新潮文庫の新刊

Yonda?

暴かれる屍鬼の正体…

そして殺戮の幕が開く

新刊

お 37 6

新潮文庫

¥743

9784101240268

1920193007435

定価：本体743円（税別）

前代未聞の怪異が村に跋扈する中、閑散とした病院の奥で、連夜密かに地獄絵巻が繰り広げられていた。暗紅色の液体が入った試験管の向こうに、愛しい骸の変化を克明に記録する青ざめた顔。ゆっくり振り翳された杭……。はびこる「屍鬼」を壊滅させるための糸口が見え出した。しかし、その時、村人の絆が崩れ始める。生き残った者たちが選んだ策は——。思わず目を覆う展開、衝撃の第四弾。

ISBN4-10-124026-4

C0193 ¥743E

各紙誌で大絶賛された「超話題作」

心の底に隠していた悪意や欲望、弱さや凶暴さをむき出しにした人々の姿を浮き彫りに。（毎日新聞）

一気に読ませる筆力は並大抵のものではない。（SPA！）

生と死、善と悪、あらゆる価値観が、簡単に逆転する恐怖。（月刊プレイボーイ）

（単行本刊行時の書評より）

屍鬼（四）

屍鬼
SHI KI
四
小野不由美
新潮文庫
屍鬼（四）
小野不由美
お
37
6
新潮文庫
¥743

カバー装画 藤田新策

定価：本体743円（税別）

前代未聞の怪異が村に跋扈する中、閑散とした病院の奥で、連夜密かに地獄絵巻が繰り広げられていた。暗紅色の液体が入った試験管の向こうに、愛しい骸の変化を克明に記録する青ざめた顔。ゆっくり振り翳された杭……。はびこる「屍鬼」を壊滅させるための糸口が見え出した。しかし、その時、村人の絆が崩れ始める。生き残った者たちが選んだ策は——。思わず目を覆う展開、衝撃の第四弾。

ISBN4-10-124026-4

C0193 ¥743E

新潮文庫

小野不由美の本

魔　性　の　子
東　京　異　聞
屍　鬼（一～五）

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

屍鬼

（四）

小野不由美著

新潮社

屍鬼
（四）
小野不由美著
新潮文庫

新潮文庫

屍鬼

（四）

小野不由美著

新潮社版

6804

屍鬼（四）

——To 'Salem's Lot

第三部　幽鬼の宮（承前）

八章

I

「——恭子(きょうこ)さんが？」
静信(せいしん)は敏夫(としお)からの電話に、思わず声を上げた。
「それで、容態は？」
良くない、と敏夫の声は低い。自分を責めているのがよく分かる声音だった。
「おれたちも例外じゃないってことだ」敏夫の声は自嘲(じちょう)を含んでいる。「お前も気をつけろよ」
「ああ……それは」
「本当に分かってるか？　おれは今朝、下山(しもやま)さんに電話をしたんだ」
「レントゲンの？」
「そう。徹(とおる)くんの葬式の翌日だったかな、辞めたんだよ、突然。それでふと思って電話してみたわけなんだが」
静信はどきりとした。

「……亡くなってたよ。今月の九日。急性心不全だそうだ」
「そうか……」
「連中は、おれたちだけを見逃してくれるわけじゃない。気をつけろ。お前も、お前の周囲の人間もだ」
　分かった、と答えて静信は電話を切った。
　恭子が発症した。しかも後期に入っている。入院の措置を取ったと言うが、たとえ今夜から不寝番をしたとしても、すでに後期に入っているだけに、容態はどう変化するか分からない。
（下山さんも……）
　思って静信は、はっとした。
「……角さん」
　あの辞職の仕方は、いかにも唐突だった。連絡してその後の様子を訊く必要がある。たとえもう間に合わないものにしても。
　思ったときだった。寺務所の戸を軽く叩く音がした。振り返ると、見慣れない初老の女が中を覗いている。静信は軽く会釈をした。どこかで見た顔だが、と記憶を探る前に、女は部屋に入ってくる。睨みつけると言うより、むしろ憎悪さえ窺わせる表情をして、小さな身体で静信の前に立ち塞がった。

「もう我慢できないわ」
「……あの？」
「あんたは一体、何をしてるの。これだから既成宗教は、あてになりゃしない。あんた、それでも坊主なの」
困惑して言葉を失っていると、光男が寺務所に現れた。
「伊藤さん」
光男の驚いたような声に、静信は思い出す。水口の伊藤郁美だ。一風変わった——。
郁美は大きく足を踏み鳴らした。
「まさか、本当に村で何が起こってるか、分かってないなんて言う気じゃないでしょうね」
「あの……失礼ですが」
「起き上がりでしょう、簡単なことじゃないの！」
静信は、はっと息を呑んだ。
「あんたたちが死人を葬ってるんでしょ。そんなことだから、仏さんが起き上がってくるのよ。あんたたちがろくでなしで、そもそも能なしだから。金儲けのことしか頭になくて、だから、みんな成仏できないんだ。分かってるの」
「伊藤さん、ちょっと」

光男が間に割って入ろうとしたが、郁美は光男を突いて静信との間合いを詰めてきた。小柄な女が、静信の喉許に顎を擦りつけるようにして見上げてくる。
「兼正が元凶なのよ。あいつらは良くない。それが入ってきてこの村は呪われたの。成仏できない死人が起き上がって、どんどん不幸を広げてる。いい加減で目を覚まして、村のために役立とうって気になったらどうなのよ」
「伊藤さん、少し待ってください」
静信は郁美を落ち着かせようと軽く手を挙げたが、郁美はその手を叩き落とした。
「こんなになっても見てるだけなの。そりゃあ、あんたらにしたら、死人が出てくれたほうがありがたいんでしょうよ。葬式ひとつで笑いが止まらないほど儲かるんだろうからね。この似非坊主が」
光男が郁美を押し除けた。
「伊藤さん、あんた、いきなり押しかけてきて何を言い出すんです。言うに事欠いて、それはどういう」
「あたしは本当のことを言ってるだけよ」
「伊藤さん！」
郁美は光男に指を突きつける。
「あたしを殴る？　叩き出すんでしょ。あんたらの遣り口ってのはそんなもんよ。村の

者から浄財を吸い上げて、金勘定しながらふんぞりかえってる。坊主が聞いて呆れるわ。供養のひとつもできないくせに。何が若御院よ。偉そうにお為ごかしを言いながら、自分はにっちもさっちも行かないで首括ろうとしたんじゃないの」

　光男が硬直した。静信は血の気が引くのを感じた。無意識のうちに腕時計を握る。

――そう、村の誰もが知っている。その情報の細部の正確さはさておき。誰も口に出しては言わないだけだ。

「訳の分からない三文小説書いて、チヤホヤされてるだけが能なの？　あんたも坊主だってんなら、兼正にねじ込んで村をなんとかしてごらんなさいよ」

「いい加減にしなさいよ、あんた！」

「……やめてください、光男さん」

　静信は気色ばんだ光男を止める。見ると、寺務所の入口で池辺と美和子が青い顔をして立ち竦んでいた。

　静信は郁美に目を移し、軽く頭を下げた。

「……おっしゃる通りなのかもしれません」

　言って、郁美に椅子を勧める。

「おかけになってください。申し訳ありませんが、どうして起き上がりなのか、兼正なのか、説明してくださいませんか」

郁美は鼻を鳴らした。
「そんなことは子供でも分かることじゃない。起き上がりに決まってるわ。兼正よ、だってあの家が建ってからなんだからね」
「憶測で人を裁くことはできないんですよ」
「憶測？　事実じゃないの。分かってるわよ。結局あんた、何もしたくないんでしょう。ふんぞりかえる以外のことは、何ひとつする気がないいんだ」
「そんなつもりはありません。けれども」
「言い訳なら結構」郁美はぴしゃりと言う。「村をなんとかする気はあるの、ないの？」
「もちろん、あります」
「じゃあ、あたしと一緒にいらっしゃい。兼正を叩き出すのよ。あたしが手本を見せてあげるわ」
「伊藤さん、いけません」
静信が言うと、郁美は目を剝く。静信は言うべき言葉を懸命に探した。
郁美を暴走させてはいけない。憶測と先入観だけを根拠にする糾弾は、かえって村の者にそっぽを向かせる結果になる。郁美が声高に叫べば叫ぶほど、村の者は郁美の言葉に対して否定的になってしまう。――だが、郁美が言っているこれは真実だ。郁美が自覚している以上に、郁美の糾弾は事態を正確に射抜いている。

「落ち着いてください。村で不幸が続いているのはたしかですが、それと桐敷さんの間にどうして関係があるんですか？　桐敷さんを責め立てれば災厄はやむのですか、本当に？」

なるほど、と郁美は軽蔑を露わに静信を見る。

「いよいよ性根が腐ってるらしいわね」

「起き上がりと伊藤さんはおっしゃいますが、本当に起き上がった者がいることを証明できますか？　誰かを御覧になったのですか？」

「もう結構」

郁美は踵を返した。呼び止める静信の声には構わず、寺務所を出て行く。静信はあとを追おうとしたが、光男と池辺に止められた。

「いけませんよ、若御院。係わり合いになっちゃあ」

「けれども」

「下手に係わり合うと、若御院まで一緒になって妙なことを言っているのだと思われてしまいます。ああいうのと寺が一緒くたにされたらおおごとですよ」

「光男さん、そういう言い方は」

静信は咎めようとしたが、光男は断固とした顔で首を横に振る。

「駄目です。若御院、自覚なすってください。もしも若御院が伊藤さんに同意したと思

われたら、檀家が追随してしまいます。若御院はそんなつもり、ないかもしれないですけど、寺の影響力を侮っては駄目です」
「けれど」
静信は光男と郁美が消えたほうを見比べた。
「あの人は、兼正を吊し上げろと言ってるんです。それに寺が同意したと思われたら最後、檀家衆の中に、何も考えずに吊し上げに参加する者が出ます。そこのところを自覚して自重してください」
静信は言葉に詰まった。寺の敵は村の敵だと自嘲するように笑った大塚隆之、浩子の顔が目に浮かんだ。
「……はい」
光男は息を吐いた。

郁美は山門を一瞥し、軽蔑を込めて唾を吐いた。誰も彼も、真っ当な見識というものを失っている。郁美が親切に真実を指摘してやっていると言うのに、聞く耳を持つ人間さえいない。それどころか、と郁美は無意識のうちに身体の疼く場所を押さえた。人を非難し、迫害するのだ。
郁美は、眥を上げて西山を見上げた。抜けるような空の下、濃い緑の山腹に黒い屋根

が見えた。そもそも郁美の中に渦巻いていた怒りが、吐き戻したくなるほどに高まって破壊的な気分に駆り立てた。寺が黙りを決め込むなら、いよいよ郁美だけでも兼正をなんとかしなければならない。——そう、必ずなんとかしてみせて、二度と郁美を軽々しく扱うことなどできないようにしてやる。

郁美は石段を駆け下り、門前町の店先を手当たり次第に叩いてまわった。

「兼正よ！　いい加減に気づきなさい、あんたたち！」

安森厚子は、工務店からの帰り道、御旅所の前に数人の人間が集まっているのに気づいて足を止めた。

何かしら、と覗き込むと、六人ほどの男女を前に、伊藤郁美が金切り声を上げていた。

「起き上がりなのよ、あんたたちだって分かってるでしょう！」

厚子は一瞬、ぎょっとした。郁美の言葉の中で「起き上がり」という言葉だけが色鮮やかに浮き上がって聞こえた。

「まあ……なあに？」

厚子は人垣を作った老人に向かって問いかけてみたが、厚子自身、郁美が何を指して「起き上がり」だと言っているのか分かっていた。今村で蔓延している「あれ」だ。工務店の人間を殺しつくそうとしている何か。まるで、と心のどこかで思っていた。ま

るで鬼でも徘徊（はいかい）しているようだ、とは。

老人は、竹村吾平（たけむらごへい）だった。吾平老人は呆れたように肩を竦める。

「兼正の連中は起き上がりだと」

「あら、まあ」と、厚子は笑った。その声は我ながら取って付けたように聞こえた。聞きとがめたように、郁美が厚子に目を留める。人垣を割って近づいてきた。

「あんた、丸安（まるやす）の厚子さんね」

「ええ。こんにちは」厚子は、ことさら笑ってみせる。「どうなさったんですか？」

「分かってんでしょう？　鬼よ。起き上がりなのよ。あんたんとこは鬼に魅入られたんだ」

「あらまあ、怖いことを」

「本当のことでしょうが。工務店で残って息してるのが何人いるの、言ってごらんなさいよ」

それは、と厚子は笑みが強張（こわば）るのを感じた。

「工務店の連中はみんなやられたんだ。工務店だけじゃない。あんたんとこの義一（ぎいち）さんも魅入られたのよ。工務店が死に絶えたら、今度はあんたんちの番だ。それでも笑ってられるの」

「よしてください、そんな、縁起でもない」

「縁起でもない？　本当のことじゃないの。工務店と同じような目に遭うことになるよ。あたしには分かるんだからね。徳次郎さんはじきに死ぬ。そしたら次は製材所の番だ。最初は嫁さん、次は息子だ。工務店と同じよ」

「冗談じゃないわ」

厚子は断ち切るように言って踵を返す。その背に郁美が言葉を吐きかけてきた。

「兼正の連中を叩き出さない限り、必ずそうなるからね。どうして分からないのよ。誰か一人でも兼正の連中を昼間に見た者がいるって言うの」

厚子は一瞬、足を止め、そして心の中で耳を塞いでその場を立ち去った。

2

敏夫は思わず、電話の受話器を見つめてしまった。

「待ってくれ。もう一度言え。静信、何だって？」

だから、と静信の言葉は他聞を憚るように小さく速い。

「郁美さんが寺に来たんだ。兼正が元凶だ、起き上がりだと言って」

「馬鹿な――根拠は」

「自分には分かる、の一点張りだ。兼正に押しかけるつもりのように見えた」

「冗談じゃない」
敏夫は絶句する。それだけは避けたい。郁美のような女が先頭に立って糾弾して、そうすればかえって真実の信憑性が下がる。もしも郁美説が広がれば、どんなに言葉をつくして敏夫らが説明したところで、村の連中は端から眉に唾をつけるだろう。
とにかく、と言いかけたところに、待合室のほうから金切り声が聞こえた。患者たちがざわめくのが控え室にまで伝わってくる。
「……こっちにおいでなすったようだ。あの婆さん、村中で辻説法する気だぞ」
郁美の言葉の内容までは聞き取れない。それでも「鬼」「起き上がり」という単語は聞き取ることができた。いったん電話を切り、敏夫は控え室を出る。血相を変えて武藤が走ってくるところだった。
「先生──」
「聞こえてるよ、あの声じゃあ」
敏夫は小走りに待合室に向かう。待合室では郁美が口角に泡を溜めて檄を飛ばしていた。ぽかんとしたように、あるいは困惑したように患者たちが郁美を見ている。その郁美の背後に、いかにも物見高そうな顔をした連中が三人ほど従っているのを見て、敏夫は苦々しい気分になった。──信じたわけではあるまい。けれども興味を抱いて成り行きを確かめようとしている者がいる。

「あんたたちは風邪でも引いたと思ってるんでしょうけど、そんなことじゃない。病院に通ったたって治るもんじゃないのよ。いい加減に目を覚ましなさい！　病院に来たってみんな死んで山に運び上げられてるんじゃないの！」
敏夫は呻いた。それは事実であるだけに質が悪かった。
「郁美さん、勝手に妙なアジテーションをされちゃ、困るんだがね」
郁美は振り返る。
「出てきなすったね、この藪医者が」
「あんたがおれをどう評価しようと勝手だが、ここは病院なんだ。静かにしてもらえんかね。それとも、あんたにはその程度の常識もないのか？」
「常識のないのはどっちよ。治せもしないくせに医者面してさ。医者だ病院だって言うなら、ちっとは患者を治してごらんなさいよ」
「おれにも治せない患者がいることは認めるさ。だが、あんたに治せる患者がいないことも、認めてほしいもんだな」
「ふん。治せるか治せないか、見てれば分かるわ。兼正が全部の元凶なのよ。そこさえ分かってりゃ、みんな綺麗さっぱり治るんだから。これ以上、家族の死に目に会わずに済むのよ」
敏夫は郁美をまじまじと見た。郁美は愚かだが、事態を正確に把握している。これを

放置しておくのもひとつの手かもしれない、と思った。
「……で？　あんたは兼正をどうしようって言うんだい。まさか家の前に押しかけていって自分が呪文を唱えたら、兼正が家ごと消えてなくなるなんて言うんじゃないだろうな」
患者の何人かが軽く笑った。郁美は殺気立った目で敏夫をねめつける。敏夫はあえて笑ってみせた。郁美を挑発するのはひとつの手だ。この狂信者は兼正に押しかける。住人を引きずり出して糾弾しようとするだろう。そうでなければ、そうするよう挑発してやればいい。だが、兼正の住人は出てこられない。たとえ辰巳が出てきたとしても、郁美が御祈祷とやらを始めれば狼狽するだろう。――そう、郁美は正しいところを衝いているのだ。上手く行けば連中が本当に尋常でないことを、村の連中の目の前に提示できるかもしれない。
「こう言っちゃあ、なんだがね、あんたの御祈祷とやらで逃げ出すのは、ヤモリやゴキブリだけだと思うがね」
「分かってないくせに、馬鹿にするんじゃないよ！」
「いいかい、郁美さん。あんたが何を信じようと、あんたの自由だ。だが、起き上がりだの鬼なんてものは迷信の中にしか存在しないんだ。そういうものが人を病気にすることは、あり得ない。ましてや兼正の連中が元凶ってのは、どういう意味だい。まさか連

中も起き上がりだとでも言うつもりか？」
「鬼よ。起き上がりだ。あいつらが鬼を作ってるのよ」
「これは驚いたな。おれは兼正の若いのに会ったが、奴は死人のようには見えなかったがな。あんたよりよっぽど真っ当な人間に見えたよ」
「そう見えるだけよ。あいつらは本当は鬼なのよ。みんな、死んで起き上がった亡者なんだ」
「亡者が昼間に出歩くのかい。おれが辰巳くんに会ったのは昼間のことだったがな」
「そういうのもいるんでしょうよ。けども昼間に出歩くのなんて、あの若いのぐらいじゃないの。他の連中は昼間にはうろうろできないのよ、死人だからね」
正解だよ、郁美さん、と敏夫は胸の中で呟いた。
「別に影がないわけでもない、昼間にも出歩く、快活な好青年だよ彼は。あんたは彼を死人だと言うが、それをどうやって証明する気だ？　あんたが御幣を振ったら、化けの皮が剝がれるのかな？」
「そうよ」と、郁美は胸を張る。
敏夫は笑った。
「まあ、あんたがそうしたいと言うなら、やってみるんだな。そうすりゃ、はっきりするだろうよ。もっとも、桐敷さんはあんたに付き合ってくれるほど暇じゃないと思うがね」

「暇があろうとなかろうと、引っぱり出すだけよ。この村の人間は、うかうかと騙されてる馬鹿ばっかりじゃないってことを連中に思い知らせてやるんだから」
「なるほど。桐敷に押しかけて、住人を引っぱり出して吊し上げようと言うわけだ。桐敷さんも大変な災難だ」
敏夫が言うと、意を得たように郁美は笑う。
「あたしは村の者のためを思って言ってるのよ。行って連中を引きずり出して、本当のところってやつを見せてあげるわ」
「だったら、こんなところでつべこべ言ってないで、さっさと行ってくれないか。診察の続きをさせてもらいたいんだがね。桐敷さんがあんたの戯れ言に付き合ってくれるようなら知らせてくれ。兼正の御仁が生きてるか死んでるか、脈ぐらいは取ってやるよ」
郁美は敏夫をねめつける。見てなさいよ、と捨て台詞を残して踵を返した。興味を誘われたのか、入口近くの者が二人ほど、そのあとについていった。他の患者は呆れたように口を開けて、郁美たちの後ろ姿を見送っている。あとについていこうか、それとも残ろうか、迷っているふうの患者に、敏夫は笑いかけた。
「気になるのなら追いかけていって、郁美さんが無茶をしないよう、見張ってくれ」
それで三人ほどがさらに立ち上がり、玄関を出て行った。
敏夫は薄く笑ってそれを見送る。

3

結城は工房にいて、表の騒ぎを聞きつけた。不審に思って家の前に出ると、ずいぶんと上のほうの路上に人集りがしている。

「……なあに？」

梓も染料で濡れた手を振りながら工房を出てきた。さあ、と結城は呟いて、とりあえずそちらに向かい、様子を見てみる。家の前の道を二百メートルほど上に向かうと、兼正に向かう坂と交わる。その入口に人垣ができていた。中心にいるのは六十に近い女だ。熱に浮かされたように、何事かを怒鳴っている。遠巻きにした人々が、彼女を呆れたように見守っていた。その中に田代の姿を見つけて、結城は声をかけた。

「田代さん。何の騒ぎです？」

「ああ」と田代は、人垣の中心にいる女を苦笑するように見た。「伊藤の郁美さんですよ。ちょっと危ない人でね。神がかってると言うか」

結城は思わず郁美を見た。たしかに、郁美の表情は神がかりのそれと言って言えないこともなかった。

「なんでもね、桐敷さんとこが元凶なんだそうですよ、村で死に事が続いているのの」

結城は胸に鈍い痛みを感じた。家の奥で寝ている息子の姿が目に浮かんだ。
「桐敷さんとこの人たちは起き上がりなんだそうです。鬼なんですってさ」
「まさか……」
「本当にねえ。そういうことをまだ信じてる人がいるんだからなあ」
田代は笑ったが、その笑い声は、必要以上に明るく、どこか作り物めいて聞こえた。
結城も梓も、また笑ったが、それは田代と同じような響きをしていた。
郁美は叫ぶ。兼正は鬼の巣窟(そうくつ)だ。連中がやって来て村は呪(のろ)われたのだ。兼正の連中は人間のように見えるが実は死人だ。自分がそれをこれから証明してみせるから、みんなで兼正を村から追い出そう。それで不幸は止まる。病人も治るのだ、医者や寺には何もできない、何も分かってないし分かる気もないのだと、郁美はヒステリックに声を上げた。
「郁美さんのほうが倒れそうだな。あの人、あの調子で商店街を練り歩いてきたんですからねえ」
結城は苦笑した。
「けれど、郁美さんの後ろにいる連中は何です？　まさか郁美さんの言うことを――」
「真に受けたわけじゃないでしょう」田代は軽く頭を振った。「単に面白がって見物してるだけじゃないかな。かく言うぼくもそうですけどね」
「それは……」

面白がるのは少しばかり不謹慎ではないかという気がした。郁美の言葉を総合すると、要は桐敷家の人々を引きずり出して吊し上げようという、アジテーションに聞こえる。
結城の意を悟ったように、田代は小声で言う。
「ついていったほうがいいと思うんですよ。とんでもないことをしでかさないか見張ってないと、――こう言っちゃあなんだが、あの人は何をやるか分からない」
なるほど、と結城は呟いた。
「あなたも行ってみるの？」
梓に問われて、結城は頷いた。
「そう……行ってみたほうがいいだろうな。たしかにああいうタイプの人間は危険だ」
もちろん、起き上がりなんてことがあるはずはない。そんなのは（破魔矢……）迷信にすぎない。それは広沢が言っていたように、疫病の（十字架）暗喩なのだろう。
結城は無意識のうちに表情を硬くした。もちろん、絶対にあり得ない。
「つべこべ言ってないで、さっさと確かめてみろや」
人垣から野次が飛んだ。
「よせって。けしかけちゃあ、婆さんも引っ込みがつかなくなるだろうが」
「尾崎の若先生を呼んだほうがいいんじゃないか。医者が必要だぞ、ありゃあ」
どっと笑い崩れる声がしたが、それは田代や結城らのものと同じく、白々しいほど明

るかった。軽口や野次がひきもきらないにもかかわらず、人垣の間にはある種の緊張が漂っている。結城も確実にそれを共有していた。

郁美が野次を飛ばした男たちを殺気立ってねめつけた。

「すぐに誰が正しいのか分かるわ」

言って、郁美は坂の上を見上げる。眥(まなじり)を吊り上げて坂を登り始めた。人垣が崩れる。半数はその場に残って郁美を見送っていたが、半数は郁美を追って坂を登った。誰かが硬い声で、おおごとになるかもしれない、三役に連絡しろ、と言っているのが聞こえた。結城は田代と目を見交わし、顔を引き締めて坂を登る人々を追った。

4

郁美は一気に坂を登る。他でもない自分が村を救ってみせる、もう誰にも自分を馬鹿にはさせない、という決然としたものに支配されていた。

門扉(もんぴ)は常にそうであるようにぴったりと閉じている。そもそもこうやって外界に対し、頑(かたくな)に門戸を閉ざしているのが、後ろ暗いところがあることの証(あかし)だ。陽射(ひざ)しに白い塀は高く、御丁寧に塀の上には鉄柵(てっさく)までが巡らせてある。何か引け目がなければ、ここまでするものか、と自らの確信にさらに手応(てごた)えを感じた。

郁美は手にした玉串の柄で何度か門を叩き、それから気づいてインターフォンを押した。数度押すと、若い声が聞こえる。
「あんたたちが何者だか、あたしには分かってるんだ。さっさと村を出て行け！」
訝るような声が聞こえた。郁美は門を見上げ、声を張り上げる。
「しらばっくれてもお見通しなんだからね。村にいるのはものの分からない馬鹿ばっかりだと思ってるんでしょうけど、そうは行かない。全部あんたたちのせいだ。違うと言うなら、出てきて申し開きしてごらん」
郁美にとって、事態はあまりにも明らかだった。この家ができてからだ、村に不幸が続くようになったのは。大勢の人間が死んだ。恐れをなしたようにさらに大勢の人間が村を出て行ったが、これだって連中が拐かしたに決まっている。誰も気づかなかったが、郁美にはお見通しだ。それは郁美が特殊な能力を授けられているから。その能力をもってすれば、屋敷の連中を叩き出すことは可能だし、こうやって来ただけでも連中は恐れをなして逃げ出すに違いない。
(今頃、慌てているでしょうよ)
郁美は笑った。郁美が村人を引き連れて自分たちの悪を暴きにやって来た、およそ勝ち目はないと恐れ入っているだろう、——それが郁美の現状に対する認識だった。中の連中は尻尾を巻いて逃げ出し、村人は自分に感謝する。寺も尾崎も面目をなくす。もう

誰も郁美を侮ることはできない。
郁美は口を極めて屋敷の住人を罵った。いや、郁美の主観としては、叱りとばし、一喝しただけだ。そして、通用門が開いた。
現れたのは辰巳だった。辰巳は、郁美の目からすると恐れを露わにして、他の村人の目からすると困惑した様子で通用門から半身を覗かせた。
「あの……申し訳ありませんが、一体何の騒ぎなんですか」
「やかましい！」
郁美は御幣を振る。郁美には辰巳が嫌悪を露わにし、逃げ腰になってたたらを踏んだように見えたが、村人には御幣で顔を打たれそうになって慌てて身を引いたように見えた。辰巳は恐ろしいものを見るような目で郁美を見た。郁美は自分の力に恐れ入ったのだと思ったが、多くの村人は、それを異常な女に出会って怯えたのだと解釈した。
「これはどういうことですか。どなたか、分かるように説明してください」
辰巳は門の前に集まった人々を見渡した。誰が答えるより早く、郁美が鬼だと叫ぶ。矢継ぎ早に責め立て、御幣を振り、辰巳は通用門の中に逃げ込んだ。郁美はそれを追おうとしたが、摑んだ腕を振り切られ、鼻先で扉を閉められる。
「逃げるの！　恐れをなしたか！」
郁美は背後を振り返った。村人に向かって閉ざされた通用門を示す。

「見なさい、逃げたじゃないの。後ろ暗いところがなかったら逃げるもんか。これが証拠よ！」

結城は人混みの中で顔を歪(ゆが)めた。郁美の狂乱は嫌悪感を誘った。もう誰かが止めるべきではないかと思え、周囲を見渡したが、少なくともまだ止めようとしているふうに見える人間はいない。人垣の後ろ、白衣を着た人物を先頭に数人が坂を登ってくるのが見えた。誰かが本当に三役を呼んだのだろう。

先頭に立った敏夫が人垣に割って入ろうとしたときだった。門が開く音がして、結城は振り返った。通用門ではなく、正門のほうが開く。扉を引き開け、姿を現したのは桐敷正志郎(せいしろう)だった。

郁美がわずかに怯(ひる)んだように退(さが)り、周囲に詰めかけていた村人も二歩ほど退った。正志郎の周りにはわずかな空隙(くうげき)ができた。白い石畳のアプローチに、秋の陽射しを受け、黒い影を落として正志郎は立つ。門前に集まった人々を至極冷静な顔で見渡した。

「これは何の騒ぎですか？」

正志郎の声は低く響き、よく通った。気後れの感じられない、堂々とした——どこか決然としたものを感じさせる声だった。

「突然、大勢で押しかけてきて家の前で妄言を喚(わめ)き立てるのは、この村の流儀なのですか」

「妄言、ですって」

郁美は金切り声を上げ、正志郎に向かって足を踏み出す。裏返った声で祝詞めいた呪文を唱えながら御幣を振ったが、当の正志郎は眉を顰め、さも軽蔑したような目で郁美を眺めていただけだった。

「悪霊退散、怨敵退散、害悪——」

言いかけた郁美の手を摑み、正志郎は御幣を取り上げる。

「馬鹿馬鹿しいことは、やめていただきたい」

「逆らうのか!」

正志郎は郁美の声には答えなかった。集まった人々を見渡す。

「見たところ、分別のある立派な大人ばかりが揃っておられるようだが。みなさんはこちらの方を支援するためにいらしたのですか。それとも単なる見物人ですか」言って、正志郎は人垣の中に目を留めた。「尾崎の先生もいらっしゃるようですね。……失礼だが、呆れた話だ」

敏夫は正志郎の視線を受けて、じわりと冷や汗が浮かぶのを感じた。時間は正午を廻った。太陽は中天にさしかかり、秋晴れの空には雲ひとつない。眩しいほどの陽射しが降り注ぎ、きちんと整えた髪と、堂々たる体軀を照らしていた。

(そんな……はずは)

敏夫の狼狽をよそに、郁美は意味不明の金切り声を上げる。何かを懐から出してぶちまけた。同時に芳香があたりに流れてきたから、あれはおそらく抹香だろう。正志郎は、さも迷惑そうにそれを払い落としたが怯んだ様子は見せなかった。郁美が上げる上擦った般若心経らしい経文にも、軽蔑を露わにするだけで期待されるような反応は見せなかった。

「このところ村で不幸が続いているのは小耳に挟んで知っていますが、それと我々と何の関係があると言うのですか。疑うと言うなら、集団中毒か伝染病を疑うべきだと思うのですが、いかがでしょう」

敏夫は頷いて人垣を割って通った。

「その通りです。……済みませんね、桐敷さん。我々が見物のために集まったと思わないでください。大変なことになっている、と連絡を受けて飛んできた者もいるんで」

「誤魔化されるんじゃないわよ」

郁美が割って入った。

「あの若いのだって昼間にうろうろしてたんじゃない。昼間に出てきたからって鬼でないって話になるわけじゃないんだからね」言って郁美は正志郎に向き直る。「あたしが怖くないって言うなら、女房と娘も出してごらんなさいよ」

「お断りします」

ぴしゃりと正志郎は言う。

「家内と娘は身体(からだ)が弱いのです。難病を抱えて苦しんでいる。この村に来たのも、そもそもは療養のためです。申し訳ないが、わたしは伝染病を疑っている。村では何かの伝染病が流行(はや)っているように見えるし、ですからみなさんと接触させるわけにはいきません。別にみなさんを汚いもののように言うわけではありませんが、妻と娘は免疫系に問題を抱えているのです。他愛もない感染症でも命取りになりかねない」

正志郎は言って、集まった者たちを見渡した。

「家人が家に閉じ籠(こ)もっているのは、それなりに事情があるからです。そこのところを御理解いただけないものでしょうか。これではまるで、魔女狩りのようだ。それともこの村では事情を抱えた弱者であろうと、余所者(よそもの)はこういう扱いを受けねばならないのですか」

いや、と言い訳するように上がる声があった。人垣は気後れしたようにじりじりと後退し、端々から崩れ始めている。郁美がさらに金切り声を上げたが、数人の男たちが背後から捕まえて引き下がらせた。

「お怒りはごもっともです」敏夫は狼狽を押し隠して軽く頭を下げる。「村には色々と迷信めいた言い伝えがあります。ほとんどの者は迷信だと了解しているが、それを頑に信じている者もいる。古い小さい村というものは、そういうものだということで、御勘弁願えませんか」

正志郎は無言で会釈した。
「村には起き上がりという伝承がありましてね。墓場から死人が起き上がってきて、死を媒介すると言うんです。郁美さんは、あなた方を、その起き上がりだと誤解したんですよ」
「わたしが死人に見えますか」
「見えませんね」敏夫は言って、軽く唇を舐める。「確認させてもらってもいいですか。そうすれば郁美さんも納得すると思う」
　正志郎の顔にはなんの変化もなかった。
「どうぞ」
　敏夫は頷き、正志郎の手を取る。脈を探るとすぐに規則正しい拍動が触知できた。頸部に触れても同じく正常な触知がある。顔を覗き込み、軽く正志郎の目許に手で廂を作ってみる。瞳孔はそれにつれて少しだけ拡大する。手を放せば縮瞳する。どんな異常も発見できない。
「落ち着かれたもんですね」敏夫は我ながら声が微かに上擦るのを自覚していた。「脈拍も呼吸も体温も正常なようだ。もちろん瞳孔反射もある。どういう基準に照らしてみても、医者として死亡診断書を出すわけにはいかないようです」
　どうも、と正志郎は笑む。敏夫は寒々しいものを感じながら郁美を振り返った。

「郁美さん。桐敷氏は死人なんかじゃない。あんたと同じ人間だよ。これで分かっただろう?」

数人の男に取り押さえられた郁美は、敏夫をねめつけて歯を剝いた。何か言いたそうにしたが、実際には言葉を発しなかった。敏夫は正志郎を振り返る。

「郁美さんもこれで納得できたでしょう。申し訳ありませんでした」

いえ、と正志郎は答え、門前で対処に困っている人々を見渡し、踵を返す。門が再び閉ざされた。外界を拒絶するかのようなその振る舞いを責めることは、その場の誰にもできないように思われた。

「結城さん、行きましょう」

田代に促され、結城は我に返った。郁美は数人の男たちに向かって何かを怒鳴りながら、それでも坂をかなりのところまで下っている。門前に集まった人垣が崩れ、坂の下に向かって流れていくところだった。

──自分は、郁美を見張るために来たのであって、彼女の馬鹿馬鹿しい台詞を信じたわけではない。

自分にそう言い聞かせても、どこかしら自己嫌悪に似たやるせなさを感じないではいられなかった。愚かな振る舞いに荷担したと思う。──まったく、馬鹿気ている。

正志郎の怒りはもっともだ、と感じた。正志郎は門前に集まった人間のすべてが、大

なり小なり郁美の妄言を信じてやって来たのだろうと思ったはずだ。実際のところ、結城自身、まったく信じてなかったと言えるだろうか。冷静に考えれば、郁美はただの神がかった女だ。その女が妄言を掲げて桐敷家に押しかけたわけだが、桐敷家にすれば無視すれば済むこと、くどいようなら、摘み出すなり警察に連絡をすれば済むことで、これは笑い話の次元の事件だという気がした。にもかかわらず、結城は大事になるのではないかと思った。今から考えると、自分がどうしてそんなふうに思ったのか分からない。

(馬鹿な、と思った……)

起き上がりだなんて、あるはずがない。本当にそう信じるなら、郁美の行動など一笑に付してしまえたはずだ。それができなかったのは、心のどこかで信じそうになったからではなかったのか。だからこそ、冷静に考えれば放置しておけばいいようなことを、重大事のように感じてしまった。

(……そうかもしれない)

結城は思う。横たわった息子、枕許の破魔矢。それが暗に示していたのはこれではなかったか。そんなことは起こり得ないと分かっていながら、結城はまさか息子が、と心のどこかで思わないではいられなかったのかもしれなかった。

(……馬鹿な)

本当に愚かだ。結城は田代に手を挙げ、家のほうへと戻りながら自嘲の笑みを零した。

本当に、笑うしかないほど馬鹿気ている。
敏夫は人波に押されて坂を下りながら、苦いものを嚙み殺していた。周囲の者たちは笑っている。それは半ば照れ隠しのようでもあり、自嘲のようでもあった。おそらくは――と敏夫は思う。郁美に対して「それ見たことか」と思っている。起き上がりなんているはずがなかったのだ、やっぱりそうだ、と笑い、うかつにもついてきた自分、心のどこかで信じそうになった自分を笑っているのだ。
(だが、郁美さんは正しかった……)
あまりにも手痛い、と思う。これで、敏夫が同じように「起き上がりだ」と言い出しても信憑性はゼロに近い。それどころか、郁美の行動は、村の連中が自発的に吸血鬼なのかもしれない、起き上がりなのかもしれないと思いつく機会をも奪い取ってしまった。もう誰も、そんなことを考えたり、真剣に吟味してみようとはしないだろう。
(……どうして)
どうして正志郎は出てくることができたのか。どこからどう見ても、死者ではない。それとも、そもそも屍鬼とはああいう生き物なのか。ならばなぜ、これまで夜にしか出てこなかった。犠牲者の死が明け方に集中していたのはなぜだ。
考え込みながら病院に戻ると、控え室で静信が待っていた。

「……よう」
「郁美さんは？」
「さあ。誰かが引きずって行ったな。家に連れ戻したんだろう」
静信は声を低め、「どうなった」と訊く。敏夫は首を横に振った。
「桐敷氏が出てきて終わりだ」
静信が目を見開く。
「まさか」
「だが、出てきたんだ。別に日光なんて気にしてるふうじゃなかった。抹香も経文も御幣も効果なし。念のために脈を取らせてもらったが、脈拍等、正常。たいそうなおかんむりだったよ。これが村の流儀か、と言っていたな」
「じゃあ、ぼくらの誤解だったのか？」
「まさか」敏夫は低く吐き出した。「単に伝承とは違ってただけだ。辰巳の例もある。あるいは個体差があるのかもしれない。だが、元凶は桐敷家にあるんだ。これだけは間違いがない」
静信は目を伏せる。
「本当に、そうなんだろうか？　ぼくたちは予断によって重大な間違いを犯していないだろうか」

「それはない。これまで確かめてきたこと、考えてきたことは、おおむね間違っていないはずだ」
「だが、確証があるわけじゃない……」
敏夫はソファに身体を投げ出す。
「郁美さんが確証をくれると思ったんだがな。なんだってあいつは……」
真昼に出てきたのか。それができるのなら、なぜ今まで一度も昼間に出てこなかったのか。そう言おうとして、敏夫は自分が失言をしたことに気づいた。とっさに静信を振り仰ぐと、静信の顔色が変わっている。
「それは、どういう意味だ？」
しまった、と思ったが遅い。
「郁美さんが確証をくれる？　まさかお前、そのために郁美さんを利用したのか」
「いや、そういうことじゃなく」
「律子(りつこ)さんが、郁美さんが病院で患者を相手にひとしきり演説していったと言っていた。お前が追い返したという話だったが、まさかお前」
敏夫は身を起こし、溜息(ためいき)まじりに告白する。
「……そう。ちょっとだけ煽(あお)ったんだ。郁美さんが確証を摑(つか)んでくれるんじゃないかと思ってな」

「どうして、そんなことを」
「どうして？　郁美さんを説得して止められるとでも思うのか？　あの人は完全にそれを信じてたんだぞ。おれが多少焚きつけようと焚きつけまいと、遅かれ早かれ桐敷家の連中を吊し上げるために坂の上に突進して行ったに決まってる。どうせ止められない。だから利用させてもらったんだ」
「どうして――お前はそういう」
　敏夫は静信をねめつける。
「あいにく、おれは形振り構っちゃいられないんだ。お前が潔癖なんだってことは分かってるよ。おれの振る舞いは、汚い手に見えるだろうさ。だが、そんなことを言ってる場合か？　連中はおれなんかよりよほど周到に汚い手を使ってくるんだぞ」
「敏夫、それとこれとは」
「桐敷の旦那は真昼に出てきた。あいつはそもそも、昼間に動くことができたんだ。にもかかわらず、今日まで昼間に姿を現さなかった。おれたちは塡められたんだ。あいつはこの日のために、今日まであえて夜にしか姿を現さなかった。連中は周到だよ。途方もなく周到だ」
　静信は沈黙したが、敏夫の言に納得したからではないことは、その表情からよく分かった。

「たぶん、村の連中は桐敷家に漠然とした疑惑を感じてた。直感に論拠は必要ないんだ。にもかかわらず、これが真っ向から否定された。村の奴(やつ)らは自分たちの疑惑を笑っただろう。ますます屍鬼だなんて信じようとしなくなる。用心を怠り、死者を土葬にする。――それが何を意味するか、お前は分かってるか?」

「お前が招いたんだ」

静信の声音は低かった。

「お前が後先を考えず、郁美さんを焚きつけた結果だ。――違うのか」

「短慮は認めるさ。おれよりも兼正の連中のほうが一枚上手だった。連中は思っていた以上に周到だし、相当の覚悟をもって臨んでる。しかもあいつらは昼間にも行動できる、呪術にも影響を受けないのだとしたら、思った以上に弱点がない。刻々と増えていると言うのに。罵倒(ばとう)なら受けるが、考えなきゃならないのは今後のことなんだ」

静信は何も言わなかった。険しい表情をしたまま黙って目を伏せ、踵を返す。控え室のドアを閉めるとき、深い溜息をついたのが聞こえた。敏夫はそれを見送り、俯(うつむ)く。

「……勝手にしろ」

5

正志郎は二階の窓から、何度目か、家の前の坂道を見下ろした。人垣が崩れたあとにも、かなりの数の村人が留まって家を見上げていたが、それも三々五々散っていき、残っていた数名もいつの間にか姿を消している。西陽に照らされた静謐（せいひつ）な坂道が無人のまま延びていた。わずかに笑み、窓辺から踵を返す。廊下を奥へと辿（たど）って、裏手に面した最も奥の部屋へと足を運んだ。

　廊下に面した樫（かし）材のドアを開けると、中にはもう一枚、内開きのドアが行く手を遮っている。二枚のドアの間の一メートルほどの空間に滑り込むと、廊下側のドアを閉め、そして内側のドアを開けた。

　中には真の闇（やみ）が落ちている。ドアを閉めてドアの脇（わき）を探り、明かりを点（つ）ける。中は二（ふた）間（ま）続きの主寝室だった。北に面して並んだ窓も寝室へ続くドアも、すべてが二重になって完全に外光を遮っていた。正志郎は暖炉の前のアームチェアに腰を下ろしてマントルピースの上の時計を見上げた。日没まで、あと少し。

　日没から少しして、寝室のドアが開いた。正志郎は微笑（ほほえ）む。

「おはよう」

　居間に入ってきた沙子（すなこ）は、怪訝（けげん）そうに正志郎を見た。

「待ち構えてたの？　穏やかじゃないのね」

「うん。穏やかじゃないんだ。今日、妙な御婦人がいらしてね」

沙子はアームチェアのひとつに腰を下ろし、髪を掻き上げる。
「——誰？」
「何と言ったかな。少し変わった人物のようだった。我々は鬼だと気炎を上げてね。村の連中を扇動して家に押しかけてきたんだ」
「本当に穏やかでない話なのね」
正志郎は低く笑う。
「起き上がりだと言っていたよ。我々が夜にしか姿を現さないのがその証拠だと」
「それで？」
小首を傾げる少女に、正志郎は微笑む。
「退散願ったよ。わたしが出ていって。御幣やら何やらを振りまわしていたけどね。なんの効果もないので心外そうだったよ。最終的には尾崎の医者が出てきて、わたしの脈を取っていった」
沙子は小さく声を上げて笑った。
「尾崎先生、驚いたでしょうね」
「のようだったな。あの顔は、ちょっと君にも見せてあげたかった」
くすくすと笑う沙子を正志郎は見る。
「それで？　どうする？」

「勇気ある御婦人は何ておっしゃるの？」
「伊藤、郁美だったかな。水口の住人だったと思うよ。たしか四十ぐらいの娘と二人暮らしだ。はぐれ者だね」
　そう、と沙子は頷(うなず)く。
「——殺すかい？」
「それはあまり利口じゃないわね。表立ってわたしたちを糾弾した人間が死んだのでは、村の人たちもおかしいと思うでしょ？」
「だろうね」
　沙子は時計を見上げ、立ち上がる。すぐ背後の窓辺に向かい、重々しい樫の扉を開いた。観音開きになったその細長いドアを押し開けると、中はアルコーヴ状になっていて、その向こうに二重のカーテンを下げた窓がある。カーテンを開け、窓を上げる。さらにその外の板戸を開くと、窓の外は茜(あかね)と藍(あい)で斑(まだら)に染まっていた。戸外にはまだ錆色(さびいろ)の残照が漂っていたが、すでに夜の領域に踏み込んでいる。宵闇とともに冷ややかな風が部屋の中に吹き込んできた。
「……そうね。旅に出てもらうのがいいかしら」
　正志郎は頷く。
「戻ってこない旅だね」

「そう」沙子は振り返って微笑んだ。「きっと、わたしたちの復讐が怖くなったのよ。それで村を出て行ったんだわ。彼女は信じてないの。たとえ誰が保証しても、わたしたちのことを無害だとは思ってない。けれども味方は得られないから、安全な土地に逃げ出すんだわ」

「——娘は？」

「家族はそれだけ？」

「そのようだよ」

「じゃあ、きっとすぐに娘さんを呼び寄せるんじゃないかしら。二人きりの親子なんですもの」

正志郎は頷いて立ち上がる。

「そう手配をするよ。——他には？」

いいえ、と沙子は軽く首を振る。

「ありがとう、正志郎。あなたのような理解者がいてくれて、とてもありがたいと思っているわ」

正志郎は振り返り、笑った。

「今日は自分でも、役に立ったという気がするよ。昼間に出歩くのを我慢した甲斐があったな」

「あなたはいつも、とても良くしてくれるわ」

だといいが、と呟き、部屋を出ようとして、正志郎は足を止めた。

「そう言えば、診療所の内装が終わったそうだよ。外装にはまだ少し時間がかかるけれども、今日から診療を始められる」

「早かったのね。――葬儀社のほうは？」

「あれもう、いつでも営業できるよ。速見さんは今晩にも越してくると言っていた」

「そう」と、沙子は呟く。改めて部屋を出ようとした正志郎を呼び止めた。「……ねえ？今日、その御婦人が来たとき、尾崎の先生は駆けつけてきていたのね？」

「そうだよ。誰かが呼んだ、というふうだったけど。それが？」

「来たのは尾崎先生だけ？」

沙子が問うと、正志郎は心得たようにやんわりと笑う。

「他にもたくさんの見物人がいたけれども、室井さんの姿はなかったようだったね」

そう、とだけ沙子は呟いた。正志郎はそれ以上何も言わず、部屋を出て行く。沙子は改めて窓辺に寄り、そこから見える山並みに目をやった。

間近の北山は黒々と聳えている。その中腹に明かりがいくつか見えた。何気なく北山の脇、西のほうへと視線を滑らせてみたが、西山と交わるあたりには、当然のことながら明かりはない。沙子は床に膝をつき、窓枠に肘を載せた。腕の上に頬を寄せて北山を眺めた。

「……今頃はもう耳に入っているわね」
たぶん敏夫から、あるいは檀家の誰かから。そしてそのうちに伊藤郁美が消えたことを聞く。たぶん、彼は何が起こったのかを理解するだろう。
「仕方ないのよ、室井さん。最初から何もかも全部、決まっていたことなの……」

6

汐が引くように坂を下っていく人々の中を流され、家に戻って以来、結城は深い憂鬱に囚われていた。
愚かなことだ。――本当に愚かな。起き上がりなどいるわけがない。一瞬でも信じそうになった自分が途方もなく愚かしく思え、自嘲する気にもなれなかった。
自分に愛想がつきる思いで鬱々と居間に坐っていた。チャイムが鳴ったとき、結城は明かりもない居間で俯いている自分を発見した。
「――はい」
玄関に出ると、田中の姉弟だった。結城は眉根を寄せた。この村に巣くう暗愚の具現に対峙したような気がした。
「あの……結城さんの具合は」

「寝ているんだよ、悪いけど」
　結城の声は、我ながら突き放すようだった。かおりは弟のほうを困ったように見た。弟のほうは、いかにも生意気な口調で言う。
「おれたち、見舞いに来たんです。兄ちゃんの顔を見ていってもいいでしょう?」
　結城は迷い、ともかくも頷いた。姉弟が心配してくれていることには疑いがない。二人は夏野(なつの)の部屋のほうへ向かう。結城はそのあとについていった。夏野の部屋に入ると、夏野は眠っている。呼吸が荒い。朝からひどい熱が出ている。容態が悪化しているのは、一目瞭然(りょうぜん)だった。
　姉弟は心配そうにベッドに屈(かが)み込み、そして結城のほうをちらちらと見る。結城はあえて席を外さなかった。じっと姉弟の様子を見守り、そして声をかける。
「もういいだろう。御覧の通り、具合が良くないんだ」
　かおりは唇を噛(か)み、昭(あきら)もまた迷うように夏野と結城を見比べた。
「入院させようと思っている。夏野には医者の手が必要だからね。だから君たちが明日やって来ても、たぶん夏野はいないと思う」
　ぱっと、かおりが顔を上げた。まるで責めるような目をしていた。
「帰ってくれ」
「あの——あたしたち、結城さんに……夏野さんに話があるんです」

「夏野は君たちと話ができるような状態にないよ」
「でも……あの」
「帰ってくれ。それから、この部屋に妙なものを持ち込むのは、やめてほしい」
昭が腰を浮かせた。かおりは弟の腕を摑んで止める。部屋に入ったときに、昨日置いていったものが消えていたことには気づいていた。それがゴミ箱の中に移動していることも。そして夏野の容態は悪化している。かおりたちにも見れば分かる。夏野を助けることができなかった。――結城がそれを邪魔したのだ。
「あの……あたしたち」
かおりは言いかけたが、何と言えばいいのか分からなかった。どう訴えれば理解してもらえるのだろう。これは必要なものなのに。そう訴えて聞いてもらえるとは思えなかった。――ゴミ箱を見れば。
かおりは勇気を鼓舞した。この人は分かってない。分かっているのは自分たちだけだという思いがあった。
「あの、看病させてほしいんです。あたしたち、今晩、側についててあげたらいけませんか。御迷惑はかけません。お願いします」
「そんなことをしてもらう理由がないね」
結城の答えは素っ気なかった。

「素人に看病してもらうまでもないよ。非常識なことを言ってないで、帰ってもらえないかね」

結城のもの言いは無慈悲で、いっそ悪意でもあるのかと思われるほどだった。なけなしの勇気を総動員し、それを呆気なく叩き落とされて、かおりにはもう言葉が出てこない。俯いたところを、結城に「さあ」と促され、仕方なく立ち上がった。昭の手を引くと、昭は身を捩る。

「……やだよ、おれ」

「昭……」

「兄ちゃん、具合が悪いじゃないか。おれ、帰れないよ。兄ちゃんについててやるんだ」

「その必要はない」

結城に叩きつけるように言われ、昭は震えた。怯えたふうの昭に対し、結城はあくまでも無慈悲だった。

「もう一度だけ言う。迷惑なんだ。帰ってくれ」

昭は俯き、立ち上がった。かおりはその手を引き、逃げるように夏野の部屋を出る。

廊下を駆けて玄関から飛び出した。

「なんだよ、あいつ……！」

昭が家を振り返った。

「兄ちゃん、具合が悪いのに！　何も分かってないくせにっ！」
「……昭」
「兄ちゃんが死んだら、あいつのせいだ。あいつが兄ちゃんを死なせるんだ」
逃げるように足を速める昭の腕を、かおりは掴んだ。
「昭、待って」
「おれはもう知らない」
「待ってよ、ねえ。……それ本気で言ってないでしょ？　結城さんのことなんて知らない、死んでしまえって意味じゃないわよね？」
昭は唇を噛む。
「だって他にどうしようもないじゃないか。姉ちゃんが置いた矢も、おれがつけてやった念珠もなかった。あいつに外されたんだ。だから兄ちゃん、悪くなってる。きっとゆうべも連中が来たんだ。このままだと兄ちゃんは殺されてしまう」
「そうだよ。だから、なんとかしないと」
「なんとかって、何をどうするって言うんだよ。あいつ、帰れって言ったじゃないか。迷惑だって。おれたちには、もうどうしようもないじゃないか」
かおりは俯く。
「姉ちゃん、看病させてくれって言ったのに、必要ないって。お守りも置いてもらえな

くてさ、おれたち、ついててやることもできなくて」
「待って……」かおりは思い出した。「できなくはないと思う」
　昭は今にも泣きそうな顔で瞬いた。
「そうよ。家の中が駄目なら、外にいればいいんだわ。恵はよく結城さんの部屋を見に行ってた。裏手に面してるの。林の中から部屋の窓が見えるんだって」
「……かおり」
「そこに行けば、外から見張ってられるわ。外からなら、お守り置いても、見つからないかもしれない」
「おれたちが？　夜に外で待ってるの？」
　昭は怯えたようだった。
「そうよ。……怖い？」
　昭は口許を引き結ぶ。
「怖くなんかないよ」
　かおりは頷いた。昭は怒っている。それは、かおりも同様だ。結城の頑迷さに腹が立つ。だから今は、恐怖を忘れていられた。怖くないわけではない。けれども結城があだから、何としても自分たちで守ってみせる、という気がする。
「行こう、かおり。それ、どこ？」

結城は二人を送り出したあと、しばらく電話の前で逡巡していた。敏夫に電話しようと思う。往診を頼む、あるいはとにかく容態を話して例のものかどうかを尋ねる。――だが、と思う。夏野が具合を悪くした当日、明らかに容態は敏夫が話していたそれとは違った。

……違う、と結城は思ったのだった。だから敏夫に連絡をしなかった。その翌日も。夏野の言葉を額面通りに受け取って、寝不足なのだろうと思っていた。おかしいと思い始めたのは昨日から。

そんなはずはない、と思う。いまさら「あれ」だなんてことは。敏夫に診てもらえばたしかなことが分かるはずだが、結城は躊躇していた。もしも「あれ」だったら。事前に聞いておきながら、結城は三日を空費したことになる。「あれ」なら数日以内に決着がついてしまう。初期症状が出たときに医者に診せなければ意味はない。

いや、そもそも、と思う。発症したら治す方法はないのだ。敏夫もそう匂わせてはいなかったか。発症してしまった以上、夏野を助ける方法はない。これまでただの一例も、助かった例はないのだから。

電話をしようと思う。しても無駄だと思う。せめて確認しなければと思う一方で、そんな確認をして何になる、と思う。あと二日もすれば嫌でも分かる。

迷った末に、もう一度、と思った。もう一度、息子の容態を見てみよう。それで踏ん切りがつくかもしれない、と夏野の部屋に向かい、スタンドの明かりひとつが点った部屋の中に踏み込んだ。

浅い速い呼吸音がしていた。微かに喉の奥で喘鳴がしている。顔色は相変わらず良くない。唇は熱にひび割れている。

どうしようか、再度迷い、そうして結城は窓の外で物音を聞いた。夏野の部屋の外は裏庭だ。ごく狭い通路のような庭を隔てて裏山が迫っている。人が通る道理はなく、物音がするはずもないが、そこでたしかに下生えを掻き分けるような音がしていた。

結城は息を詰めて耳を澄ます。もう陽は落ちている。部屋の中は暗く、窓に残った黄昏も頼りない。微かに草を掻き分ける音、そして囁くような声。「しっ」とそれを制する声が聞こえたように思った。誰かが窓の外にいる。それも複数だ。

結城はそっと窓辺に寄り、耳を澄ませ、そしてカーテンを開いた。

とっさのことに隠れる暇がなかったのか、すぐ近くの茂みに中腰になって硬直した少年の姿が見えた。慌てて身を屈めた脇に、少女の頭が半分、見えている。

結城は窓を開けた。

「何だね、君たちは」結城の声は苛立ちを映して尖る。「――出てきなさい」

そろそろと少女が立ち上がり、ふてくされたように弟がそれに続いた。

「そんなところで何をしているんだ。一体何のつもりなんだ？」
二人は俯いた。返答はない。
「夏野のことは放っておいてくれ。そう言ってるだろう。それとも、親御さんに連絡して、やめさせてくれと頼まないと、理解してもらえないのかね」
結城のもの言いは冷たく、容赦がなかった。それは結城の内面にある苛立ちを反映したものだったが、昭やかおりには、もちろん分からなかった。昭は窓を睨みつける。立ち塞がる結城、窓の中には夏野がいるのに、昭たちは入れない。まるで自分たちのほうが吸血鬼になったみたいだ、と思った。
「帰ってくれ」
結城に言われ、昭は窓辺に駆け下りた。
「このままほっといたら、大変なことになるんだ！」
昭の叫びに驚いたように結城が目を見開いた。
「兄ちゃん、死んでしまう。助ける方法を知ってるのは、おれたちだけなんだ！」
結城はぎょっとした。
「いい加減なことを言うんじゃない」
「本当なんだ。なのにどうして邪魔をするんだよ！」
昭は悔しい。何よりも自分の無力が。どうして自分は大人じゃないのだろう。なぜ大人

は昭の言うことを真面目に取り合ってくれないのだろう。子供というだけで、端から馬鹿にし、取るに足らない者のように扱う。本当のことを分かっているのは昭のほうなのに。

「——起き上がりなんだ！　このままほっといたら、兄ちゃん殺されちゃうよ！」

結城はぽかんと口を開け、そして顔を歪めて笑った。敵意が薄れ、柔和な顔になったのが許せなかった。昭はあの顔を知っている。大人が昭を子供だと思い定め、昭の言葉を子供の無邪気な戯言だと受け止めた証左だ。目くじらを立てるのも大人気ない、可愛いもんじゃないか、と見下げたときの表情だ。

「なるほどな」と、結城は笑った。「昭くんの心配はありがたいが、そういうことじゃないから、帰りなさい」

「違う！　本当なんだ！」

「君は、あれからどうなったのか知らないんだな」

昭は瞬いた。結城が言っている「あれ」が何を意味するのか分からなかった。

「……あれから？」

結城は微笑む。結城には事態は明らかだった。この子供は伊藤郁美の糾弾を聞いたのだ。あるいは小耳に挟んだ。それを子供らしく真に受けて飛んできたというわけだ。いや、もっと以前に耳にしていたのかもしれない。郁美のあの様子だと、かねてから「起き上がりだ」と騒いでいたのだろう。

「違ったんだよ、昭くん。あれは伊藤さんの誤解だったんだ。桐敷家の人たちは、別に起き上がりでも吸血鬼でもない。お医者さんがちゃんと確認したんだよ」
昭はぽかんと口を開けた。
「起き上がりなんてものはいないんだ。君たちは小さい頃から聞かされて育ったから、ひょっとしたらと思ったのかもしれないけれど、これはそういうことじゃないんだよ」
「でも──だって!」
言いかけた昭を、結城は制す。
「桐敷さんは真昼に門のところまで出てきたよ。影だってあった。郁美さんが御幣を振って呪文を唱えたりしたけれども、少しも苦にしてなかった。──迷惑そうだったけどね」と、言って結城は笑う。「尾崎医院の先生が脈を取って、ちゃんと人間だと確認した。とんでもない笑い話さ」
結城は失笑し、二人を促した。
「君たちが夏野のことを心配してくれるのはありがたく思うよ。けれども、これは起き上がりなんてことじゃないんだ。ある意味ではもっと怖いことなんだよ。夏野の具合が良くなったら、必ず連絡をさせるし、何かあればわたしから連絡をするから、君たちは家に帰りなさい。心配をかけて済まないね」
結城は言って、窓を閉めた。昭は言葉が出てこなかった。さも理解のある大人のよう

な顔で微笑み、結城はカーテンを閉めた。昭は動くことも叫ぶことも、満足に息をすることもできなかった。

「……昭」

かおりが肩に手をかけて促してきた。昭は泣きそうな顔をした姉を見上げた。

「……あいつ、おれに何も言わせてくれなかった」喉が震えた。「恵のことも、康幸兄ちゃんのことも」

「うん」

「最初からぜんぜん聞く気がないんだ、おれの言うことなんて。言いたいことなんて分かってる、って顔をして、ぜんぜん分かってないくせに、話もさせてくれなかった……！」

昭を捕らえたのは、あらゆる種類の怒りとあらゆる種類の悲しみが綯い交ぜになったものだった。昭は自分が子供であることに絶望した。

うん、と頷いて、かおりが泣き出した。かおりの手を引いて斜面を戻りながら、昭も泣いた。せめて最後に夏野の顔を見られれば良かったのに、と思いながら。

結城はしばらく、窓の外を見ていた。夏野は薄目を開けて、そんな結城を見上げていた。真綿の詰まっているような頭で、可哀想に、と思ったが、思ったそれが昭に対するものなのか、昭に重ねた自分に対するものなのかは分からなかった。

ただ、強い悲しみが思念の表面を滑り、思考の取っかかりを摑まえられずに、いつまでも滑り続けていた。

7

「こんばんは」
男の声が玄関でして、伊藤玉恵(たまえ)は表に出た。戸を開くと、中年の男が顔を出している。
「郁美さんは、おいでですかね」
言われた瞬間、玉恵は身を竦(すく)めた。母親が今日しでかした騒動なら、近所の者がお為(ため)ごかしに注進に来たから知っている。きっとそれに対する苦情だろうと思った。
あんなことはやめてくれ、あんたの母親はおかしい、村を出て行け——玉恵はいつから、そう誰かに言われるのではないかと、ずっと恐れていた。
「母は出てます。……何の御用ですか」
「出てる？　どこに行ったか分かるかい」
訊(き)いてきた男の顔に、玉恵は見覚えがない。村の者ではあるらしいが、少なくとも近所の住人ではないだろう。
「分かりません」呟(つぶや)いて、玉恵は男を見た。「苦情なら母に言ってください。あたしに

言われたって困ります」
　男は目を見開いた。
「苦情？　いいや、別に苦情を言いに来たわけじゃないよ。ちょっと郁美さんと話をしたいだけだ」
　男は言って、玉恵をひたと見据えた。
「……中で待たせてもらってもいいかね」
「お断りします。帰ってください」
　玉恵は震える手を握りしめる。男が鼻白んだふうだったが、もうそういうことはどうでもよかった。
「母はどうかしてるんです。病気なんです。ほっといてください」
「娘さんが、そんなことを言っちゃあいかんな。郁美さんが聞いたら泣くよ」
「ほっといてよ！」
　玉恵は叩きつける。戸に手をかけ、強引に閉めた。情けなくて涙が出た。玉恵には小さな頃から「あの母親」という言葉がついてまわった。周囲の人間は揶揄し、距離を取り、玉恵は子供の頃から否応なく孤立していた。周囲の陰口、お為ごかしの忠告、侮蔑と奇異の目——玉恵のせいではないのに。自分の母親だ、それは分かっている。母一人子一人、だから見捨てられないし、見捨てる気もない。けれどももう、いい加減、静か

な生活がしたかった。周囲が揶揄するから、母親がむきになる。周囲が煽てるから調子に乗る。もう構わないでほしい。それ以上は望まない。周囲がそっとしておいてくれれば、郁美だってあそこまで奇矯な行動は取らないのだから。

「ちょっと、伊藤さん」

戸を叩く音がした。帰って、と玉恵は叫ぶ。母親を責めてほしくない、ましてや煽ててほしくない。

（みんな、あたしたちのことなんて忘れて）

「伊藤さん、何か誤解してるんじゃないかい。おれは別にあんたのお母さんを責めに来たんじゃないよ。なあ」

「帰ってください」

「これはないだろう。おれはあんたの母さんに用があって来たんだ。それを娘のあんたが追い払うのかい。とにかく、こんなところで声を張り上げてたんじゃ、みっともなくてしょうがない。あんたの言い分も聞くから、ちょっと中に入れてくれないかい」

玉恵は耐えかねて戸を開けた。戸を叩こうと手を挙げた男を突き飛ばす。

「帰ってってば！」

「おいおい。乱暴なことを」

「あたしたちに構わないで！」

追い払おうとする玉恵と、その場に留まろうとする客とで揉み合いになった。郁美が戻ってきたのは、まさにその最中だった。
郁美は袋ひとつを手に提げて、家の側まで戻り、玉恵の癇性の声を聞いた。見ると家の軒先で男と玉恵が揉み合っている。玉恵は再三、「帰って」と叫んでいた。男はそれを宥めようとしている。
何が起こったのかは分からなかったが、玉恵が男を追い払おうとし、男がそれに逆らっていることは明らかだった。郁美は袋の中に手を突っ込み、抹香の包みを摑み出す。
「人の娘に妙な真似をしないでちょうだい」
はっとしたように振り返った二人に抹香を投げた。玉恵はかかってきたものを払うように手を挙げ顔を背けたが、男の反応は異常だった。狼狽した声を上げて跳び退り、まるで火でもかけられたかのように、身体を叩き、払い落とそうとする。郁美は悟った。
「……あんた」
抹香の残りをぶちまける。男は奇声を上げ、身を捩って抹香を払い落とそうと手を振りまわした。
「何しに来たの。とっとと退散しなさい。お前みたいな不浄の者が、家に近づくんじゃないよ！」
郁美は数珠を摑み出す。男は慌てふためいたように身を翻し、あたふたと夜道を駆け

出した。身についたものを払い落としながら駆け去る男を見やり、郁美は得心する。

——報復だ。

やはり郁美は連中の痛いところを衝いたのだ。だから連中が意趣返しにやって来た。そうに違いない。

郁美は、ぽかんとした娘に向き直った。

「あたしを訪ねてきたんでしょ」

「ええ……そう」

やはりね、と郁美はひとりごちる。

「いい、玉恵。あたしに客が来ても絶対に家に入れちゃ駄目だからね。特に夜の客は」

言いかけ、郁美は辰巳や正志郎の顔を思い浮かべた。あつかましくも昼日中に徘徊している連中。

「いいや、昼間でも。あたしがいないときに誰かが訪ねてきても家に入れちゃいけない。あんたも相手をしちゃ駄目。家に閉じ籠もって無視しなさい。いいね？」

玉恵は困惑したように首を傾げ、そして頷いた。

8

どうしてなのかは分からない。

彼はその丘で異端者だった。神の恩寵は弟の上にあり、光輝は彼を振り返らなかった。神の具現たる光輝だけではなく、賢者も、そして隣人でさえ。いや、決して彼は疎外されていたわけではない。ただ、弟と光輝がそうであったように、寸分の隙もなく調和することが彼にはできなかった。

彼は弟と同じように振る舞っているつもりだったし、他の誰とも同じように——あるいはそれ以上に——敬虔であったつもりだったし、そうありたいと願っていた。にもかかわらず、世界と彼の間には越えがたい隔絶が横たわっていた。

それがいつから始まったことなのか、彼にも分からない。まるで生来、付与された性質のように、記憶にある限り最初から、彼と世界の関係は決定していた。

不幸な隣人に手を差し伸べれば、彼が手を伸べた事実が隣人を傷つけた。憐れみを抑えて叱咤すれば、不幸な隣人をさらに追い詰め、激励すれば孤絶を感じさせた。どこかで何かを間違っているのだということは分かったが、それがどこなのか、彼には分からなかった。

彼は彼なりに懸命に考え、自分と世界の間の溝を埋めようと努力したが、努力は空転するばかりで、徒らに溝を深めた。

世界は美しく調和していた。彼はその調和に焦がれたが、いったん彼がそこに入ると、

すべての調和は台無しになった。だからこそ、彼は一人であらねばならなかった。彼は緑野の片隅に孤立していた。隣人たちは孤立した彼を憐れみ、手を引いて調和の中に引き戻そうとするのだが、それに従えば結局いつも必ず隣人たちを困惑させる結果になったので、いつの間にか彼は手を引かれてもそれを拒むようになった。すると今度は、救済を拒み、孤立し続ける存在がある、という事実が、隣人たちを苛むのだった。

彼の存在を喜び、良し、と言ってくれるのは、弟がただ一人だった。弟の慈愛は、世界に対しても、彼に対しても正常に作動した。誰もが弟を情け深い人格者として慕い、弟の存在は彼を含め、弟に係わるすべての人々を幸福にした。

そう、たしかに彼は幸福だった。彼一人でいる限りにおいてはたしかに満たされていたのだし、弟が側にいるとき、あるいは彼の呼びかけに弟が手を振るとき、彼は多く、満たされていた。

時折を除いては。

彼は時に、弟の姿を目にして苛立つことがあった。決して弟に対してではない。緑の野辺に立った優しげな羊飼いの姿を見ることは、彼にとってたしかに好ましいことではあったのだ。それは一幅の絵のようで、彼をひどく和ませた。にもかかわらず、本当に時折、彼はふと、その絵を見守る自分を意識することがあった。

野辺に弟が立っている、そのこと自体は彼を安らがせるにもかかわらず、野辺に立つ

弟を見守る自分、というものを意識したとたん、彼は必ず暗澹とした心持ちになった。美しい絵の中に住まう弟と、決してその絵の中にはいない自分、その隔絶が彼を決まって打ちのめした。

野辺に立つ弟、その絵が美しければ美しいほど、それは残酷な効果をもたらした。彼は決して絵の中には入れず、絵の中の世界は彼抜きで瑕瑾なく調和していることを思い知らされねばならなかった。いや、それよりももっと悪い。彼はその光景を心から好ましいと感じるがゆえに、決してその中に立ち入ってはならない自分を否応なく自覚せねばならなかったのだった。

静信は筆を止めた。

敏夫を責めるのは間違っている。どれほど極端に見えようと、敏夫は村人のために良しと思われることを行なったのだ。何が良しであるか分かっていながら、行動することを恐れて引き籠もっている静信に、敏夫を責める資格などあるはずがなかった。

にもかかわらず、静信には敏夫の行為を許容することができない。できない自分を自覚するとき、静信は自分が異端者であることを直截に感じる。

（分かっている……）

静信はじっと原稿用紙を見下ろした。

（間違っているのはぼくのほうだ）

敏夫は一人、控え室で苦いものを持て余していた。

静信の気性は分かっている。うかつなことを口にした自分が忌々しく、同時にそもそも「短慮」と呼ばれても仕方ない行動を取ってしまった自分が腹立たしかった。連中に上手を取られたのが悔しい。自分に対して苛立たずにおれなかったから、それを容赦なく責める静信に対して屈託を抱かざるを得ない。

「綺麗事だけでどうにかなるのか」

餓鬼の頃からあいつはああだ、と心中で吐き出し、敏夫は控え室を出る。二階に上がってナースステーションに入り、乱暴にドアを閉めた。つい先日まで節子がいた病室に、今は恭子が眠っている。節子の死、恭子の発症、何もかもが自分の無能の証明のように思えて、胸が悪い。

様々なものを持て余しながら、敏夫は回復室に入る。モニターを見ると、不整脈が現れているのが分かる。恭子は良くない。処置をしているが、すでに不可逆的な段階に入っている。

こいつは死ぬのか、と敏夫は思った。自分が愚かにも初期症状を見過ごし、家族への注意を怠ったせいで自分の妻は死ぬ。我ながら呆れたことに、感じているのは屈辱感で、妻を喪失しようとしている感傷ではなかった。

（おれは、恭子を失うことを悲しんでない）

しょせんはそういう人間なのだ、という気がした。そもそもどうして自分が恭子を妻に選んだのか、敏夫には思い出すことができなかった。出会いから結婚までのいきさつは思い出せても、そこには自分の生々しい感情が欠落している。今になって振り返ると、単純に父母が選んだ女を娶せられるのが嫌だったにすぎない、という気がした。自分の立場は分かっていた。村に戻って父親の跡を継がねばならない。そうして、村に尾崎を残さねばならないことは。だから父母から無理矢理娶せられる前に、自分の手で適当な女を捕まえた。ただそれだけのことだったのだ、という気がしてならなかった。

「お互いさまか……」

敏夫は苦笑して恭子の枕許に坐る。医者なら誰でもよかった、とは当の恭子が言っていたことだ。村に帰ってきた当初、村に閉じ籠められることを嫌って、そう言った。

敏夫を責めるように、心拍モニターが乱れ始めた。とりあえず処置をしたが、もういくらも保たないだろう。実家に危篤だと連絡したほうがいい。

ひとつ息を吐いて枕頭台の上のものを整え、そして敏夫は虚空を凝視した。

恭子は死ぬ、おそらくは。しばらく保たせることはできても、回復させることはできないだろう。死んだ恭子は甦るだろうか？

敏夫はしばらく、目を閉じた妻の顔を見ながら自問自答する。様々な可能性を考えて

みた。
（おれはしょせん、こういう奴だ……）
決して静信のようにはなれない。
心中で呟いて、敏夫は枕頭台の上のものを片付ける。妻の腕に填めた数珠を外した。
「恭子、頼む」
敏夫はこれまで、妻に何かを心から願ったことがない。これは最初で最後の懇願だ。
「……甦生してくれ」

9

夏野は何度か眠り、何度か目覚めた。目覚めるごとに、少しずつ意識が覚醒していく。氷のように平らになった思念の表面が融け、徐々に起伏が現れて、表面を滑り続けていた感情はそれに引っかかり始めた。
可哀想に、と思った。あんなふうに扱われて、可哀想に。その憐愍は昭に向けたものだったが、同時に昭に象徴される自分の何かに対しても向けられたものだった。国道を見たいと思った。この閉塞から逃げるための、たったひとすじの道。もしも今、自分の身体が思うように動くなら、夏野はあれを南へと下っていくだろう。それしかないのだ、

という確信のようなものが芽生えていた。――だが、もう間に合わない。
何度か結城が部屋を覗きに来た。夏野は何度か重い瞼を上げ、その最も身近にいた他人の顔を見た。とうとう一度も、視線は交わらなかった。
「……父さん」何度目かに父親が来たとき、夏野は目を閉じたまま呟いた。「窓、開けといて」
しかし、と父親は制したようだった。
「息苦しいんだ。……少しだけでいいから風が通るようにしといて」
頷いた気配がし、窓の開く音がした。冷えた風が微かに吹き込んできた。
「気分はどうだ?」
「うん……しんどいけど、悪くないよ。明日には楽になりそうな気がする……」
そうか、と答える声がした。
また眠った。短い眠りのたびごとに、意識が清明になっていくのを自覚していた。それで深夜が近づいているのだと分かった。意識の麻痺は、時間が経つごとに薄れていく。そして麻痺が完全には取れ切れないうちに次の襲撃がある。そういうことなのだと、学んでいた。
だから、徹がやって来たとき、目を開けないでもそれだと分かった。耳は周囲の物音を拾うことができたし、頭はそれがどの方向から聞こえる何に由来する音なのかを吟味

することができた。だから、そろそろだ、と思っていたし、それで徹が窓辺にやって来るのを察知することができた。

窓辺に現れた。中の様子を覗いている。細く開けられた窓がさらに開く。冷えた夜気が通った。

「……急いだほうがいいよ」夏野は呟いた。「父さんが、様子を見に来るかもしれないから」

窓辺で身を硬くする気配がする。

「そこまで行ってやりたいけど、起きられないんだ」

四肢のどこも怠(だる)くて、力が入らない。と言うより、まるで四肢を失ったような気がした。そこに依然としてあることは知覚できたが、それは萎(な)えて、まったく動こうとしない。

逡巡(しゅんじゅん)の末に、窓を乗り越えて人が入ってくる気配がした。家の中が寝静まったことぐらいは確認してきているだろうが、それでもかなりの度胸がいるに違いない。

ごめんな、と間近で囁(ささや)く声がした。

「いいよ……なんとなく……おれ、ここから出られないような気がしてたんだ……」

そうか、と声がする。

それは屈(かが)み込んできた。水が落ちてきた。ひんやりした温度の、それはたぶん、涙だ。

――吸血鬼も泣いたりするのか、と思った。

九章

I

結城は息子の部屋を覗(のぞ)き込んで、最初、息子がよく眠っているのだと思った。点(つ)いたままのスタンドを消そうとベッドサイドに近づいて、寝息が聞こえないのに気づいた。死んでいるのだと、理解するまでには少しの時間がかかった。

真っ先に思ったのは、「あれ」だったのだ、ということだった。敏夫が言っていた疫(えき)病(びょう)。初期症状が少し違っていたから、つい見過ごしてしまった。あれほど注意していたのに。それ以外の可能性については、考えてみたくもなかった。

結城は少しの間、息子の枕許(まくらもと)に坐(すわ)って呆然(ぼうぜん)として過ごし、やがて立ち上がって梓を呼んだ。同じく呆然としたふうの梓に電話をかけさせた。呼ばれて飛んできた敏夫は、ひどく複雑そうな表情で結城を見て、そして急性腎(じん)不全による敗血症、と診断書を出した。結城は敏夫が自分を責めているように感じた。なぜもっと早くに医者に診せなかったかと、問いかけているように思えてならない。

「しっかりしていたんです、倒れた時には。冗談も言えたし、笑っていた。とてもしっ

かりしていました。だから――」

　そうですか、とだけ敏夫は言った。

「……それでどうします？」

　結城は首を傾げて敏夫を見返した。

「息子さんを葬らねばならないでしょう。村ではこういう場合、真っ先に寺と弔組の世話役に連絡をするんですが、それとも、どこかの葬儀社に依頼しますか」

　結城は俯いた。一方に旧来の習慣通り、葬儀社を頼って葬る方法があり、もう一方に、越してきた村の流儀に従う方法がある。

「……どうすればいいんでしょう」

「火葬を勧めたいところですがね。結城さんはそもそも、そういう習慣のところに住んでおられたわけだし」

　結城は背筋を伸ばした。火葬にして遺骨にしてしまえば、本当にもう取り返しがつかない、と奇妙な危機感を覚えた。「取り返しがつかない」も何もない。すでに夏野の生死は決してしまったのだ。誰もこの結果を変えることはできない。結城はそれを重々承知していたが、火葬にすることは積極的に死を受け入れること、喜んで迎え入れ、不変の事実として一分の隙もなく定着させることのように思われてならなかった。

「弔組にお願いします」

「しかしね」
「息子は……この村の一員として、地縁に入り込んでいたんです。居場所を見つけていた。村の一部として還してやりたいんですよ。夏野もそれを望んでいると思います」
「……そうですか」敏夫は深い息を吐いた。「では、おれから世話役のほうには連絡しておきます。寺はどうします」
結城が考え込んでいると、
「別に宣伝をするわけじゃないが、村に葬るつもりなら、寺に墓所を借りないといけません。結城さんは墓所をお持ちじゃないんで。もちろん、これから求めることも、許可を取ることもできないわけじゃないが、許可を取るのは非常に煩雑になると思ったほうがいいでしょう。もうここ何十年も、新しい墓地の認可は出てないんで」
「認可が必要なんですか?」
「知事の許可が必要です。今から手続きをしたり、買い求めたりするより寺に頼んだほうが早いです」
「では――お願いします」
敏夫は頷いた。
「では、寺にはおれから連絡をしておきますんで。あとは世話役が全部、面倒を見てくれますから」

はい、と結城は頷いた。そのまま、結城は息子の枕許に坐っていた。他にどうすればいいのか、思いつかなかった。敏夫が去っていくらも経(た)たない頃、玄関から声がした。立ち上がる気にもなれないでいると、それは勝手に上がってきて、結城を捜すふうだった。

「結城さん——ああ」

ドアが開いた。結城が振り返ると、広沢と武藤だった。

「武藤さんから連絡をもらって」

広沢の声に武藤は頷く。敏夫が連絡をしてきた。助けが必要だろう、と言われ、仕事を休んで同じ弔組に所属する広沢を誘い、駆けつけてきた。

虚脱したように坐り込んだ結城、ベッドに横たわったのは彼の息子だ。息子を失った父親。あまりにも生々しく自分の呻吟(しんぎん)が甦(よみがえ)ってきた。

「結城さん、わたしは」

あんたの気持ちは痛いほど分かる、と言いたかったが、それも躊躇(ためら)われた。ただ結城の肩に手を置いた。それに促されたように結城は深く俯く。微(かす)かな嗚咽(おえつ)が聞こえた。

何度も頷きながら結城の肩を叩(たた)く武藤を見つめ、広沢は立ち上がる。結城は武藤に任せたほうがいいだろう、と判断した。子供を失った父親同士、通じるものがあるだろう。同じ経験を共有してない自分には、かけてやれる言葉もない。——それよりも、と広沢

は部屋を出る。葬儀の準備をしなくては。おっつけ、世話役がやって来るだろうが、それまでにもしなければならないことがいくつもある。

家の中を歩き、居間に梓を見つけた。梓もまた無防備に、物のように坐り込んでいた。

「このたびは……御愁傷様です」

広沢が声をかけると、梓は怪訝そうに瞬き、そして頷いた。

「あの、こんな時になんですが、神棚はありますか。あれば半紙で蓋をしないといけないんですが」

「いいえ」と、梓は虚脱したように答える。

「夏野くんに着せる浴衣か寝間着のようなものはありますか？」

これにも、いいえ、と放心したふうな答えが返ってきた。広沢は、同情を込めて梓を見下ろし、ちょっと家の中を勝手に弄ります、電話を借ります、と断った。家に電話して妻に最低限のものを用意して持ってくるよう頼み、湯灌の用意をするために洗面所を探す。

梓は、広沢が立ち去った居間に、一人で残された。じっと坐り込み、今のは誰で、なぜあんなに勢い込んでいるのか、その理由を理解しようとした。

息子が死んだのだ、と思い出すのには少し時間がかかった。「死んだ」という言葉は、梓の脳裏にぽっかりと浮かび、なんの感興も思念も呼び起こすことがないまま、孤立し

て漂った。
「……連絡をしないと」
それは「死んだ」という思念とは、まったく無関係なところから浮かび上がってきた。
梓は時計に目をやり、受話器を取る。学校に電話をかけた。
十数度のコールのあとで、ようやく電話に出た事務員は、無機的な声をしていた。
「一年生の小出──いえ、結城の母親ですけれども」
ああ、と事務員は答える。両親が入籍してない夏野は、事務員によく覚えられている。
梓は口を開いた。言葉は考える必要もなく滑り出てきた。自分でも自分の声を奇妙なもののように聞いた。
「息子を転校させることになりました。急にこちらを引き払うことになりましたので。息子はもうこちらを発ってます。わたしが改めて後日、退学の手続きに参りますから」
事務員が何かを言ったが、梓はそれに耳を貸さなかった。言うべき事だけを言ってから、頓着なく受話器を置く。しばらくそのままで宙を見据えていた。
ひどく怠く、そして何もかもが現実感を欠いている。
そう感じながら、梓は手を動かした。シャツの袖の中に手を忍ばせ、肘の内側を掻く。小さくふたつ、虫さされのような痕があって、それがとてももむず痒かった。

2

静信が結城夏野の訃報を受け取ったのは、勤行の前だった。村に土葬にしたいこと、ついては檀家に入って墓所を借り受けたいことを小池老に告げられた。
「結城さんちも、武藤さんとこと同じく、やはり土葬にしたいってことなんで。ひとつよろしく頼みます」
「それは構わないのですが」と、静信は受話器を握ったまま予定を書き込んだ黒板を見た。「実は……小池さん、明後日はもう予定がいっぱいで」
「明後日——ああ、明日は友引か」
「近隣のお寺さんにお願いしていただくか——どうしてもうちでということになると、十八日か、あるいは明日かということになりますが」
「いくら何でも、十八日は無茶だろう」言って小池は思案するように言葉を切る。「十八は十八で、急の用ができるかもしれんし。明日で結構。結城さんには申し訳ないが、こればっかりは呑んでもらわんと」
はい、と静信は頷いた。予定を書き込み、光男に墓地の確保を依頼して本堂に行く。勤行を終えて寺務所に戻る静信を、呼び止めた者があった。

「あのう……若御院」
振り返ると、雑貨屋の千代だった。毎朝欠かさず、山門前を掃除してから勤行に参加していく敬虔な老女は、丁寧に頭を下げる。
「近頃、お忙しいみたいですねえ」
まあ、と曖昧に言葉を濁す静信の顔を、千代は物問いたげにじっと見た。
「……大丈夫ですよねえ」
そもそも寡黙な老女の、短い一言に静信は胸を衝かれた。そこには千代の不安と期待が託されている。
千代はそれだけで言うべきことは言った、というふうにじっと静信を見上げて言葉を待っている。
「……はい」
やっとのことで答えた静信に千代はもう一度、深々と頭を下げた。ゆっくりとした足取りで本堂を出て行く。苦しく嘘をついた静信を残したまま。
村は逼迫している。これほどまでに。寺が身動きできなくなるほどの死者。たしかに敏夫の言う通り、形振り構っている場合ではないのかもしれない。誰かがこの惨禍を止めねばならない。このまま放置することは許されない。
敏夫が郁美を煽ったのは、明らかに短慮だったと思う。だが、焦った敏夫を責められ

ない。そもそも、自分は敏夫の所行のせいで状況が不利に傾いたことに怒っているのではない。あの所行そのものに怒っているのだ。
敏夫の気持ちは分からないでもない。敏夫の性格も分かっている。郁美を煽ったのは敏夫らしく、しかも敏夫の身になれば妥当だと思えたのも無理はないのだろう。その結果は予測不可能だった。だから責めても始まらない。
（けれども……）
敏夫の拠（よ）って立つ場所が見えない。敏夫が村を救おうとしているのは分かるが、何をもってそう思うのか。平たい言葉で言うなら、正義ではないのか、村人に対する慈善ではないのか、それと郁美を利用することがどうして並び立つのだろう。
自分の望む結果のためなら手段は選ばない――敏夫のそういう振る舞いは、ひどくエゴイスティックに見える。ならば最初からエゴイスティックに振る舞えばいいのだ。村の連中など知ったことじゃない、これ以上の苦労はお断りだ、面倒や危険は御免被（こうむ）ると言えばいい。そうであれば、静信も理解できるし納得できる。
――そして、自分も。
村を救いたいのであれば、手段の是非を問うべきではない。それほどの余裕は村にはないのだ。たしかにこれは、二者択一だ。村を救いたいのであれば、屍鬼を根絶することが必要なのだし、根絶しなければ惨禍はやまない。にもかかわらず、手段の是非に拘（こだわ）

る自分がいる。静信はそういう自分をも理解することができなかった。

彼の手にかかると、すべては正常に動かなかった。彼は水を汲もうとして弾み車を回転させるのだが、彼が触れれば機構は本来の動きを拒み、水を汲まずに土を掘った。困惑する彼に微笑って、弟が手を触れる。するとそれは本来の働きを取り戻して水を汲み上げる。そんなふうだったのだ。

彼は弟を介することなしに、世界と係わることができなかった。そして、弟の仲立ちがある限り、間接的にとは言え、美しい調和に触れることができたし、とりあえず自分はまったく無関係ではないのだと安堵することができた。

弟の周囲で調和した世界、彼はその絵の中に入ることはできなかったが、弟という存在を介して、その絵を鑑賞することは許された。だからこそ、弟が失われた時に、彼は世界までも喪失しなければならなかったのだ。

なのにどうして、弟の死を願うことがあるだろう。

――ならば、なぜ殺せしか。

悪霊の声に、彼は身を硬くした。

分からない。

弟の死は、隣人たちを悲嘆させた。草叢から見つけ出された亡骸は粛々と運ばれ、街

に入り、神殿に入った。その間、沿道の人々は涙にかきくれてそれを見送ったのだった。だが、その誰よりも彼は泣いた。斃れた弟を呼び戻そうと抱き縋り、それが決して叶わぬことを確認して号泣した。

耐え難い痛み、底知れぬ絶望、しかしながら、弟を彼から奪ったのは、彼自身だったのだ。

——なぜ、このような罪を。

汝は、と悪霊は勝ち誇ったように言う。

汝はその真情において、弟を妬んで居た。

己には得られざるものを得、成し得ぬを成す弟を羨み、成り代わることを渇望し、それが可能ならざることに憤った。己に対する劣等感のゆえに弟の慈善に優越感を嗅ぎ取り、それを勝者の傲慢なりと読み替え、自己を被害者として置き換えた。

それは違う、と彼は叫んだ。

彼はもちろん、やすやすと秩序に受け入れられ、ゆえに絵の中の住人であり得た弟を羨ましく思ってはいた。だがしかし、その一方で、秩序に受け入れられることのない己を心のどこかで諦めてもいた。彼が秩序の寵愛を得られないのは彼自身に由来することで、弟のせいではなかったし、彼自身、それをたしかに理解していた。

たとえ弟が存在してもしなくても、彼が秩序に受け入れられることはなかっただろう。

むしろ彼は弟がいなければ、立ちゆかなかった。彼はそれを重々分かっていた。
——では、復讐ならん。
己を受け容れず、まつろわぬ世界に、寵童を屠るを以て復讐せんとした。
それも違う、と彼は呻く。
彼は世界に受容されないことに、たしかに苦悶していた。実を言えば、弟を利用して復讐することを考えなかったわけではない。だがしかし、それは弟を屠ることによってでは断じてない。弟を誑かし、慈愛深い弟のさらなる同情を得て、弟が兄を受け入れぬ世界を拒絶し、憎むようになれば、どれほど救われるだろうかと夢想はした。
肝要なのは、弟が彼を肯定し、弟に寵愛を注ぐ世界を拒絶することで、弟の存在が消え失せることではなかった。——そんなにも、彼は弟に依存していた。
だが、同時に彼はそういう夢想を抱く自分を恥じていた。それが罪深いことであり、そんな復讐は何物をも生まないことを理解していた。彼は秩序の寵愛がほしいのであって、秩序から隔絶されたいわけではない。
弟が秩序の中に調和していればこそ、彼は弟の存在をよすがに、秩序の一部であり得たのだし、美しい調和に触れていることができたのだ。その接点たる弟が秩序を拒み、彼と二人、世界から隔絶し閉塞してしまえば、彼は弟を得ても世界を失う。
——では、何故に殺傷せしめたるや。

彼にはそれが、分からない。

3

律子は休憩室に行って、その訃報を聞いた。
「結城——工房の夏野くんですか?」
清美(きよみ)は頷く。
「亡(な)くなったらしいわ。腎(じん)不全だそうよ」
そうですか、と律子は呟(つぶや)いた。最後に見かけたのはいつだったろう。思い出そうとすると、遠目に国道から南を眺めている姿ばかりが甦った。
最後に会って会話をしたのは真夏だった。あの日、律子は決意をしたのだ。この村を出られない。夏野のように夜明け前の国道を無為に望む、ああいう生き方をしたくなかった。その日、律子は恋人に電話をし、工務店に電話をした。恋人は時間をかけて話し合おう、と言ったが、そのうち律子のほうが忙しくなってそのままになっている。とっくに連絡も来なくなっていたから、相手も諦めたのだろう。工務店のほうは、何度か相談をして、冬までには改築に取りかかりたいと言っていたのだが、設計士が工務店を辞め、そうしているうちに律子のほうに時間の余裕がなくなり、当の工務店で不幸が続い

て完全に棚上げになっていた。
どうしてこんなことになったのかしら、と律子は改めて思った。夏野に会ったあの日、こんな事態は想像もしてみなかった。律子はいつか夏野が静かに南へと歩み去っていくのだという気がしていたし、自分は村に残って骨を埋めるのだという気がしていた。あの日を起点にそれぞれの未来は、自明の方向へ伸びていくように見えたのに、その後、何ひとつ自明だと思われたようには動いていない。たった二月かそこらしか経っていないのに、もう十年も前のことのような気がする。「ひと昔」と呼べるだけの断裂が、そこにはあった。
(とうとう行けなかったんだ……)
律子はなんとなくそう思う。ひどく感傷的な気分だった。あれほど南を恋い慕っているふうに見えたのに、飛び立つことがないまま死んでしまった。
「それで、先生は？　まだ戻ってないの」
清美が訊いているのが聞こえた。
「二階よ」と、答えたのはやすよだった。やすよは視線を天井に向ける。「回復室。若奥さんにつきっきり」
「奥さん……どうなの？」
清美は、恭子が倒れたと聞いただけで、実際に恭子の姿は見てない。回復室に入れた

まま、敏夫が一人で一切合財の世話をしていた。ただやすよだけが、恭子が倒れた当初、呼ばれて処置に立ち会っている。

　やすよは首を横に振った。

「後半に入ってるわね。あたしが見たときは呼吸不全を起こしてたけど、肺の中に血が溜まってるみたいだったわよ。黄疸も出てたしＤＩＣも出てるみたいだったし、ああなるともう、どうにもならないいんじゃないかしら」

「そう……」

「若奥さんでなきゃ、溝辺町の病院に転院させるとこでしょ。それをしないのは、なんとか自分で最期を引き延ばしてやりたいからじゃないのかねえ」

「あの人も人の子だ。意外に情があるじゃないの。昨日も何度も診察中に二階に上がって様子を見てたみたいだし。本音を言うとつきっきりでいたいんだろうけど」

「悔しいんでしょ。あんなになるまで気がつかなかったのが」

　律子は二人の会話を聞きながら俯いた。あまり仲の良い夫婦には見えなかったが、これは外部からは窺い知れない種類のことだ。けれども、悔しいのだろう、というやすよの指摘には説得力がある。どうして初期の段階で家族が気づかない、連れてこないのだ、とあれほど苛立っていた当の敏夫が、妻の変調を見過ごしたのだから。

　その敏夫は、受付開始時間を大幅に過ぎて、ようやく下に降りてきた。診察が始まっ

ても敏夫は頻繁に席を外し、二階に様子を見に行く。誰か看護婦がついていましょうか、と提案したのは清美だ。この日はいつもに比べ、患者が少なかった。それだけの余裕があったのだが、敏夫は首を横に振る。構わないでいい、気にしないでくれ、と答えた。

昼が近づいても、患者は増えなかった。昨日、水口の伊藤郁美が兼正に押しかけていったという。これは単なる騒動で終わったようだが、そのせいでかえって村の者の漠然とした不安が解消されたのじゃないか、というのが清美の意見だった。単純に患者が少ないだけではない。この日は珍しく、例の患者がなかった。貧血を呈している患者は一人もいない。

「小康状態ってことかしらね。ひとつピークが過ぎて、次のピークとの谷間に入ったのかも」

やすよは言ったが、それればかりでないことは昼休みが過ぎて分かった。江渕クリニックが開業したと言う。まだ外装工事が終わっていないのに、昨日から患者を受けつけている。

「どうも、あっちは夕方だけの営業みたいですよ」と、噂を聞きつけてきた雪は言った。「夕方六時から、十時までなんですって」

「へえ。夜間クリニックってやつかしら。都会ならともかく、こんな田舎でそんなことして成り立つのかねえ」

「ですよねえ。都会なら通勤帰りのサラリーマンとかを当て込めるでしょうけど」
律子たちは一様に首をひねった。
そして、この日、パートの関口ミキは連絡のないまま仕事を休んだ。
美和子は郁美の糾弾が忘れられなかった。あまりにも異常な様相。疫病だろうか、本当に。何かそういう、美和子の知る異常とは別の異常が進行しているように思えてならなかった。
「あの……克江さん」
美和子は庫裡の厨房で鍋を磨いている田所克江に声をかけた。
「こんなことを訊いて、どうかしていると思わないでくださいね」
前置きをして、美和子は重い口を開いた。
「その……以前、克江さんは村で何が起こってるか、分かってるって言いましたよね。一体何が起こってるんでしょう?」
克江はちらりと美和子を見る。
「あんまり口にするようなことじゃないですからね」
「昨日、何とかいう方がいらしたでしょう。水口にお住まいの」
「伊藤郁美」

「そう。あの方が、起き上がりだって。……それ、どう思われます?」
克江は手を止めて、美和子をまじまじと見た。すぐに目を伏せ、鍋磨きを続ける。
「……郁美さんが正しいんじゃないですかね」
馬鹿(ばか)な、と思うと同時に、やはり、という気分がした。美和子は洗剤にまみれた自分の手を見つめた。
「光男なんかは伝染病だと思ってるみたいですけどね、こんな伝染病があるもんですか。死人が必ず明け方に出るのが証拠ですよ。鬼です。起き上がりですよ」
「でも……」
「あたしの言うことが迷信じみてるってのは分かってますけどね。他に考えようがないでしょう。そもそも、本当に鬼なんていないんだったら、どうして鬼がいる、なんていう伝説が残ってるんです?」
「それは、そうですけど」
「大丈夫ですよ」
美和子は意を摑(つか)みかねて克江を見つめた。
「だから、寺は大丈夫。鬼のことなんですから、ちゃんと仏法を護持して身を慎んでいれば心配なんかありゃしません。お経もろくに読めないような生臭坊主(ぼうず)ならともかく、そういう不心得な者は、ここにはいませんから」

「そう——そうですね」
美和子は弱く微笑(ほほえ)んだ。そう、鬼なんて馬鹿気(ばかげ)ている。けれども言い伝えがある以上、それが本当のことであっても不思議はないのだ。むしろ馬鹿気ているからこそ、言い伝えでしかないのかも。これが鬼ならば、寺は大丈夫だ。夫も息子も、鬼のほうで避けて通るだろう。疫病なら寺を避けてはくれないが、鬼ならば。
(そうだわ、鬼なんだわ。きっとそう)
美和子は洗い物をしながら、自分に言い聞かせた。
池辺は厨房の戸口に立ち、困惑した気分で床を見つめていた。池辺のいる位置からは、美和子の姿も克江の姿も見えなかったが、二人の会話は小声であるにもかかわらず、広い厨房に谺(こだま)してよく響いた。
(馬鹿な……)
鬼だとか、起き上がりだとか。そんなものがこの世にいるはずがない。
(けれど、これだけの死人が)
今年は死人が多い。尋常の数ではない。伝染病だと言うが、伝染病ならもっとニュースになるなり、行政が介入してくるなり、それらしい動きがあるものではないだろうか。本当に伝染病だという、具体的な話は何ひとつない。ただそういう噂だけが蔓延(まんえん)している。

(でも、だからって、鬼だなんて)

そんなはずはない。そういう化け物は、おもちゃ箱の中に片付けられてしまったのだ。子供の頃にはそれを信じ、天井の染みまでが怖かったけれども、もうそんな馬鹿気たことに怯えるような歳ではない。

(あり得ない)

池辺はそっと踵を返した。廊下を寺務所へと戻る。庫裡の廊下は長く、しかもそこここに薄闇をまとわりつかせていた。床板は軋む。まるで誰かがあとをつけてくるかのように。けれども、振り返って誰もいないのをわざわざ確認してみるのは子供のすることだ。

強いて背後を意識しないよう努めて、池辺は寺務所に戻った。中では光男が鶴見の顔を覗き込んでいた。

「本当に大丈夫なのかい？　なんだか顔色も良くないけど」

鶴見はぐったりとしたように椅子に坐り込んでいる。連日の疲労もあるだろう、季節柄、風邪を引いているのかもしれない。朝からどうもぼうっとしたふうだった。

池辺は鶴見の、熱に浮かされてでもいるような目を見、ふいにぞわりと悪寒を感じた。

——疫病だとは思えない。だからと言って、鬼だなんて、馬鹿馬鹿しすぎる。

「今日はもう帰って休んだほうが良くないかい」

「そうですよ」と、池辺は口を挟んだ。「今日はもう法事の予定もないし、戻って休んでください」
「……いや」と、鶴見の声は覇気を欠いている。
「そう言わず」池辺は、知らず言葉に力を込めた。「絶対に風邪ですよ。そういう顔です。帰って暖かくして寝てください」

「ちょっと、聞いた？」
燥(はしゃ)ぐように声を上げて、タケムラの店先に駆け込んできたのは、大塚弥栄子(おおつかやえこ)だった。
店先の床几(しょうぎ)には、例によって笈太郎(おいたろう)と武子(たけこ)、そして大川浪江(おおかわなみえ)がいた。
「遅いわよ。郁美さんでしょう？」
言ったのは、最初に情報を持ってきた浪江だった。
「あら、聞いてたの」
「聞いてるもなにも。うちの店先の角に立ってさ、しばらく大声を張り上げてたんだから」
「あらまあ」
「あの人も、本格的におかしくなってきたわよね。もともと危ないとは思ってたけど」
「本当にねえ」と、弥栄子は頷(うなず)く。「よりによって鬼、だもんねえ。そんなことを本気

で言い出して兼正にまで押しかけたって言うんだから、本物だわ」
　武子が笑った。
「なによう、あんた、ちょっとは信じてたくせに。知ってるわよ、郁美さんにお札をもらったんでしょ」
　あら、と弥栄子は怯む。
「別に信じたわけじゃないわよ。付き合いよ、付き合い。——信じるわけないでしょ、鬼だなんて。馬鹿馬鹿しくてお話にならないわ」
「そうお？」
「そうよ。そりゃあ、あの人が今年はろくなことにならないって言って、本当に死人が多くて気味が悪かったのはたしかだけど。だからって、鬼はいくら何でもないわよね」
　武子は大仰に頷いた。
「本当に。だいたい、死人が多い多いって大騒ぎしてるけど、こういうことだってあるもんじゃない。今年は夏も厳しかったし、残暑もきつかったしさ。もともと老人ばっかりの村なんだし」
「そうよねえ」
　笈太郎が笑った。
「それを、大騒ぎしたあげく、鬼だ、だからねえ。兼正にまで押しかけてさ、旦那にこ

っぴどく言われて追い返されたってんだから、いい物笑いの種だよ」
本当に、と老人たちは声を上げて笑った。タツはその笑いを眉を顰めて聞いた。
――こういうこともある？　とんでもない。
村では変事が起こっている。この死人は異常だ。続くことはたしかにあっても、これは明らかに度を過ぎている。そんなことは老人たちだって百も承知だったはずだ。
（……こりゃあ、まずいね）
タツは内心で独白した。この間まで、ここに来る誰もが不安を抱き、事態を訝しんでいたのに、今日はもう、「鬼なんているはずがない」というところから、一足飛びに「これは異常なことではない」というところに動いている。異常な事態に直面し、それに非常識な答えを突きつけられ、その非常識な答えを否定するために、異常だという認識までが否定されようとしているように見えた。
だが、この現状は絶対に異常だ。鬼だろうと鬼でなかろうと、尋常でないことが村で起こっているのだけは間違いがない。
（村の連中が、みんなこの調子だとしたら）
タツは微かに肩をすぼめた。救い難い何かの姿を、ちらりと垣間見たような気がした。

敏夫は何度か席を外しながらその日の診察を終えた。受付終了は午後六時。律子が後始末をしているときに、関口ミキから電話があった。誰もが漠然と予想していた通り、ミキは辞めると言う。少しずつ寂しくなる。律子は肌寒い思いで私服に着替えた。

「……永田(ながた)さん？」

病院を出て、清美に呼びかけたのは、清美がいつもとは別の方向に歩き出したからだった。清美は振り返って笑う。

「ちょっと、ミキさんの様子を見てくるわ」

「でも……」

「辞めるのは本人の自由だけどさ、あの人、もう歳でしょう。これからどうやって生活するのか、色々と気になるから」

そうですね、と微笑んで律子は清美に手を振った。清美も律子に手を振り、すっかり陽の落ちた道を急ぐ。陽が落ちると冷え込むようになった。真夏の熱波が嘘(うそ)のようだ。

秋は急速にやって来た。患者に追われ、駆けまわっているうちに、もうこんなにも時間が経(た)っていたのだ、という気が清美にはした。コートの襟を掻(か)き合わせる。本格的に衣類の入れ替えをしなければ。余裕がなくて、とりあえず必要なものを奥から引っぱり出しているうちに、十月も半ばになってしまった。

清美はいつもとは逆に、中外場のほうへと向かう。途中、兼正へ登る坂の前を通り、

ほんの一瞬、坂を見上げた。

（起き上がりねえ……）

苦笑まじりに肩を竦める。そのまま中外場の集落に向かい、うろ覚えで家並みを辿って関口ミキの家を捜した。ミキは一人暮らしだった。酒飲みの夫は十年ほど前に肝臓を壊し、以来、家でぶらぶらしていた。ミキがパートをして家計を支えていたが、二年前、夫は肝硬変で死んでいる。清美ら看護婦たちが葬儀を助けた。子供はいるが、怠惰な父親を嫌い、みんな村外に出てしまっている。葬儀に集まった子供たちは誰も、母親には同情的なようだったが、同時に父親に対して毅然とした態度を取れなかった母親を見放しているようなところもあった。

気持ちは分かるけど、と清美は胸の中で呟いた。病院を恐れる気持ちは分かる。けれどもこれからミキはどうするのだろう。つましい家の中が思い出された。家財と呼べるほどの家財もなく、蓄えは全部、夫が死ぬまでに飲んでしまっていた。田圃も山もとっくに手放し、亭主が職を転々としていたせいで生活を支えられるほどの年金もない。

記憶を頼りに、路地の奥にある小さな家に辿り着いた。玄関のガラス戸に手をかけたが、戸締まりをしてある。清美は軽く戸を叩き、声をかけた。

「ミキさん、永田です」

玄関で人の気配がした。薄暗い明かりに、ガラス戸を透かして人影が見える。戸を開

けたのは、見慣れない中年の女だった。
「どちらさん？」
「あの……関口ミキさんの家ですよね」
「そうですけど」
「わたし、病院の永田ですけど。ミキさんは――」
「今、お風呂を使ってます」
「あの、失礼ですが？」
「わたしは姪です」
清美は首を傾げた。縁者なら葬儀の時に会ったはずだが、この女には見覚えがなかった。玄関を入ってすぐの茶の間ではテレビの音がする。中年の男らしい後ろ姿の一部が見えた。
「で、何の御用です？」
女の口調には温かみがなかった。どうやら清美は招かれざる客のようだった。
「あの……ミキさんがパートを辞めるって言うんで、どうしたのかと来てみたんですけど……」
ああ、と女は素っ気ない口調で言った。
「辞めるよう言ったんです、わたしが。叔母も歳なんで、一緒に暮らすことにしたんで

す。わたしたちが生活の面倒は見るんで、もう無理に働く必要もないですから」
「まあ……そうなんですか」
それほどミキと親しいにしては、葬儀では見かけませんでしたね、と清美は言いたい気がしたが、もちろん口に出すことはできなかった。清美は少しの間、家の中を窺っていたが、女が切り口上に「それだけですか」と言うので、ミキに会うことは諦めた。
「どうも……お邪魔しました。ミキさんによろしくお伝えください」
女は慇懃に頷いて、ぴしゃりと戸を閉めた。内側から鍵をかける音がした。
清美はなんとなく、立ち去りがたいものを感じて立ちつくしていた。どうとは言えないのだが違和感を覚えた。
老後の面倒を見ようというほどミキに対して情がある、というふうに見えなかったせいなのかもしれない。それにしては、葬儀で顔を見なかった気がするのも釈然としなかったし、女の清美に対する態度には、親しい叔母の同僚に対する温かみのようなものが欠けていた。男はついに背中を見せたまま振り返らなかった。普通は顔ぐらい覗かせるのではないか、という気がする。——そして、他にも何か、決定的な違和感のもとになるもの。
首をひねりながら路地を戻り、一軒の家の前まで来て、清美は違和感の由来に気づいた。その家からは醬油と魚を焼く匂いが漂ってきていた。——そう、ミキの家からはこ

の時間帯にもかかわらず、夕餉の匂いがまったくしなかったのだ。
清美は背後を振り返った。一瞬だけミキの家を見つめ、息を吐いて首を振る。だからどうだって言うの、と自分に言い聞かせながら、清美は家路を急いだ。
ミキの家から、女は清美を見守っていた。ガラス戸の隙間から外を窺い、清美が立ち去ったことを確認する。茶の間に戻ると男が一人、無言でテレビを見ていた。茶の間の奥にある仏間には、布団が敷かれている。そこには喘鳴まじりに息をしている老女の姿があった。布団の脇の仏壇は空だ。本尊も仏具も何ひとつ残っていない。空洞だけがミキを見下ろしていた。

4

「昭、あんた、こないだ、工房の息子から電話を受けてなかった？」
昭が母親の佐知子にそう言われたのは、夕飯のときだった。
「うん、そうだけど」
「やっぱり」と、佐知子は味噌汁を盛った椀を並べ、エプロンを外した。「工房の息子さんね、亡くなったんだそうよ」
箸を取りかけ、昭は母親の顔を凝視した。

「……死んだ？」
「あたしも小耳に挟んだだけだけど。買い物に出たとき、そういう話を聞いたのよ。なんでも今朝、亡くなったんですって。それでひょっとしたら、あんた親しかったんじゃないかと思って」
昭は愕然(がくぜん)としたし、かおりもまた目を丸くした。
「そんな……何かあったら知らせてくれるって」
「取り込んでて忘れてるんでしょ。可哀想(かわいそう)にねえ。まだ高校生だって言うじゃない」
昭は箸を叩きつけて立ち上がった。
「何だよ、それ！」
「何よ」
「兄ちゃんちの父ちゃん、連絡をくれるって言ったじゃないか。大人なんてみんなそうなんだ。おれたちとの約束なんて、端(はな)から守る気がないんだ！」
言って、茶の間を駆け出してしまった昭を、かおりはおろおろと見送った。父親も母親も、ぽかんとしている。
「まあ……何なの、あれ」
母親が呟く。そうして、我に返ったように、顔を大きく歪(ゆが)めた。
「何なのよ、あれは」

かおりには答えられなかった。昭の足音が廊下に響き、玄関のドアが乱暴に開け閉めされて外へと駆け出していくのが聞こえた。きっと夏野の家に駆けつけるのだろう。あるいは、とにかくどこかで一人になりたいのだろうか。追いかけていっても、かけてやる言葉もないけれども、せめて側にいてやりたい気がして、かおりも箸を置く。立ち上がろうとしたとき、佐知子が大声を上げた。

「ほっときなさい！」

「……でも」

「放っておきなさい。何よ、いきなり。お箸を叩きつけて人を怒鳴りつけて。夕飯なんかいらないって言うんなら、勝手にすればいいんだわ。作ってる者の苦労も知らないで」

そうじゃない、とかおりは口にしかけた。昭は佐知子に怒ったのじゃない、夏野の父親に怒ったのだ。だが佐知子は、かおりに先を言わせなかった。

「いいから、あんたもさっさと食べてしまいなさい」言って、ぼうっとしたように箸を置いたままの父親を見た。「お父さんも。たまに家にいるからと思って、好物を用意してるんだから無駄にしないでちょうだいね」

ああ、と父親は呟いたが、それでも気乗りしないように皿を見ただけで、箸は手に取らなかった。かおりもまた、昭が——そして夏野が気になって、とても食事に手を付け

る気になれない。
「そう。だったら、勝手にすればいいわ。あんたも昭も、お父さんも」佐知子は吐き出すように言った。「だいたい、人を何だと思ってるの。あたしは家政婦じゃないのよ。毎日毎日、御飯を用意して、別にそれで一銭のお金だってもらったことはないんだから。なのにあんたたちときたら、ありがとうでもない。当然の顔して食べて、食べたくなきゃほったらかしで」
かおりは俯いた。
「お父さんは残業だ何だって言って夜中まで帰ってこない。残業ですって？　役場で何の残業なのよ。どうせ職場の人と飲み歩いてるんでしょ。こっちは残業だと思うから、御飯用意して待ってるのに、ほしくないとか言ってさっさと寝てしまうし、あんたたちはあんたたちで、食事の時間なんてお構いなしに遊び歩いて」
父親は俯き、困惑したように瞬いている。
「こっちは温かいものを出そうと思って待ち構えてるのに、いつまで経っても帰ってきやしない。留守番を頼んでも家にいないで遊び歩く、手伝いもしない。好きなように遊んだあげく、好きな時間に帰ってきて、それで御飯があるのが当たり前だと思ってるんでしょ！」
「……ごめんなさい」

「謝ってくれなくて結構。もう、勝手にすればいいんだわ」
叩きつけるように言って、佐知子は黙々と食事を掻き込む。かおりは、ぼそぼそとそれを真似た。勝手に一人で食事を終えると、佐知子は自分のぶんの食器を片付ける。台所からは洗い物に八つ当たりをするような、盛大な物音がした。
「お父さん……ごめんね」かおりは小声で言う。「お母さん、怒らせちゃったから。お父さんまで怒られちゃったね」
「……いいんだ」
父親は、小声で言った。その声が、妙に力を失っているように、かおりには思われた。父親も箸は手に取っているものの、やはり食事には手を付けてない。
「どうしたの？　食べないの？　残すとお母さん、また怒るよ」
そうだな、と父親は言ったが、やはり箸を付ける気にはなれないようだった。
「お父さん、具合悪いの？　食欲ない？」
「……うん」
田中は呟いて箸を置く。ふらりと立ち上がった。
「……お父さん？」
「ちょっと病院に行ってくる」
「大丈夫？」

うん、と田中は頷き、鴨居(かもい)の釘(くぎ)にかけた上着を手に取った。テレビの脇に置いたままの書類鞄(かばん)から、小さなカードを引っぱり出した。

かおりは首を傾げた。診察券だった。「江渕クリニック」と書いてあるのが見て取れる。

「お父さん、具合悪かったの？　ずっと？」

ずっと病院にかかっていたのだろうか。それを黙っていたのだろうか。かおりは父親を見上げたが、父親は微笑(ほほえ)んだ。

「大丈夫だよ。とにかくちょっと行ってくるな」

かおりは頷いた。父親が出て行って、茶の間に一人で残された。気まずい空気、佐知子の立てる破壊的な物音。これがいつもなら、慌(あわ)ててかおりと父親で母親の機嫌を取り結ぼうとしただろう。料理を褒めながら、さも美味(おい)しそうに平らげてみせ、作ってくれたことに感謝し、その証(あかし)として少し手伝いをすればいい。けれども、かおりも父親も食欲がないのは事実だった。決して母親のせいではないのだけれども、いつものように機嫌を取ってやることができず、母親はそれでいっそう苛立(いらだ)っているような感じがした。

父親も中座してしまった。かおりもこの場を逃げ出したかったが、せめて自分くらいはちゃんと食事をしないと、という気分が先に立った。味気ない食事を懸命に詰め込む。昭と、父親のことを気にかけながら。

5

深夜、敏夫は目を覚ました。ナースステーションの一郭にある仮眠スペースの中だった。
微かな物音を聞いたように思い、敏夫は息を詰める。いちおう、ベッドの枕許には、守り本尊と香炉を据えてある。数珠と抹香、桐敷正志郎の態度からすると、これがどれだけの効力を持つのか心許なかったが、なんの用意もせず眠れるほど図太くはなれなかった。
ベッドの上に横たわったまま、息を殺して周囲の気配を窺った。ベッドの周囲にはカーテンを引いてあるので、外の様子は見えない。物音だけが頼りだった。
敏夫は耳をそばだてる。微かに足音めいた物音を聞いたようにも思うが、確証はない。誰かが歩きまわっているとすれば、それは恭子ではあり得なかった。どう考えてもう、歩けるような状態ではない。誰かがいるとすれば、それは裏口から侵入してきた誰かだ。敏夫はあえて裏口の鍵を外しておいた。回復室にも特に鍵はかけてない。
物音が続いているようでもあり、幻聴のようでもあった。ナースステーションの中にひとつ残したスタンドの明かりのせいで、ベッドの周囲のカーテンは黄味を帯びた陰影

の波を描いている。そこに映る影はない。ほんの少し、カーテンを開けて外を覗いてみたいという衝動に、敏夫は懸命に耐えた。

　さらに耳を澄ましていると、今度ははっきりと微かな物音が聞こえた。それはドアを閉める音だ。同時に隙間から漏れた空気の動きでカーテンが揺れる。誰かがいる、これはたしかだ。敏夫は懸命に呼吸を制御する。耳を澄ましてもそれ以外の音は聞こえなかったが、さらに耳をそばだてていると、階下で裏口を開け閉てするのに特有の音がした。

　敏夫は息を吐く。誰かが入ってきて出て行った。それはたしかだ。そろそろとカーテンを開けると、ナースステーションは翳りを浮かべたまま沈黙している。ベッドを下り、回復室に向かう。小窓から覗くと、恭子は仮眠を取る前に見た通り、ベッドの上に横たわっていた。

　そっとドアを開けた。すぐに、モニターに変化が現れているのに気がついた。拍動が弱い。しかも間隔が著しく開いている。じっと見守るうちに、ほどなく微細な反応が消えた。思い出したように二度、小さな弱い波を描き、そしてそれきり完全に絶えた。

　敏夫は淡々とそれを見下ろした。心停止。午前二時十二分。少し迷ったが、蘇生術は施さなかった。

　——ここからが賭だ。

　恭子は甦生するのかもしれなかったし、しないのかもしれなかった。死亡時間を前後

させることは、死亡診断書を書くのが自分である以上、簡単なことだが、どうにかして死体現象をできるだけ遅らせなければならない。さもないと、葬儀の棺の中に腐敗を始めた死体が入ることになる。

ナースステーションの製氷器に向かい、ありったけの氷を用意する。小分けにして密封し、タオルで包んだそれを恭子の身体の周囲に隙間なく並べていく。何度も氷の配置を変え、布団をかけ直した。モニターの角度を変え、外から覗いただけではモニターが見えないよう調整する。

起き上がってくれ、と敏夫は妻である女の死体を見下ろした。

「……連中に対抗できるかどうかは、お前にかかっているんだ」

6

物音に気づいたのは、玉恵のほうが先だった。台所の隅にある勝手口を、執拗に叩く音がしていた。玉恵は茶の間で身を起こす。しばらく布団の中に留まって、あたりを憚るような微かな音に首を傾げた。時計を見ると二時半が近い。こんな時間に人が訪ねてくる道理はなく、訪ねてくるような心当たりもなかった。

戸惑った末に、玉恵は隣室に向かい、郁美に声をかけた。

「お母さん」
「ああ」郁美も目覚めてはいたようだった。身を起こし、台所のほうを窺う。「相手にするんじゃない。どうせ鬼よ。あたしに復讐しに来たんだから」
　まさか、と玉恵は呟いたが、勝手口を叩いている客が尋常の客だとも思えなかった。開けると良くないことが起こる、そういう気がしてならない。
　しばらく二人、息を潜めていたが、戸を叩く音は、やまなかった。郁美がそろりと立ち上がった。
「……お母さん」
「大丈夫。ちょっと様子を見るだけだから」
　明かりも点けず、郁美はそろそろと台所に下りる。勝手口は古い開き戸で、そもそも錠はついてない。ただしラッチが馬鹿になっていて戸を閉めても勝手に開くので、取手に紐をつけて壁の釘に引っかけるようにしてあった。誰かが戸を叩く。微かな力に押されて、戸が揺れる。玉恵と郁美はそれに見入り、やがて郁美が低く声を上げた。
「誰？　こんな時間に」
　戸を叩いていた音がやむ。
「明日にしてちょうだい。何時だと思ってるの。夜の客は構わないことにしてるのよ」
　戸外の誰かは、前より強く忙しなく、再び戸を叩き始めた。

「誰なの。ちゃんと名乗ってごらん」
「……山崎です」と、女の声がした。「下外場の山崎和歌です。お願い、入れて」
「お断りよ。そこは開けられない。昼間に出直してちょうだい」
玉恵は母親を見る。郁美は眉根を寄せて何やら考え込むふうだった。
「……下外場の山崎と言ったわね？　あんたのところはつい最近、越したんじゃなかったの」
違う、と和歌は声を上げた。
「無理矢理、連れて行かれたんです。主人も子供も捕まってる。あたしだけなんとか逃げてきたんです。お願い、助けて」
郁美は玉恵を振り返る。
「抹香を持っておいで」
「でも……」
いいから、と言いながら、郁美は流しから錆びた包丁を取る。塩の壺を捜した。玉恵は母親の部屋に取って返し、祭壇から抹香の箱を持ってくる。
「戸を開けておあげ。……気をつけてね」
玉恵は頷き、息を詰めて紐を外した。ガラス戸が外に向かって開く。小柄な中年の女

が顔を覗かせた。髪を振り乱し、着ているものも微かに饐(す)えた臭(にお)いがしていた。郁美はそれに向けて抹香を投げる。女は驚いたように身を竦(すく)めたが、昨日の夕方に来た男のように、それを嫌がるふうではなかった。郁美が陀羅尼(だらに)を唱えても、神妙な顔でそれを聞いている。

「どうやら、鬼じゃなさそうだね」

郁美が呟いた。和歌は頷く。

「いいよ、お入り」

郁美が言うと、和歌は中に滑り込み、安堵(あんど)したようにその場にしゃがみ込んだ。郁美に促され、玉恵は台所の明かりを点ける。明かりが点いてみると、和歌の様子はいっそう悲惨だった。玉恵にはよく事情が呑(の)み込めないが、連れて行かれた、逃げてきた、という言葉には説得力があった。

「それで？　何がどうしたって？」

和歌は坐(すわ)り込んだまま顔を上げた。顔色は悪く、声にも虚脱したように張りがなかった。

「助けてください。主人と子供が捕まったままなんです。……殺されてしまう」

「最初から順を追って話してくれないと、分からないわよ」

和歌は頷く。

「あれは何日前かしら……。今日は何日なのか分からなくなってて」
「十五日。もう十六日になったね」
「じゃあ……五日前かしら。十日だったから。……十日の夜に、娘が兼正の奥さんを連れてきたんです」
「——兼正の」
和歌は力無く頷く。疲労困憊しているように見えた。玉恵は、休ませたほうがいいのではないかと思ったが、郁美は和歌の前に立ちはだかったままだった。
「お茶を差し上げて、その次の日から、主人の様子がおかしかったんです。妙に疲れたふうで。次の日もそうで、お医者に診せないと、と思っていたら、夜に」
和歌は身震いする。
「……夜に、知らない男の人たちが家に来て。あたしたちを縛って、荷物を運び出したんです。主人は見てるだけで……」
「運送屋？」
「ええ」と、和歌は頷く。「主人が誰かに引越すって話をしてるのが家の中からも聞こえました。あたしも子供たちも口を塞がれてて、声が出せなくて……そうして、荷物と一緒に荷台に載せられて」
玉恵は息を呑んだ。それでは、和歌たちは本当に拉致されたのだ。

「古い家に連れて行かれて、閉じ籠められました。酷いところで、御飯も水もろくにもらえなくて……」
「御主人は？」
　郁美は和歌の前に屈み込んだ。
「一緒でした。主人に何がどうしたの、って訊いても要領を得なくて。具合が悪かったんです。ぼうっとしてるみたいでした。熱が高くて……」
　和歌は言葉を途切らせる。微かに啜り泣く声がした。
「しばらくして、主人は外に連れ出されました。ずいぶん経ってから、息子も。翌日かもしれないわ……分からない。とにかく真っ暗なところだったから」
「それきり会ってないの？」
　和歌は頷き、顔を覆う。
「それで？」
「……娘と二人、ずいぶん長い間、放っておかれました。それから人が来て……兼正の若い人です。たぶん、そうだと思うんです。あたしは外に連れて行かれました。真っ暗な廊下を引いて行かれて、別の檻みたいなところに移されて。柱に縛りつけられました。前よりももっと酷い、本当に何もない部屋で」
「そこには、あんただけ？」

「……そうです。そこでも長いこと放っておかれて。そしたら人が入ってきたんです。それが……」

和歌は顔を覆って頭を振る。

「誰が入ってきたの？」

「信じてもらえないと思います。でも、たしかなんです。あたし、分かったんですよ。娘と同級生だったから」

「誰が入ってきたの」

「祐くんです。外場の。清水園芸の息子。本当なんです、間違いなかったわ」

玉恵は息を呑み、母親と和歌を見比べた。玉恵は清水園芸と付き合いがあったわけではない。けれども、そこの葬式に母親が乗り込んでいって一悶着あったことは、近所の者の噂話で聞いていた。

まさか、と玉恵は呟いたが、郁美は意を得たように頷いた。

「死んだ息子だね。雅司さんの孫の」

和歌は頷く。

「信じられないでしょうけど、本当に祐くんだったんです。あたし、びっくりして。そしたら――そうしたら」

「そしたら？」

和歌は涙で汚れた顔を上げた。皺くちゃになったブラウスの襟を開ける。首周りを緩めて示した。和歌の垢じみた首筋には、ふたつの小さな瘢痕があった。
「これは……」
「咬んだんです。嘘みたいでしょうけど、本当なんです。祐くんがここを咬んで」
　玉恵は小さく声を上げて後退った。
「それって……」
　馬鹿気た言葉が思い浮かんだ。本当に馬鹿気ていたけれども、そうとしか思えないのが恐ろしかった。
「そう」と、郁美の声は低い。「なるほど、鬼だね。そうだったの」
「それからしばらく、ぼうっとしてました。身体が怠くて、何もする気になれなくて。でも、娘や息子のことが気になって。だんだん頭がはっきりしてきたんで、それで必死で逃げ出してきたんです。あのままあそこにいたら殺されると思って……」
「そう。よく逃げ出せたね」
　和歌は頷いた。
「運が良かったんだと思います。途中で誰かが様子を見に来たとき、あんまり怠かったんで寝たふりをしてたんです。そうしたら、あたしが死にかけてるんだと思ったみたい。鍵をかけないで出て行って……」

そう、と郁美は和歌の腕を叩いた。
「そりゃあ、本当に運が良かったわ」
「でも、主人も子供たちも残されたままなんです。あたし、必死に村まで戻ってきて、でも、こんなこと、誰に言っても信じてもらえるはずがないし……」
「そうだね」
「郁美さんしかいないと思ったんです。祐くんのお葬式のとき、鬼だって言ってたんでしょう？　だから、郁美さんなら信じてくれるかもしれないと思って、あたし」
郁美は頷いた。
「あんたは利口ね。その通りよ」
「お願いです、主人と子供たちを助けて」
和歌は郁美の腕に縋（すが）る。郁美は渋面を作った。
「そうしてやりたいのは山々だけど。あんたが連れて行かれたのはどこ？」
分かりません、と和歌は俯（うつむ）き、首を振った。
「それも分からないんじゃ……」郁美は溜息（ためいき）をつく。「しかも、あたし一人じゃあね。村の連中はあたしたちの言うことなんて、絶対に信じちゃくれないんだから」
「あたし、証拠を持ってきました」
「証拠？」

郁美は勢い込む。和歌は間延びした動作で頷いた。
「逃げ出すとき、持って出たんです。棺書(かんじょ)です。戒名を書いた札――」
玉恵は口を開けた。棺書は村では棺の中に納めて埋葬する。普通は埋葬した棺書など手に入るはずがない。それがある、ということは埋葬された墓が暴(あば)かれたということだった。
「たくさんあったんです。だから、持てるだけ持って逃げ出しました。途中、神社に隠してきましたけど」
「そう。神社に隠したのは利口だったかもしれないわね。連中も、神社じゃ手出しできないだろうし」
「それがあれば、村の人も納得するんじゃないかしら。郁美さん、お願いだから手を貸してください」
郁美は頷いた。
「そうね。夜が明けたらすぐに――」
和歌は頭を振る。
「こうしている間にも、主人や子供たちが殺されようとしているのかも。だからこんな夜分に訪ねてきたんです。お願い、急いで」
でも、と郁美は口ごもる。

「郁美さんなら、あいつらが怖いなんてことないでしょう？　簡単に追い払ってしまえるわ。ましてや神社に行くんだもの。大丈夫でしょう、ねえ」
玉恵は母親と和歌を見比べた。何か、違和感のようなものを覚えた。和歌には同情するが、和歌の話にはどこか奇妙なところがある。だが、郁美は少しの間、考え込み、そして頷いた。
「分かったわ。案内して」
「お母さん」
玉恵は止めようとしたが、郁美は邪険に玉恵を振り返った。
「うるさいね。お黙り。お前には分からないだろうけど、これは大事なことなんだから」
「そうじゃなく……」
玉恵は言葉を継ごうとしたが、郁美はそれを許さなかった。自室に戻り、上着を取ってきて羽織る。和歌を促した。
「行きましょう。あたしがついてるから大丈夫よ」
「ありがとうございます」
和歌は拝むようにして、勝手口から外に出て行く。郁美を招くようにし、郁美もそれに続いた。

「お母さん、待って」
「あんたは家でおとなしくしてなさい。何もできないんだから」
「でも」
「誰かが来ても、入れるんじゃないわよ。いいわね」
郁美は言って、勝手口を閉める。玉恵は台所に残された。胸に不吉な予感のようなものが満ちていた。和歌の話は、どこかおかしい気がする。郁美が飛び出して行ったのは、過ちだという気がしてならない。
（そんなはずは……）
母親は自分よりしっかりしている。玉恵は愚図で、母親に比べたら頭の廻りも良くない。常にそう言われてきたし、自分でもそうなのだろうと思う。母親のすることに間違いがあるはずがない。――けれども。
和歌は、連れて行かれたそこがどこなのか分からない、と言った。そうなのかもしれない。けれども、そこがどこだか分からないのなら、どうして村に戻ってくることができたのだろう。こんなことを信じてくれるのは郁美だけだと言う。それはたしかにそうなのかもしれない。けれどもその一方で証拠がある、と言い、それを使って村の者を説得してくれ、と言う。棺書があれば、できるだろう、というわけだが、そう思うなら、なぜそもそも棺書を持って、近所の親しい者のところに駆け込まないのか。

「お母さん……」

玉恵はたまらず、勝手口の外に踏み出したが、戸外には闇(やみ)が満ちていた。恐ろしくて足が竦み、母親を追っていけない。近頃の夜は変だ。この村は何かがおかしい。

居ても立ってもいられず、玉恵は家の中をうろつきまわった。何度も外の様子を窺(うかが)い、気まぐれに祭壇に手を合わせたりする。一時間が経ち、二時間が経った。母親が戻ってきたのは、夜明け前のことだった。

「——お母さん」

玉恵が迎えに出ると、母親は痩(や)せた顔を真っ青にしていた。狼狽(ろうばい)した様子、和歌の姿は見えない。

「お母さん、和歌さんは？」

郁美は玉恵の問いに答えなかった。ものも言わずに私室に戻り、そうしてそのへんを引っ掻(か)きまわす。

「お母さんってば、どうしたの」

郁美は無言で着替えを引っぱり出し、紙袋に詰め込み始めた。

「お母さん？」

郁美は玉恵を振り返る。紙のように顔色がない。

「いい、今夜あったことを誰にも言うんじゃないよ」

玉恵は頷く。
「言わないわ。でも」
「あたしはしばらく身を隠すから」
　え、と言葉に詰まった玉恵から顔を逸らし、郁美は荷造りをする。少しの衣類と小物を紙袋の中に詰め込んだ。
「たいへんなものを手に入れたのよ。これを連中が知ったら、絶対にあたしをただじゃ置かないわ。あんたもよ。うかつなことを言ったら、連中があんたを狙ってくるよ。絶対に口を噤んでるのよ」
「……ええ。でも」
「ほとぼりが冷めるまで、あたしは身を隠してる。心配はないよ、すぐに連絡をするし、戻ってくるから」
「お母さん」
　郁美は着替え、紙袋を提げて玄関に出る。
「いい？　絶対に今夜のことは黙っているの。誰かに聞かれたら、あたしはちょっと親戚の家に行ったとでも言ってちょうだい。余計なことを言うと、あんたも命がないからね」
　玉恵はおろおろと頷いた。郁美は玄関の戸を開ける。夜明け前、あたりはまだ暗く、

ただ夜空だけが曙光を忍ばせて白々とした蒼を含んでいた。
郁美はもう一度、脅すように口止めをして、そそくさと家を離れていった。その足取りは妙に縺れているように見えた。玉恵は呆然としたまま家に取り残された。身動きできずに母親の曲がっていったほうを見守っていると、遠くで微かに車のドアの閉まる音、走り出すエンジン音が聞こえた。
玉恵は胸を押さえる。妙にそこが痛い。車の音が消えると、あたりには無音が立ち込めた。母親の存在から永遠に切り離されてしまったような、そんな気がしてならなかった。

章

I

武藤保は柩の中を見下ろして硬直した。別れのために手折った花が、どうしても指先を離れなかった。

さして広くはない座敷の中、その柩は安置されている。柩の中に横たわった顔は、格別に苦痛の色もなく穏やかで、けれども確実に何かを欠いて、隔絶された感じを与えた。

このところ姿を見かけなかった。以前は頻繁に遊びに来ていたのに。保は自分の悲しみに手一杯で、姿を見せない夏野が病みついていようとは想像してもみなかった。

(電話ぐらい、すれば良かった)

どうしてるんだ、となぜ訊いてみようとしなかったのだろう。そうすればせめて見舞いにぐらいは来られたのに。

保は昨日の通夜以来、幾度となく繰り返した後悔をまたしないではいられなかった。兄を亡くして、正雄が逝って、保は気づいても良かったはずだ。永遠に側にいられる人間など、いないのだと。また、と言って別れた相手に本当にまた会えるとは限らない。

今日会ったそれが、常に最後になるかもしれない、という無情な事実に、もっと早くに気づいても良かった。
　そして、これが本当に永久の別れだ。兄の徹のように——そして正雄のように、これ以後、結城夏野という存在は保の人生から消え失せる。
「……保」
　姉の葵の涙まじりの声に促されて、保は白い菊の花を手放した。その痛みに、二、三歩退る。踵を返して座敷の片隅に逃げ込んだ。会葬者の姿は少なかった。越してきて間がないせいもあるだろう。不思議に、クラスメイトらしき者たちの姿も見かけなかった。そのせいで座敷には空洞が目立つ。そこに蹲った保の肩を、追いかけてきた葵が軽く叩いた。
「お寺に行けば会えるわよ。ナツは村に葬られるんだもの」
　慰める口調の葵を見、保は傍らに集まった父親や広沢らの顔を見た。
「あいつ……寺で土葬にされるって本当ですか」
「そうだよ」と、労るように言ったのは、広沢だった。「結城さんが、せっかく村の一員になったのだから、村に葬ってあげたいと言ってね」
　そうか、と保は胸が締めつけられる気がした。
「……あいつ、最後の最後まで村を出られないんだ」

保、と葵が窘めるように言う。保とて、それが埋葬を決めた結城に対する批判のように聞こえることは承知していた。——でも。

「火葬にすれば良かったんだ。そうすればあいつ、せめて煙になって村を離れて行けたのに。姉さんだって知ってるじゃないか。夏野は本当に、村を出たがっていたんだ」

そのために黙々と準備して。なのにとうとう、出られなかった。

広沢らが、目を見交わし合った。呆然としたふうの梓の隣、喪主席に坐った結城が驚いたように顔を上げているのを見て、保は座敷を逃げ出す。その場に残っていたら、村に埋めるなんて酷いことはしないでくれ、と口走ってしまいそうだった。

「保……」

庭に出た保を葵が追いかけてくる。

「気持ちは分かるけど、駄目だよ、あんな。ナツのお父さんにしたら、良かれと思って決めたことなんだから」

「うん……分かってる」

「それにナツなら言うよ、死んだあとのことなんて知ったことじゃないって」

保はふと笑いかけ、そして泣きそうになって袖で顔を覆った。

「……うん」

懸命に涙を堪えて、なんとか嗚咽を呑み込んで顔を上げると、葵のほうが蹲って顔を

覆っていた。
「……あたし、もうやだよ。こんなことが、いつまで続くの」
保は頷く。本当にいつまで続くのだろう。兄を亡くして幼馴染みを亡くして、夏野が死んで――そして、次は誰だろう。これで最後だとは思えなかった。きっとじきにまた誰かの訃報が入って、保は近しい存在を失う。それは両親のどちらかかもしれなかったし、葵かもしれなかった。あるいは、保自身かも。
「田茂の広ちゃんも、具合悪いみたいだしなあ……」
ひとりごちると、葵が顔を上げる。
「そうなの?」
「うん。ここんとこ学校に来てないから」
葵は大きな溜息とも嗚咽ともつかないものを零した。
「……どうなってるんだろう」
ああ、と保は頷く。夏以来、死人が多いと言われてきたし、それは事実だ。こんなに続けざまに人が死ぬなんて考えられない。学校で話をすると、同級生はみんな「祟られてるんじゃないのか」と言う。実際、そうなのだろうと思う。冗談事ではなく、疫病神に祟られているのだ、この村は。それが静かに村を侵食し、人を間引いていっている。
――鬼が山に引いていく。

保はふと、眉を顰めた。鬼が引く、とはこういうことだったのだ、と思う一方で、引っかかりを感じた。
「夏野……最後に会ったとき、妙なことをしてたな」
「妙なこと？」
「うん。ほら、正雄の通夜のあった日。夜に来たろ。あのときあいつ、ビデオをいっぱい借りてきててさ。それもホラーばっかり」
「……ナツが？　ナツって、そんなのに興味があったっけ」
「ないと思うんだよな。あのときまで、そんな話、出たこともなかったし。それにあいつ、それを真面目に見てるって感じじゃなかったんだ。どんどん早送りしてさ。何か探すみたいに……」
そう、肝心のいかにも恐ろしげなシーンなどは、早送りしていた。夏野が執拗に見ていたのは、シーンとしては面白味のなさそうな会話の場面ばかりだった。たとえば、吸血鬼を狩る男が滔々と喋っているシーンとか。
ハッと保は目を見開いた。夏野がその日、どんなビデオを借りてきていたのかは覚えていない。けれども雑多なそれらには、ホラーという以上に顕著なひとつの傾向があった。
「あいつ……」

夏野は疑っていたのだ、と思った。これが鬼のせいなのではないかと。そして、死んだ。連続する死が鬼によるものなら、鬼に引かれていったのだ。——鬼の存在を疑っていた者は、鬼に引かれた。

「……どうしたの？」

葵が首を傾げている。保は背筋の寒いのを堪えて首を振った。

「いや、何でもない。つい考えすぎるんだ、……色々と」

2

田茂定市は、深い息をつきながら社務所を出た。夕方から始まった世話方の寄り合いは、霜月神楽の相談よりも、続く死に事のほうで紛糾した。伝染病ではないのか、それも新種の未知のものではないのか、と言い出す者がいて、互いに不安をぶちまけ合うのに時間を取られた。きっとそうに違いない、と誰もが言いながら、にもかかわらず、誰もそれを本当には信じていないふうなのが奇妙だった。

ともかくも夜の十一時までをかけて、やっと出た結論は、こういう時だからこそ盛大に厳粛に祭りを執り行なうべきだ、ということだった。

村で行なわれる里神楽は、霜月神楽と伊勢流の名を冠してはいるものの、内実は出雲

流の神楽に伊勢流の湯立がつく。榊に弓、杖を持って舞う採物が三演目、これに九番の神能が付いて、最後に清めの湯花を観客にも振りかけるのだが、古くは五座十二番の神事で、これに能から来た「式三番」が付いて都合、五座十三番の行事だった。村では専業の大夫を呼ばない。村の者がそれぞれ伝承している。すでに消えた演目は、きちんと伝承している者がいない、ということで、中には安森誠一郎のように伝承者が最近、転居している例もあったが、うろ覚えに頼ってもいい、旧来通り五座十三番を復興しようという話になった。

(さて……こりゃあ、おおごとだ)

定市自身、五座十三番のすべてを記憶していない。中には定市自身ですら、子供の頃に数度見ただけ、というものもあった。これは古老に訊けば覚えている者もいるのかもしれないが。

(そう言や、婆さんが三輪と式三番を覚えてると言ってたかな)

妻からそんな話を聞いた覚えがある。神事には女は参加できない。場所によっては巫女が舞いを奉納することもあるが、外場の霜月神楽ではそれはない。女が舞いを奉納するのは大田植のときだけだった。古い採物のひとつに「三輪」と通称される女舞があったが、これも女面をつけた男が踊って奉納する。妻によればこの「三輪」や鈴を持って舞う「式三番」を覚えている女の子は多かったらしい。おそらくは自分が踊ることは

ないと知りつつ、衣装も綺麗でなよやかな舞いだから、憧れをもって覚えたのだろう。
(婆さんに頼むか。倅が覚えてくれりゃあ話は早いんだけどねえ)
あるいは、と考えて、定市は夜道で足を止めた。孫のどちらかが覚えてくれれば。だが、下の孫——広也は今、病床に就いていた。敏夫の顔色から察するに、あまり状況は良くない。実際、日々悪くなるふうがあり、敏夫も国立に運んだほうがいいと言っていた。入院を、という話もあったが、当の広也が頑として嫌だと言う。
(村に蔓延している、あれ)
それが実際のところ何なのか、定市にも分からない。たしかに定市自身、一時は伝染病に違いないとも思ったが、今ではそうではないのではないか、という気分がしていた。少なくともただの伝染病ではない。だから寺と尾崎が結託して、にもかかわらず定市には何も言ってこないのだと思う。いずれ三役会議をと言っていたが、それも宙に浮いている。実際のところ、話題にできるほど、はっきりとしたことが分からないのだろう。
それでも、定市にも朧気に分かっていることがある。それは尋常ではないことで、しかも、起こったら止められない、ということだ。夏以来、溝辺町の病院に運ばれた病人は多かったが、生きて戻ってきた例はなかった。これは尾崎医院に入った場合も同様だった。安森節子は入院したらしいが死んだ。ただの一人も戻ってきてない。だから孫を病院に移す踏ん切りがつかなかった。家を出せばそれが永の別れになる、という経験則

が、家族の誰をも縛っている。
定市は深い溜息をついた。孫は十七にしかならない。高校の二年生。陸上部に在籍する大柄な、心身ともに健康な子供だ。にもかかわらず、倒れた。ひょっとしたらじきに、田茂でも葬式を出すことになるのかもしれなかった。定市は心のどこかでそれを覚悟している自分自身を理解していた。
もう一度深い息を吐いて、定市は歩き出す。ちょうど村道を集落のほうに入り、上外場と門前の境に来ていた。目の前の家には明かりが点っている。夜分だというのに雨戸も引かず、前庭に光があふれているのが、昨今では物珍しかった。こんなふうに外に向けて開かれている家の様子を久々に見た、という気がした。庭先では深夜も近いというのに子供が一人遊んでいた。その子供を見て、定市ははっと息を呑んだ。
「あんた……静ちゃんじゃないかい」
家の前の側溝に木の葉を浮かべていた子供は顔を上げる。そう言えばここは境松だ。境の松尾。息子の高志が行方不明になり、しばらくしてから高志に呼ばれたと、それだけを言い残して転出した一家。
「静ちゃん、戻ってきたんだねえ」
松尾静は立ち上がり、そして定市を見て頷く。
「他の家族は？　高志くんは——お父さんは一緒なのかい」

訊くと、静は再び頷いた。
「お父さんと、お祖父ちゃんが一緒。でも、お祖母ちゃんとお母さんはお嫁さんだからダメだった」
定市は首を傾げた。
「お嫁さんだから、何だって？」
ううん、と静は首を横に振る。
「父さんと祖父ちゃんだけかい。弟はどうした？」
「潤もダメだったって」
定市には、静の繰り返す「駄目」という言葉の意味が分からなかった。怪訝な思いで境松の建物を見る。煌々と明かりは点いているが、人影はない。いかにも気安げに家は開かれていながら、不穏なほど閑散としていた。
「父さんとお祖父ちゃんは起きてるかね」
挨拶をして事情を聞いてみようと思ったのだが、静は頭を振った。
「出かけてる」
そうか、と思い、明日にでも出直そうと思った。なにしろ静の話では要領を得ない。
「あんまり遅くまで遊んでるんじゃないよ」
定市は声をかけ、踵を返そうとした。

「ねえ」と、静が声をかけてきた。「お爺ちゃんのところに遊びに行ってもいい？」
定市は振り返る。
「こんな時間にかい」
こっくり頷いた静に、定市は妙な違和感を覚えていた。こんな時間に子供が一人で留守番というのは釈然としない。ましてや境松が戻ってきているのも不自然なら、家族の全員ではないらしいのも不自然だ。ましてやこの時間に遊びに、と言う静はどこかおかしい。
定市は答えに窮した。静はどこか穿つような目つきで定市を見つめ、それから首を傾げた。
「……そうか。いい」
「うん？」
「もういいの。お爺ちゃん、田茂の御隠居でしょ？　お爺ちゃんちは、もういいの」
「それは――」
どういう意味か、と訊こうとしたが、静は身を翻して家の中に駆け込む。定市はぽかんとし、同時に何やら、うそ寒いものを感じて、慌てて家に戻った。
定市の家は、開け放されてはいないものの、それでもまだ明かりが点いていた。玄関を入り、まっすぐ茶の間に向かうと、嫁が顔を覆うようにして卓袱台に頬杖をついてい

る。その疲れ果てた様子、落胆した様子に声をかけることができず、定市はそっと家の奥に向かった。孫の部屋にも明かりが点き、定市の妻がうなだれて枕許に坐っている。

「ただいま。……どうだい」

定市が声をかけると、妻のキヨは首を横に振った。横たわった孫の広也は、息が荒い。譫言のように「水」と呟き、キヨが慌てて吸い飲みをあてがった。

3

辛く重い儀式が終わった、と結城は思った。寺から家に戻り、黄昏の落ちた居間に坐り込んで、ようやく息をついた。

広沢らの慰撫はありがたかったが、今は結城のほうにそれを受け止めるだけの余裕がなかった。

訃報を聞いて駆けつけてきた結城の両親は、結城を責めた。孫を自分たちの手の届かないところに連れ去り、そこで死なせたと言う。死に目に会えなかったことも、両親を嘆かせた。なぜ具合を悪くしたときにすぐに医者に診せなかったのか、すぐさま知らせてはくれなかったのだ、と二人は結城を罵り、暗に梓を責めた。なぜ医者に診せなかった、という台詞は、両親が思っている以上に結城の胸を刳った。

（なぜ……）

本当に、なぜ自分は、すぐさま医者に連絡をしなかったのだろう。連絡したところでどうなったものでもないのだと結城の理性は懸命に訴えたが、もしも医者に診せていれば助かったのではないか、という疑念からは逃れることができなかった。たしかに尾崎敏夫にはどうにもできなかったかもしれない。けれどもたとえば設備の整った大学病院なら。すぐに駆けつけられる距離に住んでいれば。いや、そもそもこんな村に越してこず、都会にいたままなら、夏野が死ぬことはなかっただろう。結城自身、そう思わないではいられなかったから、それをあからさまに責める両親の言葉は聞くに堪えなかった。

梓の両親も駆けつけてきてはいたが、梓の両親と結城の両親は折り合いが良くない。そもそも梓の両親は結城すらも疎んじていて、そちらはそちらで、なぜ結城のような男についてきたのだと梓を責めていたようだった。そういう確執が葬儀の場で一気に噴き出して、それでなくても辛い儀式が、耐え難い苦痛そのものになった。両家が牽制し合った結果、どちらも村には留まらず、早々に戻ってくれたのだけが救いだ。

やって来た人々の、これ見よがしの憐愍、そして親がどうして助けてやれなかったのかと暗に責める目。田中姉弟は一言も口を利かず、葬儀の間中、遠くから結城を恨むような目で見ていた。

——子供を失った親は惨めだ。

結城はそう思い、深い溜息をついた。
そんな結城を、梓は見つめていた。ダイニングに坐り込み、悄然と俯いた結城を見てもなんの感慨も湧かない。湧かない自分に違和感を感じたものの、それ以上の思念は浮かばなかった。
梓は黙って踵を返し、寝室へと向かう。家の中はもの寂しく、確実にひとつの空洞を抱え込んでいた。足許が危うい。ひどく脱力しているような気がした。目眩を堪えて部屋に戻り、梓は押入から旅行鞄を引き出した。中には最小限の着替えと、申し訳程度の日用品が入っている。昨夜のうちに準備したものだ。それを検め、何か不足はないか考えた。
――通帳と印鑑、と囁く声があった。なぜ自分がそれを必要なのか、梓には思い浮かべることができなかったが、それを携行せねばならないのだ、ということは思い出した。
通帳と印鑑、カード、保険証、運転免許証。半ばよろめきながら、梓は居間に取って返し、それらを持って部屋に戻った。鞄の中に詰め込む。そして文机で手紙を書いた。別に書きたいことがあったわけではないが、手紙を書かねばならないのだ、ということは了解していた。
梓はどんよりと濁った目で便箋にペンを走らせた。文字はしっかりしていたが、梓の視線は自分が書き出した文字に焦点を結んではいなかった。

こんな村にはいられない。
貴方（あなた）にも村にも、もう我慢ができません。
さようなら。

書いて便箋の上にペンを載せ、梓は旅行鞄を抱えた。部屋を出て夏野の部屋の間近を通るときに、理由を捉（とら）えることのできない深い悲しみが胸の中に湧き上がってきた。なぜだか悲しい。居場所がないほど。そうして家を歩み去ることは、不思議に誰かに対する憐愍のようなものに彩（いろど）られていた。

そんな自分を無感動に感じ取りながら、梓は家を出た。ドアの軋（きし）む微（かす）かな音は身を切るようで、低い門扉（もんぴ）の冷えた感触はただひたすら寒々としていた。

真っ暗な夜道を歩く。ひたひたと自分の足音は頼りなく、もの悲しい。ほんの少し歩くと、人気（ひとけ）の絶えたあたりに一台の車が待っていた。梓は車の間近でぼんやりと足を止めた。助手席のドアが促すように開いた。

「さあ」と、ハンドルを握った辰巳に声をかけられ、梓は車に乗り込む。なぜかしら、助手席でひしと鞄を抱き締めずにいられなかった。

「用意はちゃんと?」

訊かれ、頷く。理由もないのに、涙が零（こぼ）れて鞄に抱き縋（すが）った手の甲を叩（たた）いた。

辰巳はそれを視野の端で捉え、微かに笑う。特に声はかけずに車を出した。どこへ、

と言う呟くような声は、しばらく走ってから聞こえた。
「溝辺町に行くんですよ。息子さんの転校手続きをしないと」
ああ、と梓は呟く。そうだった。明日の昼間、届けを出すために高校に行かなくては。
（……それからどこへ？）
梓の心中の声を読んだように、辰巳が低く笑った。
「それから息子さんのあとを追うんです。……そうでしょう？」
梓は瞬き、そして頷いた。

結城は、梓が消えたことに、その翌日になってやっと気づいた。呆然とダイニングに坐り込み、そのまま居間で泥酔して眠り、ソファで目覚めてみると、家の中は静まり返って、結城一人が取り残されたような気がした。それが事実そのものであったことを、結城は私室を覗いてやっと理解した。
突き放すような手紙が一枚。慌ててあちこちを見てみたが、貴重品の一切は消えていた。そう言えば、と結城は思う。梓の両親は昨夜、溝辺町で一泊し、今朝早くに発つと言っていたか。どこに泊まるとも聞いていなかったが、今から思えば、梓を連れて帰るつもりだったのだろうと、ぼんやりと思った。
衝撃はなかった。それに傷つくほどの余力は、結城には残されていなかった。

4

かおりが学校から帰ると、玄関に父親の靴が出ていた。このところ残業で帰りが遅かったから、珍しいな、とかおりは思う。
「ただいま。お父さん、帰ってるの?」
台所に顔を出して、母親に訊くと、佐知子の顔は不機嫌そのものだった。
「帰ってるわよ。具合が悪いんですって」
皮肉っぽく言って、佐知子は小芋を洗う。
「役場の人に抱えられて帰ってきたわ。そんなに具合が悪いんだったら、朝にそう言えばいいのに」
かおりは母親の頑(かたくな)な背中を見つめた。
父親は具合が悪い、と言っていたのだ。一昨日、病院に行って戻ってくると早々に寝付き、昨日の日曜も朝からそう言って、なかなか起きてこなかった。母親はそれで機嫌が悪かった。自分が不機嫌なものだから、父親はそうやって自分を避けているのだと思ったようだった。少しも熱なんかないじゃない、と佐知子は父親を罵っていたのだった。
「そう言えばいいのに、当てつけがましく無理をして、これ見よがしに役場の人に抱え

られて帰ってくるんだから」

かおりは母親の機嫌を取り結ぼうと、何か父親のために口添えをしようとしてみたが、肝心の言葉が思い浮かばなかった。それで黙って台所を出た。

昭も帰っているようだったが、こそとも気配がしなかった。二階に上がって鞄を置き、制服を脱いでから隣の部屋を覗いてみると、昭は布団の上に寝転がっている。かおりを見て顔を上げたが、何も言わず、ふてくされたように寝返りを打った。

夏野はもういない。昨日、寺の墓地に埋葬されてしまった。かおりと昭は葬式に行ったが、夏野の父親は、かおりと昭に対して何を言うでもなかった。来てくれてありがとうでもなく、容態が変わったら知らせると言った、それを反故にしたことを詫びるでもない。徹底して問題外の存在として扱われたことが、昭を深く傷つけていた。

弟の心情は分かったので、かおりはちょっと息を吐いて昭の部屋の襖を閉めた。階段を下りて今度は父親の部屋を覗く。父親もまた展べた布団の上に横になっていたが、昭とは違って本当に具合が悪そうだった。顔色が悪く、息が荒い。枕許に坐って、試しに父親の額に手を当ててみると、熱はさほどでもないようだった。父親は薄く目を開けた。

「起こした？　ごめんね。具合、どう？」

父親は何も言わなかった。微かに頷いたが、それが何を意味する素振りなのか、かお

りには分からなかった。ただ、父親の手が伸びてきて、かおりの手を労るように軽く叩く。かおりはちょっと微笑んだ。
「早く元気になってね」
父親は頷き、また目を閉じた。

夕飯の用意をする間も、母親の機嫌は悪いままだった。夏野の訃報が入り、昭が夕飯の席を立ってからこちら、悪くなる一方だった。意気消沈した昭の態度を拗ねているのだと誤解したせいであり、自分が不機嫌だから、父親はたいして悪くもない具合を、さも悪そうに言って自分を避けているのだと思っているせいでもあったろう。あげくに、かおりたちが昨日、言いつけられた庭掃除をすっぽかして夏野の葬儀に行ったので、余計に拍車をかけてしまった。
おかげで、家の中の空気が重い。父親はとうとう夕飯に出てこず、昭はおざなりに手を付けただけで押し黙っていた。母親は、自分の気分を上向かせるために誰も何をする気もなさそうだと思ったのか、いっそう荒れて不機嫌だった。かおり一人が、懸命に味のしない夕飯を掻き込み、料理を褒め、後片付けを手伝ってみたけれども、佐知子の機嫌を取り結ぶことはできなかった。
早々に寝ることにして部屋に戻ったときには、芯から疲れた気分がした。布団の中に

潜り込んで明かりを消すと、風の音が耳につく。夏野は死んだのだ、と改めて思った。たぶん、恵が起き上がったことに気づいたせいで、報復を受けたのだ。

夏野に電話をもらい、それで用心していたせいか、かおりや昭を訪ねてくる者はいなかった。けれども夏野は死んだのだ。今度こそ自分たちの番かもしれない。

それを思うと恐ろしかった。それ以上に、夏野は死ぬと分かっていながら、本当に死なせてしまったことが辛かった。自分たちには何もできなかった。それが悲しい。どうにかする方法があっただろうか、かおりたちがもう少し利口に振る舞えれば、夏野を助けることができたのではないだろうか。それとも、かおりたちがどうあがこうと、どうすることもできなかったのだろうか。——死とはそういうものなのだろうか。

いろんなものが鬩ぎ合って、目は冴えるばかり、布団の中で二転三転を繰り返しても少しも眠れなかった。不機嫌な母親の背中、寝付いた父親、意気消沈した弟、いろんなものが順番に浮かんでは消え、それぞれが微妙に色の違う焦りを、かおりの中に残していった。耐え難くて、いっそ起きてしまおうかと思ったときだった。

こん、と小さく鈍い音がした。

かおりは起きあがる。また音がする。それは窓のほうからで、雨戸を誰かが叩く音のような気がした。

（そんなはず、ない……）

かおりの部屋は二階だ。窓の外は玄関の屋根で、足場がないわけではないし、その玄関の屋根も庭木を伝って登れないわけではないけれども（実際、昭がそうやって何度か登ってみせたことがある）、時間が時間だ。

かおりは枕許の時計に目をやる。もう午前一時が近い。

こん、とまた雨戸を叩く音がした。ひょっとして、昭だろうか。部屋を抜け出して、閉め出されてしまったのだろうか。昔は寝る前に戸締まりなどしたことがなかったが、いつの頃からだろう、母親は夜にはあちこちの鍵をかけるようになった（そう言えば、自分もいつの間に雨戸を閉めるようになったのだろう……？）。ついいつもの習慣で、夜に部屋を抜け出して、それで戻れなくなってしまったのだろうか、と思う。

「……昭なの？」

かおりは起き出して窓に近づく。声をかけたとたん、音がやんだ。窓を開けようとしたときだった。

「……は死んだよ」

雨戸のすぐ外から声がした。かおりは文字通り跳び上がり、その場で息を詰めた。

押し殺した女の声だった。——女？

（違う、これは）

「聞いてる？　かおり」

かおりは拳を口に当て、とっさに悲鳴を押し殺した。それは間違いなく恵の声だった。震えが立ち昇る。歯がかたかたと鳴った。

「あんたの父親は死んだからね」

雨戸の外で、人の身動きする気配がした。

「……ざまあみろ」

かおりは短く悲鳴を上げた。耐えられなかった。慌てて明かりを手探り、点けた。部屋は何事もなかったかのようにいつものまま、何ひとつ歪んでもいないし、変わってもいない。

かおりは、その場でたたらを踏んだ。どうしていいか分からず、次の行動に迷い、そして部屋を飛び出すとまず昭の部屋に行った。明かりを点けると、昭は眠っていた。

「昭、……起きて！」

眠りは浅かったようだった。二、三度揺すると、昭は不服そうな声を上げる。

「恵。――恵が」

昭が弾かれたように起きあがった。

「……何？」

「恵がいたの。窓の外にいた。……お父さんが死んだ、って」

「そんな」

「たしかに恵の声だったよ!」
昭は布団を撥ね除けた。部屋を飛び出す。かおりもそれに続き、階段を駆け下りた。両親の部屋に行くと、布団がふたつ。一方には人影があるが、もう一方には人影がない。かおりは奥の風呂場のほうへ向かい、昭は向かいの座敷へと向かった。かおりが洗面所を覗き込むまでもなく、昭の呼ぶ声がした。
かおりは駆け戻る。暗い座敷に入ると、縁側の障子が開き、雨戸も窓も開いているのが見て取れた。縁側に昭が蹲り、その足許に倒れた人影がある。
「父ちゃん、……父さん」
昭は父親を揺する。傾いた月の光が射し込んでいた。ずいぶんと明るいその光で、父親が薄く目を開けたまま、縁側から半身を乗り出すようにして突っ伏しているのが見て取れた。かおりも側に膝をつき、一緒になって父親を揺すった。父親はぴくりでもない。
(死んでる……)
本当に、死んでいる。
「恵、ざまあみろ、って」
かおりは昭の腕を摑んだ。
「――でも、なんで!?」
昭が殴られたように目を瞠った。昭が口を開く前に、不審そうな声を上げ、母親が座

敷に入ってきた。
佐知子は物音に目覚め、不機嫌の絶頂で起きあがった。こんな時間に騒いでいる子供たち。時々自分の産んだ子が、佐知子には許し難い存在に思えることがある。
布団を出て座敷に向かい、そして娘の悲鳴じみた声を聞いた。内容は聞き取れなかったが、その声音は切迫した色をしていた。それをようやく不審に思って、佐知子は夫が倒れているのを発見する。
子供たちは泣きながら、良和が死んだ、と訴えた。佐知子にも夫は死んでいるように見えたが、そんなはずはない、と思う。死んでいるわけではないだろう、けれども本当に、のっぴきならないほど容態が悪いのはたしかだ。佐知子は正体不明の怒りを感じた。なぜだか、何かに手ひどく裏切られ、自分が踏みにじられたように感じた。
ともかくも、電話に駆け寄り、救急車を呼ぼうと思う。いや、夫のあの様子では、尾崎医院に連絡したほうが早いだろうか。
(死んでるはずはないわ)
けれども、きっと一刻を争うのに違いない。ともかくも誰かに少しでも早く処置をしてもらわなければ。やはり尾崎医院に電話しようと、佐知子はアドレス帳を開きながら受話器を取る。そのとき、電話台の前の壁に名刺が一枚、貼ってあるのに気づいた。

「これ、何かしら」
佐知子は、青い顔をしてついてきた子供たちに問いかけた。「江渕クリニック」と読める。かおりが小さく声を上げた。
「お医者さん。お父さんが行ってた病院だよ」
「お父さんが?」
「うん。診察券を持ってた」
では、夫がこれを貼ったのだろうか。
「だったら、そこに電話したほうがいいよ、きっと。父ちゃんのこと、分かってるはずだもん」
昭が言って、佐知子は頷いた。クリニックの電話番号の下には、御丁寧にも「緊急時の連絡先」として、電話番号がもうひとつ書いてあった。その言葉が妙に心強く思え、佐知子は電話をする。電話した相手は、すぐに出た。あまりに早くて、佐知子は何をどう伝えたらいいのか、整理できないままだった。
「あの……夜分に……その、田中といいますが」
ああ、と電話の相手は心得た声を出した。
「田中良和さんの御家族ですか?　まさか、良和さんの容態に何か?」
「はい」と、佐知子は救われた思いで声を上げた。「倒れてしまって。その……」

夫の状態をどう伝えようか、佐知子は言葉を探そうとしたが、それを探し出すまでもなく、相手は「すぐに伺います」と言った。
佐知子は受話器を置く。玄関のチャイムが鳴ったのは、本当にそれからすぐのことだった。
「江渕と申しますが」その初老の男は、そう言って、佐知子に案内されるまま座敷に向かった。どうしていいのか分からず、とりあえず座布団を並べたところに夫を寝かせてあったが、江渕はその枕許に膝をつき、てきぱきと身体を検め始める。佐知子は子供たちを両脇に坐らせ、それを食い入るように見た。江渕はさほどの時間をかけなかった。
「残念ですが、亡くなっておられます。急性心不全ですな」
江渕は申し訳なさそうに言った。かおりが声を上げて泣き出した。呆然と見守る佐知子の目の前で、江渕は書類を出し、書き込みを始める。さらりとそれを佐知子に手渡した。夫の死亡診断書だった。
「そんな……」
まさか夫が死んだなんて。この夏以来、あちらでもこちらでも死に事が続いて、けれどもそれが本当に自分たちを襲うなんて、夢にも思っていなかった。
書類を手にして呆然とするしかない佐知子に、江渕はそうだ、ともう一通の書類を出した。

「実はですね、御主人は外場葬儀社と契約を結んでおられまして」
「外場──葬儀社？」
佐知子は激しく困惑した。そもそも葬儀社という言葉に馴染(なじ)みがなく、村に葬儀社があるなんてことも知らなかった。夫がなぜそんなところと契約をしたのか理解できなかったし、ましてやそれを医者の江渕がなぜ知っているのか、どうしてわざわざ書類を見せてまでそれを佐知子に告げるのか、そもそもなぜ、江渕がそんな書類を持っているのか、何もかもが佐知子の理解を超えている。
江渕は労るように微笑(わら)った。
「外場葬儀社というのができたんですが、御存じなかったですか。いわばまあ、互助会みたいなもんなんですけど、うちが斡旋(あっせん)のお手伝いをしてましてね。御主人もまさかこんなことになるとは思っておられなかったんでしょうが、契約をなさったんですよ。最初に来られた日だったかな。御覧の通りです」
佐知子は書類に目を落とした。コピーらしいそれには、たしかに夫の筆跡で必要事項が書き込まれ、判が捺(お)されている。
「まあ……どうして、こんな」
「さあ」と江渕は微笑う。「パンフレットを御覧になってましたから、気に入られたんじゃないですか」

「でも、必要ありません。弔組がありますから。……そうだわ、世話役に連絡をしないと」
　佐知子が立ち上がりかけると、江渕はそうですか、と残念そうに言う。
「まあ、もちろん強制のものじゃないと思いますが。ただ、それは勿体ない話だな。たしか御主人は、契約料を払ってらっしゃったはずですが」
「契約料？」
「ええ。わたしも詳しいことは知りませんけどね。たしか入金なさってましたよ。うちで速見さん——葬儀社の社長さんとお引き合わせしたとき、お金を渡してらっしゃいましたから。葬儀社に頼まれれば、葬儀にかかる費用は一切ないはずなんですけどね。まあ、反故になさるのは御自由ですが」
「そんな……」
　佐知子を捉えたのは疑念だった。この医者は何かおかしい。この契約書だって油断がならない、という感じがした。第一、きっと少なくはないだろう額面を、夫が佐知子に無断で支払えるはずがない。
　そう思いはしたが、佐知子は立ち上がった。寝室に行って抽斗を探り、通帳を取り出す。中を検めてみて佐知子は驚いた。三日前、三百万の定期が一本、解約されて引き出されている。

「まさか」

佐知子は目を瞠った。こんなに、という思い。そして怒りを感じた。——なんて、勝手なことを。佐知子は座敷に取って返す。江渕の前に坐り込んだ。

「その契約、解約できないんですか」

「できなくはないと思いますが。ただ、契約内容にもよりますが、全額が返ってくることは滅多にないいんじゃないですかねえ」

「そんな。これは主人がわたしになんの相談もなく勝手にやったことなのよ。葬儀社なんて必要ないんです、村には弔組があるんですから。弔組に頼めば、あんなに法外なお金はかからないし」

江渕は苦笑した。

「それは速見さんと相談してもらわないと。わたしにおっしゃられてもねえ。まあ、解約なさるんなら、早いほうがいいと思いますけどね。そこに連絡先が書いてありますし、連絡されてはいかがです。——では」

江渕は立ち上がる。佐知子は江渕を送り出すと、すぐさま電話に飛びついた。佐知子を突き動かしていたのは、ただひたすら夫の勝手な振る舞いに対する怒りだった。

(あたしに一言もなく、こんな勝手を)

そんなことは許さない。

この電話にも、相手はすぐに出た。佐知子が名乗ると、すぐさま誰だか分かった様子なのも同様だった。
「解約してほしいんです。夫が勝手にやったことですから」
「それは構いませんけど」と、欠伸まじりに男の声が言う。「その場合は、手数料だけいただきますけど、いいですかね」
手数料自体はたいした金額でもなかったので、佐知子は承知した旨を伝えた。
「じゃあ、書類を用意しますんで、御主人と一緒にいらしてください」
佐知子は一瞬、頷きかけ、それがもはや不可能であることを、改めて思い出した。
「あの……主人は亡くなりました」
そうだ、夫は死んだのだ、といまさらのように呆然とする。突然、死んで、座敷に放置されている。
「それは困ったな」と、速見は言った。「約款を御覧になれば分かると思うんですが、御契約者が亡くなられて以後の解約はできないんです」
「――え？」
「その……そもそも、御葬儀のための契約なんでねえ。御主人が亡くなられたのなら、解約はできませんのです。もちろん、反故にされるのは御自由ですが、その場合は、お預り金の返却はできないことになってますんで」

「そんな。これは主人が勝手に」

「しかし、御主人が契約なさったものですから。ちゃんと判子もいただいてますしねえ。御葬儀にうちを使っていただけば、お預り金は精算して、余分はお返しするシステムになっているんですが」

そんな、ともう一度、佐知子は呟いた。言葉をなくした佐知子に、速見はシステムを説明する。ほとんどの言葉は右から左に素通りして行ったが、狼狽した佐知子にも、契約を反故にすれば大損をすることになること、対して、葬儀社に依頼すれば損失はないことは理解できた。

「どうなさいますか?」

速見は欠伸まじりに訊いてきた。佐知子は頷いた。

「分かりました。そちらにお願いします」

そうですか、と言った速見の声は、どこか舌なめずりしそうな音色をしていた。

「では、早速、伺います」

佐知子は溜息をつき、電話を切った。居間の戸口に、かおりが立って佐知子を見ていた。どうしたの、と問いかけると、かおりは身を翻して駆け出す。二階へと駆け上がる足音が聞こえた。

佐知子は首を傾げながら、座敷に戻った。いつの間にか、布団が敷き展べられていた。

寝室から運んできたのだろう、展べられた布団に夫は横たわっている。お世辞にも整然と、とは言えなかった。斜めに敷かれた布団はシーツも何もくしゃくしゃになっている。夫の身体は寝乱れたパジャマのまま斜めに横たわり、掛け布団をかけられて、そこに昭が突っ伏して泣きじゃくっていた。

佐知子は溜息をついた。

「浴衣(ゆかた)を着せておかないと。——それとも、必要ないのかしら。手を貸してちょうだい。とにかく、ちゃんとしとかないと。布団がぐちゃぐちゃじゃないの」

「ほっとけよ！」

昭が声を上げて、佐知子は眉(まゆ)を顰(ひそ)めた。

「母ちゃんは金の心配をしてればいいじゃないか！」

佐知子はその場に棒立ちになった。

「おれとかおりで一生懸命やったんだから、これでいいんだ。父ちゃんだって、きっとこれでいいって言ってくれる。座布団の上に放り出されてるより、何倍もましだって」

昭は父親の身体にしがみついた。昭だってちゃんとしてやりたかったのだ。だが、父親の身体は重かった。物のように手荒く扱うこともできず、だから、かおりと一生懸命に整えようとしてもこれが精一杯だった。

「……何なの、その言いぐさは」

佐知子は怒りのあまり吐き気を覚えた。
「お葬式にいくらかかると思ってるの。お父さんが死んで、これからの生活をどうするのよ。お父さんったら、勝手に定期を解約して。あれはあんたたちの将来のために――」
「うるさい！　あっち行ってろよ。触るな！」
「そう。だったら好きにすればいいわ。葬儀社の人が来て、みっともないところを見られて情けない思いをするのは、お父さんなんだから」
昭の返答はない。佐知子は怒りで身震いしながら居間に戻った。そこで声を上げて泣いた。

葬儀社の速見がやって来たのは、それからいくらもしない頃のことだった。速見は若い男と二人連れでやって来ると、佐知子に一通り悔やみを言った。契約書の原本と約款を示し、契約内容を説明する。
最初は投げ遣りだった佐知子は、速見の説明を聞くにつれ、その内容に悪心を感じた。
「あの……今、何て？」
速見は細い目をさらに細めた。速見は五十代の小男で、常に笑っているかのような細い目をしていた。それでかえって、感情を窺うことができない。
「ですから、御主人は無宗教で、という御意向でしたので、お坊さんも戒名もありませ

んのです」
「そんな。困ります」
「困りますと言われましても、そういうことになってますのでねえ」速見は言い、どこか楽しげに見える表情で笑う。「いや、お気に召さないのでしたら、契約を反故にしてもらってもいいんですけどね。ええ、うちとしちゃあ、損はないですから」
佐知子は押し黙った。
「そういうわけで、特に祭壇もありません。いや、もちろん、御供養のための祭壇はそれはもう荘厳なのを用意させていただいてます。ですが、まあ普通の仏式の祭壇とはちょっと違うと申しますか」
「じゃあ、お経はないんですか？　お焼香も？」
「ええ。お経の代わりに、厳粛な音楽を流させていただきますから。御焼香の代わりに参列者に献花をしていただいて、その際に故人とお別れをしていただこうという、そういうことになっておりますので」
「そう……ですか」
「御心配はいりません。決して仏式に比べて見劣りするようなもんじゃありませんから。献花の間は会場の照明を落として、こう――故人のお顔にだけスポットライトを」
佐知子は嫌悪に口を歪めた。速見は構わずに得々と続ける。

「一通り献花が終わったら御親族で棺に釘を打っていただいて、最後に棺がですね、すうっと下に下がって」
「――は？」
速見は目を細める。
「ですからね、舞台で言うすっぽん、それがありましてですね」
「あの、そんなたいそうなことをするんですか？　うちの座敷は御覧の通り――」
「いやだなあ」と、速見は笑う。「奥さん、ちゃんと聞いてくださらないと困ります。会場はこちらではなくて、葬儀社の斎場を使っていただくんですよ」
それが契約ですので、と速見は言い添えた。
「だったら仕方ありませんけど、でも、そういう軽々しい演出は……」
「そうは言われましても、そういう契約になっておりますから。そうしていただかないと困りますんです」言って、速見は目を細める。妙に不穏な顔に見えた。「――手前どもにも段取りってものがございますのでね」
佐知子はなぜだか、ひやりとしたものを感じた。子供たちが側にいないのが、どういうわけか心細かった。
「これから、御主人を運ばせていただきますんで。――御心配なく。湯灌から御装束の用意から納棺まで、全部わたくしどもがさせていただきますので。通夜は六時からです

が、斎場は開いておりますから、いつからお使いいただいても結構です。御親族の控え室や仮眠をお取りいただく部屋もございますし、お着替えもそちらでしていただけます。もちろん、お泊まりいただいても結構ですが、なにしろ御葬儀が夕刻のことですので」

え、と佐知子は速見の顔を見た。速見は、にっと目を細める。

「そう申し上げませんでしたか。演出の都合がございましてね、葬儀は明日の六時からです。うちではそれをお勧めしてるんですよ。そうするとお勤めがおありの方も、列席していただけますし。こちらは土葬ということですので、墓所までは照明を用意してございます。野辺の送りに同行なさる方には、蠟燭型のライトをお持ちいただいて――」

「やめてください、そんな」

「そういう契約でございますので」

速見の顔は笑っていたが、妙に有無を言わせないものが漂っている。佐知子はまたひやりとしたものを感じ、仕方なく頷いた。

「では、御主人をお預かりさせていただきます」

速見は言って、若い助手と見える男を促した。二人は車から担架のようなものを持ち出すと、夫の身体をそれに載せ、車に運び込んだ。異常なまでに手際が良く、佐知子はろくに夫に別れを言う暇もなかった。

「――では、斎場で」

速見は慇懃に頭を下げる。

佐知子はどこか呆然とした気分で座敷に戻った。座敷には、夜明け前の白々とした空気と、抜け殻のようになった夫の夜具が残されていた。

夫はもういない。二度と家に帰ってくることはないのだ。速見らに連れ去られてしまった。

まるで夫を略奪されてしまったような気分が、不思議に佐知子にはした。

5

十月十七日、その日、寺務所にかかってきた最初の電話も、やはり訃報だった。静信は予感を感じながら受話器を取った。田茂定市の沈痛な声が、田茂広也の死亡を伝えた。

「今朝方、いよいよ具合が良くなくてね。痙攣し始めたんで救急車を呼んだんですが、病院に着くまで保ちませんでした」

そうですか、と静信は相槌を打ち、定市に悔やみの言葉をかけた。

「ありがとうございます。けども、格別うちだけが不幸だってわけじゃありませんから。むしろうちは、今まで運良く死人を出さずに来ましたからね。まあ、高校生の広也じゃなく、わたしや婆さんのような年寄りなら良かったと思わないわけにはいきませんが」

抑制された声が静信を刳った。村に死が続いているからと言って、自分が家族を亡くした悲しみが薄れるわけではないだろう。だが、ある種の諦観に達さざるを得ないほどの死が村に蔓延していることもたしかだった。それを分かっていながら、静信は何もしていない。寺に引き籠もり、無為に時間を浪費している。

田茂広也は高校の二年生だったか。田茂の家には出入りすることが多かったから、もちろん面識がある。定市や細君のキヨに連れられて、寺に手伝いに来てくれることも多かった。潑剌とした礼儀正しい少年だった。その広也が死んだのだ、と思うと痛ましく、そんな悲劇は起こるべきではないと思えた。だが、その広也も甦生する可能性があるのだ。どんな少年だったか知っているだけに、甦生した彼を自分が再び墓穴の中に突き落とすことは、どうあっても許されないことだと思えてならなかった。

静信は両手で顔を覆った。同時に、再び電話が鳴った。受話器を取ると、敏夫だった。敏夫は淡々と安森徳次郎の訃報を伝えた。特に責める言葉も、皮肉めいた言葉も口にしなかった。それでいっそう、罪悪感が募った。こうしている間にも、刻々と被害は増えている。これを黙って見ているのかと、敏夫が問うているような気がする。

「今、電話が鳴りませんでしたか」

光男が寺務所に顔を出した。静信は頷いた。

「定市さんのところの広也くんと、安森の徳次郎さんが亡くなったそうです」

そうですか、と光男は諦観の滲む声で呟き、そして首を傾げた。
「若御院、こういう場合はどうなるんですかね」
「こういう場合？」
「弔組ですよ。徳次郎さんは世話役だったわけでしょう。その徳次郎さんが亡くなったわけで、普通は定市さんが助番ですよね。けれども定市さんも――」
ああ、と静信は呟いた。定市の家でも不幸があったわけだから、定市に世話役はできない。
「丸安も身内ですよね」
光男の困惑したような問いに、静信も同様に困惑しながら頷いた。序列から言えば、定市に次ぐのは製材所の安森一成だろうが、丸安製材は徳次郎の身内だ。葬儀を出す側になる。同様に田茂の身内も助番に立てない。こんなことは、静信の記憶にある限り、初めてのことだった。
「お父さんに相談してみます。徳次郎さんのことも伝えないといけないし」
「そうですね」と、光男は悄然とする。「さぞ気落ちなさるでしょうねえ。なにしろあの温厚な御院が、血相を変えて見舞いに行かれたぐらいですから」
静信は頷き、重い気分で離れへと向かった。病床の父親に声をかけ、徳次郎の逝去を報告する。ベッドの上で本を広げていた信明は静信のほうを振り返り、そして低く「そ

うか」とだけ呟いた。特に衝撃を受けた様子ではなく、嘆くでもなかった。やはり父親は、徳次郎に別れを告げるために、見舞いに行ったのではないか、という気がした。

「それから、定市さんのところの広也くんが。こういう場合、助番はどうなるんでしょう」

信明は考え込む様子を見せ、それから短く、竹村吾平老人に相談するよう言った。静信は頷き、妙に淡々とした父親の様子に内心で首を傾げながら、こまごまとした相談をした。離れを出て、寺務所に戻ろうとしたところで血相を変えてやって来る美和子に会った。

「静信、徳次郎さんが——」

ええ、と静信は頷く。

「なんてことかしら。田茂さんのところのお孫さんも、ですって？」

「はい」

「あなた、どうするの？」

美和子に訊かれ、静信は瞬いた。

「どう——って」

美和子は青い顔で静信を近くの部屋に引き込む。

「お弔いに行くの？　行かないといけないの？」

静信は困惑した。
「行くもなにも」
「それでなくても、このところ忙しいんだから、どこか近隣のお寺さんに代わってもらうわけにはいかないかしら。ほら、鶴見さんも具合が悪いようだし。あなたと池辺くんだけで、しかも二軒じゃあ、どうしようもないじゃないですか」
「ええ、ですからそれは相談して、どちらかは日をずらしてもらうしかないと、お父さんとも言っていたんですが」
「仏さまに対してそれは失礼ですよ。近隣のどこかに代わってもらいなさい。そのほうがよほど筋が通ってるわ」
静信は首を傾げて美和子を見つめた。美和子は気後れしたように目を逸らす。
「別にわたしは、あなたに行ってほしくないからこんなことを言っているわけじゃないのよ。……もちろん、あなたが行かないといけないことは分かってるわ。でも」
言葉を切って、顔を覆った美和子を、静信は底冷えのする気分で見つめた。
「でも……。とうとう工務店には誰もいなくなってしまったのね。田茂さんのところも、お葬式を出すことになって。そりゃあ、徳次郎さんにも定市さんにもお世話になってます。それは分かってますよ。でも、あなたも少し休まないと」
「お母さん」

「晋山式もまだなのよ」と、美和子は泣く。「ここであなたが倒れたら、檀家さんをどうするの。万一、本山から住職を迎えるようなことになったら、わたしは」
　静信は苦いものを無理にも呑み下した。
「……充分に気をつけていますから」
「でも、伝染病だっていう噂も」
「大丈夫です。本当に、充分に気をつけていますから。自分の立場は分かっています。お母さんの立場も。だから心配しないでください」
　泣き崩れた美和子を宥め、静信は先に寺務所に戻る。苦く重いものが胸の中にわだかまって、遣り場のないのが辛かった。
　美和子を責めることはできなかった。静信に兄弟はいない。静信が生まれるまで、美和子がどれだけ肩身の狭い思いをしたかは想像がつく。今も信明が住職としての責務を果たせないこと、静信が妻を持たず、したがって跡継ぎがないことで肩身の狭い思いをしているのだろう。住職の妻は寺を内側から支えることを求められている。信明が倒れ、静信はこんなふうで、だから美和子がその役目を充分に果たせていないという負い目を抱いていることは想像に難くない。
　期待を背負っているのは美和子も同じ、それは期待であって、決して圧力ではないのだが、期待に応えたいという意思があり、そうはできていない自覚があれば、無言の期

待はたちまちのうちに無言の脅迫として感じられるものであることを、静信は理解していた。
だが——と美和子に落胆する自分がいる。これほどの惨状を前にして、それしか言うことはないのか、考えることはないのか、と思わないわけにはいかなかった。そう思うことが美和子にとって理不尽な振る舞いであることは理解している。分かっていながら、あなたはそんな人だったのか、と言いたい自分を自覚していた。
分かっている。静信は美和子ではない。美和子の真情は分からない。想像するしかないが、その想像の真偽を確かめる方法などない。人と人はそれほど隔絶されているのだ。美和子の立場は分かるが、そんなことを考えている場合か、と思う。だが、そう思うのは傲慢だろう。そんなことを考えている場合ではない、なのにそう考えないではいられないほど切羽詰まっている、ということなのだ。つまりは静信の美和子に対する理解が、それだけ確実に不足している。
（けれども……）
静信は自分自身すら理解し、統御することができないでいる。その自分がどうして他人を理解できるはずがあるだろう？
静信は今に至るも、自分がなぜ死を望んだのかを知らない。そればかりではなく、なぜ自分だけが誰もが躓くことのない場所で躓くのか理解できなかった。美和子や敏夫に

対して親愛の情を抱いていながら、やむにやまれぬ行為をなぜ許容してやることができないのかも、分からない。
（人にとって、いちばんの謎は自分なのかもしれない）
そして、人の認識はその心の在りようを映していくらでも歪む。自分の心に潜む歪みの在処すら知らない者が、現実を正しく把握できるはずがなかった。だから敏夫も、美和子も理解することができない。理解できないという隔絶感が、自分を怒らせるのだと思う。
（きっとたぶん、……彼もそうだったんだ）
彼もまた、
弟をなぜ殺したのかを知らなかった。分からないのは、そればかりではない。彼は弟がなぜ自分を追ってくるのか、その理由もまた知らなかった。彼がそれを理解することができないのは、結局のところ、生前の弟をも理解していなかったからに相違なかった。実際、彼は屍鬼でない弟を克明に思い描くことがもうできなかった。
（ぼくの現実は、歪んだ鏡に映し込まれた歪んだ認識の集積にすぎない……）
静信が「美和子」として認識する「美和子」には、静信の「こうであってほしい」という無意識の期待が映し込まれている。静信が美和子を想起するとき、

彼が弟のことを振り返るとき、思い起こされる美和子は、美和子という名の幻想にすぎないのではないか。

それはまず麻布の下に隠された起伏の形で想起された。その下には、彼の凶行によって無惨に損なわれた遺骸があったはずだが、不思議に彼はその変わり果てた姿を覚えていない。

ひょっとしたら静信は、一度たりとも美和子本人を見たことがないのかもしれなかった。

あるいは彼は、弟の骸から目を逸らし、一度も正視することがなかったのかもしれない。屍鬼となった弟には損傷がなかった。ただ蒼褪めているばかり、それは起き上がった死体と言うよりも幽鬼そのもののようだったが、明らかに質感を伴い、荒野を住処とする悪霊たちのように存在感を欠いた幻影のようには見えなかった。

ただ、彼は自分の行為を覚えていた。涼やかな夕暮れ、彼は弟を緑野で襲った。手には鋤を持っていた。理由のない衝動に駆られての一撃、あとは自分の行為が恐ろしく、まるで弟の命を完全に絶やすことで自分の行為をも葬り去ろうとするかのように破壊を加えた。

おそらくはそうだったのだろうと思う。実を言えば、彼はその瞬間をも記憶していない。熱に浮かされたように変質し狭隘（きょうあい）なものに感じられた自分の意識と、それを見事に塗りつぶしていた破滅的な衝動の色合いと、そして幾度かにわたる陰惨な手応えとを覚えているだけだった。

血塗られた弟の骸、それもまた漠然とした印象にすぎない。周囲の草には撒（ま）き散らされた血糊（ちのり）で赤錆色（あかさびいろ）の斑（ふ）ができていた。それだけを妙に生々しく鮮明に覚えている。弟の骸を草叢（くさむら）に引きずり込んだときの手応えと重み、草叢を背後に歩み去るときの妙に現実感を欠いた気分、どれもこれもがあまりにも曖昧模糊（あいまいもこ）としていて、だから彼が麻布の下の起伏として覚えている弟の、その前に記憶している姿と言えば、打ち掛かる凶器に気づき、驚いたように彼を振り返った像なのだった。

彼は再三再四、その像を取り出しては仔細（しさい）に見つめ、振り返った弟の顔に、自分に対する憎悪（ぞうお）が、裏切りに対する怨恨（えんこん）が、あるいは己の運命に対する絶望がありはしなかったかと検分してみるのだが、そのどれをも発見することができなかった。屍鬼と同じく、なんの感情の色も窺（うかが）えない空洞の目が、ただ驚愕（きょうがく）に見開かれ、自分に向けられていたように思うばかりだった。そして同時に、その瞳（ひとみ）に映った影を見て取ったかのように、不思議に彼はその瞬間の、殺意に圧倒され狂気を湛（たた）えて歪んだ自分の顔を弟の顔よりも鮮明に思い出すことになるのだった。

――なぜ。

彼は顔を歪めた男に問うたが、男はもちろん何を答えることもなかった。その口は何かを叫ぶかのように開かれてはいたものの、叫んだ声は彼の記憶から欠落している。実際のところ、彼は自分が声を発した覚えがなかった。彼はただ、叫ぶ形に口を開いて、声を発する代わりに凶器を振り下ろしたのかもしれなかった。

(誰にとっても現実は、何ひとつ定かじゃない……)

人は昏(くら)い。

無明の闇(やみ)に閉ざされて出られない。

6

ベランダの外には闇より他に見るべきものもなかった。篤(あつし)はその、物干し台ともベランダともつかないものの隅で空き缶を抱え込んでいる。旨(うま)くもない煙草(たばこ)を吸って灰を店からくすねてきたビールの缶の中に落とした。

もう覚えていない、いつからかそれが篤が煙草を吸うときのスタイルだった。夜のベランダに隠れて、ビールの空き缶の中に灰を落とす。もう二十歳は過ぎているのだから、以前そうしていたように隠れて吸う必要もないはずだが、祖母の浪江が煙草を嫌うので、

未だにこうして隠れるのが習い性になっている。
そういう自分を惨めだとも忌々しいとも思う。まるで祖母の顔色を窺っているようで気に喰わない。だが、浪江は煩い。くどくどと煙草の害について説教されるのも面白くないし、果てには自分たちの健康も犠牲にするつもりかとヒステリックに喚かれるのも不快なだけだ。あげくには父親を呼んで、反抗的だとか他人に対する思いやりがないとか、難癖めいたことを言い上げる。そうすると父親が篤を殴るという段取りになっている。

(……糞婆)

篤の人生には味わうべきものが何もない。生まれた時からずっと下り坂で、まだそれが継続中だった。このところ村で葬式が多い。見知った人間が死ぬ、あるいは出て行く。配送の顔ぶれが変わる、村の中が落ち着かない。それがどうした、と篤は思うが、父親はそれが気に入らないらしかった。世の中にはルールってものがあるんだ、と最近、しきりに零している。それが踏みにじられている、と父親は怒る。そのとばっちりを喰うのはいつでも篤だ。

村がどうしようと篤の知ったことじゃない。それが篤の父親を苛立たせ、おかげで篤がとばっちりを喰う。そうやって篤は貧乏籤ばかりを引いている。よりによって父親の機嫌が悪いときに松村がどじを踏む。そのとばっちりが篤にまで来る。そんな時に限っ

て母親は父親に文句を言い、祖母がまた余計なことを言う。弟と妹はそつなく立ちまわり、二人に比べて、とまた篤が怒鳴られる。みんなで寄って集(たか)って、篤に貧乏籤を押しつけている。

（どうせ死ぬんなら、そういう奴(やつ)らを片付けてくれりゃあいいんだ）

父親も母親も、祖母も兄弟もいなくなれば、どんなに清々するだろう。そうしたら篤は店の有り金を持って、吐き気のするようなこの村から出て行ってやる。それを想像すると愉(たの)しかった。想像でしかないことが腹立たしかった。あり得ないことを承知の想像を思い描いているとき、その底に、さらにあり得ない望みがチラチラと見え隠れする。

……いっそ、この手で片付けてやろうか。

その姿が垣間(かいま)見えるとき、腹の底がぞわりと粟立(あわだ)つ感じがする。頭は夢想を追っていい気分で、同時にそれがあり得ないことに胸のあたりがむかついている。そして腹の底で蠢(うごめ)く怖気(おぞけ)のようなもの。篤はその、自分の五体が断裂するような奇妙な感覚をこそ、弄(もてあそ)んでいるのかもしれなかった。

得体の知れない気分を味わって、夜を見るともなく見ている。ベランダの下は店の脇(わき)の路地、路地には店の倉庫が面している。そしてその路地の奥には二階に直接上がってくる裏階段があった。見るべきものは何もない。たまに野良(のら)猫が迷い込んでくるくらいだ。その野良猫も、最近、姿を見かけない。

なのにそこに足音がした。女物の靴が立てる、細く硬い音だった。篤は少し身を起こし、手摺の合間から下を覗き見た。女が一人、路地の入口に姿を現し、路地を覗き込むようにしてから上を仰いだ。
「……こんばんは」
女は笑った。篤よりも年上で、しかも見慣れない女だった。華やかな容姿で、どことなく勿体をつけたような物腰。村の女とは雰囲気が違う。それが誰なのか、容易に想像がついた。
「夜に人を見かけたのは、久しぶりだわ」と、その女はベランダの真下にやって来て篤を見上げた。「……何をしてるの？」
「別に」と、篤は呟くように答える。
「この村は夜が早いのね」
「臆病者ばっかりなんだよ。夜はおっかないんだとさ」
まあ、と女は笑う。
「でも、あなたは平気なのね？　剛胆なのね」
もちろんだ、と篤は笑ってみせた。
「あなたなら下りてきて、話し相手になってもらえるかしら？」
「あんたが上がってきなよ。奥に階段があるから」

「いいの？」
篤は頷く。歪んだ笑みを浮かべた。そう、篤は夜など恐れていない。夜に危険などあるはずがなかった。ましてやあの女が危険であるはずがない。たいして力もなさそうな華奢な女だ。
――そうとも、危険なはずがない。
「女のほうは危険かもしれないがな」
篤は呟き、一人で笑った。

7

月明かりが白く降っていた。木立の間の闇は蒼く、視界は陰鬱な明るさに満ちている。
奈緒は斜面を下る足を止め、少しの間、山と林とそして夜空を見比べた。風が吹いている。髪を揺らすほどの風だ。蒼褪めた景色はどこもかしこも秋の色を呈し、視覚はいかにも肌寒い刺激を感じ取っていたけれども、奈緒は格別、寒さを感じているわけではなかった。蒼い闇は、闇としての奥行きを失っている。そのように奈緒の世界も、山入の廃屋で目覚めて以来、ある種の奥行きを喪失していた。
奈緒はとぼとぼと山腹を下る。通い慣れた杣道を辿り、北山のはずれに出た。途中、

野犬に会い、威嚇してくる声を聞いたけれども、不思議に野犬が奈緒を襲うことはない。連中は威嚇するばかりで、決して奈緒に近づいてこようとはしなかった。

野良犬からも忌避される自分。そう、胸に呟きながら林を出ると、遠くに懐かしい家が見え、そこに明かりを見た。

奈緒は足を止める。提灯が家の前に下がっていた。陰紋の書き込まれたあれは忌中の提灯だ。――では、と奈緒は襟のあたりを握った。徳次郎が死んだのだ。

（……お義父さん）

奈緒は林の中に逃げ込んだ。――進、幹康、節子。誰一人、起き上がってこなかった。徳次郎は起き上がるだろうか。せめて徳次郎だけでも、自分の側に留まっていてくれるだろうか。

逃げるように遠ざかりながら、そうはなるまい、と奈緒はどこかで思っていた。ついに家族の誰もが起き上がらなかった。きっと徳次郎も、幹康らのいる安逸の国へ行ってしまうのだろう、自分を残して。

安森奈緒は、伯父夫婦の許で育った。実の父母は奈緒が六歳のとき、奈緒を捨ててどこかへ行ってしまった。それきり会ってない。消息はまったく分からなかった。

奈緒を引き取ってくれたのは、母方の伯父で、そして奈緒は伯父夫婦と折り合いが良くなかった。決して邪険にされたわけでも、虐待されたわけでもなかったが、奈緒は伯

父夫婦が自分の親ではないことをあまりにもよく分かっていた。奈緒は両親がほしかった。温かい家庭がほしかった。無条件に自分を受け入れてくれ、自分の居場所となる家がほしかった。幹康がそれを与えてくれた。

愛する息子と夫、優しかった義父母。奈緒は節子を実の母親のように思っていた。徳次郎を実の父親のように思っていた。だから、呼び寄せたかった。

（……なのに）

冷えた涙が頬を伝う。それに温度がないことを、奈緒自身、自覚しないわけにはいかなかった。

進も、幹康も、そして節子も起き上がらなかった。おそらくは、徳次郎も起き上がらないだろう。奈緒の「起き上がる」性質は、奈緒を捨てた実の父母から受け継いだ形質だ。酒に溺れ賭事に溺れ、詐欺まがいの事件を起こし奈緒を捨てて逃げ出した、そんな男女から受け継いだ悪い種子。だからきっと、こんな生き物になってしまったのに違いない。

――奈緒ちゃんのせいじゃない。

そう言ってくれ、奈緒の存在を許してくれた幹康らには起き上がる性質がない。悪い種子を持たないのだ。だから人殺しをして生き延びるような、こんな生き物になったりしない。穏やかに目を閉じたまま、安穏としたどこかに集い、安らかに眠るのに違いな

い。奈緒はそこに辿り着けない。
奈緒はたまらず、手近の木の幹を叩いた。樹皮が手を掻き切ったけれども気にならない。こんなものは治る、いくらでも。だからこそ、奈緒には安息が訪れることがない。
（どうして）
なぜ、こんなことになったのだろう。幹を叩きながら林を抜けると、丸安の明かりが見えた。材木置き場には、まだ奈緒が温かい血の通った人間だった夏の頃と同じく、整然と材木が積まれ、トラックやフォークリフトの轍跡が残っている。
虫の声はしない。夏草の匂いもしない。祖霊を迎える篝火もなく、集う親族の声も聞こえなかった。
（訪ねてきてください、と言ったのは、あたし）
たしかに奈緒は、そう言った。男はその後、約束を違えず、奈緒の家を訪ねてきた。深夜に——一人の男を伴い。その無気力な顔をした貧相な男は、後藤田秀司といった。
（あの男——あんな奴）
あいつさえ来なければ。いや、そもそもうかつにも、自分が正志郎に声をかけたりしなければ。
（あいつの母親も起き上がらなかった）
奈緒は顔を歪めた。それだけが救いだ。秀司は母親が真実、死んだことを——他なら

ぬ自分が殺したことを知って、ぼろぼろになっていたのだ。慚愧と罪悪感で自分を刺すことを覚え、そこから抜け出せずに、今や廃人同然の男。あの虚ろな汚らしい男が自分を襲った。温かい家から、永遠に引き離してしまったのだ。

（あんな男が）

徳次郎は起き上がらない、おそらくは。奈緒の大切な家族の誰も、奈緒のような――あの男のような悪い種子は持っていないのだ。だから奈緒を置き去りにして、安穏と朽ちていく。

そんな性質を付与した父母が憎かった。正志郎が、秀司が憎い。何よりも自分が憎かった。

――そして。

奈緒は泣きながら丸安を見下ろす。寝静まった瓦屋根。

（あのとき正志郎を招いたのは、淳ちゃんだって一緒なのに）

同じなのに、同じでない。まだ温かい身体をして、温かい寝床に納まり、夫の温もりに寄り添っている。

（不公平だよ、淳ちゃん。淳ちゃんだってそう思うでしょ……？）

奈緒は離れの建物を見つめた。

（不公平で可哀想だって、思ってくれるよね？）

十一章

I

前田元子は、十八日の早朝、夫が死んでいるのを見つけた。

元子は呆然として坐り込んだ。しばらくの間、人を呼ぶことも思い浮かばなかった。ようやく誰かに知らせねばならないと、思いついたときに頭に浮かんだのは、幼馴染みの顔だった。元子は夢うつつの気分で、加奈美に電話をかけた。

矢野加奈美は、電話に叩き起こされ、痛む頭を抱えて受話器を取った。昨夜は飲みに来た客につられて飲み過ぎた。胃の腑の底に不快感がわだかまっている。電話の相手は元子だった。

「加奈美？　あの、お父さんが変なの」

元子の声は虚脱したようで、妙に力がなかった。

「変って？」

欠伸まじりに問うと、「死んでいるみたいなんだけど」と、愕然とするような答えが返ってきた。

「なん——ですって？」
「死んでるみたいなの」
元子の声には、なんの切迫感もなかった。
「ちょっと、元子、冗談ならよしてよね」
「冗談じゃないと思うんだけど」
その言葉、語調に加奈美は眠気が吹き飛ぶのを感じた。元子の様子が危うい。本当に前田勇が死んだのだとしたら、この様子は異常だ、と思った。
「元子、悪いけど誰かに代わって」
「みんな寝てるわ。……お義母さんは起きてるかしら。まだよね。起きるには、まだちょっと早いもの」
「まだ誰にも知らせてないの」
そうなのよ、と元子の声は、世間話でもする調子だった。にもかかわらず、声には虚脱したように力がない。薄い氷のような冷静さ。今にも壊れて奔流が噴き出してきそうな。
「いい？　とにかく、すぐに行くわ。だから玄関を開けといて。いいわね？」
「ありがとう」元子は言って、力無く笑う。「助かったわ、あたし、どうしていいか分からなくて」

唐突に元子の声が途切れた。加奈美は受話器の向こうで、何かが軋み始めたのを感じる。
「元子！　いいから。何も考えないで。すぐに行くから。いいわね」
うん、と元子の声は子供のような調子だった。加奈美は受話器を置き、すぐさま病院に電話をする。子機を抱えたまま着替えつつ、敏夫に連絡をして事情を伝える。
「なあに？　何の騒ぎなの？」
母親の妙が起きてきた。
「いいところに起きてくれたわ。悪いけど、下外場の世話役に連絡して。元子の旦那が亡くなったみたい」
まあ、と妙は絶句した。
「電話しといて。あたしは元子のところに行くから」
妙の返事を待たず、加奈美は駆け出した。顔を洗うのもそそこに表に飛び出し、朝靄に包まれた道を小走りに急ぐ。元子の家に駆けつけると、元子は玄関の前に蹲って顔を膝に埋めていた。
「元子！」
元子は涙でくしゃくしゃになった顔を上げた。
「加奈美……うちの人が」

「大丈夫よ、分かってる。大変だったわね」
「どうしよう。あたし——どうしよう」
加奈美の服を握りしめて泣きじゃくる元子の背中を撫でる。
「大丈夫よ。今、尾崎の若先生が来てくれるわ。お義母さんは？」
元子は頭を振る。まだ起きてない、と言いたいのか、それともまだ伝えていない、と言いたいのか。
「起こして伝えないと。いいわ、あたしが」
家の中に入ろうとした加奈美を、元子が引き留めた。
「加奈美、どうしよう。勇さん、死んじゃったよ。他人になっちゃった。家に帰るくらいなら死んだほうがいい」
加奈美は眉を顰める。
「……元子？」
「あたしの子供なんだから。なのに勇さん、死んじゃったの。どうしよう、あたし」
「元子」加奈美は元子の肩を揺する。「しっかりして。大丈夫よ、あんたは心配しなくていいの。だから落ち着いて」
でも、と言い募る元子を加奈美は強く揺すった。
「しっかりしなさい。茂樹くんと志保梨ちゃんは？　泣きやんで様子を見に行くの。い

いね?」
子供の名前を出すと、元子はぴたりと泣きやんだ。頷いてみせると、ようやく元子は我に返ったように加奈美を見つめる。
「ばたばたするから、二人とも起きちゃうわ。きっと心細いと思う。あんたが側についていてやらなきゃ」
元子は頷く。ようやく表情に強いものが戻った。加奈美はひそかに息をつく。子供を支えることで、自分自身を維持させるのだ。今はこれしか考えつかない。
「さあ、行って」
加奈美が促すと、元子は家の中に駆け戻っていった。ようやく安堵の息をつき、加奈美は首を傾げる。元子は取り乱していたのだ。完全に言葉が脈絡を失っていた。——けれども、元子はあの言葉の断片で、何を伝えようとしていたのだろう?
首をひねりながら家に上がり込むと、姑の登美子が起きてきたところだった。
「何の騒ぎ?」
「朝早くにごめんなさい。元子から電話をもらって」
「あんた——加奈美さん。電話って」
「勇さんの様子が変だって。元子、すっかり取り乱していて」
まあ、と登美子は絶句し血相を変えた。泳ぐように廊下を奥へと向かう。部屋のひと

つに飛び込み、敷き展べられた布団の枕許に膝をついて肩で息をした。
「――勇！」
加奈美はそっと登美子の肩越しに勇の顔を覗き込む。薄く開いた目、薄く開いた口、まるで蠟でも被せたような生気のない肌。瞬くこともなく、呼吸している様子もない。たしかに勇は死んでいるのだと思う。
「なんで元子さんは、あなたに連絡するんですか！」
唐突に登美子が振り返った。
「あたしに一言もなく、どうして赤の他人のあなたに」
「元子は取り乱してたんです。どうしていいか分からなかったんだわ」
「だったらあたしを呼べばいいじゃないの！　あたしの息子なのよ！」
そうですね、と加奈美はとりあえず登美子を宥める。もう若先生が来ますから、とにかく今は落ち着いて、と言葉をつくして宥める。登美子は息子を亡くした悲嘆より、それを今まで知らされなかった怒りで顔を紅潮させていた。今にも元子を責めるために二階に駆け上がっていきそうで、それを押さえるのに四苦八苦していたから、玄関から敏夫の声が聞こえたときには救われた気分だった。
勇と登美子を敏夫に任せ、加奈美は二階へと上がる。子供部屋を覗き込むと、元子は子供たちの枕許に坐っていた。二人ともよく眠っている。

「若先生、来たよ」
加奈美が声をかけると、元子は振り返り、頷く。志保梨の布団を直して、子供部屋を出てきた。
「少しは落ち着いた？」
元子は涙を拭(ぬぐ)って頷く。
「ごめんなさい。すっかり動転しちゃって……」
「無理もないわよ」
元子は深い息をついた。
「二人に何て言って伝えたらいいのかしら」
「そうね……」
「お義母さん、起きたかしら」
うん、と頷いて、加奈美は階段のいちばん上に腰を下ろす。
「あたしから伝えといた。お義母さんもすっかり動転しちゃったみたい。あとで何か言われるかもしれないけど、気にしちゃ駄目よ。あんたも狼狽(ろうばい)してたんだし、お義母さんも狼狽してるんだから。事が事だもの、平穏にはいかないわ。何かとね」
「そうね……」
元子も息を吐いて、加奈美の横に腰を下ろした。

「勇さん、具合が悪かったの？」
「そうなの。でも、うちの人もお義母さんも病院は嫌いだから……。若先生にお願いして来てもらったんだけど、それきり病院に行かないで」
「そう……」
またか、と加奈美は思った。舅の巌の場合と大同小異だ。
「ねえ、加奈美。最近、変な噂があるのを知ってる？」
「うん？」
元子は真剣な顔で声を低めた。
「伝染病が流行ってるって」
「ああ……それ。そうね、そういうふうに言う人もいるわね」
「本当なのかしら。まさか……ねえ。うちの人、お義父さんから移ったんじゃ」
「元子」
「だったら、ひょっとしたら子供たちも」
「元子、大丈夫よ」加奈美は元子の手を握った。「大丈夫だって信じなきゃ。……本当はあたしにも何とも言えない。噂があるのは本当だし、たしかに伝染病だと考えないとおかしいぐらい人が死んでる。でも、伝染病なら気をつければ予防できるわ。ちゃんと気をつけてあげて。そうして、気をつけていれば大丈夫だって信じるの」

「だって、そんな……」

「他に方法はないでしょ？　あんたが不安になって取り乱したら、茂樹くんと志保梨ちゃんが傷つくのよ。だからそう信じて、しっかりやることをやって、子供にも大丈夫だって身をもって示してやらないと」

　そうね、と元子は目を伏せた。少しの間、加奈美の手を握って考え込み、ややあって顔を上げる。

「ねえ……、村で妙なことが続くのって、兼正が越してきてからよね？」

「違うわ」加奈美は言葉に力を込めた。「兼正が越してきたのは、山入の人たちが死んだあとよ。後藤田の秀司さんが死んだあと。だから余所者（よそもの）は関係ないの」

「でも、兼正の人たち、具合が悪いって聞いたわ。なんでも、持病があって」

「それも関係ないわ。あの人たちの病気は移らないの。むしろ、他人から病気を移されやすいのよ」

「でも」

「免疫（めんえき）っていうのかしら。それに異常があるんですって。だから他人の病気が移りやすいし、移ると大変なことになるの。村で伝染病が流行ってるみたいだから、兼正の旦那さんはすごく心配してるみたいよ。向こうのほうが、移されるんじゃないかって怯（おび）えてるの。だから逆なの。違うのよ」

「……そうなの？」
加奈美は頷いた。店に来る客から聞いた話をかいつまんで聞かせた。水口の伊藤郁美が兼正に押しかけた顛末。
「まあ……」
「旦那さんは、かんかんだったみたいよ。郁美さんが奥さんと娘さんを出せって言ったら、村の人には会わせられないって。病気が移ると、おおごとだから」
「そう……」
元子は息を吐いた。ようやく、身内でざわめいていたものが、落ち着いてきたのを感じた。感謝を込め、元子は加奈美の手を握る。加奈美は微笑んで元子の手を叩き立ち上がる。階段を降りていった。
元子はそれを見送り、坐っていた。夫が死んだのだ、という認識が動かし難い事実として胸の中に湧き上がってきた。元子は残されてしまった。だからあれほど、病院に行ってくれと頼んだのに。
「……鬼」
巌が死んで、勇が死んで。本当に巌が勇を引いていったようだ。村に続く死者。伝説の鬼のように、死を広げていく何か。
（……まさかね）

本当に鬼だなんてことはあるまい。

(けれど……)

元子はふと宙を見据えた。村を跳梁している何か。それは村人を容赦なく引いていく。それは村の外からやって来る。樅の林、墓所から。村に侵入し——いつか元子から子供を奪っていくのかもしれない。

2

「また亡くなったの?」

清美はコーヒーを淹れる手を止めて渋面を作った。律子は頷く。

「で、誰?」

「前田勇さんっていう人。下外場の人なんだそうですけど」

「知らないわ。でも、いつだったか、前田って人が亡くなったわよね。先生が看取ってる。その縁続きかしら」

「さあ。……先生も大変ですよね。それでなくても奥さんが大変なのに」

「そうねえ。本音を言うと、他人の往診なんてしてる場合じゃないんだろうけどね。若奥さん、どうだって?」

「変わりはないみたいですよ。なんとか引き延ばしてるってところじゃないですか。すごく難しい顔をしてましたもん」
清美は息を吐いた。
「なにしろ、分かったのが倒れてからだもんね。例の病気にしちゃ、良く保ってるわよ。先生が意地で保たせてるんだろうけど」
「そうですね」
律子が頷いたとき、井崎聡子が入ってきた。
「あら、おはよう」
声をかけた清美に、聡子は「おはようございます」と返して休憩室を見渡す。
「あの……雪ちゃん、来てます？」
「いいえ。どうしたの？」
「雪ちゃん、昨日、お休みだったじゃないですか」
ああ、と律子は頷いた。とりあえず律子らは交代でなんとか二週に一度の休みを取っている。昨日は雪の休みになっていた。
「久々に実家に戻ってくるって、一昨日の夜、出かけたんですけど。ゆうべ、とうとう戻ってこなかったんです。それで実家から直接、出勤することにしたのかなと思ったんですけど」

律子は、清美らと顔を見合わせた。
「まだ来てないわ。連絡も来てないし。でも、ゆうべ戻ってないなら、直接出勤してくるつもりなんでしょ？」
「だと思うんですけど……」
聡子はどことなく不安気で、律子もまた曖昧模糊とした不安を感じないではいられなかった。ミーティングの時間になった。やはり雪は現れなかった。「家に戻って里心がついたのかしらね」と清美は笑ったが、その笑顔は、やはりどこか強張っていた。いよいよ受付開始時間になり、それでも雪の姿は見えなかった。聡子がたまりかねたように、雪の実家に電話をかけた。
聡子の電話に出たのは、雪の母親だった。聡子が雪の所在を問うと、母親のほうが驚いた声を出した。
「あの……雪はそちらに戻りましたけど」
「そんな。戻ってきてないんです。病院にもまだ来てませんし」
「馬鹿な。だって、あの子はゆうべ——ええ、十時過ぎだったかしら。明日も仕事だから帰るって言って家を出たんですよ」
聡子は血の気が引くのを感じた。雪の家から外場までは通勤できる範囲内だ。なのにまだ着いてないなんてことはあり得ない。何かあったのだ、間違いなく。

「雪ちゃん、どうしたって？」
聡子が受話器を置くと同時に、律子が不安そうな顔で聞いてきた。聡子は首を横に振った。自分でも、自分が震えているのが分かった。
「ゆうべ、家を出たって。何かあったんだわ。どうしよう、律子さん」
律子の顔からも血の気が引いていった。その脇で会話を聞いていた清美たちの表情も強張っている。
「まさか事故……？」
「分かりません。とにかく親御さんが心当たりを当たってみるって。それでも見つからなかったら、警察に届けを出すそうです」
「まあ……」
律子は軽く両手で自分の腕を抱いた。とても寒々しく心細い。不安で恐ろしくてたまらない。
そうしているところに、ようやく敏夫が二階から降りてきた。受付開始時間をすでに十五分も過ぎている。
「あ、先生」
聡子が勢い込んで敏夫に駆け寄った。敏夫に事情を告げる。
「そうか」とだけ、敏夫は答えた。

「どうしましょう、先生。もしも雪ちゃんに何かあったんだったら……」
ああ、と敏夫は頷いたが、完全に上の空だった。聡子は鼻白んだ。言葉に窮した聡子を置いて、敏夫は診察室に入っていく。
「そんな……先生、冷たい」
軽く肩を叩かれた。やすよだった。
「まあ、先生も人の子だから。奥さんが危篤と言ってもいいような状態なんだし……」
「でも、雪ちゃんだって、これまでずっと勤めてきたんですよ？　その雪ちゃんが行方不明になったって言うのに、そうか、って。そんな受け答えってありですか？」
「奥さんのことで頭がいっぱいなのよ。そもそも疲れてもいるんだし。聡ちゃんが腹が立つのは分かるけど、そこんとこは大目に見てあげないと」
「……そうですけど」
聡子は釈然としたふうではなかったし、そう言って慰めた、やすよ自身も釈然としていなかった。「冷たい」という聡子の言葉は不当ではない。いくら疲労困憊しているにしても、スタッフが行方不明になったと言うのに、あの対応はないだろう。
「疲れてるんだと思うわ」言ったのは、律子だった。「先生も、もう限界なんだろうと思うもの」
「ええ……そうですね」

った。

聡子は低く言って口を噤んだ。看護婦たちも全員、それ以上の言葉を見つけられなかった。

3

前田勇の訃報は、勤め先であるＪＡにももたらされた。

清水はそれを聞いて、またた、と息の詰まる思いをする。実を言えば清水はこのところ、不信感のようなものに搦め取られて喘いでいた。それは些細な事柄が発する、何かがおかしいという漠然とした不安の積み重ね、違和感の積み重ねによるものだった。

たとえば、と電卓を叩く手を止め、清水は夜の職場を見渡した。外場ＪＡ信用事業部。一見して小さな銀行や信用金庫の支店となんの違いもない。夜も九時になろうかというのに、ぽつぽつと職員が残っているが、閑散とした印象は免れなかった。

村には金融機関の支店がない。存在するのはこのＪＡと、特定郵便局のふたつだけだった。世帯のほとんどは郵便局に口座を持ち、農林業従事者のほとんどがＪＡに口座を持つ。農林組合員はＪＡに口座を持たざるを得ない。しかしながら、実際に使用するには郵便局のほうが何かと便利だ。それで双方に口座を持ち、預金を配分することが当たり前のように行なわれているが、最近になって、それが随所で滞り始めている感触があ

った。

　ある者は、ＪＡの口座に振り込まれる販売事業部からの入金を、いったんそっくり郵便局の口座に移し、融資の返済金や共済掛け金など、口座から引き落とされる必要額を月ごとに入金する。ところがその月々の入金が滞っているのだろう、引き落とせないことがある。どれも小口だが、明らかに増えていた。一切の入出金が止まって凍った口座も少なくない。特に、農協に所属せず口座だけを持つ、準組合員にそれが多かった。

――これ自体は些細なことだ。別段、信用事業に支障をきたすほどのことはない。

　あるいはこういうこともある。ＪＡは信用事業部の営業所だが、共済事業の窓口もここにある。共済事業部の職員は、頻繁に組合員・非組合員の家庭を巡って保険を売るし、場合によっては掛け金の集金もする。ところが、この夏以来、転出者が増えていた。訪ねて行っても人がいない、掛け金の支払いが滞って宙に浮く。事前にも事後にもなんの連絡もない。三名の外交員たちは音を上げている。――これだってやはり、些細なことになるのかもしれなかった。

　職員が減っている。これもまた特筆するほどのことではないのかもしれない。所長が辞めた。他にも辞職した職員がいる。辞職せず、突然出てこなくなった職員が一人。補充はされているものの、今や半数が新規雇用の職員で、仕事の能率は著しく下がっている。おかげで、こんな時間まで清水は残業させられる破目になっていた。

残業が多いだけではない、あちこちに齟齬があって、それをなんとか塗り隠すための煩雑な手間が多い。外場ＪＡは、これらの小さな不具合を外部に悟られることを望んでいない。これが漏れれば外部から煩い介入がある。それを忌避する体質がもともとあって、齟齬がすべて小さなものであるだけに、なんとか内部で処理しようと誰もが躍起になっていた。

そして死。――夏以来、村では死に事が続いている。清水の娘は八月の半ばに死んだ。それ以外にも、どこの誰それが死んだという噂には事欠かない。こんなに人が死ぬものだろうか、という清水の疑問は、残暑の厳しい頃には笑いと同情をもって受け止められた。同僚の誰もが、清水は娘を亡くしたせいで、神経質になっているのだと、そう思っているようだった。だが、本格的に秋になると、同僚からは笑みが消えていった。笑みだけではない、同情の色も。

被害妄想じみている、と清水は自分でも思う。しかしながら、清水はこのところ、自分が孤立している、という感触を抱いていた。十月の初め、模様替えがあった。単に机の配置を変えただけだが、その際、清水の机は壁際の隅のほうに移された。他の職員との接触が減った。お茶を淹れてくれる女事務員は、清水の湯呑みだけを他の湯呑みと分けて扱う。湯沸かし室や洗面所にいつの間にか置かれた消毒薬、清水が何かを手渡そうとしても、相手は手を出してそれを受け取ることを躊躇う。

ちょうどその頃だったと思う。職員の間で、「伝染病」という言葉がやりとりされるようになったのは。近頃では、これに「新種の」という修飾語が付く。そして、それが誰かの口に上ると、職員たちは一様に清水から視線を逸らし、口を噤む。

忌避されている、と清水は感じていた。娘を亡くした。だから清水は汚染されている。おそらくはそう思われているのだろうと感じる。

こまごまとした違和感の蓄積、ごく小さな不快感、齟齬、奇妙な印象を与える出来事。それらは積み重なり、清水と、彼を取り巻く人と世界の間に、目に見えない障壁を築いていた。外界に裏切られ、疎外され、拒まれている感じ。何もかもが信用できない。所属しているという安堵感を剝奪され、清水は寄る辺を失っている。

（だが……なぜ？）

清水は娘を失っただけだ。高校一年にしかならない娘が突然に奪い去られ、家の中には空洞ができた。清水は自分を被害者だと思っている。悲劇と災厄に魅入られたのは自分だと。にもかかわらず、周囲は清水を加害者のように扱う。なぜ、娘を失ったうえ、こんな扱いを受けなければならないのか。

この夏、何かが狂った。清水はそう思わずにいられなかった。この村はどこかおかしい。伝染病だと言う声もあったが、清水はそれを信じていなかった。娘が伝染病で死んだのなら、どうして清水は無事なのだろう。妻も父親も無事だ。なんの不具合もない。

医者だって何も言ってこない。

同時に、伝染病だとしか言いようのない事態は理解している。たしかに死が続きすぎる。娘を実際に失っているために、死の連続に対して清水が抱いている危機感は、周囲の人間よりもずっと深かった。連続する突然死、それは拡大しているように見える。このままで行けば、村は死滅するのではないのか。

夏以来、村はおかしい。

(兼正……)

そう、あの屋敷に転入者が来て以来。夜中に越してきた転入者、異常な家、恵は死の前、兼正に向かう坂を登っていった。

清水は自分の疑惑に理が無いことを承知していた。にもかかわらず、日に日にそれは膨れ上がり、確信へと成長していく。

自分に降りかかっている苦痛、すべては兼正の連中に所以(ゆえん)がある。転入者のせいで自分が苦況に置かれているという感触から、どうしても抜け出すことができなかった。

4

田中良和の葬儀に列席した人々は、一様に「妙な葬式だ」と言い、あるいはそう言い

たげな表情を露わにした。喪主の席に坐った佐知子は、その視線に苛立たざるを得なかった。子供たちは依然として佐知子に対して屈託がある様子で、それもまた佐知子を苛立たせた。

速見が言っていたように、夫を納めた棺は釘を打たれると斎場の床に沈み、そして別の戸口から運び出された。そういう外連味の強い演出も不快なら、陽の落ちた道を歩き、滅多に訪ねることのない墓所に登るのも、また不快だった。

参列者の好奇の目から解放され、佐知子は家に戻って息をつく。酷い目に遭った、という気がした。けれども、これは始まりで、終わりではない。これから佐知子は二人の子供を――反抗的な子供を抱えて生きていかなければならないのだ。佐知子の実家は村内にあったが、今はもう家族はいない。年老いた母がいたけれども、都会に行った兄夫婦が手許に呼び寄せていた。家にいるのは遠縁の家族で頼りにできるはずもないし、仕事だ何だと言ってそそくさと佐知子を残して帰っていった兄夫婦のことを思えば、兄夫婦を頼りにできるはずがないことは明らかだった。母親だけは心配するように佐知子を見ていたが、兄に引っぱられて帰っていった。母親も佐知子を助けてはくれないだろう。兄夫婦から小遣いをもらい年金で暮らしている有様だから、金銭的にもあてにならなかった。孤立が胸に滲みた。佐知子はそれが、夫の裏切りのように思えてならなかった。

かおりは母親が荒れた様子で寝に行くのを見送った。

（お父さんは、ずっと具合が悪いって言ってたのに）
最後の最後まで労られることのなかった父親が可哀想だ。父親がひどく理不尽な扱いを受けたような気がしてならなかったけれども、実を言えば、それは父親の死因にひとつの疑問がまとわりついているからなのかもしれない。
（……恵の声）
間違いなく、恵の声だった。恵は父親の死を宣告した。それで様子を見に行ってみると、本当に父親は死んでいて――。
かおりは茶の間に坐って、身体を震わせた。部屋に戻るのが怖かった。昨夜は親戚と一緒に斎場に泊まったから、怖いことを忘れていられた。けれども、今夜はもう一人だ。
（昭の部屋に泊めてもらおう）
そう思い、部屋を訪ねると、昭は例によって布団の上でぼんやりしている。
「ねえ、昭、こっちに寝ていい？」
訊くと頷く。それでかおりは、昭の布団の脇に自分の夜具を運んできて並べた。寝支度をして、そこに潜り込んだところで、ようやく昭が口を開いた。
「なあ、かおり。これからどうする？」
「どうする、って。何が？」
「あいつら」

かおりは震えた。
「どうしようもないじゃない。あたしたちには、どうにもできないもん。結城さんも、もういないし……」
「でも、恵が父ちゃんを殺したんだ」
「やめてよ」かおりは布団の上に起きあがる。「そういう言い方、しないで」
「本当のことだろ。恵がやったんだ。きっとおれたちが余計なことに気づいたから。兄ちゃんが襲われたみたいに、父ちゃんが襲われたんだ。このまま放っておくのかよ」
「そうするしかないじゃない。触っちゃいけなかったんだよ。余計なことをしたから結城さんもお父さんも」
　かおりは、言葉に詰まった。「死んだ」とか「殺された」とか、そういう単語は口にしたくもなかった。
「あたしたち、まだ子供なんだもの。何もできないんだから、しょうがないじゃない」
　昭は、かおりをねめつけた。
「でも、大人は誰も分かってないんじゃないか。おれたちがどうにかしなかったら、どうにもなるはずがないだろ」
「だって」
「兄ちゃん殺されて、父ちゃん殺されて、それでこのままほっとくのかよ」

昭を捕らえていたのは怒りだった。誰も何が重要なのか分かってない。重要なことほど理解してくれないのが大人だ。
「なんとかしなきゃ、どんどん人が襲われていくんだ」
「じゃあ、あんた一人で結城さんのお墓に行けばいいんだわ。結城さんに杭を打てばいいのよ！」
かおりは叫んで、布団の中に潜り込んだ。昭は硬直した。
「そんなこと……」
できるはずがないじゃないか、という言葉を、昭は呑み込んだ。そう、夏野だって起き上がるかもしれないのだ。そうして犠牲者を襲っていくのかも。
（まさか）
昭は反射的に思ったが、夏野が起き上がるはずがない、という台詞にも、夏野が人を襲うなんてことをするはずがない、という台詞にも、意味がないことは明らかだった。夏野なら、やるべきだと言ったのじゃないか、という気が、昭にはした。昭は夏野を深く知るわけではないが、何が重要なのか、夏野はちゃんと分かっていた、という気がしていた。何が大事なことなのか心得ていて、怖じ気づいたり迷ったりせずに行動できる。昭がいつも、不甲斐なく直前で引き返すのとは違って。
——そう、夏野は本橋鶴子にも杭を打とうとしていた。水際で食い止めなければなら

ない、と言っていた。ここに夏野がいれば、夏野にも杭を打つべきだと言っただろう。いや、それとももう遅いだろうか。夏野が埋葬されたのは日曜日のことだ。もう二日が経っている。

(兄ちゃんだって、そうしてくれって思ってる……)

夏野なら、起き上がることを望んでなんかいないはずだ。恵のような化け物になって、犠牲者を襲うことなんか望んでない。

それを防ぐためには、夏野の墓を暴くしかない。暴いて、棺を掘り出して、杭を打つ。

昭の脳裏に、いつか恵の——そして本橋鶴子の墓を暴いていたときのことが甦った。自分一人で、あれだけの作業ができるだろうか。墓まで行って逃げ帰ってくるのがせいぜいなのじゃないだろうか。もう同行してくれる夏野はいないのだから。

(こないだみたいに、また変な奴が現れたら……?)

本橋鶴子の墓で襲われたとき、昭は動くことができなかった。かおりが危ないと思ったのに。

たとえ、誰も現れなくても。なんとか勇気を鼓舞して墓を掘り起こし、棺を開けることができたとしても、夏野に——自分の知り合いに杭を打つなんてことは、どう考えても、できそうになかった。

夏野は昭より、何倍も剛胆に見えた。けれどもその夏野でさえ、墓で襲われた翌日に

会ったときに「怖い」と言っていた。

このことだったんだ、と昭は思った。自分が他人に、あるいは知り合いに杭を打つこと。そうやって、相手を損なうこと。夏野に対してそれはできない。——ましてや父親に対しても。

そう、夏野に起き上がる可能性があるように、もちろん父親にだって起き上がる可能性はあるのだ。今日の夕刻、すでに真っ暗になった中で、埋葬された父親。今なら、まだ間に合う。たとえ夏野がすでに起き上がっていたとしても、父親ならば、まだ。

昭は身を竦めた。

そんなことが、できるはずがない。

(でも、だったら、どうしたらいいんだよ、おれたち)

5

光男は座敷の掃除をしていて、短いブザー音を聞いた。あれは信明が人を呼んでいる音だ、と慌てて離れへと駆けつける。

「御院、どうしました」

病床の住職は、光男に頷き、枕許の棚を示した。そこには白い封筒が一通、載せられ

ている。
「これを、出しといて、くれんかね」
一句一句、区切るように言われ、光男は頷く。きちんと封をした封書を取り上げた。表書きはない。手紙はワープロを使えば書けるが、表書きまでは信明の手には余るのだ。
「どちらにお出ししときますか」
光男が訊くと、信明は兼正、と答えた。
「ああ、はいはい」
光男は了解して頷いたが、信明は違う、というように手を振る。
「兼正の、屋敷のほうだ」
「屋敷のほう?」
「何と、いったか。越してきたほうだ」
光男は首を傾げた。それは兼正の跡地に越してきた、あの転入者のことを言っているのだろうか。
「桐敷さんですか? 溝辺の兼正じゃなく?」
信明は頷く。光男は「なんでまた」と、思わず口にしたが、信明は答えなかった。
「頼むよ、光男くん」
はあ、と光男は呟いた。何度も首をひねりながら寺務所に戻り、表書きをした。主人

は桐敷正志郎と言ったか。とりあえずそれを投函に行き、戻ると法事から静信が戻っていた。

「ああ、おかえりなさい。ねえ、若御院」光男は手紙の件を静信に報告した。「一体、何の御用なんでしょうね」

静信は首を傾げた。兼正ならともかく、桐敷家に信明が手紙を出す理由が思いつかなかった。静信はついでの用の際、信明にこれを尋ねてみた。信明は「単なる挨拶状だ」と、答えた。

「挨拶——ですか？」

信明は頷く。それ以上は何も言わなかった。単なる挨拶状とも思えない。そもそもそんなものを出す必要はないし、単なる挨拶状にしては、信明の様子がどこか重々しく、気になった。

離れから寺務所へと戻りかけ、静信はまさか、と思う。信明はひょっとしたら事態を把握しているのだろうか。そう言えば、安森徳次郎の見舞いに行ったとき、妙に何かを得心した様子だった。一昨日、徳次郎の訃報を伝えたときにも様子がおかしかった。必要以上に淡々としているように思われたのだ。ひょっとしたら信明は、見舞いに行くと言った時点で、徳次郎の余命がつきていることを理解していたのかもしれない、だから別れを告げに行ったのかも、とその時にも思ったが、本当に信明は事態の一切を了解し

ているのかもしれない。桐敷家がすべての元凶だと気づいている、ということはあるだろうか。そして静信が何ひとつできないでいるのに苛立ち、自ら何らかの手を打つ気になったということは？

（まさか……）

静信は苦笑して首を振った。いくら何でも、病床に寝たきりの信明がこの異常な真相に気づくということはないだろう。分かっているのではないか、だから行動を起こしたのではないかと疑うのは、間違いなく静信が何もしていない自分に自己嫌悪を感じているからだ。誰かに責められ糾弾される気がする。そうされそうな後ろめたさがある。

だが、手の不自由な信明が、わざわざ手紙を書いた以上、それが単なる挨拶状でないことは想像がついた。真相に気づいていてもいなくても、信明には何か目的があって、桐敷家にわざわざ手紙を書く気になったのだ。

病床の父親でさえ、何かをする気になっている。そして苦労して手紙を書いた。にもかかわらず、静信は寺に逃げ込んで自分の処し方を決めかねている。そういう自分が不甲斐なく許せないのに、どうすればいいのか分からない。屍鬼が「いなくなる」ことは望むところだが、それは「いなくする」ことと決して同義ではなかった。

静信は鬱々として聖堂に向かった。昼間のこの時間では、誰がいるはずもないことは分かっていた。たとえ夜であっても、もう静信以外の者がここを訪れることはないだろ

う。静信は、ぼんやりとベンチに身体を預け、横になる。
天井は高く、空疎だった。そこに何を思い描こうとしても、それは有意義な形を得ることができなかった。
(ぼくは何者なのだろう)
そして、荒野に放逐された彼は?
丘は楽園だったのか、それともそもそも流刑地だったのだろうか。彼は無辜の民だったのか、それとももとより罪人だったのか。彼は何を思い、弟を殺傷したのか。
その惨劇の日、果たして自分に何が起こったのだろう、と彼は思わざるを得ない。
それは豊穣の秋、美しいよく晴れた日のことで、この頃、丘に住む者たちはその年の実りを感謝し、神への献げ物を携えて神殿に向かうことになっていた。彼もまた、弟とともに神殿に向かうことになったのだった。
よく肥えた羊の初子が一頭、それが慣習によって定められた献げ物だった。彼はその日弟に声をかけ、羊の中からそれを譲ってもらおうとしたが、少しの間、考えてやめた。
羊を飼うのは弟の生業であって、彼の生業ではなかった。彼は地を耕し、そこに穀物の種を播いて生きている。種を根づかせ、穀物を育てるのは大地の恵み、そうやって得た収穫こそが、神が彼に施してくれる恩寵だった。

弟に羊を譲ってもらい、それを捧げるのも違うし、自分が育てた穀物でもって羊を購うのも違うと思えた。彼は神の恩寵によって生きている。だからこそ、その恩寵に報いるのには、彼自身が神との関係において得た最善のものでなければならないと彼は判断した。

神によって恵まれ、神の介助によって得た彼の糧。それを感謝をもって神に返そうと彼は決意し、初子一頭ぶんに相当するよりもなお多い穀物の袋を用意した。

弟は最初、彼が羊を連れるのではなく、穀物の袋を抱えているのを見て不思議そうにしたが、彼が意図を語ると、目を細めて頷いた。それで彼は弟と、献げ物を持って街に向かったのだった。

だがしかし、神殿の賢者は眉を顰めた。

供物は羊の初子と定められている。

彼は彼の判断について申し述べたが、賢者はそれを理解しなかった。弟が口添えした。兄は兄の信仰において、最善のものを神に献じようとしている。信仰とは神と兄の間に交わされる神聖な契約であって、兄と神殿の間に交わされるものではあるまい。神殿の取り決めはひとつの目安であり、兄の用意したものは羊よりも高価だ。

賢者は弟の理性を褒め、彼と弟の献げ物を持って神殿に入った。塔の頂上の祭壇には、ふたつの供物が並べられた。

そして彼の供物は振り返られなかった。賢者は徐に、神が彼の判断を喜ばなかったことを伝えた。

神との契約は信仰の証の羊が一頭、何故それを惜しむのだ。

惜しんだわけではない。むしろ羊一頭に相当するよりも多くを彼は捧げた。彼は訴えたが、彼の真意は理解されなかった。

彼はうなだれて神殿を出た。

神はなぜ、彼の真意と信仰を拒むのか。

途中、店先を覗き、新しい鋤を求めたが、これは単に彼の鋤が傷んでいるせいに他ならず、少なくとも代価を支払った時点で、彼は特に凶器を求めたつもりはなかった。

真新しい鋤を杖突くようにして街道を歩いた。彼はその間、ずっと黙して、彼と周囲との不調和について考えていた。神さえ彼の心情を理解してはくれない。ならば他の誰が彼を理解できるだろう。それほどまでに彼の言動は周囲の理解を拒む。救い難く隔絶している。

鬱々と森を抜け、緑野に出た。彼の愛してやまないその緑の地を見たとたん、意味のない衝動が押し寄せた。

彼は叫びたかった。——何を、なのか彼自身にも分からなかった。叫ぶ言葉を持たなかったので、代わりに鋤を振り上げた。

そして弟をめがけて振り下ろしたのだ。
弟は彼を振り返った。振り返って立ち止まり、一瞬、目を瞠(みは)って彼を見つめた。そうして緑野に倒れ込んでいった。彼は自分の行動に驚愕(きょうがく)し、一瞬のうちに自分の罪を悟り、自分に下される罰について考えた。殺人者と呼ばれ、彼はこの地を追放される。二度と緑野には戻れず、秩序の中に彼の居場所を得る方法は永遠に失われる。そもそも弟がいなければ、この世界のどこにも彼の居場所はなかった。
彼は絶望に視野を閉ざされて呻(うめ)いた。呻いて弟に駆け寄り、二度三度と鋤を打ち下ろした。弟はまったく動かなくなった。
串(くし)刺した鋤を抜き取り、投げ捨て、彼は弟の骸(むくろ)の側(そば)に膝(ひざ)をついた。弟の命を取り戻そうと身体に縋(すが)り、抱き上げたが、弟はすでに絶息していた。彼は号泣し、泣きながらその骸を野辺に隠した。そうして返り血もそのまま、一人で家に戻ったのだった。
振り返れば——彼は弟の死を受け入れたくなかったのだ。だから弟を野辺に隠した。骸を遠ざけることで、弟の死をも遠ざけようとした。彼はその夜、半ば本気で弟の帰りを待ち、翌日訪ねてきた隣人に、弟が戻ってこないと訴えることさえした。
実際、彼は夜を徹して、弟の帰宅を待っていた。生きた、温かい弟が扉を開いて家の中に戻ってくるのを待っていたが、もちろん、弟は戻ってこなかった。彼はそういう形で自分の罪がなかったことになることを望んだが、彼の罪がなかったことになることは、

当然のようになかった。

三日目、神殿の賢者が噂を聞いて訪ねてきた。彼は弟を捜してくれ、と半ば本気で求めた。隣人たちが賢者の指揮で緑野に散り、そして弟の骸を見つけた。

聖堂からの帰り道、静信は墓場の中を突っ切っていて、真新しい墓の前に花が供えられているのに気づいた。それ自体は決して珍しいことではない。村では墓参よりも、位牌供養のほうを大事にするが、墓参もまったくしないというわけではなかった。盆や彼岸の節目には墓参し、供養のために板卒塔婆を立てる。気を引いたのは、今がそういう節目ではないせい、そして供えられた花束が、そのへんの野山から摘んできた野菊や葛や女郎花で作られていたからだった。

まるで子供がそうするように、野山から摘んできた花が単に束ねただけで角卒塔婆の根元に置かれていた。どの花もう萎れていて、さらにその脇には昨日のものだろう、枯れた花が横たわっている。

つましい花を持って日参している者がいるのだ、と思った。誰の墓だろう、と静信は卒塔婆を見た。卒塔婆には静信自身の字で、結城夏野と書かれていた。

6

大川は店の前に立って、商店街のほうを一瞥した。頼りない雨が降っていて、景色はいかにもしけたふうだった。公民館の少し先に見える後藤田衣料品店は閉まっている。先日、妻が後藤田久美と会って、その時に店を親戚に譲って久美は娘と村を出て行くと言っていたらしいが、その言の通り、その夜のうちにトラックが来て引越していったらしかった。

それ自体は些細なことなのかもしれない。だが、大川はそういったことの一切が気に入らなかった。後藤田響子が再婚すると言う。久美がそれについていくと言う。めでたいことだろうが、大川の気に喰わなかった。そういう場合にも、久美だけは村に残るべきだったし、残される母親のことを思って響子は再婚を諦めるなり相手を説得して同居するなりすべきだった。それが外場のルールだったはずだ。これまで村は、そんなふうに動いてきた。なのに最近、そのルールが少しも守られない。極めて無頓着に破られていく。大川はなぜだか、それが自分に対する侮辱のように思えてならなかった。

世の中には「かくあるべき姿」というものがあると思う。これまで——確実にどこか

の時点まで、村はそれに従って動いてきた。それが頻々と覆されるようになり、今ではルールに従って動いているものなど何ひとつない、と言ってもいい。

後藤田母娘は、親戚と称する見ず知らずの女に店を譲って夜中に村を出て行った。同じようにして夜中に出て行き、以来閉まったままの店が他にも四軒あり、また、後藤田の場合と同様に店を譲って出て行った家が一軒ある。荒物屋の富幸は村を出、あとにはやはり親戚と称する見ず知らずの夫婦者が入ってきた。だが、この二人は家に閉じ籠もったまま、周囲に挨拶をするでもない。店も基本的に閉めたままだ。時折、気まぐれのように店を開ける。それも夕刻を過ぎた頃になって。

八月の終わり、駐在の高見は死んで、後任の佐々木という警官がやって来た。だが、この佐々木も姿を見ることは滅多にない。夜間に時折、駐在所の中に坐っているのを見るが、普段は何をしているのか、まったく動向が知れなかった。九月の頭には郵便局の大沢が引越した。しばらくは長田が局長を代行し、九月の半ばには本局の斡旋で新しい局長が来たが、これもすぐに姿が見えなくなった。長田は再び局長を代行し、自分が局を引き継ぐかどうかを思案している。

九月には従業員の松村の娘が死んだ。以来、松村は仕事を休みがちだ。もともと覇気というものを持ち合わせず、小心で真面目なのだけが取り柄だったような男が、無断で仕事を休む。うかつなミスも絶えず、大川は始終、松村を怒鳴り散らしている。以前な

らそれで大川に怯え、少しは改まったものが、娘を失って以来、松村は大川の機嫌に無頓着だ。いくら怒鳴っても聞いているのかいないのか、頷くばかりで一向に行状は改まらない。どこか捨て鉢になった風情だった。出入りの業者は頻繁に顔ぶれが変わる。そのたびに取り決めてあった段取りが狂い、大川を苛立たせる。——そういう何もかもが大川は気に入らなかった。

村はあるべき状態にない。どこかで歯車が狂ったまま、それが修正される様子もなかった。それどころか、日に日に軋みは大きくなる。ルールの一切が踏みにじられていく。

「まったく……どうなってるんだ」

大川は呟いて、店に戻った。カウンターに伝票が置いてあるのを見て顔を歪める。配達の伝票だ。ついさっき、篤に行け、と声をかけたのに、まだ出かけていないのだろうか。

「おい！　篤！」

大川は二階に向かって怒鳴る。いつもならうっそりと姿を見せるはずの息子が、いくら呼んでも現れない。まさか伝票を持たずに配達に行ってしまったのだろうか。怪訝に思いながら二階に上がると、息子はまだ部屋にいて、だらしなく横になっていた。

「篤！　配達だって言っててんだろうが！」

大川が部屋の入口で怒鳴ると、篤は目を上げたが、そこにはあるべきものがなかった。大川に対する恨みがましい目、ふてくされた——けれども、どこか怯え、屈服した表情

が。
息子は無感動な目を大川に向け、億劫そうに寝返りを打った。大川は篤にそうやって無視されることに慣れていなかった。
「手前、何をだらだらしてやがんだ。配達だって言ってるのが聞こえねえのか」
大川は篤の背中を蹴る。篤は身を丸めたものの、やはり無反応だった。カッと頭に血が昇る。大川が怒鳴れば従う。それが家族のルールだったはずだ。罵声を上げて篤を引きずり起こそうとしたとき、娘の瑞恵が顔を出した。
「お父さん、お兄ちゃんは具合が悪いんだよ」
大川は振り返った。学校から帰ってきたばかりらしく、制服のままの娘は大川を宥めるように微笑む。
「朝も具合が悪かったの。風邪なんじゃないかな。寝かせといてあげてよ。配達ならあたしと豊が手伝うから」
大川は呻いて篤を一瞥した。
「どうせ仮病に決まってる。——おい、篤、おれにはお見通しなんだからな」
篤の返答はない。丸くなるようにして大川に背を向けたままだった。その陽に灼けた首筋に季節はずれの虫さされの痕があることに、大川は気づかなかった。もちろん、自分が出て行ったあとに、息子が小さく「今に見てろ」とひっそり呟いたのにも。

十二章

I

敏夫は往診から戻り、とりあえず母屋に顔を出して遅い夕飯を掻き込んだ。母屋では、すでに寝支度をした母親が、複雑な表情で待っていた。

「おかえり」と、言う孝江に生返事をし、とにかく食事に取りかかる。食欲はなかったが、せめて何か詰め込まないことには、身体が保たない。

「また今夜も、恭子さんについてるの？」

ああ、と敏夫は頷いた。

「恭子さん、どうなの？」

さあ、とだけ敏夫は答えた。

「実家に連絡をしないでいいの？　嫌ですよ、あとになってあちらの家族からつべこべ言われるのは」

「まだそういう段階じゃない」

「でも」

敏夫はじっとテーブルの天板を見つめた。実際のところ、恭子の死後、すでに丸四日以上が経過している。

いくら死亡診断書を敏夫が書くにせよ、いくら大量の氷を使って死体現象を遅らせているにせよ、もう限界が近づいている。——いや、すでに限界を超えているのではないか、という気が敏夫にもした。そろそろ決断をしなければならない。

敏夫は甦生(そせい)してほしい、と切実に願う反面、どこかで恭子が甦生するはずなどないと思っている気がしてならなかった。やはり心の奥深いところで「起き上がり」などというものを信じ切れていないのかもしれなかったし、あるいはそうも好都合なことが起こるはずがない、と思っているのかもしれなかった。

(普通なら、とっくに埋葬されている……)

屍鬼の存在が知られていないのは、そもそも火葬の風習のせいで屍鬼が多くないせいだろう、という自分の推測を、敏夫は信じている。つまりは、ごく普通に通夜(つや)が行なわれ葬儀が行なわれるまでの間に、甦生することはあり得ない、ということだ。死亡の翌日が通夜で、さらにその翌日が葬儀という例は珍しくないし、友引に引っかかればさらに一日以上の日延べがされるのが普通だ。荼毘(だび)に附されるのが死後七十二時間以上経(た)ってから、という例は決して少なくない。ということは、死後七十二時間程度で甦生することは、滅多にないと見てもいいのではないだろうか。逆に言うなら、最低でも丸三日、

七十二時間以上は待ってみなければ意味がないということだ。だが、その七十二時間はすでに過ぎている。もう望みはない、と思いつつずるずると丸四日が過ぎ、五日目に入ろうとしていた。

(今夜一晩だ。朝まで待って、それでなんの兆候もなければ、諦める……)

敏夫はそう、自分に言い聞かせた。それ以上はどう考えても危険だろう。さしもの敏夫も、死体を抱えている、というプレッシャーにそれ以上は耐えられそうになかった。

(そう……この調子で、もう一日は無理だ)

このところ診療時間中も、ほとんど上の空だった。看護婦の姿が見えなくなるたび、まさか回復室に行ってはいないだろうかと気にかかり、あるいは何かの手違いで、取り返しがつかないほど死体現象が進んでしまうのではないかという危惧がどうしても念頭から離れなかった。

敏夫は、わずかに苦笑する。

(意外に、おれは犯罪者には向いてないのかもしれないな……)

踏ん切りをつけて顔を上げると、不安そうな顔をした孝江と視線が合った。

「お前、大丈夫なの？」

孝江は息子の顔を覗き込んだ。寝不足のせいだろう、充血した目は熱でもあるように濁って潤み、目の下には隈が浮いている。息子は疲労困憊しているように見えた。

「誰か看護婦に手伝ってもらったらどう？　そうでなきゃ、国立に運ぶとか」
いや、と敏夫は呟く。
「……たぶん、今夜が峠になるだろう。明日には向こうの両親に連絡することになるかもしれない」

夕飯が済むや否や、敏夫は手術室に駆けつけた。ナースステーションには鍵がない。回復室の廊下側に面したドアには内鍵があるが、ナースステーションに通じるドアにも、やはり鍵がなかった。ちょっと恭子の様子を見てみようと思い立てば、誰でもナースステーションを通って回復室に入ることができる。死体を放置しておくのには、あまりに不安で、ナースステーションのほうも廊下に面したドアの内側、目立たないところに間に合わせの掛けがねをつけて内側から閉め切ってあった。ナースステーションには手術室からも出入りができたが、手術室——その前室——には鍵をかけられる。とは言え、合い鍵は事務室に常備されているから、これは自分の不安を宥めるための、ほんの気休めにすぎない。
二階に駆け上がり、前室の鍵を開けた。ほんの一呼吸、開くことを躊躇う。恭子の死体が横たわる回復室から、このドアの中までは、鍵というものは存在しないことを意識しないではいられなかった。

（馬鹿気(ばかげ)てる……）
もしもこのドアを開けた向こうに、誰かがいるとすれば、それは恭子だ。もしも恭子が起き上がったのなら、なにもこのドアの向こうに潜んでいる必要はない。内側から回復室のドアを開けて、廊下に直接出ることができるのだし、そこからどこへなりとも自由に行ける。だからこれは単なる怯(おび)えにすぎないのだが、それを分かっていても、扉を開くのには軽い抵抗があった。
自在扉を押すと、軽く軋(きし)んで内側に開く。がらんとした小部屋が冷え冷えと沈黙していた。これが前室、右手には手術室に向かう扉があり、奥には滅菌洗浄室に向かうドアがある。扉を押し開いた敏夫の肩越し、廊下から射(さ)し込む光で、狭い室内は薄暗いとは言え、見渡すことができる。もちろん、誰の姿も気配もない。明かりを点(つ)けても、やはり誰の姿もなかった。付属のシャワー室のカーテンは開いている。誰が隠れる物陰も、ここには存在しない。
前室を横切り、洗浄室に入る。照明のスイッチはドアのすぐ左手にある。薄暗い室内には流しや器具戸棚、既消毒ハッチやオートクレーブなど、物陰には事欠かないが、もちろんそこにだって誰がいるはずもない。洗浄室を抜け、ナースステーションに続くドアの前に立った。ほんの少し中の物音を窺(うかが)い、なんの気配もないことを確認しないではいられなかった。敏夫にも、自分が恭子の甦生をあり得ることだと信じているのか、そ

れともあり得ないことだと信じているのか、よく分からなかった。
思い切ってドアを開ける。ナースステーションの明かりを点けると、無人の室内が目に入った。もちろんやはり、誰もいない。
軽く息を吐いた。敏夫にはそれが安堵の息のようでもあり、同時に落胆の息でもあるような気がした。壁の時計に目をやる。日付が変わろうとしている。
（明日の朝までだ……）
自分に言い聞かせ、回復室に向かう。ドアを開けると、暗い回復室の中に横たわる人影が見えた。敏夫の妻だった女の死体だ。廊下からの明かりは、衝立で遮られており、ナースステーションからの光は、敏夫自身の影で遮られている。枕許のモニターは壁を照らし、だから恭子の姿は影にしか見えない。明かりを点けるまでのほんの一瞬、腐敗し巨人様に膨らんだ死体の顔を思い浮かべた。そうなっていたら、敏夫に退路はない。不安が見せる埒もない夢想だ。
回復室の明かりを点けると、枕辺に近寄るまでもなくガーゼをかけられた恭子の顔がはっきりと見えた。敏夫は枕許に近づき、ガーゼを取って息を吐く。少なくともさほどに酷いことにはなっていないように思われた。
体温は十度以下になるように気をつけている。それが良かったのか、四日が過ぎたにもかかわらず、まだ皮膚に腐敗網は現れていなかった。腹部の膨満もほとんどない。念

のため、腹腔にドレナージチューブを留置して、腐敗性浸出液とガスを排除できるようにしてあったが、さほどの排出はない。乾燥を防ぐために、効果のほどは疑問だがとりあえず生理食塩水を注射し、湿らせたガーゼで顔を覆っていた。そのせいか、皮膚の革皮様化も最低限に抑えられているようだった。とりあえずこれなら、まだ誤魔化せるだろう。

敏夫は改めて安堵の息をつき、枕許に寄ってバイタルサインをチェックした。心拍も呼吸も停止したまま。次いで床にのたうっているグラフ用紙を拾い上げた。脳波計から吐き出されたグラフには平坦な線が並んでいる。こんなものか、と苦笑しながらグラフを辿った。敏夫はふと、紙をたぐる手を止めた。

思わず、グラフと恭子を見比べた。ごく微細な波がほんの一瞬、現れている。さらにグラフを辿ると、そこにもまたひとつ。敏夫が往診に出かけ、遅い夕食を摂っている間に、たったの三回だけ、その揺れは現れていた。本当にごく微かな波だ。機械のせいだろうかと思った。それは甦生の兆候だと考えるにはあまりにも微細でありすぎる。

どう受け止めていいのか分からず、何度もグラフと恭子とを見比べているうちに、グラフが目の前で小さな波を描いた。それきりまた平坦な直線に戻る。

まじまじと死体を見下ろした。軽く頸部に触れてみるが、肌はすっかり冷えている。もちろん脈拍はない。心臓も完全に停止している。呼吸もしてない。血圧もゼロ。瞳孔

反射を確認しようとして、瞼に手をかけた。氷のせいで芯から冷えた肌に触れ、瞼を持ち上げて敏夫は身を硬くする。ペンライトを持つ手が震えた。光を入れてみても瞳孔反射はない。それが混濁した角膜越しに見て取れた。――そう、角膜が澄んできている。夕刻に見たときにはたしかに、完全に白濁していたのに。

敏夫は軽く息を呑んだ。死後約四十八時間で、角膜は完全に混濁し、瞳孔が見通せなくなる。低温状態にあれば若干、混濁が遅れることはあるようだが、いったん混濁していたものが再び澄む、ということがあるだろうか。

敏夫は恭子の顔を覗き込んだ。脳波計の針がまた動く音がした。その音のせいか、恭子の容貌は、どこか穏やかすぎるように見えた。蠟のような色艶をしていた肌が、妙に自然な艶を取り戻しているように見える。

「まさか……」

恐る恐る布団を剝ぐ。身体を固定してあるベルトを外す。軽く腕を持ち上げてみた。硬直は完全に解けている。死後硬直が完全に緩解するのは三日から四日程度のことだが、恭子の死体は低温に保ってある。これほど早く硬直が解けるはずがなかった。腕の下に現れた死斑も、薄くなっているように思われる。もともと死斑は薄かったが、これほどまでに薄かっただろうか。思い悩む敏夫の脇で、また脳波計の針が動いた。

何度も深く息をし、動脈に留置したカテーテルから採血する。血液は暗紅色を呈して

いるが、光に透かしてみると、糸のように鮮紅色の液体が混じっていた。顕微鏡にかけると赤血球は完全に融解しているが、鮮紅色の部分には小さな赤い顆粒（かりゅう）が見える。
敏夫は改めて妻を見下ろした。
この死体は完全に死んではいない。死んでないだけでなく、極めてゆっくりと――物体としては迅速に――腐敗とは別種の変化が進行している。
敏夫は恭子に屈（かが）み込み、じっとその容貌を見つめ、そして両手でその頬を包み込んだ。少しの間、額を彼女に押し当てていた。

明け方が近づいた頃から、脳波が頻繁に波を描き始めた。ごく微細な波形が連なっては途絶え、それはもう直線には見えなくなった。同時に硬直は完全に解け、死斑は明らかに消退していく。肌が透明感を取り戻し、角膜も白濁が取れていった。それでもまだ、脈拍はない。呼吸も完全に停止している。血圧も依然としてゼロ、恭子は間違いなく死体のままだった。
瞳孔反射が現れたのは、あたりが白んでからだった。ほんのわずかだが、明らかに光を入れると瞳孔が縮小する。暁光（ぎょうこう）が訪れ、朝陽が射し込み始めた頃、敏夫は恭子の肌が血色を取り戻したように感じた。依然としてバイタルサインにはなんの変化も起こらない。

異常を感じたのは、午前七時になろうかという頃だった。頬が血色を取り戻したように見えた。それが徐々に赤い色を濃くし、そして明らかに異常な赤味を呈し始めた。よく観察しようと回復室のブラインドを上げたときだった。目の前で見るみるうちに水疱が現れた。額から頬にかけて、光の当たるほうがより濃く紅斑を呈し、そこに小さな水疱が生じて広がっていく。見守るうちに、そのうちのいくつかが弾けて表皮がめくれ、真皮が露呈した。陽射しのせいか、と敏夫はようやく悟った。

恭子はなんの反応も見せない。呻き声を上げるでもなく、身動きをするでもなかった。にもかかわらず、白い顔がフィルムを早送りするように赤らみ膨張し、水疱に覆われて弾けていく。ほとんど数分の間に見るも無惨な有様になり、さらには弾けてめくれた表皮が黒ずみ始めた。――炭化しようとしているのだ。

敏夫は慌ててブラインドを下げる。それでも進行を止められず、狼狽えてストレッチャーを取りに行った。恭子の身体をベッドから移し、回復室から手術室へと運ぶ。前室にも手術室にも窓はない。完全に遮光された室内に運び込むと、それでようやく異常な反応が止まった。

「これが、屍鬼か」

敏夫はひとりごちる。だから連中は夜に跋扈するのだ。では――と、敏夫は唇を噛んだ。桐敷正志郎も辰巳も屍鬼ではない。ホラー映画に見る吸血鬼には得てして人間の下

僕がいる。おそらくは、それに類する者なのだろう。実際のところ、敏夫らは完全に正志郎に謀(はか)られたのだ。夜にしか姿を現さない、それは故意に演出されたものだった。
一敗を喫したが、敏夫には逆転のチャンスがある。手術台に拘束された恭子がそれだ。
敏夫は薄く笑う。回復室と手術室を元のように閉め切り、それから電話の受話器を手に取った。コール六回で、相手は出た。
「はい、橋口(はしぐち)ですけど」
「やすよさん？　尾崎だが」
あら、とやすよは声を上げた。
「どうなすったんです、こんな時間に」
「急で悪いんだが、今日は休診にする」
「──え？」
敏夫は笑みを隠すのに苦労しなければならなかった。
「恭子の具合が良くない。どうやら危篤(きとく)と言っていい状態のようだ。とてもじゃないが、今日は患者の相手はできない」
やすよは絶句し、すぐに労(いたわ)るような声を出した。
「分かりました。みんなにはそう連絡します。先生、人手は？」
「いや。おれだけでいい。悪いが一人にしといてくれ。──いや、できることはもうい

くらもないんだ。ただ目を離したくない」
「分かりました」と、やすよは沈痛な声で答えた。

2

元子はその朝、いつもの時間に起き、子供たちを起こそうとして、志保梨がぐったりと生気を失っているのに気がついた。
顔色は青ざめ、やんちゃな表情が見られない。無理に起こしても茫洋とした表情のままで、口数も少なく、半ば夢でも見ているかのようだった。元子はこの表情に見覚えがあった。舅の嶽を、そして夫の勇を奪っていったあれだ。
(そんなはず、ないわ)
だって志保梨は国道には行っていないのだから。舅や夫のように、失われてしまうなんてことがあるはずはない。元子は瘧のように震えながら、志保梨の身体を抱き上げた。たった六歳のこの子が、失われてしまうなんて、そんなことが許されるはずがない。
元子は志保梨を抱えて家を飛び出した。茂樹が不思議そうに「どこに行くの」と訊いてきたが、元子はこれに返事をすることもできなかった。後先を考えずに無我夢中で家を出た。

志保梨の身体は、集落を駆け抜けるうちに石のように重くなった。何度も滑り落ちそうになる身体を抱え直し、元子は走る。道行く村人が奇異なものを見るように元子を振り返ったが、元子はそれを認識していなかった。娘の重さに耐えかね、道に膝をつき、抱え上げようにも力を失った両の腕を自覚した。苦心惨憺してなんとか背負い、息も絶え絶えになって門前の尾崎医院に辿り着く。元子は藁をも摑む思いで玄関に走り寄った。元子を迎えたのは、一枚の貼り紙だった。玄関の内側にはカーテンが引かれており、貼られた紙には「本日休診」という文字が見えた。元子はその場にへたりこんだ。

「そんな……」

元子は玄関を叩く。声を張り上げた。

「お願い！　開けてください！」

だが、病院は静まり返ったまま、なんの応答もない。通りがかった女が一人、元子に声をかけてきた。

「どうしたの？」

元子は玄関の貼り紙を示した。女は困ったように眉を寄せる。

「あら——珍しい」

「今日……今日は木曜日ですよね」

「ええ。最近はずっと、土日も開けてたのにねえ。どうしたのかしら」女は言って、不

安そうに建物を見上げた。「若奥さんの具合が良くないって話を聞いたけど……それでかしらねえ」
「でも……うちの子だって具合が良くないんです」
「それは大変ねえ。でも、休診じゃあねえ」
　そんな、と元子は目の前が暗くなる思いがした。なぜ診てもらえないのか、助けてもらえないのか。子供が危険だと言うのに。
　志保梨の具合が実際にはどの程度悪いのか、誰かに請うて車に乗せてもらうべきではないのか、いや——それよりもそもそも電話をするなり、あるいは救急車を呼ぶなりするべきではないのか、——そういったことは、元子の念頭にも浮かばなかった。志保梨が危険だ、それしかない。舅や夫のように死んでいこうとしている。自分から引き離され、手の届かないところに行ってしまう。一刻も早く、安全な庇護してくれる場所に辿り着かなければ、自分は本当に娘を失ってしまうだろう。
　そう思って駆けつけた病院が、休診だったという事実が、元子をいっそう逆上させた。誰か——元子に悪意を抱く誰かの手が、無慈悲にも元子から娘を奪い去ろうとしている。
「そう言えば」と、女が首を傾げた。「たしか、下外場にも病院ができたとか、言ってなかったかしら」
　元子は女を振り返った。

「楠(くすのき)スタンドのあたりに、兼正のお医者さんがクリニックを開いたって聞いたような気がするけど」
元子は息を呑んだ。それはまぎれもなく余所者(よそもの)だ。しかも、スタンドに行くためにはあの恐ろしい国道に出なくてはならない。
「なんだったら、誰かに詳しいことを聞いてあげましょうか？」
女の声に、元子は首を振った。背中の志保梨を引っぱり上げ、ふらつく足で立ち上がる。しっかりと背負い直して踵(きびす)を返した。
「あら——ねえ、あなた」
女の声にも構わない。どこかに行かなければ。元子の娘を助けてくれる誰かのところへ駆けつけなければ、と絶望的な気分でそう思った。
（でも……）
余所者、——国道。まるで何かの罠(わな)のようだ。志保梨を救うためには医者に連れて行く必要があるが、よりによってそれが、国道の余所者だなんて。それは元子から子供を奪うもの、なのに陥(おとし)いれられたように、そこに行くしかない。
元子は半ば泣きながら、それでも志保梨をしっかりと背負い直した。門前から下外場へと、よろめきながら駆け出したが、元子の気分ほどには足は前に進んでくれなかった。
（でも、急がないと）

一刻も早く。でないと舅や夫の二の舞になる。取り返しがつかないことになってしまうに違いない。

喘ぎながら泣きじゃくりながら、無我夢中で元子は前に進む。中外場まで来たとき、前方に現れた老人が、怖いものにでも出会ったように跳び退って道を空けた。

本当に行ってもいいのか、とも思う。国道に出たとたん、暴走した車に出会うのではないのか。余所者に診せたりしていいのだろうか。診察室の中から冷たくなった志保梨が出てくることになったら。恐れる一方で、何としてでも医者に志保梨を診せたかった。そうしないと志保梨は奪われてしまう。

迷いが足を縺れさせた。元子を叱咤するように、背中の志保梨は重かった。これは娘の命の重みだ。投げ出すくらいなら死んだほうがましだ。

その一心で国道まで辿り着いた。注意のうえにも注意を払い、スタンドの付近を探す。女の言っていたクリニックはすぐに分かった。看板が出ている。元子は泣きじゃくりながらそのドアに近づき、それが固く閉ざされているのを知って、その場に坐り込んだ。

(……なぜ)

ドアの脇に、診療時間が書いてあった。夕方の六時から十時まで、とあった。

「——そんな！　ねえ、開けて！」

扉を叩きたかったが、両手は塞がっていた。娘から手を放すことなど絶対にできない。

元子は頭を打ちつけた。額でドアを叩く。そうまでしても、元子のために扉を開いてくれる者は現れなかった。元子は声を上げて泣いた。志保梨が死んでしまう。元子から略奪されてしまう。

声にならない悲鳴を上げたとき、背後から頼もしい声が聞こえた。

「元子！」

加奈美の声だ。元子は振り返る。加奈美は駆け寄ってきて、元子の脇に膝をついた。加奈美の背後には数人の村人が呆気にとられたように立ち竦んでいた。

「あんた――どうしたの」

元子は金切り声を上げて泣いた。矢野加奈美は元子の狂乱と言っていい態に狼狽する。元子らしき女が子供を背負い、泣きながら国道のほうに歩いていった、と聞いた。元子と加奈美が親しいことを知っている近所の者が、わざわざ知らせに来てくれたのだった。まさかと思い、半信半疑で出てきたものの。

元子がここまで取り乱す理由はひとつしか思い浮かばなかった。元子のいるここが、江渕クリニックの前だという事実がそれを補強する。加奈美は恐る恐る志保梨の顔を覗き込み、志保梨がぐったりしているようではあるものの、息をしていると知って安堵の息を吐いた。

「元子、大丈夫よ、しっかりしなさい」

元子は頭を振った。何かを懸命に訴えているが、言葉は聞き取れない。聞こえなくても何を言いたいのかは分かった。
「志保梨ちゃんは大丈夫よ。元子がそんなだから怯えてるわ。駄目よ、しっかりしないと」
加奈美は「大丈夫」と繰り返し、元子の肩を抱く。落ち着くまで揺すった。
「加奈美、志保梨が」
「うん。具合が悪いのね？　大丈夫よ、病院に連れて行けば」
「でも、どこのお医者も」
加奈美が言うと、元子は首を振る。
「尾崎の若先生に来てもらいましょ」
「休診なの。診てくれないのよ」
まあ、と加奈美は口ごもった。珍しいこともあるものだ。——だが、無理もないのかもしれない。敏夫はこのところ、無休で病院を開けていると聞いていた。
「そう。じゃあ、溝辺町に連れて行きましょう。ちょっとでも早いほうがいいわ。志保梨ちゃんを抱かせて。スタンドから救急車を呼びましょ」
元子が目を見開いた。
「救急車？」

「そうよ、それがいちばん早いでしょ？　国立や共済病院なら設備も揃ってるし、お医者さまだって揃ってるわ。だから大丈夫よ」

元子が呆然としたように頷いた。加奈美が微笑んでみせたとき、すぐ脇のほうから人の声が近づいてきた。目をやると、前田登美子が村人に先導されて駆けつけてくるところだった。誰かが知らせに行ったのだろう。

「元子さん――あんた」

加奈美は登美子を制した。

「志保梨ちゃんと元子を見ててください。あたし、救急車を呼んできます」

「やめてちょうだい！」

語気荒く言われ、加奈美はぽかんとした。登美子は視線を元子に移す。引ったくるように志保梨を抱き寄せた。

「あんたって人は、何を考えてるの！　突然外に飛び出して、こんな恥さらしな」

「でも……志保梨が。志保梨の様子が」

加奈美は口を挟んだ。

「志保梨ちゃん、具合が悪いんです。それで元子は」

「あんたは他人なんだから、黙っててちょうだい！」

登美子にヒステリックに叩きつけられ、加奈美は言葉を見失った。

「なによ、熱なんかないじゃないの。この子がどうしたって言うのよ。こんな大騒ぎをして、みっともない」
「でも、お義母さん」
「くだらないことで大騒ぎして。あんたって人は、本当に」登美子は元子を睨み、ぐったりしたふうな志保梨を立たせる。「さあ、家に帰るのよ。今日は学校はお休みじゃないでしょう。お父さんのお葬式だって済んだんだから、急いで帰って、今日から学校に行くの」
そんな、と元子は志保梨を捕まえようとした。その手を登美子が叩き落とす。
「あんたは」登美子は足を踏み鳴らした。「自分が大騒ぎすればするほど、ろくでもない結果になるんだってことが、いつになったら分かるの」
登美子は嫁を睨んだ。孫の手を引いて強引に家へと連れ戻す。登美子を支配していたのは、徹底的な拒絶だった。登美子にとっても可愛い孫だ。その孫が死ぬなんてことが起こっていいはずはない。具合が悪いなんていうのも嘘だ。例によって嫁が、過剰な思い込みで大騒ぎしているだけに違いない。そうでなければいけないのだ。
「お義母さん！」
元子の悲鳴を、登美子は背中で聞いた。家に帰って着替えさせて孫を学校にやらなければ。そうやって何もなかったように振る舞っていれば、なかったことになるに違いな

い。

元子は登美子を追おうとした。けれどももう、足が言うことを聞かなかった。加奈美に支えられ、思わず縋りつこうとしたのに、手にはまったく力が入らない。元子はただ殺意を込めて姑の背中を見た。

——誰もかれもが、元子から子供を奪っていこうとしている。

(余所者だけじゃない)

元子は初めて、すべての人間が敵なのだということを悟っていた。

3

敏夫はその日一日を手術室で過ごし、恭子の側にいて経過を見守っていた。脳波は連続的な波形を現し始め、微細だった波は次第にくっきりとしたパターンを描き出した。昼を過ぎた頃から、時折——お笑いなことに夢でも見ているかのような反応を示したが、依然として心拍はゼロ、血圧もゼロ、呼吸も完全に止まったままだった。

無惨にもケロイド状になった顔の傷は、手術室に移してから治癒し始めた。紅斑は次第に消え、弾けた表皮も剝離して、真皮にも薄皮が張り始める。一日かかって、ほぼ以前の滑らかさを取り戻した。——いや、もとが乾燥で褐色を帯び、死体の色艶をしてい

たことを思えば、以前以上の滑らかさに戻ったと言えるのかもしれない。今、この顔を見て恭子が死んでいると思う人間はいないだろう。青味を帯びてはいるものの、眠っているようにしか見えない。

敏夫は何度目か、血液を採取した。最初は動脈にカテーテルを挿入したままにしておいたが、これは押し出されてしまった。以来、いちいち注射針を刺して採血しているが、この針の痕が塞がるのも早い。血液から塗抹標本を作って顕微鏡にかけた頃には完全に塞がり、どこに針を刺したのか分からなくなっていた。

血液は異常だった。最初は暗紅色を呈していた血液は、次第に鮮紅色に変わっていった。暗紅色の部分には腐敗溶血した赤血球の断片が見えていたが、鮮紅色の部分にはそれが見えない。ただ赤い、顕微鏡をもってしてもごく小さな顆粒状にしか見えない何かが、ある密度で含まれている。それ以外の組織は見ることができなかった。それは次第に全身に及び、やがて静脈血までが同様の鮮紅色に変じた。

恭子の血液は、採血したまま放置していても凝固しない。分離もしなかった。それはただ、時間をかけて暗紅色に変じていく。試しに試験管の中に敏夫自身の血を一滴落としてみても凝固は起きない。それどころか暗紅色に変じた血液は、それでいったん鮮紅色を取り戻した。血清でも同じことが起こる。試験管に蓋をし、密閉すると暗紅色に変化するのが早かった。暗紅色に変じた血液をさらに長い間——半日以上——放置してお

くと、組織が沈殿し分離する。そうなると血清を滴下しても、もう鮮紅色を取り戻さない。

根本的な変容が血液に起こっている。それは敏夫にも理解することができた。試しに様々な薬品を混入してみたが、なんの反応も引き起こすことができなかった。これはただ、人間の血清に対してのみ、反応する。

これに対して、恭子の身体(からだ)のほうは、依然として死体のままだった。ただ、脳波だけが当たり前のように存在しているが、心拍も呼吸も戻らない。変化は進行していたが、甦生(そせい)の気配はなかった。念のためにアンビューバックを使って人工呼吸を施してみても、自発呼吸は再開しない。心マッサージを試み、硫酸アトロピンを投与して経皮ペーシングも試してみたが、心拍は停止したままだった。念のために除細動器具(デフィブリレータ)も使ってみたが、やはり効果はない。エピネフリンを注射して通電量を最大まで上げてみても同様だった。

恭子の変化は早いのか、遅いのか。比較対照するものがないので何とも言えないが、丸四日を過ぎ五日目に入るあたりに重大な観察ポイントがある、とは言えそうだった。その死体が起き上がるかどうかは、脳波をモニターしていれば、予測することができる。脳波を取れない場合でも、血液を採取して色を観察していれば、目算を立てることができる。恭子の例から言うなら、死後五日目に入れば、顔色を見れば分かる。明らかに容貌(ようぼう)が変化する。

（死後五日間の経過観察……）

敏夫は考え込む。問題は、それが可能かどうかだ。村では土葬にするために埋葬が早い。通夜は死亡の当日が原則だし、すると翌日には埋葬されることになる。屍鬼による犠牲者は夜半に死亡する例が多いが、通常の例で言うなら、三十六時間程度で埋葬されることになってしまう。それを五日まで引き延ばす方法が果たしてあるのか。しかも、恭子の変化は例外的に早い可能性がある。個体によっては、もっとゆるやかに進行するのかも。そうなると、死者の容貌から起き上がるか否かを予測することは不可能に近い。患者が死亡して、まだ敏夫の支配下にある期間内に、起き上がるか否かを見極めることはできない、と言えるだろう。

死亡から五日、埋葬を引き延ばす方法はないか。それだけの猶予を持たせることができれば、会葬者の目の前で死体が起き上がることもあり得る。そうなれば、誰もが嫌でも現状を認識するだろう。

（どう考えても無理か……）

たとえ村人をなんとか説得して埋葬を五日、引き延ばすことができるとしても、その間、なんの防腐処置もしないで放置しておくことは許容されないだろう。最低限、ドライアイスを入れるぐらいのことはしなければならないが、あまりにも死体温度が下がると、それで変容もまた遅滞する可能性がある。それを考慮に入れれば、さらに埋葬を引

き延ばさなければならない。こうなると鼬ごっこだ。
（やはりすべての死体に、甦生することがないよう処置をする必要がある）
果たして、どうすれば甦生を止められるのか。――そもそも、屍鬼を倒すためには、何をする必要があるのか。
とりあえず根本的に血液に変容が起こっていることは分かった。この血液を破壊することができれば、それで甦生を阻止できるかもしれない。しかしながら、さらに考え得る限りの薬物を混入してみても、これと言う反応を引き出すことはできなかった。
考え込んでいたときだった。背後で異音がした。それは喘鳴に似ていた。
敏夫はゆっくりと背後を振り返る。時間は午後七時を過ぎようとしていた。――そう、手術室の中では分からなかったが、すでに陽が落ちている。
恭子は目を開けていた。モニターに目を移してみても、心拍もなければ呼吸も再開していない。にもかかわらず、それは縛められた身体を揺すり、身動きができないことを確認すると、首だけを動かして敏夫のほうを振り返った。
敏夫はひとつ息を呑み下し、そして立ち上がった。
「……気分はどうだ？」
恭子は何かを言おうとするように唇を動かしたが、声にはならなかった。ほんの一瞬、モニターの呼吸が反応を示し、そしてまた平坦に戻った。

動いている。瞬き、敏夫を見つめているにもかかわらず、心拍は停止している。まったく微動だにしていない。目の前の女はたしかに死亡していた。

アンビューバックを使って人工呼吸を試してみたが、やはり呼吸は再開しなかった。怯えた顔をする恭子を宥め、心マッサージもしてみたが、声を上げはしたものの、やはり心拍は戻らない。おそらくは、この異常な死体に呼吸や拍動が戻ることはないのだろう。

恭子は何かを訴えている。時折、掠れた声になった。声が出たときにだけ、胸郭が動く。当然のことながら、吸気しなければ発声できないのだ。

「心配はいらない。すぐに眠らせてやる」

恭子は明らかに怯えた顔をした。喘ぐように口を動かし、何かを訴えようとする。痙攣するように何度か胸郭が動いた。断続的に声が漏れる。その口をマスクで覆う。麻酔機の気化装置のスイッチを入れた。

麻酔しようとしたが、できなかった。途中から静脈麻酔に切り替えたが、やはり麻酔は効かない。恭子は声の上げ方を思い出したようだった。悲鳴が漏れないよう、口を塞がねばならなかった。

笑気ガスは効かない。チオペンタールもケタミンも効果がなかった。ペンタゾシン、モルヒネも効いた様子がない。麻酔薬のみならず、鎮痛剤も受けつけないらしい。とい

うことになれば、おそらくモルヒネなどの大量投与によって決着をつけることはできないのに違いない。
いずれにしても、麻酔できないのなら、できるだけ穏便に死なせてやるしかないわけだ、と敏夫は思った。
口を塞がれた恭子は、身を捩るようにして拘束を抜け出そうとしていたが、これは徒労に終わっていた。別に恐ろしい怪力とやらになったわけではないらしい。煙になって消える様子もなく、蝙蝠になって逃げることもできないようだった。
「じきに楽にしてやる。だから少し堪えてくれ」
敏夫は仏壇から拝借してきていた本尊を翳してみた。恭子は目に見えて反応する。塩を撒いてみたが、塩には特別、反応はない。抹香や線香などの芳香にはひどく嫌がる様子をみせたが、ごく普通の芳香剤や香料にはなんの反応もしない。同じ強い芳香を放つものにしても、抹香と芳香剤では成分がまったく違うだろう。それを思うと、片方に反応し、もう片方に反応しないのは不思議でもないが、本尊になぜ反応するのか不思議だった。試しに身体に当ててみたが、小説や映画にあるように、焼け爛れた痕がつく、などということはなかった。純粋に恐怖しているように見える。あるいは脳に変容が起こって、そのせいである種の図形に恐怖反応が起こるのかもしれなかった。鈴の音も嫌がる。澄んだ金属の音は総じて恐怖心を喚起するようだった。

呪術は有効だ、おそらくは。尋常の嫌がり方ではないから、屍鬼のほうがよほど必死になればともかくも、これで襲撃をかなりのところ回避できるだろう。

(問題は……)

どうやって屍鬼を停止に至らしめるか、ということだった。敏夫にすれば、ひそかに処置できるような何らかの方法に存在してほしい。事前に注射一本のことで済むならどんなに助かるだろう。

試しにバルビツールを投与してみたが、やはり効かなかった。農薬を探してきてパラコートを注射してみたが、やはりなんの変化もない。クレゾールやステリハイドなどの消毒薬も無効、大量の空気を注射してみても、やはり効果はなかった。

仕方なく大腿静脈を切開して出血させてみようとしたが、開放創自体がすぐに塞がるのでそれほどの出血には至らない。外頸静脈を穿刺し、そこから血液を吸引してみようとしたが、すぐに血管を遮断されたように吸引できなくなった。前肘部を切開し、肘正皮静脈を露出して切断してみたが、やはり血管をどこかで遮断されたように出血しなくなる。諦めて放置しておくと、気づいたときには切開創自体が塞がっている。

怪我には恐ろしく強い。治癒再生能力が異常に高いようだった。なまじな方法では、負傷させることも難しいだろう。

口と鼻を塞いでも、そもそも呼吸してないだけあって、効果がない。血液自体は密封

すると暗紅色に変じて分離するから、ガス交換は行なっているのだろうが、あるいは皮膚呼吸で充分、ということなのかもしれなかった。皮膚全体を覆ってみれば――たとえば水の中に全身を浸けてみれば分かるのだろうが、あいにく手術室ではそれだけの設備がない。

かくなるうえは、と敏夫は脳波計に目をやった。最も最初に「死」から甦生したのは脳だった。脳を破壊すれば行動不能に陥るかもしれない。穿刺針とカテーテルを使い、鼻腔と内耳の二箇所から挿入して脳の組織を破壊してみようとしたが、やはり効果があるようには見えなかった。

(再生しているのか……)

そうなのかもしれない。破壊する端から再生しているのかも。驚異的な治癒能力を考えると、あり得ないことではないかもしれない。組織の破壊には意味がない。おそらくは、血液の遮断、――それによる酸素供給の停止が有効な手段になるのだろう。なるほど、古典的な方法が最も効果が高いはずだ。頭部の切断、心臓や肝臓の破壊、つまりは、大動脈大静脈が集中する箇所を杭のようなもので破壊する。細い針穴ぐらいなら治癒してしまうし、実際に留置した針は身体から押し出されて排出されてしまっている。杭のような摩擦の大きい太いものでなければ、おそらく排出され、傷痕は治癒することになるだろう。

有効なのは杭だ。あるいは、頭部の完全破壊。それで駄目なら完全に不死だということになる。
敏夫は用意してあった杭を手に取った。

4

静信は思案した末に寺務所を出た。時計を見るとすでに日付が変わって、二十一日の早朝に入っていた。
境内を抜け、墓所を抜け杣道（そまみち）から丸安の材木置き場に出る。二階に明かりの点（とも）った尾崎医院の建物を目指した。
屍鬼を狩ることには抵抗がある。だが、なんとかして妥協案を探さなければならない。村の窮状をこれ以上、無視はできない。
屍鬼の生が優先か、人の生が優先か。静信の出すべき答えは決まっている。人が優先だ。なぜなら静信は人だからだ。屍鬼でありもしない静信が、屍鬼の生と人の生を等価のもののように扱うのは、人としての分を超越した振る舞いに思える。人を俯瞰（ふかん）し、屍鬼をも俯瞰する神の思考だという気がした。だが、静信は人でしかないのだ。ならば人としての視点に留まっているべきだし、すると答えは決まっている。屍鬼は脅威であり、

敵だ。殺さねば殺される。屍鬼を殲滅して自分たちの安全を守らなければならない。
静信は半ば自分に言い聞かせながら、尾崎医院の通用口に向かった。通用口には鍵がかかっている。ナースステーションには明かりが点っていたから、敏夫は恭子についていて上に詰めているだろう。それでインターフォンのボタンを押した。応答には少し時間がかかった。静信が何を言うよりも早く、「静信か」という敏夫の声が聞こえた。
そう、と答える。この時間に電話もせず、突然に訪れるのは自分しかいまい。
「いいところに来た。今、手が放せない。おれの部屋の窓が開いてるから、あっちから廻ってきてくれ。手術室だ」
静信は首を傾げ、とりあえず裏手に廻った。敏夫の私室に入り込み、寝静まったふうの母屋を足音を忍ばせて横切り、病院へと向かう。待合室の片隅にある表階段から二階へと上がった。病室の前を通り過ぎると、ナースステーションにだけ明かりが点っているのが見える。回復室は暗く、覗き込んでも衝立しか見えない。人がいる気配はないが、すると恭子はやはり手術室に移されているのか。それほど病状が悪いのだろうか、と思った。
たしかナースステーションから手術室に行けたはずだ、とドアに手をかけたが、これは開かなかった。回復室に戻ってみたが、これも開かない。仕方なく廊下の奥にある自在扉を押した。前室に入る扉は難なく開いた。

前室にはシーツや衣類が丸めて放り出されていた。手術室のほうを覗くと、敏夫は白衣のまま手術台に屈み込んで静信を振り返った。手術台の上には無影灯に照らされて、白い裸体が横たわっており、思わず静信は視線を逸らした。
「上を脱ぐか、術衣を着るかしろ。隣の洗浄室にある。ついでに前室のシーツや寝間着を洗浄室の洗濯機に放り込んでくれ」
「ああ、……でも」
急げ、と言ったきり、敏夫は再び恭子に向かって屈み込む。恭子の顔は白く、固く目を閉じている。
「恭子さんは、まさか」
「死んだ」
そうか、と静信は心中で呟いた。敏夫の白衣を見たとき、すでに救命のために処置をしているのではないことは想像がついたが。
言われるまま前室に戻り、丸めてあった布類を抱えて洗浄室に入った。洗濯機を探して静信は立ち竦む。この、林立する試験管は何なのだろう。そのほとんどには暗紅色の液体が入っており、大半は分離している。赤褐色の資料を載せたプレパラート、点々と落ちた血痕のようなもの。
「――敏夫」

静信は洗浄室から手術室を覗き込んだ。角度が変わって、敏夫の手許が見えた。敏夫は恭子の胸のあたりを縫合している。拘束された恭子の肩先に赤黒く染まった杭が放り出してあった。

静信は息を呑んだ。敏夫は手許から目線を上げる。

「御覧の通りだ。恭子は死んだ」

「……甦生、したのか」

ああ、と敏夫は頷き、縫合糸を切った。

「今日――いや、もう昨日か――の夕方に起き上がった。ついさっき、永眠したところだ」

永眠、という言葉は、似つかわしく思えた。そう――起き上がった死体は眠りを破られたのだ。それを再び眠りにつかせる。それも、二度と目覚めることのない永遠の眠りに。どんな言葉を使っても、屍鬼を殺す、という事実には変わりがないが、たしかに永眠させると言えば、狩るほうの心理的な抵抗は薄まる。言葉というものの呪術的な力。

「汚れるぞ」と、言った敏夫の白衣には、あちこちに血痕が飛んでいる。袖口も真っ赤だった。「術衣を着るかしろ。手袋をしとけよ。素手では危険かもしれない」

言いながら、敏夫は白衣を脱ぐ。それを静信に向かって差し出した。

「ついでにこいつも洗ってくれ」

領いて白衣を手に取った静信についてきて、敏夫は洗浄室の椅子のひとつに腰を下ろした。手袋を外して捨てると、煙草に火を点ける。

「敏夫……」静信は洗濯機の周囲から洗剤らしきものを探し出し、それを適当に放り込んでスイッチを入れる。「その試験管は」

「恭子の血だ」言って敏夫は試験管に目をやった。「ほとんど死んでるようだな」

「死んで？」

「そう言うのが正解だって気がするんだがな。これがおそらく、連中の本体だ。うまく言えんが、血液自体が生きている、という感じだな。だからって別に血液がアメーバみたいに動いて襲いかかってくるわけじゃないが」

敏夫はぐったりと椅子の背にもたれて煙を吐く。少しの間、何かを探すように煙を見ていた。

「……そう、生きてるんだと思う。そして、こいつらは飢えて死ぬんだ。あるいは窒息して死ぬ。死ぬと分離してしまう」

「血液が？」

敏夫は頷いた。

「その変色したやつ――まだ分離してないやつに人間の血清を入れると、鮮紅色を取り戻す。息を吹き返すんだ。連中が人を襲うのは、そういうことなんだと思う」

敏夫は言って、困惑したまま佇んだ静信を見て皮肉気に笑った。
「桐敷正志郎も辰巳も、屍鬼じゃない。おそらくは人間だ」
「まさか」
「としか考えられん。恭子は日光に反応した。陽の光は駄目なんだ。焼け爛れてしまう」
静信は思わず、手術室のほうを見た。敏夫は脱力したように続ける。
「そんな顔をしなくても、もう痕なんか残っちゃいないさ。損傷に対する治癒力は驚異的だ。文字通り、見るみるうちに塞がってしまう。刃物やなんかで生半可に負わせた傷ぐらいでは、連中を止めることはできん」
「……杭は」
「有効だな。たぶん、至近から散弾銃か何かを使っても有効だろう。治癒する暇を与えず、一気に血管系を破壊するしか手はないと思う。あるいは、伝承通り、頭部を切断する。
連中の血液は生きてる。そして、脳が生きてるんだ。実際、恭子は最後まで呼吸も心拍も戻らなかった。ただ、本人が起き上がるより先に、脳波が現れた。いったん完全に消失していたものが、戻ったんだ。本当に消失していたのか、それとも、機械では拾えないような微細なレベルでかろうじて活動を維持していたのか、それは分からないが、少なくとも屍鬼は脳死ならぬ、脳生の死体だ、とは言えると思う。生かしているのはあ

の妙な血液だろう。たしかなこととは言えないが」
　静信は瞬いた。――そう、恭子が起き上がったということは、一度死んだ、ということに他ならない。
「恭子さんはいつ亡くなったんだ？」
「五日前……十六日だ。丸四日を過ぎたあたりから脳波が現れて、昨日の朝には太陽光線に対する反応が起こった。甦生したのは夕方を過ぎてからだ。比較対照するものがないから、すべての屍鬼がそれくらいで甦るとは言えないわけだが」
　静信は息を呑んだ。
「……隠していたのか、恭子さんが亡くなったことを？　なぜ？」
　敏夫は呟いた。
「甦生しないかと思って」
　静信は言葉を失った。
「亡くなったのに、何も言わず、遺体を隠匿していたのか？　経過を見守って、起き上がるのを確認して杭を打って殺した……？」
「他に手がなかったんだ」と、敏夫は言って気怠そうに目を閉じる。「一切の薬物は効かない。異常に治癒能力が高い。抹香なんかの芳香は有効なようだな。呪術も有効だ。どうやら恐怖刺激になるらしい。十字架、本尊、どちらも怯えた様子を見せた。ただし、

仏像が怖いわけじゃないらしい。光背が怖いようだな。仏像の頭の後ろの、あの放射状のやつ。十字といい、ああいう直線が配置された図形が怖いんだろう。だが、それで喚起できるのは恐怖感だけのようだ。襲撃を回避する手としては有効だが、それで連中を永眠させることはできん」

静信は血の気が引いていくのを自覚した。

「一切の薬物が効かない？　……試したのか？」

ああ、と敏夫は頷く。

「だから、死後の処置で甦生を食い止める方法はないんだと思う。少なくとも、おれがひそかに処置をすることはできない。起き上がるのを止めたければ、埋葬する際に杭を打つなり、頭を切断するなりすることだ。起き上がった奴を止める方法も、起き上がること自体を止める方法も、それしかない」

返す言葉を失った静信の前で、敏夫は気づいたように片手に目をやる。フィルターまで燃えつきた煙草を流しに投げ込んで、身を起こした。

「手を貸してくれ。とにかくここと手術室を片付けないと。恭子の身体を清めて寝間着を着せて、回復室に戻さないといけない。――ああ、傷を包帯か何かで覆っておかないとな」

「……なぜ」

静信が呟くと、敏夫は立ち上がりかけたまま、怪訝そうに静信を見上げた。
「あのままじゃ他人に見せられないだろう」
敏夫は肩を竦める。静信が言いたかったのはそんなことではなかったが、とりたてて口は挟まなかった。
「他人の目から隠し通すこともできない。経帷子に着せ替えないといけないわけだし。傷が存在すること自体は、治療のために必要だったとか何とか、言い逃れることもできるだろうが、あまりどこにどんな傷があるのかは見られたくない。おれがやったのは死体破損だが、他人はそうは思っちゃくれんだろう。きっと恭子を殺したんだと思うだろうさ」
「その通りなんじゃないのか」
敏夫は顔を上げ、手術室に向かいかけた足を止めて振り返った。
「何を言い出したんだ？」
「お前は恭子さんを殺したんだ。死亡を秘匿し、死体をひそかに保存していた。甦生した彼女を実験材料に使い、果てに殺した」
「静信」敏夫は口を開けた。「そうじゃないだろう」
「そうじゃない？　どう違うんだ？」
「いいか、恭子は」

「恭子さんは発病したんだ。正体不明の伝染病だ。ひょっとしたらそれは、屍鬼による襲撃の結果なのかもしれない。いずれにしても、彼女は死亡した。そして、起き上がった」

「その通りだ。恭子は屍鬼になったんだ」

「じゃあ訊くが、屍鬼とは何だ？　それが何に由来するものかはともかく、患者は貧血を前駆症状とする疾病で死亡する。死ぬと奇妙な死体現象を起こす。どうやら一定時間ののち、甦るらしい。――これは、本当に真の意味で死んではいなかった、ということを意味しないか？」

「恭子は死亡してた」

「甦る以上、本当に死んではいないんだ。死というのは不可逆性のものなんじゃないのか？　甦った以上、どんなに死に見えても、それは死じゃない。仮死にすぎないんだ。仮死を過ぎて患者は甦生する。甦生した患者は、人を襲う。襲撃によってこの奇病は伝染していく」

「だから、吸血鬼だと言ってる」

「そういう症状のある病を『吸血鬼病』と名付けるのは勝手だ。だが、仮死から甦生した患者をお前が殺したという事実には、変わりがない」

「いいか」敏夫は静信に指を突きつける。「恭子は死んでた。目を覚ましたが、その間

も呼吸は停止していたし、心拍も止まってた。生き返ったんじゃない。あれは死体だ」
「その、医学的な根拠は？　お前に断言させる『死』の定義とは何なんだ？」
静信が問うと、敏夫は何かを言おうとして口を噤んだ。
「本当に死だったのか、本当に死体だったのか？　客観的に、そう言い切って間違いのないものだったのか？」
「こいつは――」
「死は不可逆性のものだろう。可逆性の死を死と呼んでいいのか？　死の定義のほうを検討し直す必要がありはしないか？　それをせずに、ただ心拍や呼吸がないという事実だけを取り上げて死体だと断定していいのか。死体に脳波が存在するのか？　死体がなぜ動くんだ」
それは、と敏夫は口ごもった。
「お前がすべきことは、恭子さんが本当に死体なのか、死体だとしたらどうして動くのか、なぜ死んだと思われた者が甦生したのか、その原因をつきとめて、治療の方法を探すことじゃなかったのか？」
なのに敏夫は、殺すための方法を探した。自分の妻を使って。そのためにそもそも死を秘匿し、死体を隠していたのだ。
「患者を救うためだと言うなら、いくらでも協力する。――だが、常識を逸脱した患者

を抹殺するためだと言うなら、ぼくには協力できない」
敏夫は顔を上げ、真っ向から静信を睨み据えた。
「では訊くが、お前はどうしたいんだ。どうすればお気に召すんだ？」
「それは」
「村では死が続いているんだ。連中に襲われて犠牲者が死亡している。それを放置して見守っていろと言うのか？　屍鬼が殺されることは酷いことで、人が殺されるのは酷いことじゃないのか。餌にされることを拒んで、身を守るために敵を排除するのは、許されないことなのか？　——誰も自分や自分の家族が死ぬことなんて望んでないんだ。お前だってだからこそ、それを止めたいと言っていたんじゃなかったのか。疫病なら根絶すべきだが、屍鬼による襲撃なら放置しておくべきだとでも言う気なのか、お前は」
今度は静信が押し黙る番だった。
「こっちが屍鬼の立場を慮って譲歩を示せば、連中も譲歩してくれるのか。連中だって必要があって人を襲ってるんだろうが。連中は人を襲わなきゃ飢えるんだ。おそらく飢餓から血液が死亡し、本人も死亡する。それを避けるために必然として人を襲ってるんだ。屍鬼を憐れんで狩ることはしない、だから襲撃をやめて飢えて死んでくれと言うつもりか。そんな無理難題を連中が受容するとでも思っているのか！」
「……それは」

「お前のそれは卑劣な怯懦だ。要は自分の手を汚したくないんだろう。屍鬼が起き上がることは、生き返ったと言って言えなくもない。そうだろうさ、脳が活動しているんだからな。たぶん本人は思考する。感情を持つ。その点にかけちゃあ、人と何ら変わらない。ひとつの人格を抹殺するという意味では、屍鬼を狩るのも人を殺すのも同じことなんだろう。そしてお前は屍鬼じゃない。だから自分の手を汚して餌を殺す必要がない。それだから、屍鬼が人を狩ることを容認できるんだ。屍鬼を狩ることは自分の手を汚すことだ。自分が殺戮者にならなければならない。だからそれは嫌だと言う。——違うのか」

「……その通りだよ」静信は息を吐く。「ぼくは自分が殺戮者になりたくないんだ。他者を殺害することは、どんな大義名分を掲げようと正義ではないと思うからだ。屍鬼が人を狩ることを容認しているわけじゃない。屍鬼だろうと人だろうと、他者を殺戮すべきではない、と思ってる。だが、甦生した恭子さんが自己の存続のために人を襲うか襲わないか、これは彼女の選択に任されるべきことだ。ぼくが口を出す筋合いのことじゃない。ぼくは彼女の行為に対して論評はできても、こうせよ、ああせよと命令はできない。ぼくが行動を意のままにすることが許されるのは、ぼく自身に対してだけなんだ」

「そして自分は相手が屍鬼だろうと殺したくない、それは自分の選択の自由だと言いたいわけだな？」敏夫は口許を歪めて笑う。「今、この村で事態を正確に把握しているの

が自分たちだけであることも、自分がここで屍鬼の行為を屍鬼の自由だと言って見逃すことが、間接的に他人の殺害を容認する行為にあたることも、お前は知ったことじゃない、と言うわけだ」

　そういう意味じゃない、と言いたかったが、自分でも本当にそういう意味でないのかどうか、分からなかった。

「論評はできても命令はできない？　ついさっき、おれを人殺しだと責めたのは単なる論評だったわけか？」

　静信は俯(うつむ)いた。敏夫は吐き捨てる。

「知らないようだから教えてやる。……お前のような奴を偽善者と言うんだ」

　そうなのだろう、と静信は心の中でひとりごちた。

「おれは選択し、決断している。このまま汚染の拡大を放置できない。だから屍鬼を狩る。連中は敵だから、自分を含めた同族を守るために容赦はしない。これがおれの正義だ。口を挟む気はないと言うなら、出て行け。おれはお前の論評など聞いている暇はないんだ」

　静信には返す言葉がなかった。だから、その通りにした。

　偽善者だという敏夫の指摘は間違っていないと思う。静信は屍鬼を狩りたくない。た

しかに自分の手を汚したくないのだ。罪と定められた行為に踏み込む勇気がない。ただ人を襲う、自分たちに対する脅威だから、というだけでは、罪に踏み込む決断ができるほどの殺意を抱くことができなかった。

人であろうとなかろうと変わらない。誰も殺したくなどない。実を言えば、すべての人が——屍鬼がそれを望んでくれることを望んでいる。そのように、自分が信奉する神の理念で世界が調和することを願っている。

（人には……）

静信は寺へと戻りながら、戯れに言い訳をしてみる。

（殺意を抱くことのできる者と、そうでない者がいるんだ……）

脅威に対して怯え、逃げ惑うことしかできない草食獣と、脅威を威嚇し、打ち払おうとする肉食獣がいる。自分は肉食獣ではないから、そんな殺伐とした論理には従えないのだ、という言い訳は有効だろうか。

考えながら寺に戻った。悄然と寺務所の机に向かう。臆病で卑怯な羊だ、自分は。安全な場所に身を竦めて、細々と草を食むしか生きていく術を持たない。

思いながら抽斗を開けた。原稿を取り出し、そしてふと首をひねった。

（誰か……）

ほんのわずかの違和感。たとえば原稿用紙の端、紙の角。それは編集者の手を経て戻

ってきた原稿のように、別人の手を経た痕跡を留めているように思えた。
(誰かが弄った？ ……まさか？)
静信の机には、光男も美和子も手を触れない。ましてや抽斗の中を検めるということはあり得なかった。
首を傾げながら原稿をめくってみる。ノンブルには欠落がない。これまでの仕上がりを見直すつもりで漫然と原稿用紙を眺め、そして静信は手を止めた。
原稿用紙の余白に文字が書かれている。鉛筆の薄い文字だ。もちろん静信の筆跡ではなく、そもそも静信は余白に書き込みをしない。

彼はなぜ弟を殺したのか

静信はじっとその文字を見つめた。
兄は魔が差したのだ。それ以上を書く気がなかった。かつて静信がそうしたように、意味のない衝動に駆られただけだ。殺意がないだけに、放浪する兄の苦悶は深く――。
思いながらさらに原稿用紙を繰って、静信は再び書き込みに出会う。

殺意のない殺人は事故であって殺人ではない
殺意のない殺人はない
理由のない殺意はない

静信はどこか剔られた気分でその文字を見つめた。それらの文字は静信の視線を搦め

取った。

（だが）静信は文字を見つめる。（……本当に理由などなかったんだ）

十三章

I

静信が勤行を終えて寺務所に戻ったとき、電話が鳴った。静信はその電話が何を伝えるものか予測していたので、あえて受話器を取らなかった。光男が受話器を取り、そして少しのやりとりのあと、受話器を置いて静信に告げた。
「尾崎の若奥さんが亡くなられたそうです」
そうですか、とだけ静信は答えた。
「具合が悪いとは小耳に挟んでましたけど、そんなに悪かったんですねえ」光男は誰にともなく言い、言葉を継ぐ。「吾平さんは二軒こなしたばっかりなんで、田茂の定市さんが助番に立ってくれるそうです。すぐに打ち合わせに来られるってことで」
「分かりました」
光男の言葉通り、定市はすぐに駆けつけてきて、葬儀についてのこまごまとした打ち合わせをした。自分の家でも一昨日、葬儀があったばかりだと言うのに。
この日のうちに通夜、翌日に葬儀、敏夫の厚意で葬儀の規模は格別大きくなくてもい

い、ということになった。

「なにしろ、御覧の有様なんで。寺も人手が足りないだろうし、内々で済ませるから格別の配慮は必要ないってことなんで」

池辺は敏夫の心遣いに感謝したようだった。

「正直言って助かりますよね。大々的にって言われても、角さんもいないし鶴見さんだって具合が良くないし」

静信は頷いた。折を見て、角の家に電話を入れ、角の様子を訊いてみた。角は死んだと言われるのではないかと懸念していたが、案に相違して、角はいない、と言われた。旅行がしたいと突然言い出し、出かけたきり音沙汰がないと言う。ひょっとしたら戻ってこない旅なのではないかと思えたが、それを口にするわけにもいかなかった。

とりあえず、その角の家に連絡して角の父親と兄に脇導師を頼んだ。またですか、と言葉のわりに深刻味のない口調で角の父親に言われ、外界と村とがいかに隔絶しているかを思い知らされた。村ではもはや、「また」という言葉すら禁忌になっている。角のところの二人と池辺、静信とで四人。寺は空になるが、さすがに尾崎が相手では、いかに簡素に、と言われようともそれ以下の扱いはできない。

「とうとう、って感じですねえ」田茂定市は嘆息した。「本当に、葬式を出してない家のほうが少なくなったって気がします」

言って、ちらりと静信を見る。何かを問いかけるような眼差しだったが、静信に答えられることはなかった。

その訃報を律子に伝えたのは、橋口やすよだった。

「若奥さんがね、亡くなったんだわ」

律子は言葉に詰まった。昨日、危篤だと言って休診にしたぐらいだから、覚悟はしていた。それでも、実際に死んだと聞けば心に重い。

「今晩がお通夜で、明日がお葬式。今日明日は休診にするそうだから」

「はい……ええ」

律子は着るものを選び、家を出た。手伝いに行かねばならない。だが、さすがに敏夫に何と言おうか、考えると気が重かった。よほど前駆症状を見落としたのが悔しかったのか、つきっきりで世話をしていた。その甲斐あってか、他のどの患者よりも良く保ったのに、さすがの敏夫もこの病には抗えなかったということか。

(……病、か)

律子はひそかに胸を押さえる。本当に単なる伝染病なのだろうか。その答えを、自分はもう知っている気がしたが、どうしてもそれを認める気にはなれなかった。

通い慣れた道を辿ると、病院が見えた。病院を通り過ぎ、隣にある門を入って母屋の

玄関に向かう。こちらに来るのは何年ぶりだろう。すでに玄関の周辺は葬儀のために整えられようとしていた。

集まった人々の中に何かを采配している田茂定市の姿が見えて、律子は少し驚いた。定市のところではつい一昨日、葬儀があったばかりなのに。

(でも……徳次郎さんはもういないし……)

門前の弔組世話役は鬼籍に入った。ひょっとしたら竹村吾平なりが次の世話役に立つのかもしれないが、吾平老人も慣れない葬式の面倒を二軒続けて見たばかりだ。とりあえず定市が助番をするしかない、ということなのだろう。知らず、溜息が漏れた。こんなにも村は困窮しているのだと、そんな気がしてならなかった。

集まった人々に会釈をして玄関に入る。広々とした玄関ホールには、武藤とやすよがすでにやって来ていた。敏夫の所在を訊くと、やすよは頭を振った。

「寝てるわ」

「寝てる……んですか?」

やすよは微かに笑う。

「疲労困憊してるんでしょ。一番に来て会ったときには酷い顔をしてたからね。だから寝てください、って言ったのよ」言って、やすよは声を低める。「こう言っちゃあなんだけど、せっかく診療も、容態を見守らないといけない患者もいないわけだからね。滅

多にあることじゃないんだから、休んでもらわないと」
「そうですね」
「大奥さんなら座敷よ」
律子は頷いて、座敷に向かった。すでに組まれた祭壇の側には、尾崎孝江が控えていた。律子は孝江に悔やみを言ったが、孝江は淡々としたものだった。むしろ明らかに機嫌が良くない。
「さぞお力落としのことでしょうけど……」
常套句を口にした律子の言を、孝江は溜息でもって払い落とす。
「せめて子供を残してくれれば良かったんだけど。近頃の若い人は何を考えてるんだか、あの人も自分のことが忙しくて子供どころじゃなかったようだから」
「はあ……」
「敏夫もなにもあそこまですることはないだろうに、人の好い子だから。これから通夜だ葬儀だと忙しいのに、倒れるような破目にならなきゃいいけど」
律子は返答に困って、曖昧に頷いた。型通りの悔やみだけを述べて、早々に玄関へと退散した。どんなやりとりがあったのか想像がついているのだろう、苦笑ぎみの武藤に、やすよはキッチンに行ったと聞いて、ダイニングへと向かう。キッチンではエプロンをつけたやすよが、お茶の用意に取りかかっていた。

「お疲れさん」やすよも苦笑している。「──まあ、先生の身体のほうが心配だってのは、間違ってないわよ」
「そうですね」
律子もエプロンを広げながら、曖昧に笑ってみせた。
「なんでも、お葬式はできるだけ簡単にするみたいよ。とは言え、相手が尾崎じゃ寺のほうも、はいそうですかってわけにはいかないだろうけど」
「それで奥さん、機嫌が悪かったんですね」
「でしょうねェ」
小声で笑い合っているところに、清美がやって来た。清美は渋い顔をしている。律子はその顔を見て、孝江だな、と思ったのだが、清美に渋面を作らせたのは、そんなことではなかったらしい。
「やすよさん、律ちゃん、ここはいいから」
え、と律子は首を傾げた。
「お勝手のほうは近所の女衆がするそうだから。あたしたちは、他の雑用をしてほしいって」言って、清美はダイニングに坐り込む。「定市さんに拝まれちゃったわ。近所の人がそうしてくれって。看護婦は煮炊きに手を出さないでほしいんだってよ」
「それは……いいですけど、どうして」

「伝染病よ」清美は低く呟く。「悪い病気が流行ってるって噂があるから。あたしたちが口に入るものに手を出して大丈夫なんだろうかって、近所の人が心配してるからって」

律子は言葉を失った。やすよも、まァ、と言ったきり、言葉を失う。

たしかに、と律子は思う。看護婦たちは「悪い病気」と最前線で向き合っているのだ。これが通常の伝染病なら、真っ先に感染する可能性もあるし、看護婦自身がすでにキャリアだという可能性だってある。それを不安に思う気持ちは分からないではないものの。しんと押し黙ったところに、聡子がやって来た。やすよはエプロンを外しながら聡子に声をかけた。

「お疲れさん。――どう？　雪ちゃんから何か連絡あった？」

いいえ、と聡子の表情は暗い。雪は姿を消したまま消息が分からない。

「実家のほうにも電話してみたんですけど、やっぱりなんの連絡もないみたいです」

「そう……心配ねえ」

やすよは深い溜息をつく。律子もひそかに息を吐いた。本当に――溜息をつくしかない。聡子に事情を話し、キッチンはそのままに再び玄関のほうに向かった。集まった人々が気まずげに視線を逸らし、田茂定市がいかにも申し訳なさそうに応接間のほうを示した。

「どうも済みませんな。帳面やら、事務のほうをお願いします」
やすよが頷く。定市は溜息をついた。
「……本当にねえ、この村はどうなってるんだか。うちでもつい一昨日(おととい)、葬式があったでしょう。だもんで、どうも当たりが悪くてね」
「あら、定市さんも?」
そうなんですよ、と定市は苦笑した。
「死人が出た家を警戒する気持ちは、分からないじゃないんですけどね。丸安や工務店の人たちもそう言ってましたよ。特に工務店はさんざんなことだったから、番頭の武田(たけだ)さんが出入りするだけでも嫌な顔をする家もあるそうでね」
やすよは溜息をつく。
「世も末だわね」
「……そんなことをしても無駄なんだがな」
定市がぽつりと言った。律子たちが首を傾げると、言葉を漏らしたことに気づいたのか、定市は決まり悪気に笑う。
「いや、歳(とし)を取るとどうもものの分かりが悪くてね。なんだかね、そういう気がするんですよ。こりゃあ、本当に伝染病なんだろうかってね。なんだかもっと――別のことのような気がするんですわ」

「別のこと?」
「それが何なのか、分かりゃしないですけどね」と、定市は言葉を濁して笑った。分からないと言ってはいるが、定市には何か思い当たるものがあるふうだった。
そして、律子にも同じく思い当たるものがある。安森奈緒に似た誰か。もう記憶自体は摩耗して夢のように思えるものの、それは律子を縛りつけている。
息を吐いたとき、孝江の声がした。
「まあ、あなたたち、こんなところで何を暢気(のんき)にしてるんです」
孝江は開けたままの戸口から応接室の中を覗(のぞ)き込み、眉(まゆ)を寄せた。
「あなたたちが率先して働いてくれないと困りますよ。お勝手のことなんて、近所の人たちじゃあ分からないんだから。やすよさん、あなたが行って、ちゃんと采配してくださいよ」
それが、とやすよは定市を見る。定市が孝江に事情を説明しようとした。それを孝江は遮る。
「事務のことなら、武藤さんがいるでしょう。もともとそれが専門なんですから任せておきなさい。やすよさんたちはお勝手のほうへ行ってちょうだい。近所の女衆に好き勝手に家の中を弄(いじ)られたくありませんからね。第一、あなたたちが率先して働いてくれないと外聞だって悪いでしょう。お客さんじゃないんですからね」

「でも、あたしたち、別に使用人じゃないですから」
言ったのは聡子だった。孝江は聡子をねめつける。
「誰がお給料を払っているのか、忘れているようね」
「たしかに、先生からお給料をいただいてますけど。でもそれは、看護婦としての報酬を病院からもらってるんで、別に尾崎のお家の使用人じゃないです」
「聡ちゃん」
清美が小声で窘めた。孝江の血相が変わるのが見えた。
「本当に敏夫も人が好いわ。こんな反抗的な看護婦を大事に面倒見てるんだから。主人だったら、さっさと辞めさせたところですけどね」
「別にあたしは困りません。看護婦をほしがってる病院なんて、いくらでもあるんだから」
「何ですか、その言い方は。今日まで世話になっておいて。そう思うなら、さっさと辞めてどこへなりと行けばいいでしょう」
「そうしてもいいですけど」と、聡子は投げ遣りに言う。「……雪ちゃん、行方不明になったっていうのに、先生は心配もしてない。そんなんだったら、もういいかな、って気もします」
「聡ちゃん」

清美がさらに窘めた。聡子は清美を涙の溜まった目で見返す。

「だって行方が知れないんですよ？　こんなに長い間、連絡だってなくて、何かあったに決まってるじゃないですか。事故か、もっと悪いことか。なのに先生、そうか、って言ったきり、どうなった、って聞いてもくれないんですよ」

清美は無言で聡子の背中を撫でた。

「そりゃあ、先生が若奥さんのことで大変だったのは分かってます。奥さんのことなんだから、きっとすごく心配で頭がいっぱいだったんでしょ？　でも、雪ちゃんだってずっと働いてきたんですよ。先生が大変そうだから、越してこようって言って、休日も返上してずっとやってきたのに。――なのに」

顔を覆って泣き出した聡子の背を、律子も撫でる。聡子の心配は分かる、痛いほど。

孝江はそんな律子らを険しい顔で眺め渡した。

「仮にも院長の妻と、看護婦を同列に扱えるはずがないじゃないですか。でも、そういう物事の順番ってものが分かる子でもなさそうね」

言って、孝江は踵を返す。定市が困惑したように孝江が消えたほうと泣きじゃくる聡子を見比べていた。

2

大川は朝食を摂りながら、何度も二階へと——天井へと目をやった。かず子はそんな夫をはらはらした気分で見る。
夫の機嫌が悪い。篤が起きてこないせいだ。次第に怒りを溜めていく夫の様子を見て、かず子はことさらに明るい声を上げた。
「篤ったら、どうしたのかしらねえ。具合が悪いって言ってたけど、まだ気分が良くないのかしら。瑞恵、ちょっと見てきてよ」
制服姿の瑞恵は、頷く。立ち上がろうとしたところに、大川自身が立ち上がった。
「お前は飯を食ってろ。おれが叩き起こしてくる」
「いいよ、あたしが行く。お兄ちゃん、やっぱり具合が良くないんだと思うから」
いい、と言い捨てて、大川は茶の間を出た。どうせ具合が悪いなどと、篤の言い訳に決まっている。もともとが怠け者で小狡い言い訳をしては仕事をさぼりたがるのだ。近頃、村で不祝儀や病人が続いているのを見て、自分も具合が悪いと言えば、甘い顔をしてもらえると思ったのに違いがなかった。
大川は二階に上がり、篤の部屋の襖を開けた。篤は布団に入るどころか、路地に面し

た物干し台に出て大の字になっている。
「篤、いつまでダラダラ寝てやがんだ！」
大川は怒鳴りながら部屋に踏み込んだが、息子は慌てて身を起こすでもなかった。開いたままの窓を潜り、物干しに出る。
（暢気に寝てやがる）
息子の顔を見て大川はそう思った。声をかけても起きる気配がないのを見て取って、乱暴に蹴りを入れる。それで飛び起きるだろうと思ったのに、篤は蹴られるまま手足を投げ出していた。
おかしい、とすぐに思った。大川は息子の側に屈み込む。寝間着代わりのジャージは夜露を吸ったのか湿気で重い。軽く叩いた頬は冷え冷えとしていた。
「おい、篤」
大川は声を上げ、息子を揺する。鼻先に手を翳し、襟首を摑んで揺すり、ようやく息子が死んでいることに気づいた。
――ついに、来た。
大川はとっさにそう思った。家の周囲で蔓延していた「それ」、きわどいところで大川の家庭を掠めていったそれが、ついに。
大川は階段を駆け下りる。不安そうに妻子や母親が大川を見ていた。

「かず子、篤の様子を見てやれ。……どうも死んでるようだ」
かず子が悲鳴じみた声を上げた。瑞恵と豊と、先を争うようにして茶の間を出て行く。浪江がおろおろとそれに続いた。
大川は苦いものを持て余しながら電話の受話器を取った。腑が煮えるほど腹立たしかった。起こるべきでないこと、ルールに反することが自分に降りかかってきたことが許せない。卑劣な、という憤りが喉許を灼いたが、それを誰に向ければいいのか分からなかった。
苛立ちながら尾崎医院に電話をする。すぐに応答があったが、聞き覚えのない女の声が、今日は休診だ、と言う。
「実は、倅が死んでるみたいなんですがね。ちょっと来てもらえませんか」
それが、と電話の向こうの女は困惑したふうだった。
「実はこちらでも不祝儀で。若奥さんが亡くなったんです。今日がお通夜で……」
大川は舌打ちをした。悔やみを言う相手に礼を言って電話を切った。溝辺町の救急病院に電話をするか、あるいは救急車を呼ぶか。そう言えば、下外場にクリニックができたという話もあったか。
考えていて、ふと不安になった。尾崎の若奥さん——というのは、溝辺町に店を持っていた恭子のことだろう。尾崎恭子が死んだのだとしたら、葬儀は大々的なものになる。

先代が死んだときの葬儀もたいそうな代物だった。ひょっとしたら、寺はそれで手一杯かもしれない。
少し迷って、寺に電話を入れてみた。光男らしき男が電話に出たが、息子が死んだ旨を伝えると、やはり同様に困惑したようだった。
「大将、済みませんが……」
「尾崎の若奥さんが死んだって？」
「そうなんです。なにしろ、尾崎のことなんで、若御院が行かないわけにはいかないんで……」
「ああ、そうだろうな」
「他にも法事があって。日をずらしてもらえれば、なんとかなるとは思うんですが」
「いや、いいんだ。尾崎のことじゃ仕方がない。あっちは檀家総代でもあるしな」
大川は言って電話を切ったが、腑を灼いたものが身内で沸騰して息が詰まった。何かに向かって怒鳴り散らし、拳を振り上げたかったが、あいにく、相手になるものがない。
寺と尾崎の関係は分かる。それでも大川は自分が蔑ろにされた、という気がしてならなかった。憤懣やるかたなく、外場集落の世話役である村迫宗秀に電話をした。宗秀は事情を聞いて、それは、と絶句する。
「尾崎のことじゃあなあ」

「まったくだ。だからって、こっちもいつまでも息子を可哀想な姿のまま放っておけないからね。弔いをしてくれるのは寺しかないってわけでもないし」
「そうだねえ。……そう言えば、上外場に葬儀屋ができたんだ。前に社長が挨拶に来て、名刺を置いてったよ。ひとつ連絡をしてみるかい」
「ああ、そういう話があったな。そうしてみるよ。仁義を欠いちゃあいるが、こればっかりはこっちも寺の都合が空くのを待ってられないからな」
そうだね、と宗秀は言って、外場葬儀社の電話番号を教えてくれた。葬儀社はすぐに出た。事情を伝えると、その男はどこか甲高い調子の声で、聞き返す。
「たしかに死亡なさってるんですか？　まだ救急車は呼ばれていない？」
「呼ぶもなにも、間違いなく死んでるよ。まだ医者には診せちゃいないんで、診断書はないがね」
「そうですか、承知いたしました。すぐに御令息を引き取りに伺います。いいえ、お構いなく。湯灌もうちでさせていただきます。そのときに、細かい説明もさせていただきますから。——ああ、死亡診断書も御心配なさいませんよう。江渕クリニックが出してくれますから。手が空き次第、先生に来てもらって一筆書いていただきます。役場への届けから何から一切合財、うちのほうでさせていただきますんで、御安心ください」
「そうかい。そりゃあ、助かるよ」

大川は言って、電話を叩きつけるように切った。二階からは女たちの泣き声が聞こえている。

「ろくでもない息子だったが」と、大川は口を歪(ゆが)めた。「……最後までろくでもねえ真似(まね)をしやがる」

3

加藤実(かとうみのる)がクレオールの中に明かりを見つけてドアを開くと、客は広沢と田代だけだった。すでに九時、ドアには準備中の札が下がっていたが、マスターの長谷川(はせがわ)は歓待するような笑顔を浮かべた。

「いらっしゃい。お久しぶりですね」

ええ、と加藤は呟(つぶや)く。店内にはどこか陰鬱(いんうつ)なものが漂っている。そう思うのは広沢と田代が喪服姿だからなのかもしれなかった。

「広沢さん、今日は――ああ、病院の」

広沢は頷いた。尾崎医院の恭子が死んだと聞いた。加藤自身は、恭子はもちろん、尾崎敏夫ともあまり深い付き合いがない。

「大川酒店の篤くんも亡くなったそうですね」

加藤が言うと、これには長谷川が溜息まじりに頷いた。
「今日一日で二軒だからねえ。……まったく、どうなっているんだか」
「若奥さんもやっぱり？」
　病気だったのか、と意を含ませて問うと、田代が暗い顔で頷いた。
「そう。身体を壊してたらしいな。敏夫がずいぶん必死になって治療をしたんだけど、駄目だったたって」
「それは、若先生も気落ちしてるでしょうね」
　うん、と田代は頷く。
「……いや、そういう様子を見せるような奴じゃないから。だからまあ、いつも通りだったけどね。このところろつきっきりだったらしくて、すごく疲れたふうではあったな。そっちのほうが、ひどかった」
　そうですか、と加藤はスツールに腰を下ろして呟く。
「……参ったよ」と田代はひとりごちた。「すごく険悪な通夜でさ。弔組の連中はなんとも冷ややかだし」
　加藤が首を傾げると、広沢は苦笑した。
「ほら、伝染病だという噂がありますから。正直言って、手伝いたくなかったんでしょう。尾崎の通夜にしては弔問も少なくてね。寺も手一杯らしいから、ずいぶんとあっさ

りしたお通夜でした。それで大奥さんは、不機嫌だったし」
「そう。それで看護婦たちに当たるしね」と、田代は溜息をつく。「看護婦のほうも色々と気が立ってたみたいで、険悪な感じでねえ」
「――気が立っている？」
「ほら、連日、忙しいから。日曜も病院を開けるようになって、このところ満足に休みもなかったみたいだし、疲れてるんじゃないかな。おまけに弔組からは邪険にされてさ。食べ物に触るな、って台所から追い出されたんだって。伝染病の噂があるんだから仕方ないんだけどさ。伝染病だとしたら病院は前線基地みたいなもんだからなあ」
「ああ……」
連続する死に対して、疫病（えきびょう）だという噂があったが、加藤自身はそれについて懐疑的だった。村で死に事が続いているのは事実だが、調べるともなく本を繰っても村で頻発している死に該当するような疾病（しっぺい）を発見できないでいる。それはともかく、看護婦にしたら理不尽でたまらないだろう。村のために休日も返上して働いてきたのに、それをもって排斥されるのでは気も荒れるだろう、という気がした。
「それだけじゃなく、看護婦が一人行方不明になったらしいんだよ。雪ちゃんていう娘。みんな心配してるんだけど、敏夫はこのところ恭子さんのことで手一杯だったから。それでちょっと、敏夫に対しても険悪な感じだったな」

「行方不明？」
長谷川が頷いた。
「何かの事件に巻き込まれたんでなきゃ、いいんですけどねえ」
田代はうんざりしたように言う。
「本当に、この村はどうなってるんだろうな。この死人の数は尋常じゃないよ。ついこの間も結城さんとこの息子さんが亡くなったばかりだし、武藤さんのところだって
――」
「結城さん、その後、いかがですか。葬式でお見かけしたときは、ずいぶん力を落としておられたようですが」
おまけに結城の妻は、彼を置き去りにして実家に帰ってしまったと聞いている。
広沢は首を振った。長谷川が苦笑するように答えた。
「……この程度の時間じゃあ、吹っ切れと言うほうが無理でしょう。たった一人のお子さんだったわけだし」
そうですね、と加藤は呟く。
「長谷川さんも、思い出してお辛かったでしょう」
長谷川も村に越してくる前に、一人息子を亡くしている。
「いや」と、長谷川は笑った。「わたしはもう、気持ちの整理がついてますから。それ

だけの時間が経ちましたからね」
長谷川は、それでもどこか寂しげな調子で笑う。加藤の前に氷を入れたグラスを出した。
「……時間は親切です、こういうことにかけちゃあね。しかも平等だ。きっと結城さんにも親切にしてくれるでしょう」
「そうですね」
加藤は頷いたが、これは希望でしかないことを分かっていた。加藤にも息子がいる。死んだ妻が残していった、たった一人の子供だ。裕介に先立たれることを想像すると、その衝撃から立ち直る日など来るのだろうか、という気がする。
「せっかく村に越してきたのに。とんだことになってしまいましたね」
広沢が呟き、長谷川が頷いた。
「そうですねえ。結城さん、ひょっとしたら引越してしまうかもしれませんね」
それもありそうなことに思われた。加藤は村の住人だ。ここにしか居場所がないが、結城はそうではない。おそらくは結城も、こんな村にさえ来なければ、という気がしていることだろう。あるいは葬儀の始末をつけて村を出て行くのかもしれない。そうであっても不思議はないように思われる。
「ぼくも一度、お訪ねしてみましょう」

加藤は呟いた。自分に何ができるとも、言えるとも思えないけれども。

「お忙しいみたいですね」

長谷川に言われ、加藤は頷いた。

「店の用ではないんですけどね」

「ああ、工務店の？　加藤さんみたいに、なまじ手先が器用なのも考えものだな」

加藤は曖昧(あいまい)に笑った。加藤は電気店を営んでいる。特に看板は上げてないが、電気工事も請け負っていた。工務店の下請けを頼まれることもしばしばで、電気工事だけでなく、ちょっとした造作も見よう見まねでできなくはなかったから、人手が足りない時などは工務店から造作を頼まれることもあった。

「工務店は今、大変みたいですね」

広沢が言って、加藤は頷く。

「ええ。とうとう徳次郎さんが亡くなってしまいましたから」

そもそも安森工務店の社長は安森幹康だった。父親の徳次郎から事業を譲られていたのだが、その幹康が死んで工務店のほうもまた徳次郎が面倒を見るようになっていた。その矢先に徳次郎が倒れ、今は昔から工務店にいる武田が事業を采配(さいはい)していた。なにしろ従業員がそれなりにいるから、右から左に閉めるわけにもいかない。おそらくは徳次郎の娘婿(むすめむこ)か兄弟の誰かが工務店も、その親会社になる安森工業も継ぐことになるのだろ

う。
「やっぱり、それで？」
「それでというわけじゃありません。工務店のほうは番頭の武田さんが面倒を見ているし、別に徳次郎さんが亡くなったせいで忙しいわけではないんですが」
広沢は首を傾げた。加藤は苦笑する。
「……そもそも、このところ墓地の整理が多いですからね」
ああ、と広沢も長谷川も、気まずげに呟いた。
「それで手を取られがちなところに、小さな造作が多いらしくて。雨戸やサッシの施工(せこう)が多いんです」
「――え？」
問い返してきた長谷川に、加藤は苦笑する。なぜ自分がこんな複雑な笑い方をしなければならないのか、それは加藤自身にもよく分からなかった。
「どうも近頃、みんな戸締まりに気を配るようになったみたいですよ。それが流行みたいです。古い雨戸を取り替えたり、窓をサッシにしたりする人が多いんです。鍵(かぎ)の取りつけですとかね」
「そう――ですか」
広沢もまた、加藤と同種の複雑な笑いを浮かべた。そう言えば、と長谷川は首を傾け

る。
「うちの隣も造作をしてたな。玄関の工事をしましてね、昔ながらのガラス戸をドアに変えたんですよ。……そうか、そういうのが流行ってるんですね」
加藤は頷いた。
「そのようです。家の中の襖を塞いでドアにしたり、窓をつぶしてしまう人もいますよ」
「窓をつぶす？」
瞬いた広沢に、加藤は頷いた。
「この村は、どうなってしまったんでしょうね」
家の外を徘徊する何かに怯えているよう。それから身を守ろうとしているようような。それぞれに訊けば、古くなったから、建てつけが悪いから、子供が年頃になったから、とそれなりに妥当な理由がありはするのだけれども。
「……まるでみんな、家の中に立て籠もる準備をしているみたいです」

4

静信は尾崎恭子の通夜を終えてから、聖堂に向かった。暗闇と静寂、祭壇には神の姿

はなく、崩壊に瀕した空洞があるだけだった。少し待ってみたが、近づいてくる足音はなかった。

恭子の姿を見るのは、いたたまれない心地がした。敏夫の憔悴した顔を見るのも、同様にいたたまれなかった。かける言葉もなかったし、言葉をかけられることもなかった。静信も敏夫も、短い儀式の間中、儀礼的な言葉を交わしただけで、目を合わせることさえしなかった。

憔悴した姿を見れば、哀れに思う。実際のところ、敏夫は夏以来、過酷な状況に置かれてきた。患者に追われ、ろくに休む暇もなく、無為に犠牲者を看取ってきたのだ。恭子についていた数日は、かつてないほどの心労を敏夫に負わせただろう。憔悴しているのも無理はない。——だが。

敏夫は恭子を実験材料に使ったのだ、と思う。それを忘れることはできなかった。自分の妻が死んだのに、甦生する可能性に賭けて死を秘匿した。敏夫が一階で診療を行なっていた間、二階には恭子の死体が横たわっていたのだ、と思うと背筋が冷える。ましてや敏夫は甦生した恭子を生かしておく気もないくせに、甦生を待って死体を観察していたのだ。

そう——敏夫は、甦生しないかと思って、と答えた。甦生することを期待して死体を隠匿したのだが、それは甦生した恭子を救うつもりがあったからではない。敏夫はもと

より心を決めている。屍鬼は敵であり、生かしておくことはできないのだ。端から殺すことを想定して、恭子の甦生を待っていた。そして甦生したと見るや、採血して血液を調べ、様々な薬物を投与し、どうすれば効果的に殺すことができるのかを実験したのだ。妻であった女を使って。

敏夫の行為は蛮行に等しい。あの手術室の中で何が行なわれたのかを考えると背筋が冷える。敏夫には正義と確信があっての行為だろうが、静信には常軌を逸して見えた。それとも、そう思うのは静信だけなのだろうか。

屍鬼という存在がなく、しかも村を救うのだという大義名分がなければ、敏夫の行為は狂気の末の暴挙にしか見えないだろう。いや、それがあってさえ、静信にはそうとしか見えない。なんの罪悪感も抱いてないふうだった敏夫の感性を理解することができなかった。

そこまでする必要があるのか、と思う。妻だった女を生体実験に供してまで、打ち払う方法を模索しなければならないのか。屍鬼が人を襲うことは、それほどのことなのか、という気がした。そう——敏夫も言ったように、それは屍鬼にとって必然なのだ。人を襲わなければ自身が飢える。屍鬼は肉食獣と同義だ。命を狩って自分を生かす。だからと言って肉食獣を、肉食であるがゆえに悪と断じることがどうしてできるだろう。

だが——と、犠牲者のほうに目を転ずれば、そこには理不尽で悲惨な死がある。犠牲

者に対して、ライオンが獲物を狩るようなもの、これは自然の摂理だ、と言うことができるとは思えなかった。

――自分の手を汚したくないだけだろう。

敏夫の言は正しい。静信は殺戮者になりたくないのだ。屍鬼に対して鷹揚でいられるのは、自分が屍鬼ではないから、彼らの殺戮が対岸の事象だからだ、という敏夫の指摘も、おそらくは間違っていない。

けれども、と静信は懐中電灯の薄明かりの中、空洞の祭壇を仰いだ。

祭壇には神がいない。良きことを指し示すことはない。静信自身が見つけなければならないが、立ち竦んだまま動けない。

こんなところで竦むのは、おそらく静信だけなのだろう。その意味でも、たしかに静信は異端者だった。

良きことを模索していても、それに辿り着くことができない。良かれと思っても、良かれとは判断されない。荒野をさまよう彼が、最善の供物を探して捧げたにもかかわらず、神が契約に背いた彼の真意を理解しなかったように。静信と世界とは、そのように隔絶されていた。

鬱々と考え込み、来たときよりもいっそう鬱々とした気分で夜道を戻った。

物音を聞いたのは、ちょうど墓場にさしかかったところだった。前方を誰かが横切っ

た気がした。いや、誰かが静信の姿に驚き、身を隠したのを見たように思った。

静信は懐中電灯の明かりを向ける。枯れた秋草が夜風にそよぎ、墓所に植えられ境線の役割をする樹木が黒く蹲っている。

あのあたりだった、と光を向けた間近に、真新しい卒塔婆が立っている。結城夏野の墓だった。その根元には、小さな花束が置かれていた。明らかに真新しい。ついさっき誰かが供えたばかりのようだった。

どれもそのあたりから摘んできた野草ばかり、それが夜のうちに供えられている。この村で、夜間の墓地を恐れないのは何者だろう。何のために、わざわざ夏野の墓前に花を供えていくのだろう。

「……誰です?」

静信は暗闇に向かって呼びかける自分の滑稽さを理解していた。

「誰かいるんでしょう?」

暗闇の中、返答はない。立ち枯れた草が風にそよぎ、乾いた音を立てている。

「お礼を言います。夏野くんもたぶん、喜んでいるでしょう。……けれども、昼間にしたほうがいい。それとも夜でなければ墓参できないのですか」

ふいに微かな声がした。一瞬、静信はそれを小動物の鳴き声のように思ったが、断続的に続く声で、それがまぎれもなく人間のものであり、しかも懸命に何かを怺えようと

している声であることを悟った。
「どなたです？　夜道は危険です。なんなら、お宅まで送っていきますが」
駄目です、と微かな声がした。静信は知らず、息を呑み身を硬くする。
（出られない……行ってください）
静信は耳を澄ました。それは幻聴のようにも思えた。
「若御院、行ってください。おれを見ないでください」
静信はいつの間にか詰めていた息を吐いた。それはたしかに人の声で、まぎれもなく声帯を有する肉体から発された音だった。意思の疎通が可能な誰かが暗闇に潜んでいる。その人物はそして、格別、静信に害意を抱いているわけではない。
「どなたです？」
静信は重ねて訊いた。その声は若い。どこかで聞き覚えがあるようにも思ったが、具体的な顔は思い浮かばなかった。
「夜は危険です」
「おれは夜にしか出歩けないんです、もう」
「出ていらっしゃい」
「駄目です……とても顔を合わせられない」
「なぜです？」

暗闇からは、微かに嗚咽めいた声が聞こえた。
「……夏野を殺したのは、おれだからです」
静信は、はたと思い至った。
「君は――ひょっとして武藤さんの」
「その先は言わないでください。できたら、忘れてください。少なくとも親父やうちの家族には何も言わないでほしいんです」
静信は頷いた。
「……分かりました」
「若御院は驚かないんですか。おれが怖くない？」
「そうですね……怖くはないです」
そうか、と彼は呟く。
「お願いですから、親父たちには何も言わないでください。おれも、もう来ません」
「約束します。君のことは忘れることにする。わたしのほうが墓地には近づかないことにします」
だから墓参をやめる必要はない、と言いたかったのだが、彼は啜り泣くような声を漏らした。
「もう来ません。夏野に詫びたかったのも本当だけど、実はおれ、待っていたんです。

夏野が起き上がらないかと思って。……でも、たぶん夏野は起き上がらない。もう駄目みたいです。今になっても起き上がらないなら、夏野はたぶん死んだままなんだ」
彼は微かに泣き声を漏らした。
「おれが殺したんです。もうこの世のどこにも夏野はいない。欠けたまま戻ってこないんです、永遠に。……そうしたのはおれだ。分かってるんです。でもおれは、夏野がいなくなったのが悲しい。すごく悲しいんです」
「分かります」
静信が言うと、彼はひそかな声で泣いた。
「弟が一人増えたみたいな感じだったんですよ、若御院。あいつ、ひねくれたとこもあったし生意気なことも言うけど、いい奴だった。でも死んじゃったんです。おれが殺したから。殺したくなんか、なかったんです。でも、夏野を襲わないと、妹や弟を襲わせる、って言われて……」
静信は黙ったまま眉を顰める。
「おれはあんなこと、したくなかった。けど、仕方なかったんです。連中はそういうことを平気で命じる。どんな酷いことだって気にしないんだ。でも、おれはもうそういう連中の仲間で、連中に色々助けてもらわなきゃ、どうにもならないんです」
微かな嗚咽が風音に混じる。

「鬼なんです、本当に。憐れみなんてぜんぜんない。あんな連中、一人残らず死んでしまえばいい。本当にそう思うんですよ、おれ。けれども自分もその仲間なんです。おれだって同じように夏野を襲って殺した」
「そう強要されたのでしょう？」
「そうです。おれは家族を守りたかった。だから夏野を襲いました。けど、そうやって言い訳しても駄目なんです。……だって今だって別の人を襲ってきた帰りなんだから」
静信は息を呑んだ。
「情けない話でしょう？　おれ、夏野の墓参りに来て、殺して悪かったって思いながら、それを命じた連中を怨んでいながら、他の人間を襲ってるんですよ。そんなこと、すまいと思ったんです。夏野は仕方なかった、けれどももう命じられてるわけでも脅されてるわけでもないんだから、これ以上は人殺しはすまいと思ったんです。でも、腹が空くんですよ。──笑っちゃうでしょう？　ものすごく腹が空くんですよ。なんか食わないと死んでしまう、と思うんです。我慢できなくて自分から殺しに行ったんです」
静信は思わず、うなだれた。
「腹が空くと、人殺しが何だ、という気分になってしまうんですよ。どうせ夏野だって殺したんだから、って。襲ってすごい、後悔したけど、だからもうやめようと思うんだけど、続けて襲わないと相手が正気に返って、誰から何をされたのか吹聴するぞ、って

言われて。知られたくないんです、おれ。親父やお袋に、おれがこんなふうになってること。誰にも知られたくない。バレちゃうと、親父やお袋だってみんなから責められるでしょう？　そういう目には遭わせたくない。そう思うと、続けて襲うしかないし、そうすると相手を殺すことになっちゃうんです」

「それは……君のせいじゃない」

屍鬼は人を襲わなければ生きていけないのだから。捕食者とは、そういうものなのだから。にもかかわらず彼の良心は死んでいない。生命としての在り方は根本的に変わっているのに意識は変容していないのだ。これは——あまりに惨い。

「おれは脅されて夏野を襲いました。けども最近、本当にそうなのかな、と思うんです。連中は夏野を襲わないと、おれの家族を襲わせると言った。連中はそういうことをして喜んでるんです。おれが夏野と仲良かったの知ってて、わざわざおれに命じる。おれはそれに逆らえなくて言いなりになったけど、家族を守るんだって自分に言い訳したんだけど、別にだからって他の連中が親父たちを襲うの、止められるわけじゃないんです。おれが守ってやれるわけじゃない。おれが他の人を襲うみたいに、他の仲間が襲うのかもしれない。それを思ったら、外場を出て逃げろ、って言うしかないんだけど、逃げろって言えば済むことなら、夏野を襲う前にそうすれば良かったんだ」

「それは……」

「そうしなきゃいけなかったんですよ、若御院。でも、おれはそうしなかった。脅されて夏野を襲ったけど、実は違うんじゃないかと思う。おれはきっと分かってたんだと思うんです。誰かを襲わないと生きていけないってこと。おれは人を殺さないとやってていけない。他の仲間もそうなんです。外場にいる限り、襲われるんです。夏野だっていつ誰に襲われるか分かったもんじゃなかった。どうせ殺されるんなら、どうせ殺すしかないなら、自分が殺したほうがましだと思った気がするんです。少なくとも、どうせ殺すしかないなら、見ず知らずの他人じゃなく、おれのこと知っている相手にしたかったのはたしかだと思う」

言って彼は、自嘲するような笑いを漏らした。

「甘えてるんですよ。知り合いで、仲良かったから。赤の他人に酷いことするなんて、許されない感じがするじゃないですか。でも、夏野は弟分だから。他の人なら許されないことでも、許されるような気がしたんだ。けれども、だったら親父を襲いに行けば良かったんですよ。弟でも妹でも良かった。でも、家族に酷いことをするのは、それはそれで許されない感じがするから。だから、夏野を襲ったんだ」

彼の乾いた笑い声は、細く続いてやがて嗚咽めいた音色に変じた。

「そうやって殺しといて、起き上がってくれないか、毎晩、確認に来るんです。おれは夏野に死んでほしくない。夏野が可愛いからです。けどもこれだって違うんだ。夏野

が甦(よみがえ)って、死なないでいてくれたら、おれが夏野を殺したことだって帳消しになるから。夏野の存在がこの世から消えないで残れば、おれは夏野を襲ったことになってても殺したことにはならない。だから甦ってほしかったんですよ。……おれは、そういう奴なんだ」

それは人間ならば当たり前の心情だ、静信はそう慰めたかったが、言葉にはならなかった。当たり前だ、だから気にせずに襲い続けなさい、と言うのか？　そんなことを勧められるはずもなく、だとしたら慰めには意味がない。

「本当は、甦らなくていいんだ。おれみたいな化け物になっちゃいけない。けども夏野が甦らないとおれは人殺しで、そしたらもう墓になんか来られる義理じゃないんです。本当に死んでしまわないでくれなんて、言う資格ない。ここでもおれ、夏野に甘えてるんですよ。あいつ、最後に窓を開けといてくれたから」

静信は闇を見つめる。

「ごめん、って言ったら、仕方ないって。だからおれ、墓に来ても許される気がして。でもおれは、そういうふうに言ってくれる奴を死なせたくない。死なせるの、惜しいと思うのに、殺したのはおれなんです」

静信は重い息を吐いた。彼の思考は抜け出せない穴の中に落ち込んでいる。救いのない暗い穴だ。そして彼の存在が続く限り、そこから抜け出すことはできない。彼がそこ

から救われることがあるとすれば、良心も慈悲も――彼の彼たる所以をすべて放棄して、殺戮に心を動かされなくなった時だけであり、そうなればもう彼の人格は消滅するに等しい。

静信は息を吐いた。

「人が存在し続けるということは、それだけで苦しいこと……」

「本当に、そうです」

彼は言って、そして闇の中、下生えを掻き分ける音がした。枯れた草を折りしだき、彼の気配は遠ざかっていく。やがて風音の中に紛れて消えた。

静信は深い溜息をつき、そして寺務所に戻って原稿用紙を広げた。

それが罪であることを彼は知っていたし、その罪によって、自分が秩序から受け入れられないのみならず、完全に拒絶されるだろうことを、理解していた。神は彼の罪を見逃さず、彼の罪を赦さないだろう。彼は裁かれ、楽園を追われる。

事実、彼はそのようにして、荒野に放逐された。

故郷を失い、神を失い、秩序に受容される可能性を失った。弟を失い、世界を失い、彼には呻吟と悔恨と呪いしか残らなかった。弟を屠ることで、彼が得たものはなかったし、救われるものもなかった。

誓って、お前を殺したいわけではなかったのだ。

彼は前方の、すでに薄闇に覆われた虚空に向かって叫ぶ。それに応えるように、彼方に蒼く鬼火が点った。

彼は引き寄せられるように歩み寄る。鬼火に取り巻かれ、屍鬼がそこに立っている。弟の目は、やはりじっと彼を見つめていた。どんな非難の色もない双眸が彼をひたと見据えている。

今や弟は絵の中の人物のようには見えなかった。弟の立つ荒涼たる大地、暗澹とした夜、その光景は、少しも絵のようには思われない。それは陰鬱な一枚の絵画であり得たはずだ。にもかかわらず、少しもそのようには見えず、ゆえに彼もまた絵を見る自分という隔絶を、些かも感じなかった。

緑の丘、周囲を取り巻く荒野。それは逆に言えば、荒野の中、丘は完全に隔絶された異界だったということだ。荒野の中の異物、その異物の中にあって、彼はある種の異端者だった。だからこそかえって、荒野にあることがふさわしいのかもしれない。むしろこの流離の地においては、弟のほうが異物だった。

荒涼たる大地を流離う男の絵、――彼はひょっとしたらそういう暗澹たる絵の中に入り込んだのかもしれなかったし、その絵を見ているのは弟のほうなのかもしれなかった。絵の中の住人にとって、鑑賞者は屍鬼となった弟のように異物感を感じさせるものなの

かもしれない。ひょっとしたら、緑野に立つ弟を見守っていた彼は、弟の目からすると屍鬼のように見えていたのだろうか。

緑野に立つ弟の姿は、記憶の中にあってさえ彼を打ちのめした。もはや丘を追われ、戻る術(すべ)もないと言うのに、彼の中にはその絵の中に入りたいという焦燥が満ちた。

彼が弟に対して凶器を振り上げたのは、実はそうやって絵を破壊することによって、ひと思いに自分の苦痛と焦燥に終止符を打ちたい、という衝動によるものだったのかもしれない。

真実、世界から切り離されてしまえば、彼は完全に世界を喪失する。しかしながら少なくとも、彼はそれによって、なぜ自分が世界に受容されないのだろう、という悲嘆からは解放されることになった。

世界が彼を拒むのは、彼が罪人だからだ。

なぜ、と理由を考えるのは、それを解き明かすことによって世界に受容されるのではないかという期待を捨てられないからに他ならない。期待を捨てられないにもかかわらず、それが依然として遠いことに苛立(いらだ)つのだ。

彼は弟を屠った殺戮者となることで、彼自身の中に完全な絶望という、ひとつの安定を作ろうとしたのかもしれなかった。

5

元子が目を覚ますと、枕許の時計は午前二時を過ぎていた。慌てて布団を撥ね除け、身を起こした。
身に付けているのは部屋着のままだ。娘の志保梨が倒れて以来、元子はそうして寝間着に着替えることもないまま、座敷の隣で寝起きをしている。志保梨は座敷に寝かせてあった。部屋の襖は一枚だけ開いたままにしてある。そこからスタンドの明かりが点った座敷と、そこに展べた布団に横たわる志保梨の姿が見えた。
寝過ごしてしまった。十二時には交代するから起こしてくれと、姑の登美子に頼んでおいたのに。座敷に入ると、登美子は志保梨の枕許で眠っている。元子はなんとなく溜息をついた。
「お義母さん、代わりますから、起きて寝に行ってください」
軽く登美子を揺すったが、座布団を枕に横になった登美子には反応がない。とりあえず登美子はそのままに、志保梨の顔を覗き込んだ。
志保梨は小さく、喘ぐように唇を開いていた。小さな顔は血色が悪く、古びた紙のような色艶をしていた。長い睫毛は固く閉ざされている。その寝顔がいかにもいたいけで、

元子は胸が痛むのを感じる。これほど幼く頼りなく、しかも愛しい。
　そっと手を伸ばして小さな頬を撫でた。熱は下がったようだった。安堵して、元子は異常に気づいた。あまりにも呼吸が静かすぎはしないだろうか。
　まさか、と思った。気のせいだわ。
　思い過ごしを確認するために手を翳して志保梨の鼻先に持っていった。呼気は感じられなかった。
　喉の奥で声にならない悲鳴がつかえた。吐き出せなくて息が詰まる。
　指先で探り、耳を寄せてみる。軽く頬を叩き、身体を揺する。
　元子は登美子を振り返った。
「——お義母さん！」
　登美子を揺すり、胸を叩いた。登美子のほうは安らかな寝息を立てていた。
「お義母さん！　起きて！」
　元子の登美子を揺する手は、次第に荒くなった。襟首を掴み、力任せに揺する。
「なんで寝てるの！　どうして起こしてくれなかったのよ！」
　登美子がうっすらと目を開けた。
「起きなさいよ、何を暢気に寝てるのよ！　あたしが代わるから起こしてって」
「なに……」

登美子は寝ぼけた声を出す。異常を察知した様子がなく、眠そうにまた目を閉じた。
元子は息が詰まった。揺する手が勢い余って登美子の頭を座布団に打ちつけた。
「起きなさいよ！　寝ぼけてるんじゃないわよ、志保梨が――あんたのせいで！」
元子は襟首を摑んだまま登美子の頭を引き上げ、座布団に叩きつける。登美子は呻き、顔を歪めたが、抵抗するでも悲鳴を上げるでもない。悲鳴を上げたのは元子のほうだった。
「この糞婆ァ、志保梨を死なせたわね！」
元子は登美子を投げ捨て、志保梨の身体を搔き抱いた。志保梨、と叫んで泣き崩れる。
登美子は呆然としたように身を起こした。元子と孫を、怪訝そうに見た。首を傾げ、緩慢な動作で首筋を搔いた。

十四章

I

二十二日、早朝、安森和也(かずや)は異様な物音を聞いて目を覚ました。飛び起きてみると、隣に寝ていた妻の淳子(じゅんこ)が痙攣(けいれん)している。慌(あわ)てて救急車を呼んだが、共済病院に到着するまでもなく、妻は死んだ。急性心不全、と診断された。

安森厚子は嫁の急死に自失しながらも、心のどこかでひとつの言葉を反芻(はんすう)していた。伊藤郁美が言った「起き上がり」という言葉が忘れられない。何かがいる。それが自分たちの死を望んでいる。それは夜に現れる者で、鬼のような種類の何かだ、という気がしてならなかった。それは分家の人々を食らいつくし、いよいよ厚子の家に忍び込んできた。これから鬼は厚子の周囲で猛威を奮い、厚子の家庭を根こそぎ破壊するだろう、という予感がしてならなかった。

(そんなはずはないわ……)

起き上がりだなんて。そんなものを信じるのは、郁美のような狂信者だけだ。そして、郁美の糾弾がどんな茶番に終わったか、厚子だって知っている。

だが、厚子は嫁の遺体を連れて村に戻りながら、車の窓から見た村の風景に、どこか禍々しいものを感じないではいられなかった。死んでいく人々、村を捨てて出て行く人々。逆にやって来る余所者たち。多くは駐在の佐々木のように得体が知れず、兼正のあの住人のように、姿を見かけることがない。いるはずなのにいない新住人、そここにできた空き家と、そこに潜む暗闇の気配。村の中に侵入し、あちこちに潜んでいる「死」。

（鬼だなんて、あり得ない）

厚子は自分にそう言い聞かせる。絶対にそれだけはないと断言できる。

（けれども……）

工務店では死に事が続いた。厚子の家でも死人はこれで義一に続いて二人目だ。別に迷信じみたことを信じるわけではないものの、なんとなく験が悪い気がすることはたしかだ。

そう——今度、チャンスがあったら、溝辺町に行って神社に参拝し、お祓いをしてもらおう。単なる気休めにすぎないが、気休めには気休めなりの意味があるものだ。

思っていると、夫の一成がぽつりと言った。

「淳ちゃんの葬儀は、どうするかなあ」

どうするって、と厚子は問い返した。一成は憂鬱そうにハンドルを握って前方を見て

いる。
「どうも最近、いろんなことを蔑ろにしてきた気がするんだよ。考えてみれば、仏事も神事も機械的にこなしていた気がする」
「そうね——本当にそうだわ」
「やっぱり身は慎まんとな。だから淳ちゃんの葬式もそれなりにきっちりしてやりたいんだけどな。ただ、淳ちゃんは外場葬儀社と契約したとか言ってたろう」
厚子は渋面を作った。そう、淳子は何を思ったのか、尾崎医院にはかからず、江渕クリニックに自ら行き、そしてそこで外場葬儀社の契約書に判をついていた。厚子は前を行く息子の車に目をやる。息子の和也もそれを聞いて驚いていたが、厚子らも驚き、狼狽した。縁起でもない、と思ったし、契約によれば無宗派葬儀だと言う。僧侶を呼ばない、ということらしいが、寺との関係からいってもそんなことができるはずがなかった。
「なあ。淳ちゃんのやりたいように、やってやったらどうかなあ」
「そんな、まさか」
「でも叔父さんの葬儀があああだったろう。若御院しか来れなくてさ。寺も手一杯なんだよ。それを考えると寺に頼むのも悪いし、ああいう寂しいことになるのは淳ちゃんが可哀想な気がしないかい」
「……そうねえ」

「葬儀社の葬式は変わってるらしいが、なんでも、何もかもやってくれるそうだよ。そうしたら、おれたちも余計なことを考えずに淳ちゃんのことだけ考えてやれるってもんじゃないかな」

そうかもしれない、と厚子は思い、手の中の死亡診断書が入った封筒に目を落とした。土葬にする村では、出張所のほうに届けを出さないと埋葬許可が下りない。もう何度、同じものを提出し、同じ書類を受け取っただろう。何度、辛く神経のすり減る儀式を執り行なっただろう。正直に言うなら、このところの葬式続きで、厚子ももう葬式には辟易していた。淳子の死を軽んじるわけではないが、何もかも人に任せられるものなら任せて、ただ可哀想な嫁のことを追慕してやりたい、という気がした。

「そうね。……和也に相談してみましょう」

「うん。——なあ、淳ちゃんの葬式が終わったら、八幡さまに参拝に行くか」

厚子は力を込めて頷いた。

「ええ、それがいいと思うわ」

2

二十二日は、爽やかと呼びたいような秋晴れの一日になった。律子は喪服に着替えて

家を出る。尾崎家も喪の装い、参列者も陰鬱な白と黒。あまりに見慣れた、まるで村の一部であるかのようなその光景。
　応接間に行って、スタッフと会い、今日の仕事の分担を決める。座敷に顔を出して敏夫に挨拶をしたが、敏夫の顔色は昨日よりもずっと良かった。とは言え、憔悴の色は拭えていない。どこか気落ちしたふうでもあり、虚脱しているふうでもあった。
「身体は大丈夫ですか？」
　律子が訊くと、苦笑めいた笑みを零す。どこか皮肉な色の漂う、いつもの通りの笑みだった。
「死にゃあしないだろう。おれみたいなのは長生きすることになってるんだ」
　そうですね、と律子は呟いて笑った。
「だがまあ、これなら診察室に詰めているほうが楽かな。早く拷問に終わってほしい気分でいっぱいだよ」
　相変わらずの言いように、ひっそりと微笑んで持ち場に戻った。駆けつけてきた恭子の両親が泣き崩れているのが哀れだった。
　武藤と妻の静子が受付に立ち、律子らは応接室に控える。聡子の姿が見えなかった。
「やすよさん、聡ちゃんは」
「来てないわねえ。ひょっとしたら、今日は来ないかもね」

そうね、と清美は溜息をつく。

「昨日の様子からすると、そうかもねえ。ひょっとしたら聡ちゃんも辞めるのかしら。寂しくなるわね」

「まさか……」

律子は言ってみたが、やすよも清美も、もうそれを覚悟しているふうだった。

「先生には先生の事情があるんだけど、聡ちゃんにしたら、たまらないでしょ。雪ちゃんとは仲が良かっただけに。奥さんもああで、村の人とも色々あって、きっといっぱい屈託ができちゃったと思うのよね」

清美が言うと、やすよも頷く。

「思うところはあるだろうねえ。これが普通の状況だったらさ、給料のためだと思って我慢するんだろうけど。でも、仕事はあの有様でしょ。わざわざ実家を離れて休日を返上して、危険を承知できつい仕事をしてたわけだし。色々と思うところができて、それでもあれを続けられるかって言うと、やっぱりねェ」

「……そうですね」

「聡ちゃんはそもそも、村の人間じゃないしさ。これまでだって、良くやってくれたわよ。でも、さすがにもう嫌気が差してるんじゃないかしらねえ。そうだとしても、責めるわけにゃいかないわよね」

律子は頷いた。仕方ないこととは思いつつ、心寂しい。大切なものを喪失しつつある、という気がしてならなかった。孤立していく。いろんなものから切り離されていく。
脳裏に国道が浮かんだ。朝靄の中に消えていく道の先に存在するのは、あの夏の日に律子が手にしていた「日常」だった。

喪服を着た人の群が、北へ向かって流れていく。タツはそれを店先から眺めていた。
ついに尾崎医院でも葬式だ。つい先日は田茂でも葬式があったらしいし、それはとう村の中枢に到達した、という感じがした。
「尾崎でも葬式だなんてねえ」
弥栄子は感慨深気だ。そうだね、と武子は葬式に向かう人々を目で追う。妙な沈黙が降りたところに、笈太郎がやって来た。
「タツさん、タツさん」
笈太郎は勢い込んでいる。
「伊藤の郁美さんが消えたって聞いたかい」
「いや」タツは目を見開いた。「消えたって。いなくなったのかい？　そう言や、近頃、姿を見かけないけど」
「そうなんだってさ。いやね、おれも郁美さんの姿を見かけないが、どうしたんだろう

と思ってね。行ってみたら家が蛻の殻なんだよ。近所の者の話じゃあ、どうやら一週間ほど前に親戚の家に行くとか言って出て行ったらしいのさ」
タツは瞬いた。
「兼正に直談判に行った、その頃じゃないか」
「うん、そうみたいだよ。その翌々日から姿が見えないらしいからね。娘の玉恵さんが残ってて、親戚のとこに行ったたって、そう言ってたらしいんだが」
「あんな騒ぎをしでかして、村にいられなくなったのねえ」
弥栄子が溜息まじりに言う。武子が肩を竦めた。
「あの人がそんなに殊勝な性分だとは知らなかったわ」
「さすがの郁美さんでも、恥ずかしくていられなくなったんだろうなあ」と、笈太郎は言う。「時期が時期だけにさ、親戚の家に用があって、ってのは怪しいと思うよ、おれは。でも、つい昨日だかに、玉恵さんも母親のとこに行くって言って出て行ったらしいけどね」
「あらまあ」と、弥栄子は嘆息する。「そりゃあ、寂しくなるわねえ」
武子が鼻白んだように弥栄子を見た。
「なによ、あんた、嫌ってたくせに」
「そうだけど」

タツは眉を顰めた。郁美の親戚の話というのは、聞いたことがない。いないわけではないだろうが、疎遠なのではないだろうか。兼正に押しかけた、その翌々日、というところが気になった。別段、村の者が姿を消すのは、近頃では珍しいことではないものの、妙にタイミングが良くはないか。

（こりゃあ……）

タツは葬儀に向かう人々を見つめた。

郁美は恥をかいたからと言って、姿を隠すような女ではない、と思う。恥だと思えば、その恥を隠すためにいきり立つ、そういう女だと、タツは了解していた。

（ただごとじゃないかもね）

兼正に押しかけて、住人を吊し上げた。そして姿を消した。ひょっとしたら兼正の住人に何かをされたのかもしれない。あれ以上、妙なことを言わないように。——なぜなら、郁美は正しかったから。

タツは笈太郎たちのほうをチラリと見た。これは口に出さないほうがいいだろう。想像にしかすぎないし、もしも当たっていれば、今度はタツが姿を消すことになる。

登美子の様子がおかしいのではないか、——そう気づいたのは加奈美だった。

志保梨の通夜だった。立て続け、三度目の葬儀に、元子の親族たちは暗澹とした顔を

している。通夜にやって来た溝辺町の僧侶も、怪訝な顔をしていた。元子は身も世もなく泣き伏したまま、その側に坐った登美子は生彩を欠いている。気落ちしているのは当然のこと、虚脱しても無理はないと思えたが、それにしても妙に茫洋とした顔をしているのが気になった。孫の通夜が行なわれていることを、理解していないようだ、と思う。精神的な衝撃を契機に、老人がボケ始めるという話もあるが、ひょっとしてそれだろうか、と思った。そう疑いたくなるほど、登美子は反応が鈍く、感情も摩耗しているように見えた。

「ねえ」加奈美は、元子にそっと訊く。「お義母さん、大丈夫なの？　何か変じゃない？」

元子は頭を振ったが、そもそも加奈美の言葉など端から聞いていない印象を受けた。

「ねえ、それより茂樹は大丈夫だと思う？　村を出たほうがいいかしら。もしも、茂樹にまで万が一のことがあったら、あたし」

泣きながら加奈美のスカートを摑む。これに対して、加奈美は答える言葉を持たなかった。今、この村で他人の安全を保障できる人間がいるのだろうか？

沈黙する加奈美の顔を食い入るように見て、元子は泣き崩れる。

「酷いわ。あたしの子供なのよ。なのにどうして、誰も彼もあたしから奪っていこうとするの」

「元子、誰もそんなこと考えてないわ」

嘘よ、と元子は声を上げて泣く。加奈美はそんな元子の様子に危機感を覚えないではいられなかった。
「……茂樹くんを連れて、一度、村を離れたほうがいいかもね」
ぴくり、と元子は顔を上げる。加奈美は微笑んだ。実家にでも帰ってみれば、と勧めたいところだが、あいにく元子は村の出身だ。両親はもういないが、兄が村に残って家を継いでいる。
「……やっぱり、そう思う?」
「別に、誰かがどうこうという話じゃないわよ。でも、元子もいろんなことがあったし、少し落ち着いて気持ちを整理する時間が必要だと思うの。親戚の家にでも行って、しばらくぼうっとするのがいいんじゃないかしら」
そうね、と頷きかけ、元子は急に顔を歪めた。
「——でも、駄目よ。できない。そんなこと、させてくれないわ、お義母さんが」
「言ってみるだけでも、言ってみたら?」
駄目、と元子は怯えた顔をした。
「……駄目よ。そんなこと、できない」
「なぜ?」
問いかけたが、元子は拒むように頭を振る。駄目、と頑是無く繰り返した。

3

大川は憮然として斎場に坐っていた。派手な祭壇はスポットライトで照らされ、妙な音楽が流れている。速見が粛々と「別れの辞」なるものを述べていたが、ひどく上滑りで軽薄なものに思えた。

それ以上に大川を憮然とさせるのは、集まった人々の奇異の目だった。客は一様に夜間の葬儀に怪訝な顔をしている。その内実がこれなのだから、どれほど呆れているだろうと思うと腹が立った。尾崎が葬式だから、と誰もが納得し同情めいた顔をするのも気に喰わない。なぜ息子を失ったうえ、こんな屈辱を忍ばねばならないのか、と思えてならなかった。

「まったく、こんなみっともない……」

大川の後ろで母親の浪江が零している。好きで頼んだわけじゃない、と大川は気が荒れるのを感じた。口を開けば、尋常じゃない、恐ろしいと繰り返す従業員の松村、大川の顔色を窺うばかりで、何か言いたげにしながら口を開かない妻。それとは反対に、あんなろくでなしのためにひたすら悲しんで、奇妙な葬式にも会葬者の奇妙な目にも頓着する様子のない子供たち。親戚は大川を責めるような目で見ながら、しきりに首をひね

っている。つい先月、縁続きで葬儀があったばかりだから、こんなに葬式が続くなんて、と不安そうな面持ちだった。村はどうなっているのか、妙な噂があるが本当か、と従兄弟の大川長太郎などは盛んに言う。――そうやって誰もが自分のことにかまけ、大川の苦々しい気分を忖度するふうでないのが忌々しかった。

苦虫を嚙みつぶした気分で式次第を耐える。弔問客に大川が謝辞を述べると、式は献花に移った。会葬者が白い花を棺の中に入れていく。一通りそれが済むと、いよいよ棺に蓋がなされて、遺族に石が渡された。棺に釘を打っていく。

大川は早く終わってほしい一心で釘を叩いた。息子との別れ、などという感慨は、身の置き場のない羞恥と苛立ちに消し飛んでいる。

「それでは、いよいよお別れでございます」

速見が意気揚々と言って、すると会場にはわずかにスモークが焚かれ、棺は台の下へと沈んでいった。大川は閉口すると同時に、こんな茶番もあと少しだ、と安堵する思いがした。

出棺だと促され、大川は会葬者のあとについて会場を出る。斎場の裏手にあるホールで待っていると、二枚扉の向こうから粛々と白布に七条袈裟をかけられた棺が運び出されてきた。会葬者に蠟燭型のライトが手渡される。大川が棺を載せた輿の引綱を取り、豊を筆頭に親族の男たちが輿を担ぎ上げた。かず子は遺影を抱き、浪江と瑞恵が花束を

持って葬列は前に進み始める。大川の墓所は川を渡った水口から東山に入ったところにある。上外場にある斎場から、途中、村道を通って二之橋までを進まなければならないのが苦痛だった。道路際（ぎわ）に立った人々が、奇異の目で葬列を見送っているのがよく分かる。

橋を渡り、山の中に入ってようやく息をついた。林道を逸（そ）れ、舗装していない杣道（そまみち）に入ると暗いだけに足場が悪い。杣道の両脇（わき）に照明がいくつか据えられていたが、あまり助けにはなっていなかった。

輿を抱えている連中が転ばなきゃいいが、と思ったとき、背後で豊の小さな声がした。引綱を後ろに引かれる感触があり、とっさに大川は振り返って輿に手を伸ばす。後ろざまに転びそうになった豊らは、踏み留まろうとした反動で前のめりになり、輿がぐっと大川の身体にのしかかってきた。大川はそれを懸命に支える。棺を落とすような不様な真似（まね）だけはどうあってもしたくなかった。

輿はかろうじて持ち堪（こた）えた。安堵の息が周辺から漏れる。もう墓所は目の前だった。大川も安堵し、手の中の引綱に目を落とした。よく持ち堪えた。——だが、妙に輿は軽くはなかっただろうか。

輿そのものの重さがあり、棺そのものの重みがある。棺そのものが存外に重いものだ。そこに体格の良い篤が納まっている。大川は自身も巨漢だから、弔組に出ると、輿担ぎ

に駆り出されることが多い。このところ葬式も続いていた。身体で輿の重みを知っているが、それにしては、どうも輿が軽いように思えてならなかった。

（まさかな……）

大川は頭を振る。

あと少しの辛抱だ。それでこの、忌々しい儀式が終わる。

4

電話が鳴っている。

結城はその音に気づいていたが、じっと息子のベッドに坐り込んだまま、それをただ聞いていた。

おそらくは広沢か、そうでなければ武藤だろう。二人は再三、結城の様子を見に来てくれたし、頻繁に食事にも誘ってくれたが、結城には出かける気がしなかった。工房は閉めたまま、広沢や武藤に引きずり出されるのでなければ、二人が差し入れてくれる弁当で過ごす。葬儀の日からずっとその状態で、二人は何度も梓に連絡を取れと勧めてくれたが、もちろんそんなことをする気にもなれなかった。

梓がいなくなってみると、家の中の荒廃は早かった。梓がいる頃には、結城もそれな

りに掃除をしたし、時には食事を作ることもあった。後片付けを手伝うことは頻繁だったが、もう自分一人だけなのだと思うと、何をする気にもなれない。居間にも台所にもゴミや酒瓶が堆積していき、今やかつての整然とした様子を留めているのは夏野の部屋だけだった。ここだけは結城も投げ遣りに扱う気になれず、いきおい夏野の部屋で過ごす時間が増えた。家の中の荒廃を食い止めようという気には一向になれなかったが、やはり荒廃の直中にはいたくないらしい、と自嘲を込めて自分を振り返る。

息子を亡くした衝撃は大きかった。無為に手を拱いて死なせてしまった悔恨は深い。おそらくは梓に見捨てられたことも結城を意気消沈させているのだろう。支える相手も支えてくれる相手もないと、立ち上がる踏ん切りが見つからなかった。

それよりもなお、さらに結城を嘖んだのは、葬儀の日、武藤保が漏らした一言だった。夏野は村を出たがっていた、と保は言った。結城はその時まで、息子がそれほど都会に戻りたがっていたことを知らなかった。それは日に日に結城の中で重く冷えた核となって育っていった。ことに息子の部屋にいて、中断されてしまった様々なことを目にするにつけ、それは重く冷え固まっていく。

その意味で、息子の部屋にいるのも、結城にとっては辛いことだった。だがしかし、不思議に結城は夜になると、どうしてもここにいないではいられないのだった。

今夜も、薄暗い中に坐っている。ベッドの枕許にある目覚まし時計が——二度と持ち

主を起こすことのない小さな機械が、未だに時を刻んでいる。その朧に蒼い光で、すでに日付が変わったことを知る。
これで何日が経ったのだろう。葬儀が日曜だったから、もう八日目に入った。
それだけの間、こうして坐り込んでいたわけだ、と結城は自嘲の笑みを零した。こんな状態でも不思議なほどはっきりと日付を自覚している自分がおかしかった。
(もう八日だ……)
いい加減に立ち直らなくては。広沢も武藤も心配してくれている。
もう踏ん切りをつけてもいいだろう、と自分に言い聞かせた。
「こうして坐っていても、夏野が帰ってくるわけじゃない……」
自分に向かって呟いた言葉は、思いもかけないほど深い喪失感を結城に突きつけた。
それに狼狽え、そして結城は自分がそれを待っていたことを自覚する。
「……そうか」
結城は顔を両手で覆う。
自分はそれを待っていたのだ。そこに一縷の望みをかけて、自分は愚かにも夏野を土葬にした。ひょっとしたら、万が一、何かの奇蹟でもいい、夏野が起き上がって帰って来はしないだろうか、と期待して。
だが、今日まで一度も、なんの異変もなかった。あるはずがない、起き上がりなど存

在しないのだ。いくら待っても、夏野は帰ってこない。——永遠に。
それを納得して、結城はひとしきり泣いた。自分の手の甲を嚙みながら、村を出て行こうかと思う。結城はここで何も得なかった。すべてを失った。
（だが、村には夏野が眠っている）
夏野を置いては出て行けない。強引に連れてきた。村に閉じ籠めた。こんな村に来なければ、おそらくは死ぬことはなかっただろう息子。その息子を村に残し、自分だけが出て行くことなど、できるはずがなかった。
結城はすでに、息子の死体によって村に結びつけられていた。二度と解くことはできず、この桎梏は死ぬまで結城をこの悔恨に満たされた場所に繫ぎ留めるだろう。
結城はそんな形で、自分があれほど望んでいた地縁を得たことを知った。やっと得たそれは、重荷でしかなかった。

5

徹は山道を、足を引きずるようにして歩いた。徹が襲っていた老人は、今日の襲撃の途中で痙攣を起こした。おそらく、死んでしまうのだろう。
（また殺した）

罪を重ねていく――こうやって。

西山の斜面を登る途中で、一人の男に会った。村から引きあげてきた彼を、後藤田秀司というのだと、徹は仲間の噂で知っていた。この夏、村で最初に甦った男。年老いた母親を憐れみ襲って、殺したという自責の念でぼろぼろになっていった男。仲間の多くは、秀司に対して蔑む色を隠さなかったし、正雄などは露骨に軽蔑して邪険に扱っているようだったが、徹には彼の気持ちがよく分かった。自分の凶器で自分を刺して、それで束の間、酔った気分になり、そして退廃の中に落ち込んでいった。自分もできることなら、そうなってしまいたい。歯止めをかけるのは、そうやって常に千鳥足で歩く秀司が、そうなることでかえって殺戮に対する罪悪感を失ってしまっていることだった。罪の意識を逃れるために自傷する。だからもう罪の意識がない、そういうことなのだろう。徹もまた罪を忘れることを望んでいたが、さらなる罪へと無制限に踏み込むことは恐ろしかった。だから秀司のようになりたい一方、秀司のようにだけはなりたくない。

ふらふらと歩く男を、蒼褪めた視野の中で見送り、徹は黙々と歩く。西山の林道まで来たとき、徹は少しの間、迷った。このまま北山に向かって墓地に顔を出そうか、それともこのまま山入に引きあげようか。

おそらく夏野は甦生しない。そもそも甦生の望みがあれば、夏野はとうに山入に移されているだろう。だから彼は、平穏な眠りについたのだ。

もう行っても無駄だ、と思いながら、心のどこかで諦(あきら)めることができなかった。徹は杣道を拾い、北山にある寺の墓所へと行かずにおれなかった。あとわずかで寺に出る、ちょうどそこで待ち受けている人の姿があった。

その男が誰で、どういう存在なのか、徹たちはみんな分かっている。

「お墓参りかね?」

正志郎は薄く微笑(ほほえ)んだ。この男は徹たちの仲間ではない。少なくとも彼は人だった。にもかかわらず、兼正の住人たちを庇護(ひご)しており、そのことによって仲間として受け入れられている。

徹は俯(うつむ)いた。叱責(しっせき)があるだろうことは、覚悟していた。

「あまり寺に近づくのはどうだろうな。あそこの若御院は、我々の存在に気がついているからね」

正志郎は、「我々」と言ったが、正志郎と徹は同一の存在ではない。

「……兼正に行きなさい。沙子が呼んでる」

徹は頷(うなず)き、唯々(いい)諾々と踵(きびす)を返した。墓場に通っていることを知られていたのだ。

兼正の住人からの呼び出しは、制裁を意味していた。佳枝(よしえ)の呼び出しなら叱責だけで済むが、辰巳の呼び出しなら制裁がつく。兼正に呼び出されるのは最悪だった。正志郎か、あるいは沙子から叱責があり、辰巳の制裁がある。場合によっては重大なペナルテ

ィが課せられた。それらを拒む権利は、徹たちにはない。罰を恐れて逃げ出せばどうなるか、誰もが嫌でも知っている。徹も一度だけ、逃げた仲間の埋葬に参加したことがあった。

捨て鉢な気分で兼正に向かい、まるで生のある客のようにインターフォンを押した。若い女の声が答えたが、その声に徹は聞き覚えがなかった。兼正に住む側近たち。徹らには、ほとんど接点がない。

通用口を開けてくれた女の顔に、徹は見覚えがあった。もともとは中外場にいた三村(みむら)安美(やすみ)だ。初秋の頃、突然引越した三村家の家族のうち、安美だけが山入にいたが、最近、姿を見かけないな、と思っていた。都会に行ったのかと思っていたが、こんなところにいたのか、と思った。

「武藤ですけど。……桐敷の旦那(だんな)さんに来るように言われて」

そう、と安美は頷いた。中へと招かれ、徹は通用門を潜(くぐ)る。ごくありきたりな「家」の顔をした建物に近づき、玄関から中へと踏み込んだ。

兼正の屋敷に来るのは初めてだった。いつか来ることになるだろう、という予感はしていた。広いホールに入って安美はすぐ脇の部屋を示す。

「そこで待ってて」

はい、とうなだれたまま、徹はその、応接室のような内装の部屋で所在なく立ってい

た。
ほんの少しして、食器の立てる微かな音がした。振り返ると沙子がコーヒーカップをふたつ、トレイに載せて入ってくるところだった。徹はひそかに笑う。まるで、人間の客のようだ。応接室に通されて、コーヒーを振る舞われる。きっと沙子は、坐れと言うのだろう。
「坐って」
果たして、沙子がそう言って、徹は泣きそうな気分で笑った。沙子は怪訝そうにしてカップをテーブルに置く。徹はすでに通常の食物を受けつけないが、水分などは摂って摂れないこともなかった。おそらくは必要ないのだろうが、山入でも飲み物だけはふんだんに与えられる。人が集まったとき、そこにせめて酒ぐらいないと、居場所を見つけられないものらしい。飲んでも酔いはしないのだが、山入における酒の消費量は、決して少なくないと思う。
「……お寺の墓場に通っているんですって？」
徹は頷いた。
「あなたは、彼を殺したことに苦しんでいるのね？」
「当たり前じゃないか」徹は目の前の少女を見返した。「夏野は知り合いだったんだ。どうして、あんたたちは平気でいられるんだ。これは人殺しなんだぞ」

沙子は微笑んだ。どこかに翳(かげ)りの含まれた笑みだった。

「屍鬼とは人を狩るもの。人に敵対するもののことなの。仕方ないじゃない、人を襲わなければ屍鬼は死んでしまうのだもの」

「でも」

「人だって生き物を狩るでしょ？　命を狩って生きながらえているんじゃない。それと同じことだわ。これは殺人じゃないわ。単なる生きるための手続きなの」

「人は家畜じゃない。牛や豚とは違う」

そうね、と沙子は目を伏せた。

「たしかに人は家畜とは違う――違うように見えるわ。家畜は喋(しゃべ)らない、悲しんだり喜んだりしないわね。――でも、本当に？」

徹は眉根(まゆね)を寄せて沙子を見た。

「家畜だって死にたくはないのよ。自分の死から逃れたいと思わない生き物はいないわ。きっと、いない。だって『生命』は生存のための機械なんだもの。すべての生き物は生きる。生存のために生存しているの。なのに死にたくないのも、死ぬことを悲しむのも人間だけだと思ってる。違うわ。悲しみは人間にだけ存在するんじゃない。少なくとも、死の恐怖は人間だけに存在するんじゃないでしょ？　ただ、人間には人間的な悲しみや恐怖でなければ理解できないだけのことなのよ」

「でも」
「危害を加えられたり加えられそうになれば、鶏や牛だって逃げるでしょ？　生き物はすべて死にたくないの。本質的には草や木だってそうよ。だって生命は、生きるためにプログラムされてるんだもの。生命を維持して自分の分身を残すために存在しているの。それが生命というものが本質的に持っている性質なのよ」
沙子は言って、花瓶に活けられた花を示した。
「あの花だってそう。生きるために存在しているの。そのために存在しているのに、生きることを妨げられるのは生命にとって悲劇だわ。その点に関しては、人も動物も植物も、何ら違いはないのよ。——あの花は切り花ね。切り取られてしまった。死に瀕しているわ。けれども水を上げて、花を維持してる。死に対して抵抗しているの。すべての生命がそう。死を恐れてる。死に対しては抵抗するの。それを人間は自分たちのために踏みにじる。家畜を殺し、たかだか自分の目を慰めるだけのために、こうして切ってくるのよ。
あなたが今やっていることと、これまでやってきたことの間には、なんの違いもないの。あなたは良心の呵責を覚えてるけど、それは今行なっていることが特別酷いことだからじゃないわ。これまでも同じように酷いことをしていたのだけど、制度があなたの良心を守ってくれていただけのことなの。家畜の死や植物の死で呵責を覚えなくていい

よう、これはそういうものだ、と麻痺（まひ）させてくれていただけ」
「そんなふうには思えないよ……」徹は顔を覆った。「あんたの言ってることは分かるよ。きっと正しいんだろうと思う。でも、駄目なんだ」
「どうして？」
「だって人は死にたくないんだ。人を殺すのは酷いことなんだよ。これは理屈じゃないんだ。殺されようとして悲鳴を上げない人間はいないよ。助かろうとして懇願する。そういうもんだろう？」
「家畜だって殺される段になれば悲鳴を上げるんじゃない？」
「それは、そうだけど」
沙子は微笑んだ。
「あのね？　殺される家畜は悲鳴を上げるでしょう？　でも、実はそれは『悲鳴』じゃないの」
徹は顔を上げた。
「それは『悲鳴のような声』なのよ。それが本当に悲鳴かどうかは分からない。だって人間は家畜の心を本当に理解することなんてできないんだもの。ただ、家畜の断末魔の声が人の悲鳴に似た音色をしているから、それを悲鳴だと感じるだけなの」
「あんたはさっき言ったじゃないか。どんな生命だって死にたくないんだ、って」

「そう、死にたくないのよ。だってそれは、そもそもの存在意義に悖ることなんだもの。これはそれとは別次元の問題。

いい？　家畜が悲痛な声を上げるわね？　人はそれを『悲鳴』だと感じる。なぜなら、その声は『悲鳴』であるかのように『悲痛』だと感じられる音色をしているからよ。だから『悲鳴』だと認識するの。でも、人は真の意味で、家畜の心を理解することはできないの。殺される家畜は悲鳴を上げる、――それは死への恐怖の表明、文字通りの悲鳴なのかもしれないし、実は悲鳴なんかじゃ、ぜんぜんないのかもしれないわ。本当のところなんて分からない。人は人としか意思の疎通ができないのだもの。いい？　肝要なのはそこなのよ」

徹は瞬いた。

「本当のところは分からない、意思の疎通はできないの。だからと言って、何もかにも人間に倣って解釈して、悲嘆に満ちた音色の声や眼差しや、悲鳴なんていう人間のサインを動物の中にも読みとって、それで理解した気になるのは愚かだわ。

屍鬼はたしかに、人の心を理解できる。人の恐怖も悲しみも理解できるわ。同じ体系の記号を共有する生き物だから、意思の疎通が可能なの。けれども、それだけのことよ。同じ体系の記号を共有していようといまいと、屍鬼が人を襲うのは襲わなければ生きていけないからよ。人が獣を狩るのと、植物を狩るのとなんの違いもないんだわ。人はた

しかに怯える、悲しむ、恐怖するわ。けれども死に対して怯える人が特別なんじゃない。特別値打ちがあるわけでも、特別値打ちがないわけでもないわ。同じ体系の記号を共有している人と屍鬼の関係が特殊なだけのことなのよ」

「同じ記号……」

「獲物を憐れむ必要なんてないの。これはわたしたちが生きるために、当然のことなんだから。それは人が生命を狩るのとまったく等質のこと。屍鬼と人の関係は特殊だから、特別酷いことに思えるかもしれないけれども、人が生命を狩るのと同じくらい酷いことで同じくらい当たり前のことなんだわ。——少しも変わらない。

わたしたちは屍鬼で、ここは狩り場だわ。人は獲物。それ以上の意味なんかない。ただ、わたしたちの獲物はとても強くて狡猾だから、油断をしたら逆襲してくる。人が獣を狩る以上に危険な狩りなの。だから注意が必要なんだわ。用心深くなければいけない、そうでなければわたしたちは生き残ることができないの」

「でも……」

「わたしたちだって死にたくないの。あなただってそうでしょう？」

徹は俯く。

「死にたくないから、結局、今も獲物を襲っているのよね？」

「……そうです」

「獲物を憐れむな、とは言わないわ。けれども、自分を責めては駄目。自分を責めるくらいなら、自分を憎んで殺せるほどでなければ駄目よ。……それしか選択の余地はないんだもの」

徹は顔を覆った。嗚咽（おえつ）が漏れた。微かに衣擦（きぬず）れの音がして、すぐに徹の肩に小さな感触の手が載せられた。掌（てのひら）は温かみを持たなかったが、その柔らかく小さな感触が優しげだった。

よりによって、徹をこの苦しみの中に突き落とした首領に慰撫（いぶ）されている自分を皮肉だと思う。それでも徹はその小さな身体（からだ）に縋（すが）らずにいられなかった。細い腕が徹を抱きかかえ、労（いたわ）るように撫（な）でた。

十五章

I

寺務所の電話が鳴ったのは、二十三日、夜の九時のことだった。静信は何気なく受話器を取った。受話器の向こうから狼狽えたような女の声が流れてきた。
「あのう、鶴見ですけど」
ああ、と静信は声を上げた。鶴見は昨日、ついに出てくることができずに休んでいた。
「奥さんですか？　鶴見さんの具合はいかがです」
静信の問いに、ごく控えめな声が答えた。
「亡くなりました。それで、お伝えしといたほうがいいかと思って……」
「それは」と言いかけたきり、御愁傷様です、という言葉が喉に引っかかってうまく出てこなかった。なぜなら、静信はこうなることを知っていたからだ。恭子が死んだ。おそらくは病院の下山も十和田、パートの老女の辞職もそういうことだったのだろう。角も同様だし、だとしたら鶴見もそうなのだろうと思っていた。
静信の沈黙を誤解したのか、鶴見の妻女は続ける。

「昨日、あんまり様子がおかしいんで、共済病院に連れて行ったんです。そしたら、肝臓を壊してたらしくて。あのひと、お酒が好きでしたから。血液検査で注意するように言われてたんですけど、晩酌をやめられなくて」

そうですか、と呟いて、静信はやっと悔やみを言った。

「それで、主人が息を引き取る前に、言い残したことがありまして」鶴見の妻は口ごもる。「あの、妙なふうに取って気を悪くしないでもらいたいんですけど、主人がその……寺は今大変だから、手を煩わせちゃいけないって。自分が死んだら、葬儀社に頼んでくれって言って。──それで、どうしたもんかと……」

静信は言葉を失った。これは鶴見の心遣いなのだろうか。それとも、という疑惑が心に重い。もしも心遣いだとすれば、いっそう胸に痛かった。死期を悟ってなお、そこまでの気遣いをしてくれたのか、という思い、そんな人を亡くしてしまったのだ、という思いが錯綜して言葉が出なかった。

「どうしたもんでしょうねえ」

「……ありがとうございます。別に決して妙なふうに受け取ったりはしませんから、どうぞ、奥さんの気の済むようになさってください」

「そうですか？　いえ、せっかく主人が言い残したことでもあるんで、やっぱり」

「分かります。もちろん、お弔いには伺わせていただきますから」

はい、と鶴見の妻は安堵したように息を吐き、そうしてようやく涙声になった。長い間、お世話になりまして、と彼女は言う。こちらこそ、と静信は返した。
電話を切り、奥へと向かう。茶の間では美和子が一人で編み物をしていた。
「お母さん、鶴見さんが亡くなったそうです」
まあ、と美和子は硬直した。
「そんな……なんで」
「肝臓がお悪かったそうです。池辺くんに伝えてくれますか。ぼくはお父さんに報告してきますから」
ええ、と美和子は立ち上がる。静信は離れへと向かった。部屋の外から声をかけたが、返答がなかった。眠っているのだろうか、と思い、戸を開ける。中の明かりは消されている。部屋に踏み込んで明かりを点け、静信は立ち竦んだ。
信明の姿がなかった。ベッドは寝乱れたまま、蛻の殻、部屋のどこにも信明がいない。
静信は血の気が引くのを感じた。慌てて母屋に取って返すと、美和子が池辺と茶の間のほうに戻ってくるところだった。
「お母さん——お父さんがいません」
「そんな」
美和子は悲鳴を上げた。池辺も棒を呑んだように立ち竦む。

「だって、そんなはず……お父さんは自分の足ではどこにも」

静信は頷く。信明の姿が見えないことに気づいたとき、とっさに脳裏に浮かんだのは、どこかに倒れているのかもしれない、ということだった。信明はかつて一度、過度なリハビリを自分に課したあげく、転倒骨折したことがある。

その時のことが甦った。いるはずのない場所に信明が倒れて呻いていた。信明はひそかに無茶とも言える歩行訓練をし、少しずつ距離を延ばして、そこで倒れたのだった。同じことが今度もないとは言えない。

美和子もそう思ったのだろう、慌ててそのあたりを捜し始めた。池辺が光男を呼び、光男と克江が駆けつけた。全員で寺中を捜しまわったが、信明の姿はどこにもなかった。

「どう……しましょう」

光男に問われ、静信は俯く。

「とにかく、警察に」

光男は受話器を取って、駐在所の電話番号をダイヤルし始めた。

信明が自力で寺を出られたとは思えない。誰かが信明を連れ出したのだ。おそらくは、拉致された。

光男が何度かダイヤルして、出ない、と受話器を叩きつけた。

「新しい駐在さんは、夜にしか見かけんと聞いたことならあるけどねえ」

おろおろと言う克江に、静信は眉を顰める。そう言えば、静信は新しい駐在に会ったことがない。ろくに挨拶もないまま、静信のほうも疫病だ屍鬼だと駆けまわって失念したまま今日に至っている。

「今日に限って、早々と寝てるんでしょう。とにかく行って叩き起こしてきます」

光男が勢い込んで寺務所を出て行った。美和子は不安そうに静信の顔を見る。何に対してというあてもないまま、美和子に頷いてみせながら、静信は漠然と、光男は駐在には会えないだろう、と思っていた。いない、出てこないと言って戻ってくる。確信はないが、そういう気がした。

静信は受話器に手を触れ、一瞬、敏夫に連絡をしようかと思った。信明がいない、攫われたのだと思う、と。しかしながら、迷っただけで手を下ろした。それを敏夫に言ってどうなるだろう。敏夫は医者だ。病人の治療はできても、それ以外のことにおいては素人にすぎない。信明の捜索ができるはずもなかった。焦らせるだけだ、益がない。

そこまでを考えて、静信は自分がひどく頑になっていることを自覚した。どうしてだかは分からない。けれども自分は明らかに、敏夫に対して頑迷な態度を取っている。

なぜそこまで自分は敏夫を責めるのだろう。敏夫の行為は軽率ではあったが、それでも敏夫が村人のために尽力していることは疑いがない。焦るあまりの蛮行だとも言える。これを屍鬼による災害だと考えようと、異常な疫病だと考えようと、村が危機的な状況

に陥っていることには違いがなかった。救済が必要だ。誰かが行動しなければこの村は壊滅する。それももうあまり時間がない。
それを分かっていても、かつて「疫病だ」と思ったときのような焦燥感は起こってこなかった。
（このままでは村は……）
荒涼たる廃墟の風景が浮かんだ。それを思うと危機感を覚えるのに、そこに蠢き徘徊する屍鬼の姿を思うと、それもやむを得ない、という気持ちになるのだった。
信明がいない、と心の中で呟いてみる。攫われたか、それとも。いずれにしても、もう生きた信明には会えないだろう。静信は信明を敬愛していた。師父とも言うべき存在だった。失ったことは哀しい。もう会うことはないのだと納得するのは辛かったが、それでも信明を連れ去ったであろう屍鬼たちに対して怒りを覚えなかった。信明を攫った――そしてたぶん殺した屍鬼よりも、自分は依然として屍鬼を殺した敏夫に対して怒っている。
（ぼくは……）
身体のどこかに暗黒がある。それが屍鬼の暗躍を肯定している。かつて自分が死ぬことを良しとしたように、村が死ぬことを良しとしている。
――されば汝は詛われ、此の地を離れ、永遠の流離子となるべし。

彼は常に、世界との間にひとつの齟齬を感じ続けてきた。弟を屠ることで、彼はそれを誰の目にも見える断絶として露わにし、定着することには成功した。それは今から思えば、彼が丘で唯一、成功したことなのかもしれなかった。

隣人たちは最初、誰一人として彼の犯した罪に気づかなかった。賢者もまた、彼の罪には気づかなかった。彼は布に包まれた弟の遺骸に縋りつき、声を嗄らして泣いた。この悲嘆は真実だった。彼は弟と世界を喪失しようとしていた。心の底から、弟の甦生を願わずにはいられなかった。そんな彼を隣人たちは憐れみ、彼のための涙を添えたのだった。

だが、彼の罪は明らかになった。

草叢から街へと、神殿へと弟は運ばれ、彼の手の届かない奥深い一室で秘蹟を施され、高価な香油で清められ真新しい屍衣と布で覆われて出てきた。葬送に先立ち、彼と弟は賢者とともに塔に登った。神にその死を報告するためだった。

狭い塔の最上階には、さらに高い尖塔が建っている。誰も登ることのできぬその頂上に、清らかな光輝が点っていた。賢者はその麓の祭壇に弟の骸を供え、頭を垂れて神の子がその膝許に帰ったことを報告した。

声は尖塔の頂から神託として賢者の上に降った。賢者は光輝を仰ぎ、そして蒼白に変じた面を彼に向けた。それまであった、憐れみと労りの色は、もはやどこにもなかった。

――汝、何たる罪を犯せしか。
彼はただ呆然と賢者の顔を見つめていた。賢者はそれ以上に自失しているように見えた。
不思議にこの時まで、彼は自分の罪が露わになることを想像していなかった。それは決して罪を隠しおおせるだろうと侮っていた、という意味ではない。彼自身、弟を失ったという衝撃、世界との接点を失い、もはや弟とも世界とも触れることはないのだという衝撃に我を失っていたのだった。
彼の悲嘆は真実だったし、彼の涙も紛い物ではなかった。むしろ彼は神の奇蹟によって弟を呼び戻すことができるのではないかと期待して、この塔に登ってきた。
だが、光輝は彼の罪を見逃さなかった。それは隠しようもなく明らかになった。彼は他ならぬ自分自身が弟を殺傷し、彼から弟と世界とを略奪した犯人であることを、ついに知らされることになった。
こうして彼の罪と喪失は確定したのだった。
それまで彼を憐れみ、彼のために涙を流し、慰撫の声を投げていた人々は、猝に石を拾い、泣きながらそれを投じた。もはや涙は彼のためのものではなかった。彼には怒声が打ち寄せた。弾劾が、罵詈が、怨嗟が、呪詛が、彼の身を覆い、彼はその中で、ただひたすら呆然と立ち竦んでいるしかなかった。

彼はその場に打ち倒され、罪人の印をつけられて裁きの間に引きずり下ろされた。凶行の理由を問い、温情を下そうという場で、彼はただの一言も、自らを救うための言葉を発することができなかった。

なぜ、という問いには、沈黙をもって答えねばならなかった。弟をそうまで憎んでいたのかという問いには、否と答えねばならなかった。

賢者は沈痛な色で彼に神託を下した。

――されば汝は詛われ、此の地を離れ、永遠の流離子となるべし。

彼は諾々としてそれを受けた。神殿を引きずり出され、彼が通ったあとには罪を清めるための砂が撒かれた。もはや彼はそれほどまでに呪われていた。城壁までをそのようにして引き立てられ、かつての隣人たちが投じる石に追われ、彼は東にある門に達した。彼は初めてその門を見、そしてそれが開くのを見た。城壁の外には陰鬱なばかりの凍った荒野が広がっていた。

この暗黒を見よ。

丘の光輝にくらべ、この暗さはどうだ。門の内から賢者は荒野を指さした。

これは無明の闇、この昏きは穢れであり、呪いである。

そう言って示して、賢者は彼の背中を押した。たたらを踏んだ彼は荒野によろめき出、その背後で黄金の狭い門は閉じた。

2

恵が「食事」を終えて山入に戻ると、村迫の地所に呆然と坐っている男が目に入った。

恵は暗がりを見通して笑う。そうか、ついに起き上がったのか、と思った。

「……小父さん」

恵は、悄然と首を垂れた男に近づいた。男は途方に暮れたように顔を上げた。

「出てきたのね。起き上がったとは聞いてたけど」

「恵……ちゃん」

男は田中良和だった。田中は起き上がった。そして檻の中で最初の犠牲者を襲った。

襲って——殺した。

「いつ出てくるかと思ってたの。良かったわ」

「君は何を考えてるんだ」田中は顔を歪めた。「良かったはずがないじゃないか。こんな、恐ろしい」

「だって仕方ないことなんだもの。御飯を食べなかったら、あたしも小父さんも飢えて死んでしまうのよ？　それとも小父さん、あたしに死ねって言うの？　飢えて死ねって？」

「君が、わたしを」
「飢えるの、辛いでしょ？　だから小父さんも、襲ったんでしょ？」
それは、と田中は口ごもった。たしかに、田中にはもう、恵を罵る資格がなかった。最初は躊躇し拒んだが、飢餓は辛かった。殺そうというわけじゃない、暴力を振るおうというわけじゃない、ほんの少し血をもらうだけだ、と自分を騙して襲ったが、結果として、若い娘が一人、子供が一人死んだ。ずいぶんと弱った二人を片付けて、初めて田中は外に出してもらえた。田中は殺戮を容認したわけではなかったが、すでにもう殺戮者の仲間だった。
「あれは……誰だったんだろう」
女の顔にも子供の顔にも、田中には見覚えがなかった。
さあ、と恵は素っ気なく呟く。
「村の人じゃないと思うわ。あそこには、村の者は運ばないもの」
田中が恵を見上げると、恵は屈託なげに首を傾けた。
「村の人を攫ってきて閉じ籠めてる家もあるけど、あれは村に狩りをしに行く甲斐性のない木偶のために飼ってるの。やっぱり、起き上がったばかりの人に、知り合いを襲わせるのは刺激が強すぎるんじゃないかしら。だからじゃないの？　最初の家に運ばれるのは、都会から間引いてきた連中よ」

「都会……」
恵はさらに肩を竦めた。
「自動車道を使えば、夜の間に行って帰ってこれるもの。あたしは、まだ出してもらえたことがないけど、毎晩のように車が出て行くわ。帰ってこないこともあるから、向こうにも隠れ家があるみたいね」
そうか、と田中は力無く呟く。こういったことが、村では進行していたわけだ、と何度目かに思った。夏以来、田中の手許に集まっていた死亡届の写し。その実体。
「それで小父さんは、明日はどうするの？」
え、と田中は顔を上げた。
「だから、明日からは自分で食事をしないといけないでしょ？　誰か指示された？」
「いや……でも」
「襲わないわけにはいかないのよ。でもって足がなかったら、村で調達するしかない。溝辺町は駄目よ。この近辺の人は勝手に襲っちゃいけないの。村の人か、そうでない遠方の都会の人か、そのどちらかよ」
そんな、と呟いた田中に向かって、恵は屈み込んだ。
「家族がいいと思うわ」
田中は腰を浮かせた。恵は正体不明の笑みを浮かべて、二、三歩、後退る。

「小父さんは起き上がったんだもの。家族だって起き上がる可能性が高いのよ、知らないの？　家族のことが心配じゃないの？　小父さん一人じゃ寂しいでしょ？　ここに小母(おば)さんや、かおりたちがいればばって思わない？」
「……君は」
「嫌ならいいけど。でも、小父さんが襲わなかったら、他の誰かが襲うのよ。あたしが行ってしまうかも。だって、かおりなら、お人好(よ)しだから、あたしを入れてくれると思うもの。ちょっと泣き言を言ってねだればね」
「そんなことは」
「止めることはできないのよ。そのうちに絶対、誰かが襲うの。襲っちゃいなさいよ。自分の家族じゃない」
「……君は襲ったのかい？」
恵はさも嫌そうな顔をした。
「そんなことするはず、ないでしょ。あたしはあんな人たちに、ここに来てほしくないもの。やっと自由になったんだから」
恵は言って、身を翻(ひるがえ)した。軽く笑い声を立てる。
「明日、起きたら誘ってあげる。それまでに考えておいて」

「ひでえことするのな」

笑い含みの声に、恵は振り返った。集落の南にある沢を上ろうとしたところだった。ここから西山の林道へと抜ける裏道がある。沢の脇に続いた杣道がそれだった。かつて切り開かれ、やがて忘れられて下草に埋もれ、そしてまた仲間たちによって細く踏み分けられた死の道。

「女って、こええ」

にやにやと笑う正雄を、恵は冷たく一瞥した。正雄は薄笑いを浮かべたまま隣に並ぶ。

「そんなに田中って奴が憎いのか？　幼馴染みだったんだろ？」

「余計なお世話よ」

「女ってホント、夏野みたいな中身のないスカした奴が好きだよな。嫉妬のあげく、ここまでするんだから恐れ入るよ」

「嫉妬してるのは、あんたでしょ」

正雄が薄笑いを引っ込めた。

「――どういう意味だよ」

さあね、と恵はそっぽを向く。正雄とはなぜかしら一緒になることが多かったが、恵は正雄が気に入らなかった。最初の頃はさほどにも思わなかったが、一緒にいればいるほど何もかもが癇に障る。

「嫉妬って、おれが誰に嫉妬してるって言うんだよ。ふざけるなよ、問題じゃねえよ、どいつもこいつも」
「そう。あたしだって別に、かおりに妬いてなんかないわよ」
「そうかなあ」
「そうよ」と、恵は足を止めた。「妬いてなんかない。あたしは怒ってるのよ。当然でしょ？　彼を殺されたんだもの。かおりが妙なことに巻き込まなかったら、殺されずに済んだのよ」
「夏野のほうが巻き込んだんじゃないのか？」
「そんなはずないじゃない。彼は、かおりなんか相手にしないわよ。田舎丸出しの冴えない奴なんだから」
「どうかなあ？」
「彼はあんたと違って都会育ちなんだから、かおりみたいな野暮ったい女の子なんかお呼びじゃないに決まってるわ。かおりのほうが巻き込んだのよ。あたしの仇でも討とうと思ったんじゃない。あいつ、そういう奴なんだから。勝手に親友気取りで、いっつも友情を押しつけてきて。そのくせ意気地なしなのよ。だから結城くんのことだって、誘ったんだわ。あたしの気持ち知ってたくせに、裏切り者」
「だから嫉妬だろ、そういうのは」

「あたしは、かおりがあたしを裏切ったことに怒ってるの。あげくに彼は死ぬようなことになったんだから。かおりが殺したようなもんよ。これは正当な怒りなの、あんたの嫉妬とは訳が違うわ」

「何だよ、それ。おれは別に田中なんて奴、知りもしないんだからな。それでなんで嫉妬しないといけないんだよ」

「好きな子を取られて妬いてるほうが、健全なんじゃない。そういうときに嫉妬するのは、人間なら仕方のないことだもの。でも、あんたのはそれですらないんでしょ」

正雄は剣呑な表情を浮かべた。

「どういう意味だよ、それ」

「なりたかったんじゃないの、結城くんみたいに。羨ましかったんでしょ」

「ふざけんなよ、おれがなんで——問題じゃねえよ、あんな生意気な奴」

「そう？　良かったわね、彼が起き上がらなくて。彼が起き上がってたら、今頃、あんたの居場所なんかないわよ」

「何だと」

「そうやって凄むところが小物の証拠じゃない。彼はそんなことしなかったもの。ヒステリックに喚いたり、他人を脅したりする必要なんてなかったんだから。起き上がったら今頃とっくにお屋敷にいるわ。そういう人だったもの」

正雄は憎悪の籠もった目つきで恵を睨み、そして歪んだ笑いを浮かべた。
「そうかもな。そしてお前は取り残されるんだ」
「あたしは」
「夏野が連れて行ってくれると思うか？　あいつ、そんな奴じゃないぜ。田中って奴だけじゃなく、お前だってお呼びじゃねえに決まってるさ」
「どういう意味よ！」
恵が思わず殴りかかろうとしたとき、軽く背中を押された。どけ、と短く声がして、俯いた人影が通る。正雄が顔を背けた。それをチラリと見やって、憂鬱そうな顔をしたまま徹は杣道を登っていく。
恵と正雄は、少しの間、口を噤んでその背中を見送った。徹が屋敷に呼ばれたらしい、という話を聞いた。無理もない、と二人は思った。徹はあからさまに狩りを嫌がっていたからだ。いずれそうなるだろうと、恵などはいくぶん、冷淡に思っていたし、なぜそんな目を付けられるような真似をするのか、正雄は理解に苦しんだ。——だが、戻ってきた徹に制裁はなく、それればかりか佳枝のいる本家に移って彼女を助けるようになった。都会から間引いてきた羊から贄を選んでも良く、だからもう村に降りる必要もない。今、この道を辿っているのも、狩りのためではなく屋敷に行くか辰巳に会うか、なにがしかの用を佳枝に頼まれたからだろう。

「なんでなのよ」

恵は徹の背を見つめる。恵はよく働いている。佳枝の意を迎えるために、できる限りのことをしている。なのに恵にはなんの恩恵が施されることもない。

「……不公平だよな。徹ちゃん、辰巳さんに逆らってばっかりいたのに」

「上の人たちの考えることってさっぱり分からないわ。おまけに徹ちゃんてすごく嫌味よ、そう思わない？　正直に嬉しそうな顔をすればいいじゃない。なのに、不本意そうな顔して」

「だよな。しかもさ、おれたちなんて、もともと仲良かったんだから、少しは優遇してくれてもいいと思うんだよな。佳枝さんにちょっと口添えしてくれるとかさ。なのに最近、顔合わせてもそっぽ向くし、口も利こうとしないんだぜ」

「あたしもよ。あたしたちを見下してるんじゃない」

ふん、と正雄は鼻を鳴らす。膨れて杣道を登り始めた恵の隣に並び、同じく膨れた顔をして歩き始める。

——恵と正雄は結局のところ、よく似ている。

3

尾崎医院は、葬儀の翌々日、二十四日から診察を再開した。それを決めたのは敏夫だ。村の状況を考えると、それ以上は悠長に休んでいられなかった。開けて早々、田代書店の息子が留美に連れられてやって来た。久々の例の被害者だった。田代孝——十歳。休んだぶん、溜まった患者を捌きながら、敏夫は考え込む。水面下で襲撃は続いている。病院に犠牲者が姿を現さなくなっただけに事態は悪化している、と言えた。恭子のおかげで屍鬼の性質は摑んだと思う。だが、敏夫には協力者がいない。屍鬼を一掃するために行動を起こそうにも、敏夫一人ではどうにもならないことは確実だった。かと言って、敏夫が声高に屍鬼だと叫んだところで、村人が納得するはずがない。郁美の失敗例があるのだから、なおさらだった。思い悩みながら午前の診療を終え、昼を摂って控え室に戻ると、清美がやって来て複雑そうに一通の手紙を差し出した。

「——何だ？」

「病院宛に来てましたた。特に親展とはなかったんで、武藤さんが開封したんですけど」

敏夫は封書を受け取り、中を検めた。それは聡子の辞表だった。型通りの辞表には、短い私信が添えてある。そこには孝江にも敏夫にも我慢できない、と書いてあった。敏夫は眉を顰める。聡子が激昂していることは分かったが、なぜなのかが分からなかった。困って清美を見ると、清美は目を逸らす。

「雪ちゃんのことが堪えたんですよ」

首を傾げる敏夫を、清美は溜息をついて、恨みがましく見た。
「心当たりがないってふうですね。だからなんですよ」
「どういうことだ?」
「雪ちゃんがいなくなったんです、先生、それを分かってますか?」
ああ、と敏夫は瞬いた。そう言えば、そういう話を聞いたような気がする。そこでようやく、雪が消えた、という現象の異常さに思い至った。
「そりゃあ、奥さんのことがあって先生が大変だったのは分かってますよ。でも、聡ちゃんにしたら、先生が少しも気にしてないふうなのが我慢できなかったんだと思います。正直言って、あたしもそうです。聡ちゃんも雪ちゃんも先生のことを思って、わざわざ村に越してきて、休日も返上して働いてたんですよ。その看護婦が行方不明になったっていうのに、そうか、はないんじゃないですか」
「それは——」敏夫は唇を噛む。「そう、済まなかった。恭子のことで……」
「あたしに謝られても困りますよ。もういまさら先生を責めてもしょうがないですけど。でも、若奥さんの葬儀の日にも色々と嫌なことがあったし、聡ちゃん、大奥さんとも揉めてましたから。だから我慢がならなかったんです。そこのところだけは分かってあげてくださいよ」
敏夫は清美を見据えた。

「それは、井崎くんが辞めたのはおれのせいだ、という意味か？」

「そう言ったつもりですけど、そう聞こえませんでしたか」

清美は低く言って、そして目を逸らした。

「あたしも納得はしてません。先生には同情しますから、それで辞めるのどうの、と言う気もありませんけど」

敏夫は口許を歪めた。

「覚えておこう」

清美は一礼して、控え室を出て行く。敏夫は清美を見送って、我知らず机の上に封書を叩きつけた。

清美の言い分は分かる。雪の件は耳に入っていたが、敏夫は完全に右から左に聞き流していた。恭子のことで頭がいっぱいだったのだ。明らかに自分の落ち度だという思いがあった。だからいっそう、腹立たしい。

――そう、敏夫は完全に恭子の死体を抱いて逆上していたのだ。今になってそう思う。振り返れば、そもそも恭子の死を隠匿したこと自体、恐ろしい博打だった。死体が起き上がる確率がどの程度のものだかは知らないが、恭子は起き上がらない可能性もあったのだ。いくら冷やしていたとは言え、葬儀になれば看護婦たちだって恭子に対面したはずだ。弔問客には医者もいる。誰が恭子の死に顔を見て、昨夜死んだとは思えない、と

言い出しても不思議はなかった。それを指摘されずに済んだのは、恭子が起き上がったせい、真実、通夜の前夜に死亡していたからだ。それを昨夜、改めて思い、敏夫は総毛立つ思いがした。自分はもう少しで、すべてを失うところだった。

郁美を煽った件を静信に責められ、逼迫した状況に焦って、視野が狭窄していた。死体を隠匿しているという自覚が、自分自身で思っていたよりも敏夫を追いつめていた。連日の疲労のせいもあったろう、通夜と葬儀と、そのおかげで久々にゆっくりと休み、ようやく理性が戻ってみると、たしかに自分の振る舞いは、ある種、常軌を逸していた。

静信が責めるのも無理はない。自分のやったことの是非はさておき、静信があれを許容できるはずなどなかったのだ。そこまで度を失っていた自分に対する嫌悪がある。だからいっそう、そこを責められると痛い。

「おれが軽率だったんだ」

分かっている、これは自分の落ち度だ。だが、敏夫は村を覆ったこの状況をなんとか打破したいのだ。自分のための行為ではない、村のためだ。これ以上の死を食い止めるため。そこには嘘はないと自分では思っている。

「どうしろと言うんだ、おれに」

後悔で胸が灼ける。最善手はいくつもあったが、敏夫はそれをみすみす逃した。

ふと、もうやめてしまおうか、と思う。村人は誰も気づいていない。いや、気づく気

がないのだと思う。誰も敏夫ほど事態を重要視してはいない。静信は分かっていながら手を引いた。だったら、敏夫がここで手を引いていけない理由が分からない。

成り行きに任せればいいのだ。なにも敏夫がこれ以上、自分を酷使せずとも、あるいは自分の手を汚さずとも、このままでいけば、早晩、外部の人間も異常に気づく。それを待ってなぜいけないのだ、という気がしてならなかった。

4

加奈美は食器を片付ける。このところ、元子はずっとパートを休んでいた。実際問題として、夫が死に、娘が死に、もうそれどころではないだろう。もともとさほどに人手が不足しているわけでなし、加奈美には不都合はないのだが。

（大丈夫なのかしら……）

食器を洗いながら、加奈美は元子のことを思った。登美子は明らかに様子がおかしかった。にもかかわらず、元子は登美子のことなど念頭にないように見える。あれ以後、日に何度も電話して、そのたびに登美子の様子を訊いてみるのだが、元子から答えが返ってきたことはなかった。元子の念頭にあるのは、茂樹のことだけ。たった一人、残された息子の無事だけを思案している。

（仕方ないわ、元子はもともとああだったんだもの）

志保梨を背負って江渕クリニックの前に蹲っていた姿が目に浮かんだ。友人でなければ及び腰になったろう。それほど元子の様子は尋常さを欠いていた。

ずっと、あれほど子供のことを心配していたのだから――と思う。思う一方で、不思議にも感じた。そもそも、なぜ元子はあそこまで神経質に子供のことを思うのだろうか。子供を失うのではないかという不安があるからではないのだろうか。国道があるから不安になったのではなく、不安があるから国道に反応しただけではないのか、という気がした。

それを思うと、加奈美の胸には重い悔いが湧き上がってくる。元子に訊いたことはないが、その不安の火種は、自分が点けたのではないのか、という気がしていた。

加奈美が都会で家庭を持っている頃、決して元子はあんなふうではなかった。加奈美が離婚し、戻ってきた当初もあんなふうではなかったと思う。それは徐々に進行した。

加奈美は離婚に際し、二人いた子供を夫の家に置いてきている。自分が望んでのことではない、夫の父母に奪われたのだ。

夫は大手証券会社に勤めていた。有名大学を卒業し、名の通った会社に勤める真面目で勤勉な男だと加奈美はそう思っていた。夫の女性関係が完全に破綻していることなど、加奈美には見抜けなかった。結婚すると決めた相手に対しては誠実な男を装っていたが、

そうでない女に対して、夫の言動は常軌を逸していた。この人にとって彼女たちは玩具(おもちゃ)にすぎず、人間ではないのだ、と悟らざるを得なかった。嫉妬があり、同じ女に対する憐愍(れんびん)があった。「淫売(いんばい)同然」と言い放ち、だから何をしてもいいのだ、と平然としている男に対する怒りがあった。耐えかねて離婚を切り出したが、夫は頷(うなず)かず、舅(しゅうと)姑(しゅうとめ)も頑として同意しなかった。別れるなら子供を置いていけ、と再三言われ、それだけはと思って耐えたが、限界が来た。夫の人間性に対して疑問を抱くと、亀裂(きれつ)は深まるばかりで埋めようがなかった。調停に縋(すが)ったが、調停員は味方してはくれなかった。加奈美は泣きながら離婚届に判をついた。

そういった経過のすべてを、元子に話したことはない。加奈美はそれを、母親以外の誰にも語らなかった。「あなたは妻として大事にされているのだから、そこまで怒ることはないじゃない」という、通り一遍の台詞(せりふ)など聞きたくもなかった。遊び相手だと割り切ると、人を人とも思わないでいられる男の精神構造が容認できなかったのだ、という加奈美の主張は、あまりに理解を得ることが難しかった。少なくとも調停員の理解を得ることができなかった、という事実が、今も加奈美を縛っている。

だから元子に語ったのは、夫の女性関係が離婚の理由であったこと、もともと夫の姑とは折り合いが悪く、離婚のいざこざで感情の齟齬(そご)が拡大して仇敵(きゅうてき)のような有様になったこと、結果として子供を置いてくることになったこと、それだけだった。

それが良くなかったのではないか、と近頃、加奈美は思う。同じく舅姑と確執のあった元子は、それで不安に火を点けられなかったか。元子が恐れているのは、他の何よりも、実は姑に子供を奪われることではないのか、とそういう気がしてならなかった。

姑さんとは上手くやらないと駄目よ、と加奈美は元子に言った気がする。いざというとき、こっちに同情してくれるかどうかは、平素の関係にかかっているのよ、と冗談めかして言った覚えがあった。離婚することなどあるまいと思っての他愛もない冗談だったのだが、それが元子を追い詰めはしなかったか。考えると、思い当たる節がいくらもあった。後悔で、胃の腑が痛む。

苦い気分で食器を始末し、少し迷って店を閉めた。最近では夜の客は少ない。日によって一人、二人あればいいほう、ゼロという日も珍しくなかった。陽が落ちれば、人はそそくさと家に帰る。まるで逃げるように。

店を閉めて母屋に戻った。母親に相談してみよう。元子をどうしてやればいいのか。茶の間に入ると、母親は一人ぽつんと、点けっぱなしのテレビの前で横になっていた。

「ねえ、お母さん。ちょっといい？」

加奈美は声をかけたが、妙の反応はない。寝ているのだろうか、と顔を覗き込み、妙が虚ろな顔をして画面を眺めているのを認めた。

「ちょっと相談なんだけど」

加奈美は重ねて言ったが、妙は視線を寄越しただけでなんの返事もしなかった。様子が変だ、と声をかけると、億劫そうに目を閉じて寝返りを打つ。怠くてたまらないふう、心ここにあらずという感じ。——それは登美子の姿にとてもよく似ていた。
「……お母さん？」
妙の顔色は悪い。蛍光灯のせいばかりではなさそうだった。額に手を当てると、微熱があるようだ。それを指摘しても、反応はない。
加奈美は息を呑んだ。しばらく妙を凝視していた。
——夏以来。
村では何かが進行していた。明らかに異常な何か。それが村を蝕んでいる。
とうとう来たんだわ、と加奈美は思った。
それは妙を捕らえたのだ。

5

二十五日、静信が起きてみると、池辺の姿が消えていた。寺務所には、「辞めます」とだけ書いたメモが残されていた。困惑して見つめているうちに光男が来た。事情を述べると、じゃあ、と光男は声を上げる。

「ゆうべ見たあれは、気のせいじゃなかったんですね」
「ゆうべ？」
「ええ、真夜中に。最近どうも、眠りが浅くてねえ。何度も目が覚めるんですよ。それで台所で水を飲んでたら、トラックが」
静信は光男の顔を見返した。
「高砂松のついたトラックです。噂に聞いてたのより小さかったですけど。それが路地の前を横切っていくのが見えたんですよ。あの先はもう寺の私道しかないですから。それで、まさか、とは思ってたんですが」
そうですか、と静信は俯く。寺ももう、聖域ではないわけだ、と思った。おそらく実家に連絡をしても、池辺は戻ってなどいないだろう。
美和子は心配して何度も電話したら、と勧めたが、あとでそうします、とだけ静信は答えた。美和子は不審そうに静信を見て、そして打ちのめされたように目を伏せた。
信明の行方は杳として知れなかった。駐在に行った光男は、案に相違して新しい駐在に会えたらしい。佐々木というその警官は、事務的に失踪届を提出させて、それを抽斗にしまった、という。
信明がなぜ消えたのか、考えられることはひとつしかないが、同時に不思議にも思う。彼らは寺に侵入することができるのだろうか。――そう、考えてみれば、これまで寺に

被害がなかったことのほうがおかしい。角は失踪し、鶴見も死んだ。そして、信明も失われた、そういうことだ。こうして村は侵食されていくのだ、極めて平等に。

父親を喪失したにもかかわらず、やはり屍鬼に対する怒りはなかった。早晩、静信も美和子も襲われることになるのかもしれなかったが、身を守るために屍鬼を狩るべきだとは思えなかった。思えない自分に落胆した。それは間接的に村が滅びることを是とすることだ、とは分かっている。

そう、自分は心のどこかで、それを肯定しているのだ。積極的に滅びてしまえと思っているわけではなかったが、滅びるならそれもやむを得ないとは思っているのだと思う。そういう自分を疑問に思う。これでは敏夫を責められない。

とりあえず、掃除は光男に任せ、静信は衣を改めて本堂へと向かう。朝の勤行(ごんぎょう)に来る者も減っていた。見知った顔もまばらだった。徳次郎も節子もいない。そう言えば、ここしばらく、雑貨屋の千代の姿も（……大丈夫ですよねえ）見ていなかった。寺に残った僧侶(そうりょ)は静信だけ、それにふさわしい、いかにも寂しい有様だった。それとは反対に、これまで姿を見たことのない檀家衆(だんかしゅう)がぽつぽつと、熱心に通ってくるようになっていた。中には檀家ではない者の顔も見えた。彼らは何も言わない。突然、寺に来る気になった理由に言及することはなかった。熱心に手を合わせ、そして何を語るでもなく帰っていく。そうして来ていながら、ある日突然、姿が見えなくなる。

寺は徐々にその機能を失いつつあった。静信の知らない場所で死者は増え、静信の手を経ないまま埋葬されている。

これが、と静信は読経しながら思う。

自分が是としてしまった村の有様だ。これを嘆く権利も、憐れむ権利も、静信はすでに持っていない。

6

タケムラには例によって、老人たちがたむろしている。話題はつい先日の、大川酒店の葬儀のことでもちきりだった。

「あんな異様なお葬式なんて初めてよ」

弥栄子は呆れたように言う。武子も鼻の付け根に皺を寄せて、露骨に嫌悪を示した。

「本当に。浪江さんの神経を疑ったわよ。あたしだったら、息子があんな葬式をやらかすって知ったら、どやしつけてやるけどね」

「寺が手一杯だったせいなんだろ」と、タツは口を挟んだ。「なにしろ尾崎も葬式だったからね」

「そりゃあ、そうだけど」と、武子は口を歪める。「それにしたって、あれはないわよ。

あんなみっともない」

　そうよねえ、と弥栄子が頷いたところに、笈太郎が腕組みをしながらやって来た。もう少しでタケムラの前を通り過ぎそうになり、武子に呼ばれて慌(あわ)てて足を止める。

「何を考え込んでんのよ」

「ああ――」と、笈太郎は瞬き、首を傾(かし)げながら床几(しょうぎ)に腰を下ろした。「なあ、人のいるはずのない家で物音がするってのは、何なんだろうな」

「何よ、それ」

　弥栄子が聞くと、笈太郎はさらに首を傾げる。

「いや、うちの隣さ。あそこは、ずいぶん前から人がいないだろ。山瀬のとっつぁんが死んで、かみさんは息子と同居するんで家を出ちまったからさ。副島の木工所に貸して倉庫にしてたんだけどさ、副島の親父(おやじ)さんも去年死んで廃業したから、そのまんまになってたんだよ」

　ああ、とタツは頷いた。

「なんだけどさ、ちょいと前から人がいるような感じがするんだよ。ほら、うちの便所と隣の壁がくっついてるからさ。夜中に小便に行くとさ、隣から物音が聞こえるんだよ」

「気のせいじゃないの。そうでなきゃ、笈太郎さん、とうとうボケ始めたのよ」

弥栄子が笑う。
「冗談じゃないよ。たしかに物音がする気がするんだよ。それも鼠でもいるってふうでない、人がごそごそやってる音に聞こえるんだがね。誰か越してきたのかと思ったんだが、そんな様子もないし、たしかに昼間見ても誰もいるようなふうじゃないし」
「裏の物音じゃないの」
武子が言った。笈太郎は首を傾げ、頷く。
「そうかもしれんなあ。音ってのはどうも、どっから聞こえるか、分かるようで分からないもんだからねえ。そうかもなあ。裏の音かもなあ」
「そうよ、きっと」
「なんだか気味が悪くてさ。おれも歳かね。どういうわけだか、つまんないことでびくびくしちまうんだよ。隣だけじゃない、いろんなことが気味悪くてさ」
「歳だよ、それは」と、武子が声を上げて笑ったが、タツはひそかに頷いた。
タツは近頃、気になって仕方のないことがある。車の勘定が合わないのだ。
どう見ても見覚えのない車が入ってくるのに出て行かない。あるいは、出て行くのに入ってきたのを見た覚えがないことがある。タツは近頃、寝間を道路側の二階に移した。窓は閉め切るが雨戸は必ず一枚だけ開けておくことにしている。夜間の出入りが気になって仕方ないからだ。なのに、車の勘定が合わない。そもそも昼間の交通量が激減し、

夜間の交通量ばかりが増えているのも気に入らなかった。

「気味悪いって言えば」と、弥栄子が声を低めた。「下外場の松尾がいなくなったんだよね」

「なぁに、世話役の？」

「違うわよ。あそこの分家。山根のほう。爺さんと婆さんと二人っきりでいた」

「ああ」

「いなくなったんだって。家具も何もかも残ってたらしいのよ。貴重品はなくなってたし、別に荒らされた様子もないから、例によって出て行ったんだろうって話なんだけど」

ふうん、と武子も笈太郎も、どこか不安気に相槌を打った。弥栄子も同じく不安そうながら、自分がなぜそんなことを気味悪く思う必要があるのか分からない、というふうに見えた。

「何でもないことなのよね。別に珍しいことでもないし……」

弥栄子は自分に言い聞かすように言う。

「……やだわ、あたしも笈太郎さんの臆病が移ってるのかしらねえ」

田茂由起子は、夕飯の茶碗を片付けながら何気なく表のほうを見て、向かいの三安に

明かりが点(とも)っているのを見た。
「まあ、……そんな」
由起子は呟(つぶや)く。卓袱台(ちゃぶだい)を拭(ふ)いていた嫁が、何か、と言うので、縁側のほうを示した。
「明かりが。戻ってきたんだわ」
「あら、まさか」
「ちょっと、行って見てくるわ」
由起子はエプロンを外し、丸めてその場に放り出す。由起子の家は中外場のはずれにあって、周囲は田圃(たんぼ)と樅(もみ)の林に囲まれている。向かいの三安がなければ離れ小島も同然だし、その三安が無人になってこのところ心細くてならなかった。その向かいに駆けつけると、あちこちの雨戸は開け放たれ、表座敷の縁側では女が掃除機をかけているのが見えた。
「あらまあ、――あんた、日向(ひな)ちゃん」
日向子は顔を上げ、由起子に気づいて掃除機を止めた。座敷の明かりに逆光になっていたが、日向子が笑ったのが分かった。
「こんばんは、お久しぶりです」
「お久しぶりって」由起子は目を丸くした。日向子は八月の末に家出したはず。そしてどういうわけか三安の一家は日向子に呼ばれたと言って越していった。あまりにも異常

な転居だった。「――あんた、どうしたの。戻ってきたの？」
　そうなんです、と日向子は笑って、バケツの中の雑巾を絞る。
「長いこと、空けていたから掃除が大変」
「そうだろうねえ。……他の人は？」
「戻ってきてますよ」と、日向子は言う。由起子は何気なく家の中の様子を窺った。座敷には人影はなかったが、その向こうでは誰かが立ち働いている音がしている。二階のほうからも掃除機を使う音がしている。
「米子さん？」
「弘ちゃん」
　由起子の視線を追って、日向子は微笑む。
「そう。――いきなりいなくなるから、どうしたのかと思ったわ。一体、何がどうなってるの」
「色々込み入った事情があって」日向子は言ってから、由起子の顔を覗き込むようにした。「小母さんとこも変わりはないですか？　みなさん、お元気で？」
「ああ……ええ」
「会いたいわ。お話ししたいこともいっぱいあるし。またお邪魔してもいいですか」
　そりゃあ、と由起子は頷いた。

「良かった。嬉しい」と、日向子は本当に嬉しそうに笑う。「とにかくざっと掃除をしちゃいますね。せめて掃除機だけでもかけておかないと、寝場所がなくって」
「ああ……そうでしょうねえ。手伝おうか？」
「いいんですよ。落ち着いたら改めて挨拶に行きます」
そう、と由起子は頷いて、踵を返した。驚きだわ、と思っていた。引越していった顚末も尋常でなかったが、戻ってくるところがいっそう尋常でない。一体何があったのだろう。
思って家の玄関に入りながら、由起子は三安を振り返った。黒々とした家の、あちこちに明かりが点っている。二階の窓から男が一人姿を現して、座布団を二枚、叩き合わせて埃を払うのが見えた。弘ちゃんだわ、と由起子は思って首を傾げた。――弘二はあんな体格だっただろうか。もっと頼りなげで、痩せていて。
男が座布団を持って奥へと引っ込む。その横顔に光が当たって、顔がよく見えた。
「……そんな」
驚いている間に、男の姿は部屋の奥に消え、再び現れて窓を閉めた。今度も、逆光になる前の一瞬、その顔がよく見えた。
――弘二じゃない。
（あたし、目がどうかしてるのかしら）

由起子は思わず目を擦る。あれは弘二ではない、別の男に見えた。それだけじゃない、その顔には見覚えがある。由起子の従姉妹は下外場に嫁いでいる。その向かいにあるのが大塚製材で、由起子は従姉妹を訪ねた折、製材所で頻繁に今の男を見なかったか。
（あれは……大塚の息子じゃあ……）
付き合いがあるわけではないから、たしかとは言えない。けれども——。
（そんなはず、ないわよねえ）
ないはずだ。日向子は、二階にいるのは弘二だと言ったのだし。第一、大塚製材の息子は死んだという話を従姉妹はしていなかっただろうか。
「いやね、目がいかれたのかしら」
由起子は自分を笑った。胸の奥に言葉にしがたい不穏なものが湧いて淀んだ。
（そのうち分かるわ）
そう——日向子が来たら訊いてみれば済むことだ。

夜は平板に広がっていた。田圃を隔てて黄色い明かりが見えた。田中はそれをしばらく見つめる。恵から家族を襲え、と唆されて二日が経っていた。
昨夜、田中は恵に連れられ、山入から村へと下りてきたが、やはり村人を襲う決心はつかなかった。家の近くまで来て明かりを見ていた。もちろん家族を襲う決心などつく

はずがない。そして今夜、昨夜と同じ場所まで来て、田中は飢えに苛まれている。それは飢餓という名の苦痛だった。飢餓は田中を切り裂くように苛む。苦痛から逃れるためには、狩りをしなければならなかった。田中の胸の中にある善悪の天秤は、大きく傾こうとしていた。それを承知していたからこそ、田中は家に戻ってこずにいられなかった。飢餓に喘いでいる、その状態を憐れみ、飢えをしのぐために恐ろしい行為を成して、それを許してくれる者がいるとすれば、家族だとしか思えなかった。他人は田中を許さないだろう。襲うくらいなら飢えていろ、と指を突きつけるに違いない。

罪に踏み込むことは怖い。それは罪そのものを恐れてのことか、あるいはその結果としての罰を恐れてのことなのか、田中自身にも判然としない。いずれにしても、家族ならばその恐れが軽減することはたしかだった。

同時に、妻子はこれからどうするのだろう、と思う。妻は実家を頼れまい。田中の父母はすでに死に、遠隔地に兄弟もいるが、あてにできるほど余裕のある暮らしをしている者はいなかった。妻は働いた経験がない。これからの生活をどう支えようというのだろう。子供たちはどうなるのか。これから高校へ進む。さらに進学を望んだとき、経済的な事情で諦めねばならないとしたら、いたく不憫な話だった。——たしかに、山入に連れて行けば、生活の心配はせずに済むのだ。将来の心配もせずに済む。

同時に田中は、甦って以来、深い孤絶を感じるようになった。その由来は分からない。

この地上に一人だという心細い感じがする。安堵できる何かから遠く隔てられ、二度とそこへは戻れない。その思いが、田中を家に引き寄せた。だが、つましく門を閉ざし、内部に温かく明かりの点った建物を見ると、自分の孤愁が身に滲みた。自分の家、家族たちの集う場所、そこを目前にしながら入っていくことのできない自分。

自分はここにいる。

死んでいない。まだ生きている。ここで、家の外で、家族の許に帰りたいと切実に願っている。

飢餓を忘れるほど恋しかった。帰宅する田中のために食事を用意して待っていた妻、茶の間で食卓を囲んでいた子供たち。あまりにもありふれた日常。切り離されてみると、それは「日常」と題された絵空事のように思えた。あれほど温かく安穏とした特殊な状態を、どうしてなんの感慨も持たずに過ごしていられたのか、分からない。

誰か自分の存在に気づいてくれないだろうか。自分を呼び、よくぞ生きて戻ったと迎え入れてはくれないだろうか。子供じみた夢想から逃れることができず、田中はその場に釘付けになる。昨夜と同様に。違うのは、切羽詰まった苦痛が身内から田中を苛んで、それがもう耐え難いほどになっていることだった。

田中は周囲に目を配りながら、深夜の道を歩いた。家の中に明かりはあったが、家族は寝静まっているようだった。田中は正面からそっと二階を見上げた。子供たちの部屋

の窓には、彼を拒むように雨戸が引かれている。
田中は裏手に廻る。路地には物置が据えられ、物干し竿が立っている。そこに面して同じように雨戸の引かれた掃き出し窓があった。その窓の中では、彼の妻が眠っている。
せめて妻の顔を見たい、と思った。自分の存在を知ってほしい。苦しみを理解し、慰めてほしい。妻に会い、慰撫されることで田中は救われたかった。恐る恐る雨戸を叩こうと手を伸ばしたが、実際に叩く勇気はなかった。子供たちに聞きとがめられるのが恐ろしい。——それ以外にも不安が。なぜかしら自分の家が禍々しいものに思われ、こうして近づいているだけでも胸苦しかった。
戻りたいのに恐ろしい。家そのものが悪意すら持って自分を拒んでいるように思われた。これが恵から忠告された「閉ざされている」ということなのだろう。
田中はもう招かれなければ自宅に入ることができないのだ、と言う。かつて田中は命じられて恵を家に招き入れた。その時点で屍鬼に向かって開かれていた家は、招待した田中自身が死亡したことによって再度、閉ざされた。いや、田中が甦生したことによって、と言うべきなのかもしれない。死者はその家の一員なのだ。依然として家に留まることを許され、家族として追慕される資格を有している。だが、屍鬼にはその資格がない。田中はもう家族の一員ではなく、完全な部外者だった。だからこそ、家に踏み込むためには、家族の誰かに家の中に招き入れてもらわなくてはならない。

その方策を見つけられないまま、田中はこわごわと路地を戻り、勝手口に向かう。鍵(かぎ)がかかっていたが、予備の鍵がどこにあるのかは知っている。勝手口に面した縁の下の、もう使われていない鉢の中を探った。鍵を手に取ったが、手は震えて鍵を鍵穴に差し込むことすらできなかった。意味もなく、家が恐ろしい。もはや動いてもいない心臓を冷えた手で鷲摑(わしづか)みにされる気がして、苦しくてならなかった。

とても家には入れない、そう思ったとき、間近から低い声が聞こえた。地を這(は)うような声は、勝手口に近い犬小屋の中から聞こえた。ラブか、と思った刹那(せつな)、その犬は火の点(つ)いたような勢いで吠(ほ)え立て始めた。

田中は跳び退(すさ)り、慌(あわ)てて小屋から離れた。切羽詰まったラブの声が、ここはもう田中の家ではなく、田中には足を踏み入れる資格のないことを、何よりも明らかに物語っていた。

逃げ出そうと後退り始めたとき、遠くない場所で窓の開く音がした。雨戸は閉じたまま、窓だけが引き開けられる音がして懐(なつ)かしい妻の声が聞こえた。

「昭なの？」と、寝ぼけたような妻の声は、どこか甘い。「何の騒ぎなの？」

声とともに雨戸が開いた。妻が顔を出した。違う、と田中は思った。

——佐知子。

田中は妻に会いたかった。会って慰撫されたかった。家庭が恋しく、その温かい集合

の中心点となる女を恋い慕っていたが、それは妻という存在であって、佐知子ではない。
自分が甦ったことを喜んでくれるだろうか、――佐知子が？　自分を受け入れ、田中の罪を許し、孤絶を理解して慰めてくれるだろうか。佐知子は決してそれをしないことを、田中は想像できた。化け物と罵るだろう、自分を襲うつもりかとヒステリックに喚き立てるに違いない。田中の心情には一片の斟酌もせず、田中が死んだせいで遭遇しなければならなかった心労を並べ、それがいかに不当なことであるかを態度で示す。苦渋を強いた田中を全身全霊で責めるだろう。
田中は身を屈め、寝間の窓のほうに忍び寄った。ラブがいっそう切迫した声で鳴いて、佐知子を窓辺に釘付けにした。
佐知子が、ラブ、と苛立ったように身を乗り出したのを見て躍り出た。腕を摑んで引き寄せ口を塞いだ。呼吸は必要ないはずなのに、押し殺した息で肩が激しく上下した。佐知子が目を瞠り、身じろぎしてくぐもった声を上げた。
田中は嗤う。
初めて、自分がこの女を憎んでいたことを悟った。
二十六日の未明、元子が起きたら、部屋で登美子が死んでいた。元子はその死体を、眉を顰めて見た。

特にどんな感慨もないまま、二階へと上がる。元子の姿を認めて寝床から起きあがった息子に、今日は学校を休んでいいから、と告げた。

「お休みしていいから、部屋でおとなしくしててほしいの。特にお祖母ちゃんの部屋には絶対に入らないで。お手洗いに行くときでなかったら、二階にいてちょうだい。いいわね？」

茂樹は不安そうに元子を見て、そうして頷いた。元子はくれぐれも、と念を押して、一階に降りる。

敏夫に連絡して、世話役に連絡して。――考えたが、それも億劫だった。ふと、葬儀社が村にできたことを思い出した。葬儀社なら何もかもやってくれるだろう。自分が登美子を湯灌するのも、いつまでも登美子の死体が家にあるのも嫌だった。人が大勢、出入りするのも嫌だ。そんなことで、万が一にも茂樹に妙な病気が移るようなことがあったら。

元子は嫌悪を露わにして姑の死体を見た。早くどこか見えないところ――安全圏の外に出してしまいたくてたまらなかった。

元子は茶の間の抽斗を探って、志保梨の葬儀のあと、放り込まれていた広告のチラシを引っぱり出した。電話すると、すぐに社長の速見が出た。

「姑が死んでいるんです。でも、手を触れたくないの。小さい子供もいるんで、早くな

んとかしてほしいんです」
元子が言うと、そうですか、と速見は愛想の良い返事をした。
「そうでしょうとも。お気持ちはお察ししますよ。すぐに御遺体を引き取りに参ります。心配はございません、手前どもで全部処置して、斎場のほうに安置させていただきますから」
「そう」と、元子は息を吐いた。「お願いね」
電話を切り、登美子の遺体はそのまま、丁寧に何度も手を洗って二階へ上がった。茂樹が祖母に近づかないよう、見張っておかなくては。

7

かおりが目を覚ますと、夜の中で鳥の声がしていた。雀の声に混じって、高い空に鳶の鳴く、澄んだ声がしている。
かおりは、はっと身を起こした。慌てて枕許の時計を確認する。もう九時が近い。飛び起きて窓を開け、雨戸を開けた。
雨戸を開けると、晩秋の色を漂わせた陽光が部屋いっぱいに射し込んできた。かおりはとっさにカレンダーに目をやる。十月二十六日、水曜日。もちろん休日でも祭日でも

ない。
「やだ」
かおりは呟いて、慌ててパジャマを脱ぎ捨て、制服に袖を通した。鞄に荷物を押し込み、取るものも取りあえず部屋を出て、ふと思い返し、昭の部屋を覗く。雨戸の引かれた室内は暗く、昭は前後不覚に眠っている。
「昭、起きなさいよ！」
かおりは窓を開け、雨戸を開けた。射し込んだ陽光から逃れるように昭は布団に潜り込む。布団を引き剥がして揺すった。
「起きなさいってば。もう九時よ」
え、と昭が跳ね起きた。
「うそ。……なんで？」
なんで、と聞きたいのは、かおりのほうだった。目覚ましが鳴らなかったとは思えないから、きっと止めて寝てしまったのだろう。このところ寝付けなくて、朝起きるのが辛い。目覚ましを止めて寝入ってしまうことが再三だった。昭に至っては、未だに自分で目覚ましをかけたこともないが、そうしていられたのは、昭やかおりが寝坊しても、必ず母親が起こしに来るからだ。
昭は飛び起きて制服を引っつかみ、盛大に騒音を立てながら用意をする。母親に毒づ

く声を聞きながら、かおりは階下へと駆け下りた。降りながら、昭は子供だ、と思う。子供でいることに傷つくくせに、自分で目覚ましをかけ、母親の手を借りずに起きることはできないし、それを考えたこともない。自分だってそうだ、と思う。母親が起こしてくれなければ、定時に起きて学校に行くことができない。そんな自分が大人には足りないことはよく分かる。どうあがいても子供でしかない。自立できない、自活できない。だから父親の死を悼む間もなく、生活の心配をしては死んだ父親を責める母親を、酷いと思うのは間違っている。

複雑な気分を抱えて下に降りた。茶の間は暗く、台所にもまだ人の気配はない。洗面所に駆け込み、身繕いをしてから寝室を覗いた。雨戸は開いていたが、母親は眠っている。

「お母さん」

かおりは声をかけた。もう食事をする時間はないし、どうして起こしてくれなかったの、と母親を責めるのが間違っていることは分かる。だから起こしても意味はないのだけど、かと言って声もかけず黙って家を出て行くことも気が咎めた。

「お母さん、もう九時だよ」

屈み込んで言うと、佐知子は目を開けた。かおりの背後の廊下を、昭がけたたましい足音を立て、駆け抜けていった。佐知子は億劫そうに身動きをし、長い溜息をつく。

「あたし、学校に行くね」
そう、と佐知子は頷く。かおりは首を傾げた。
「お母さん？　具合でも悪いの？」
別に、と言ったが、佐知子の口調には倦怠が漂っている。起きる様子もなく、布団に身を横たえ、どこか虚ろな顔をして眩しそうに瞬きを繰り返していた。かおりは血の気が引くのを感じた。とっさのうちに恵と夏野と、そして父親の様子が浮かんだ。背後で悪態をつきながら戻ってくる昭の足音が聞こえる。
「……昭」
「何だよ、もう。いっつも、起きろ起きろって煩いくせに」
「昭、ってば」
ふてくされて廊下を通り過ぎようとしていた昭が振り返った。怪訝そうにして寝室に入ってくる。
「どうしたんだ？」
昭は、かおりの硬い表情と母親を見比べた。母親はぼうっと天井を見上げている。すぐに目を閉じた。何か変だ、と思った瞬間、痛いほどの力でかおりに腕を掴まれた。
「昭、どうしよう」
強い力、怯えたような声で昭も事情を悟った。夏野を襲ったあれだ。昭たちから父親

を奪ったものが、母親を次の標的に選んだ。
そうに違いないという確信が半分、まさかという期待が半分、昭は母親の身体を揺する。
「母ちゃん、起きろよ」
母親は目を開けたが、やはり虚ろな顔をして横たわったままだった。
「何時だと思ってんだよ。起きろよ」
「……勝手に行っててちょうだい」
佐知子は寝返りを打つ。声には覇気がなかった。
「お母さん、眠いのよ……」
顔を背けた首筋に、かつて夏野に見たのと同じ斑紋があった。昭は乱暴に部屋を横切り、雨戸を閉め、窓を閉める。しっかりと鍵をかけた。今ここでこんなことをしても意味がないと思いながら、そうせずにはいられなかった。ぴったりとカーテンを閉じる。
「昭……」
問いかけるように自分を見上げてくる姉の手を取って引き立たせる。寝室の外に押し出して、襖を閉めた。
「……なんとかしないと」
「ねえ、こんなの嘘だよね。お母さんまで、そんな」

昭は首を振る。茶の間に戻ってそのへんの棚を引っ掻きまわした。
「ねえ、昭」
「恵だろ。きっとあいつら、おれたちを皆殺しにする気なんだ」
「まさか」
かおりは悲鳴を上げたが、それは否定と言うより、信じたくないという叫びに聞こえた。おれだって信じたくないよ、とひとりごちながら、昭は抽斗を開け、物入れを探る。お札や守り袋の類は見つからなかった。そもそも夏野のところに、あるだけのものを浚えて持っていった。いまさら何かが残っているはずもなかった。
「かおり、溝辺に行ってこい」
昭が言うと、かおりはきょとんとした。
「鈍いな。溝辺町の八幡さまだよ。前に初詣に行ったことあったろ。あそこだったら社務所があって、ずっと開いてておお守りとか売ってるじゃないか。村の神社って、そういうの置いてないんだから」
「でも、学校は?」
「行ってる場合じゃないだろ」
「叱られちゃうよ」
「おれたち、父親が死んだばっかりの可哀想な子供なんだぜ。そのうえ母ちゃんの具合

も悪くて、だから色々用事をしないといけないんだって言えば誰も文句なんか言わないだろ」
でも、とかおりは言いかけ、結局頷いた。昭は、棚から母親の財布を取って、かおりに突きつける。
「お守りとか破魔矢とか、できるだけたくさん」
「……あんたは？」
「おれ、他にすることがあるんだ」
かおりは釈然としない様子で頷き、財布を持って出かけていった。昭は一人茶の間に残され、裏庭に出る。物置の中から、父親の工具箱と、家の修繕に使っていた角材を引っぱり出した。苦労して適当な長さに切り、木工用のカッターで削る。
今度は母親の番だ。連中からの報復なのは間違いない。そう言えばゆうべ、夢うつつにラブの吠え立てる声を聞いたような気がする。母親が死んだら、今度こそは、かおりか昭の番だろう。母親だけで済むはずのないことを、昭は確信していた。
身を守らなければいけない。母親を、かおりを守らなければ。そのために杭を打つしかないのなら杭を打つのだ。たとえそれが、夏野だろうと父親だろうと。かおりが嫌だと言うのなら、自分だけでもやらなければ。ここで怖じ気づいたら、夏野だって昭に失望するに違いない。

十六章

I

元子は茂樹に斎場へ近づくことを許さなかった。茂樹は実家に預け、昨日の通夜も早々に終わってもらった。正直な気持ちを言えば、通夜や葬儀にさえ出たくはなかった。弔問客は誰も奇異の目で見ていたが、そんなことは気にならなかった。

そして元子はこの日の朝、用心をしていたにもかかわらず、茂樹の様子がおかしいことに気がついた。

「どうしてよぉ！」

元子は叫び、泣き崩れる。登美子からは隔離していた。万全を期したつもりだ。実家に預けていたのになぜ、と元子は理不尽な運命に怒り狂った。

余所者ならいざしらず、舅や姑ならともかく、もう元子から子供を奪っていくような者はいないはず。なのに茂樹は奪われようとしている。

「茂樹くんの調子が悪いんですって？」

実家のほうに顔を出した前田利香は、憐愍を込めて元子を見た。

「元子さんも災難ね。次から次へと」
言った利香も今月の頭に夫を亡くしたばかりだ。村内から嫁いだ利香は、前田姓こそ名乗っているものの、子供を連れて水口にある実家に戻っていた。
「……ねえ、元子さん、こんなことを言って、迷信じみた奴だと思わないでほしいんだけど。……ひょっとしたら伯父さんが引いていってるんじゃないかしら」
「お義父さんが？」
利香は気まずげに頷く。
「本当に馬鹿みたいね。……でも、気になってしょうがないの。伯父さんが出るって噂を聞いて……」
元子は目を瞠った。
「すぐ近所の田丸のお婆ちゃんが、近所で見たって言うのよ。見間違いでしょう、って言ったんだけど、たしかに伯父さんだったたって」
田丸美津江は水口の下のほうに住んでいる。
「それで伯父さん、思い残すことでもあるのかしら、なんて言ってたのよ。半分は冗談だったんだけど……でも、現にこうやって元子さんのとこで不幸が続いてるでしょう？　――だから」
「そう……」

そうなのか、と元子は思った。釈然とした気分だった。舅の巌は元子を嫌っていた。何をしても気に喰わなかったのだ。だからきっと、と元子は確信する。

(そういうことだったんだわ……)

巌が引いているのだ。元子の大切なものを奪っていこうとしている。誰もが元子から子供を奪っていこうとしている。摂理までが死人をわざわざ甦らせて、敵に味方をするのだ。

「そんなこと、させないわ……絶対」

2

十月二十七日。外場に住む竹村昭子の訃報が入った。敏夫は病院を出て行く。帰りを待つスタッフに田代書店の子供も死んだと、連絡が入った。

「田代さんとこの……そうですか」

武藤はやるせなさそうに頭を振った。

「こないだ来たときに、そうじゃないかとは思ったんだけどね。やっぱりあれだったんだなあ」

「ええ……」

田代夫妻は、さぞかし気落ちしているだろう。——それとも、と律子は思う。ついに来るべきものが来た、と了解しているだろうか。

死者は勢いがついたまま止まらない。江渕クリニックが看取っている患者や外部の病院で死亡した患者もいるだろうから、死者の実数はこんなものではないはずだった。しかも今日は清美が来ない。

律子は時計を見上げた。もう診察時間に入っている。未だに清美からはなんの連絡もなかった。来ませんね、という言葉を律子は呑み込んだ。もう何を言う必要もないように思えた。やすよも武藤も何も言わなかった。時折、時計を見上げていたから、誰も気にしてないわけではないだろう。武藤は何度目かに時計を見上げ、無言で首を振って事務室へと出て行った。休憩室には律子と、やすよだけが残された。

「……若先生があれだけ奔走してるんだし」と、唐突にやすよが声を上げた。顔を見返すと、やすよは笑う。「そのうちなんとかなるわよ。あの人は昔から往生際の悪い人でね。無駄な悪あがきってのが大好きなんだけど、最後には辻褄を合わせるから悪あがきも捨てたもんじゃない」

「そうなんですか？」

「そうよ。大学に入るときもそうだったわねえ。高校三年のとき、志望校のランクを落としたら、って言われたみたいよ。でも、意地っぱりだから。悪あがきして、それでち

ゃんと合格したから。そういう人だからね」
律子は微笑んだ。
「酷い状況になればなるほど、ムキになるのよ。あの意地っぱりが、このままで済むわけがない。いずれ救済策が見つかるわよ」
「……そうですね」

敏夫がうんざりした気分で病院に戻ると、すでに受付時間が始まっている。そこには患者と訃報と、永田清美が病院を辞めるという報告が待っていた。
「――清美さんが？」
やすよは頷いた。
「ついさっき、電話があって」
やすよはそれ以上、何も言わなかったが、敏夫は昨日の気まずい会見を思い出さないではいられなかった。
「それは……痛いな。なんとか説得できないか」
敏夫が言うと、やすよは頷く。
「とりあえず電話でも慰留してみたんですけど。まあ、あの人も旦那と子供がいますからねえ。伝染病だって話になって、ずいぶん旦那から辞めろってせっつかれてたらしい

ですし」
　そうか、と敏夫は呟いた。
「実際のところ、どうなんです？」
「どう——とは？」
「本当に伝染病なんですか」
　敏夫は言葉に詰まった。
「なんだかね、あたしには別のものに見えるんですよ、最近。だから何だって訊かれても困るんですけど」
「正直言って、分からない」
　そうですか、とやすよは溜息をついた。それ以上は問わず、持ち場に戻る。敏夫もまた深い溜息をつかないではいられなかった。膠着した状況（何と言って協力者を募る？）、逼迫してくる様々な要因。蓄積した疲労は敏夫の中で、無気力の種子となって埋もれている。
（おれ一人じゃ、どうしようもないじゃないか……）
　倦怠が押し寄せてきた。
　律子は仕事をこなしながら、清美のことを考えていた。雪の失踪、聡子に続いて清美

の辞職。病院はずいぶん寂しくなった。スタッフだけではない、患者の数も減っている。スタッフが減っているから、相対的に仕事量は減りはしないのだが、絶対的な患者の数は減っていた。例の患者ばかりでなく、少し前には多かった、些細な不調を訴える患者も少ない。結局、近頃病院にやって来るのは、ずっと以前から通っているような慢性病の患者や怪我人がほとんどで、それもじりじりと減っている。——それが怖い、と思う。

葬式の数は減ってない。今朝も訃報がふたつ入っている。死はやんでいないのだ。それで村人の不安が軽減されるはずもなかった。以前と同じく不安だろう。だったらもっと些細な不具合を訴えてやって来る患者が多くてもいいはずだ。それが減っているのはなぜか。また、例の患者が減っているのはなぜだろう。慢性病や理学療法に訪れる患者までもが減ったのは、人そのものが減っているせいなのかもしれなかった。

（何か、とても怖いことが起こってる……）

律子にはそう思えてならなかった。不安な気分で仕事を終え、家に帰ったが、やはり落ち着かなかった。時計を見て意を決する。太郎の引綱を取って家を出た。

清美と話をしてみよう。辞める辞めないはもちろん清美の自由なのだが、律子には心細くてならない。目に見えないところで、何か怖いことが起こっている。そのはずなのに、目に見えないのがいっそう不安だった。

清美の家は、門前にある。律子の家とさほどには遠くない。太郎を頼りに、道路際の

家々の明かりに励まされて夜道を歩き、清美の家の近くまで来たときだった。一台のトラックが前からやって来て律子とすれ違っていった。律子は思わずそれを見送った。
――高砂運送。
ふいに妙な予感を感じた。律子は小走りに枝道を折れ、清美の家へと向かった。清美の家には明かりがなく、雨戸も窓もぴったりと閉じている。玄関に駆けつけ、呼び鈴を押したが応答がなかった。
(……やっぱり)
隣家のドアを叩(たた)いた。老齢の男が顔を出し、律子が恐れていた通り、清美の一家はついさっき越していったと教えてくれた。
(そんな、馬鹿な)
引越す予定があったなら、清美は事前にそう言っただろう。今日、電話をしてきた時にだって、辞める理由としてそれを挙げたはずだ。引越すことになったから、辞めると言えば角も立たない。――なのに。
「……わたしたちが邪魔なのね」
敏夫を支えるスタッフが。尾崎医院の存在が。だから下山も十和田も、パートの二人も、雪も聡子も清美も。
(奈緒さんに似た誰か……)

似た誰か、ではない。あれは奈緒だったのだ、間違いなく。これは伝染病なんかじゃない。だから、病院を標的にしている。
ふいに涙がこみ上げてきた。清美には、たぶんもう会えない。雪にも、そしてきっと聡子にも。律子はそれを確信していた。
「みんな行って……そして誰もいなくなる」
律子は道に蹲り、甘えた声を出す犬を抱いた。太郎はひとしきり、律子を宥めようとするかのように律子の頬を舐めていたが、ふいに怯えたように声音を変えた。
律子の背後に、人影が近づいていた。

3

昭は不寝番をするつもりで部屋の窓を開け、家の前の道を見下ろして一夜を過ごした。過ごすつもりだったが、結局どこかの時点で寝入ったらしい。明け方の冷気に目を覚ましてみると、すでに夜は明けていて、昭の脇でも、かおりが眠っていた。
舌打ちをしながら階下に向かう。母親は宥め賺して座敷に移してあった。仏壇の前に布団を敷き、そこで寝かせ、雨戸や襖にお札を貼り、破魔矢を吊していたのだが、昭が降りてみると雨戸が一枚、開いていた。

母親は青い顔をして眠っている。容態は昨日より悪かった。貼ったはずの札は一枚残らず剝がされ、破魔矢どころか、仏壇の中の本尊や香炉までがなかった。
「母ちゃん、お札、知らないか?」
昭は母親を揺すり起こしたが、母親は億劫そうに首を振る。
昭は庭に飛び降りた。あたりを捜したが、それらのものの一切が見つからなかった。ただ、庭に香炉から零れたのか、ぶちまけたような灰の跡だけが残っていた。
札や破魔矢では連中を止められないのだと悟るしかなかった。しきりに水をほしがる母親の枕許には、かおりが残り、昭は学校をさぼってバス停に向かう。今度は昭が、溝辺町の神社に行く肚だった。あんなものでは襲撃を止められないことは分かっている。けれども、それがそのまま残っていたわけではない、御丁寧に消えているのが気にかかった。本当になんの効力もないのなら、連中はそれをほったらかしにしておくだろう。わざわざ除けたぐらいだから、嫌がらせ程度の効果はあるのかもしれない。
考えながら歩いていると、声をかけられた。タケムラの前だった。
「こんな時間に、どこ行くんだい」
声をかけてきた老人は、知り合いではないが、佐藤笈太郎ということぐらいは知っている。たしか水口で木工をやっている老人だ。いつもタケムラの前にたむろしている。
「もう学校に行く時間だろうに」

「母ちゃんに用事、頼まれて」
おやまあ、と笈太郎は目を丸くする。
「学校をさぼってかい」
訳知り顔に口を開いたのは、下外場の大塚弥栄子だった。
「お母さんの具合が悪いんだって？」
「うん」
「お父さんが亡くなったばっかりだって言うのに、大変ねえ。それでなくても死人が出ると、あとあと雑用がつきないのに」
ああそうか、と笈太郎が呟いて、黄ばんだ歯を見せて笑う。
「そうか、そりゃあ大変だな。おっ母さんの按配はどうだい」
「……分かんない」
そうか、と笈太郎はどこか悄然とした。弥栄子もわざわざ床几を立って、昭の背中を撫でる。
「今年は酷い年よねえ。なんだか得体が知れなくて。こんなときこそ昭ちゃんがしっかりしないとねえ。男の子だもんねえ」
昭は黙って頷いた。そこには、昭の決意が込められている。
「本当に得体が知れないよ。次から次へと人が死んじまってさ」笈太郎は溜息をつい

た。「金物店の嫁さんだって逝っちまって、タツさんとこの縁続きでも、とうとう葬式だよ。あんなに元気だったのにさ」
およし、と低く言ったのは、竹村タツだった。笈太郎は、はっと気づいたように、昭の顔を見る。
「いや、その。……母ちゃんだけでも治るといいなあ」
昭は頷き、そして老人たちの顔を見た。
「でも、治るもんなのかな」
「治るわよ」弥栄子は昭の肩を揺らす。「そんな縁起でもないこと、言うもんじゃないわ」
「でも、治った人、いるの？　夏からこっち、誰それが具合が悪いって話ばっかりでさ。治った人なんて一人もいないじゃないか」
昭が突きつけるように言うと、老人たちは押し黙った。タツが軽く息を吐く。
「……その通りだね」
「ちょっと、タツさん」
弥栄子が慌てたように声をかけたが、タツは頓着しなかった。昭に向かって重々しく頷く。
「あんたの言う通りだよ」

「こんなに人がバタバタ死んでさ。次から次へと倒れて。なのにどうして、大人は何もしないんだ？　どうして放っておくんだよ」

タツは何も言わなかった。放ってるわけじゃ、と笈太郎が下を向く。弥栄子は昭の肩に手をかけたまま、明らかに困惑した様子だった。昭には我慢ができなかった。

「この村、変だよ。絶対にどうかしてる。こんなに人が死んで、なのに大人は何もしない。なんで誰もなんとかしようとしないんだよ。いっつも大人だ大人だって威張ってるんじゃないか。だったらなんとかしてみせろよ」

笈太郎がむっとしたように何かを言いかけたが、弥栄子がそれを制した。

「お父さんが死んだばっかりだもんね。お母さんまで具合が悪かったら、そう思うのも仕方ないわ。あたしたちだって、何も考えてないわけじゃないんだけどねえ」

弥栄子の憐愍（れんびん）を込めた声が不快だった。昭はポケットに両手を突っ込み、タケムラの前を離れようとした。

「そんなことを言うけど弥栄さん、おれたちにどうにかできるのかい」笈太郎が情けなく声を上げた。「たしかに変だよ、この村はさ。けど、尾崎の若先生にもどうにもできないんだろう。しかもさ、何なんだいあれは、あちこちの家が空になったり、かと思うと、いつの間にか人が戻ってたりさ。しかも郁美さんのとこだって」

昭は足を止め振り返った。聞くともなく笈太郎の言葉に耳を傾ける。

「赤恥かいたんで、親子揃って出て行ったんでしょ。当然なんじゃない？」
「そうじゃなくてさ。妙な噂があんだよ、知らないのかい。最近、出入りするのがあるらしいんだよ。それも夜中にさ。もちろん郁美さんじゃないし、娘の玉恵でもない。田丸の婆さんは、前田の巌さんに似てたって」
「馬鹿な」弥栄子は笑いながら手を振る。「あの人は気が弱いんだから。巌さんのはずないじゃないの。あの人は月の初めに死んだんだからさ」
「そうとも。だから気味が悪いんじゃないか。冗談じゃない、おれは、こういう気色の悪いことに係わり合いになるのは真っ平だ。そりゃあ、強盗や何だってんなら、若い者の真似だってしてみようって気になるけどね」
　昭は路面に落ちた自分の影を見つめた。前田巌——下外場の老人だ。名前通り巌ついい顔を思い出した。そう、死んだという話を聞いたことがある。そしてその巌に似た人影が夜に出入りしている家がある。
「それ、どこ？」
　昭は老人たちに声をかけた。笈太郎は、昭の存在を失念していたのか、驚いたようにし、だから郁美さんの、と言った。
「水口の伊藤って家だよ。いちばん下にぽつんと一軒だけ離れてる。三猿の石碑のすぐ近くさ」

そう、と呟いて、昭は川の対岸に目をやった。川と山に挟まれたごく細長い土地に、家が建ち並んでいる。

昭は踵を返した。笈太郎が不審そうに声をかけてきたが、構わず走って家に取って返す。問いかけるように、かおりが出てきたが、無視して二階に駆け上がった。

木槌はない。あるのは父親の金槌だけだが、これでも大丈夫なのに違いない。昭は机の下に突っ込んでおいた箱を引き出し、そこから杭を二本、引っぱり出した。昨日一日かかって、七本の杭を作ってある。

それを金槌と一緒にデイパックの中に放り込んだ。念のために自分用に取っておいた守り札を胸ポケットに押し込む。

「おれは、やるよ」昭は高ぶって震える手で、ポケットの中身を確認するように押さえる。「兄ちゃんの仇は取ってやるから」

こうするべきだ、と言ったはずだ、夏野なら。昭はデイパックを摑み、階段を駆け降りる。かおりには構わず、家を飛び出した。

昭はまっすぐに水口に向かった。タツだけが三之橋を渡る昭を遠目に見た。

笈太郎の言っていた家は、すぐに分かった。水口の集落のはずれ、どことなく荒んだ感じの小さな竹林の中、山を背に建っている。荒んだ感じがするのは伊藤家も同様だっ

た。もう長いこと廃屋になっているように見える。どことなく気味悪く思いながら、昭は玄関の歪(ゆが)んだガラス戸に手をかけた。

当然のように、ガラス戸は開かなかった。昭は周囲を見渡し、人目がないことを確認すると、裏手へと廻った。すぐにじめじめとした路地の奥に勝手口を見つけたけれども、これもまた開かない。ただ開かないばかりでなく、台所の窓も勝手口のガラスも、内側から板のようなもので目張りされているようだった。昭はさらに裏へと廻り込み、斜面に面した建物を検(あらた)める。窓が二箇所、そのどちらもやはり内側から板が張られている。

昭は腕時計を見た。まだ正午を少し廻ったところだ。連中が起き出すのには早い。時間なら充分にある。

それでも幾度か深呼吸をし、何度も周囲の様子を窺(うかが)いながら、デイパックから金槌を引っぱり出した。もう一度自分に言い聞かせながら一呼吸、それから窓ガラスのひとつに向かって金槌を振り上げた。

おっかなびっくりだったせいか、ガラスは小さな音を立ててひび割れた。軽く釘(くぎ)抜きのほうで叩くと、破片が落ちて桟と板の間に滑り落ちた。それで度胸が据わって、同じように何度か金槌を振り下ろす。ガラスの一枚が完全に落ちて、そこから腕を差し込んでみようとしたけれど、板のせいでそれができない。ただ、板はベニア板らしく、掌(てのひら)で押すと内側に撓(たわ)んだ。

昭はもう一度息を吸う。それからベニア板に向かって尖った釘抜きのほうを打ちつけた。板が裂ける音がして、先端が潜り込む。昭は次第に大胆になった。力任せに金槌の両端を使い分け、桟を壊し、板を裂く。すぐに板が裂けて外れ、桟が折れ、昭が潜り込めるほどの穴が開いた。

いつの間にか肩で息をしていた。汗を制服の袖で拭い、昭は窓によじ登る。ガラスの破片が掌を刺して、軽く舌打ちをした。穴の中に首を突っ込み、とりあえず中を見渡す。窓から射し込んだ光で、暗い部屋の中の様子が見て取れた。黴臭い茶の間だった。

昭は壁を蹴って中に潜り込んだ。家の中は暗い。窓には内側からベニア板が打ちつけられ、まるで隙間を目張りするように、板の縁にはガムテープがきっちりと貼られている。昭の破った部分から光が入っていなければ、本当に真っ暗だっただろう。

昭はデイパックから懐中電灯を取り出した。光を当ててみると、家の内部は廃屋と呼ぶほど荒れていないことが分かった。きっと埃が積もり、あちこちが朽ちているだろうと想像したのに、意外に中はこざっぱりしている。古いことはたしかだが、まるで今も誰かが住んでいるように、あちこちに「家」の気配が漂っていて、自分が土足なのが気が咎めたほどだった。

（誰か、いるんだ……）

どこがどうとは言えない。けれども、人が住んでいるのだ、という気がした。茶の間

には戸口がふたつ。一方はガラス戸で、これは台所に面し、開いている。昭はそちらに明かりを向け、土間に板や石膏のような袋が積んであるのを見つけた。もう一方は隣の部屋に向かう襖だった。古びて染みが浮いた襖は、ぴったりと閉じている。

昭はそろそろと襖に手をかけた。滑りの悪い襖は、軽く抵抗してから音を立てて開いた。そっと中に明かりを向け、覗き込むと布団が見える。舐めるように照らしてみたが、布団の中には誰の姿もなかった。

この部屋には窓がないようだった。部屋の一方は土間に面し、向かい側にはさらに隣の部屋に向かうとおぼしき襖がある。もう一方には部屋の幅いっぱいの大きな仏壇らしき棚が見えたが、軸や仏像のようなものはなかった。ごたごたと物の置かれた棚や箪笥があちこちに据えてあって、床にはかろうじて布団を敷けるほどのスペースしかない。そこにいかにも寝乱れたふうの布団が放置してある。

(誰もいないのかよ……?)

昭は思いながら、布団を踏みにじって部屋を横切り、さらに向かい側の襖に手をかけた。誰の姿もないことで、どこか拍子抜けしたような気分があった。そろそろと、けれども先ほどよりはかなり無造作に襖を開く。

小さな家には、三間しか部屋がないようだった。六畳ほどの部屋の正面には内側から板の張られた窓、どうやらそれが表に面しているらしい。ぴったりと目張りされている

ようで、部屋の中には真の闇（やみ）が降りている。懐中電灯の明かりで箪笥や坐（すわ）り机が配置され、その合間にごたごたと物が積み上げてあるのが分かった。
土間に面してはガラスの入った障子、これを開けると玄関で、土間が台所までを廊下のように貫いていると分かる。玄関のガラス戸にも板が張られ、しっかり目張りされている。土間にも段ボール箱や物が積み上げてあるが、これと言って不審なものは見えなかった。土間の反対側には妙に真新しいカーテンが吊（つる）されている。手をかけてみると、ゴム引きしたような手触りがして、裏側は黒い。そのカーテンの向こうは窓ではなく襖になっていた。
昭は首を傾（かし）げた。天袋が見えるから押入だろうが、なんだってカーテンなど吊してあるのだろう。昭は襖を開け、明かりを向けて、思わず跳び退（すさ）った。
声にならない悲鳴が漏れた。押入の上段に横たわっている人影があった。
折り畳んだ毛布を敷き詰めたところに、濃い色の服を着た人間が横たわっている。片手が腹の上に載せられていたが、ぴくりでもなかった。――そう、まるで反応がない。
昭は震える手で光を向けた。やはり人影はまったく身動きをしなかった。懐中電灯の先で襖を押し開けてみた。眠った男の顔が見えた。厳つい顔の老人で、昭はその顔に見覚えがあった。
（前田の……爺（じい）さんだ）

やはり、と思った。噂は本当だったのだ。死んだはずの老人がここに横たわっている。昭は光を顔に向け、表情を凝視したが、老人はピクリとも動かない。深く眠っている。

——あるいは。

昭は懐中電灯の先で老人をつついてみた。やはりなんの反応もなかった。二歩、三歩と側(そば)に寄ってみる。老人はこそとも動かず、そして寝息も聞こえない。腹の上に載せた手に、おっかなびっくり触ってみると冷たかった。死んでいる、と言うべきだろう、本来ならば。

（こいつが）

昭は息を呑(の)み下す。口の中は干上がっていた。軽く揺すっても反応はない。そっと手を指で摘(つま)み、持ち上げて放すとパタリと落ちる。前後不覚に眠っている——あるいは、本当に死んでいるのだ。

昭は緊張のあまり、笑いたい気がした。人形のように無抵抗に横たわっている。これが父親の——夏野の仇だ。夏以来、村に死を撒(ま)き散らし、昭の世界を引き裂いた元凶。本当に昼間には、活動できないのだ、と思った。こんなふうに暗いところに潜んで眠っている。身動きできず、目覚めることもできない。日が暮れるまでは、昭の思うままだ。

「見つけたぞ」

昭は声に出してみた。やはり老人は、柔らかい人形のように横たわっている。

「やっつけてやるからな。……全員」

昭は老人の腹の上、筋ばった手の側に懐中電灯を置き、デイパックから杭を取り出した。ベルトに差した金槌を抜く。身を乗り出し、顔を覗き込むようにして杭を構えた。切っ先が震えて、位置が定まらない。

こいつらは人殺しだ、と昭は自分に言い聞かせた。

「兄ちゃんも父ちゃんも死んだ。お前らが殺したんだ。だから、おれだって酷いことだなんて思わないからな」

そう、同情はしない。斟酌しない。これは正義であり、生者の正当な権利だ。

「お前らは鬼なんだ」

切っ先を老人の胸板に押し当てた。当てた一点を軸にして、杭は情けないほど揺れている。

やるんだ、と昭は自分を叱咤した。この禍々しい連中が、無抵抗でいる今のうちに。今なら鬼は抵抗できず、昭に危害を加えることはできない。昭が金槌を振り下ろすのを止められず、易々と息の根を止められて、灰になって消えていくだろう。

言い聞かせても、金槌を握った手が動かなかった。昭は強いて、父親の死に顔や、夏野の最後に見た顔を思い出そうとした。横たわった母親、父親の死体を置き去りに、怒

りを露わにしていた母親と、それを見ていた自分のやるせなさ。無力感と絶望、怒りと悔しさ。昭を苦しめたすべての元凶。

「……やっつけるんだ」

まだ陽が高い、今のうちに。

——昭は、辰巳の存在を完全に失念していた。彼のように真昼に外に姿を現すことのできる者がいることは、まったく念頭に浮かばなかった。それだから、まさか自分の背後に気配を殺して近づいてくる人影があろうとは、想像だにしなかった。昭の注意は震える杭の切っ先に向けられており、頑として動こうとしない金槌に向けられていた。

太い腕が伸ばされた。厚みのある手がそろりと昭の肩先に伸び、首筋を左右から摑もうとしていたが、その手は、気配も臭いも放射していなかった。構えられた手は、唐突に閉じて昭の首を捕らえ、締め上げた。悲鳴もなく、声もなく、ただ杭が倒れ、金槌が落下して鈍い音を立てた。

——何かが、突然、落ちかかってくるような衝撃を受けたことは覚えている。

昭は誰かに肩を叩かれたような気がしてぼんやりと目を開けた。昭には何が起こったのか分からず、さっきどうして急に血の気が引いていったのかも分からなかった。そして今、なぜ喉がこんなに痛むのかも分からない。

昭は瞬いた。暗い部屋の中だった。自分の視野の下のほうに明かりがある。懐中電灯の明かりだった。見るともなく見て、時計を捉えた。秒針の動く硬い音がしていた。
昭は、はたと我に返り、弾かれたように身動きをした。どっと汗が噴き出した。くぐもった声が漏れたが、悲鳴にはならなかった。口が固く貼り合わされている。
暗い部屋の中、ここは昭が忍び込んだあの部屋だ。すぐ近くに、わずかに開いたカーテンと、襖が見える。隙間は暗かったが、かろうじてそこに黒の濃淡で横たわる影が覗いているのが分かった。
身動きしようとしたができなかった。昭は周囲を見まわし、身を捩って自分の姿を検める。おそらくガムテープのようなもので口が塞がれており、ロープで自分が坐ったまま柱か何かに縛りつけられていることを確認した。両手は括り合わされ、投げ出された足の間に落ちている。その足先の床の上には、懐中電灯が置かれ（落ちて?）、頼りない光が、畳の上に置かれた四角い目覚まし時計を照らしていた。
（……時計）
昭は何気なくそれを見つめ、そして目を見開いた。悲鳴じみた声が漏れたが、それは蓋されて喉につかえ、逆流して昭を咳き込ませる。それすらもままならず、昭は少しの間、自分の咳で窒息しそうな気分を味わった。
苦痛で涙が滲む。なんとか咳を鎮めて瞬くと、時計の文字盤が見て取れた。嘲るよう

に懐中電灯で照らされたそれは、長針が六と七の間を、短針が四と五の間を示している。
昭は渾身の力で身もがいたが、縛めは緩む気配もなく、かえって腕に食い込んで抜き差しならない苦痛を与えた。絶望的な気分で時計と押入の間隙を見比べる。くぐもった悲鳴が間断なく塞がれた口から漏れた。足が畳を蹴り、叩く。断末魔のように。その衝撃で床に置かれた懐中電灯が転がったが、依然として文字盤には光が射していた。
——四時三十三分。
硬質の音を立てて、秒針が歯車のように動く。一秒ずつ。

4

清水寛子は回覧板を持って家を出た。そこには、役場に夜間窓口が設けられた旨、告知が出ていた。
(都会でもないのに……)
夜でなければ役場に行けないような、そんな忙しい人間が、この村にいるのだろうか。第一、夜にわざわざ出かけるなんて。
(妙な感じ)
思いながら、隣家の呼び鈴を押した。ほんの少し前まで、呼び鈴など押さずともドア

を開けて声をかければ良かったのに、隣家の住人は近頃、昼間でも鍵をかける。別に隣家に影響されて、というわけでもなかったが、寛子も近頃では、そうすることが増えた。別に昼間、物騒なことが起こるなどと思っているわけではないものの。
すぐに玄関の中で足音がして、太田道代が顔を出した。道代は寛子の顔を見るなり、ああ、と呟いて笑みを浮かべる。寛子は目を伏せた。いつからだろう。道代が笑顔を装っている、という気がしてならない。寛子だと気づいたときの、ほんの一瞬の間。眉根が今にも寄せられそうになって、それを糊塗するようにわざとらしいまでの笑顔が浮かぶ。
自分は歓迎されてない。寛子はそう思う。それは最初、気のせいとしか思えなかったが、今では確信になっていた。
「あの、回覧板なんだけど」
寛子が言って、クリップボードを差し出すと、道代はほんのわずか、それと寛子を見比べた。
「ああ、そう。悪いわね。ポストに投げ込んでおいてくれれば良かったのに」
貼りついたような笑みで言いながら、道代はなかなか手を出そうとしない。寛子はこんなとき、まるで自分が何かに汚染されているかのように感じる。
(何だって言うのよ)

寛子は道代に回覧板を突きつけた。道代は躊躇(ためら)ったようにして、それを受け取る。受け取った手つきが、いかにも汚いものでも受け取るかのようだった。にもかかわらず、依然として道代の顔には笑顔が浮かんでいる。

寛子はその笑みから視線を逸(そ)らした。踵(きびす)を返そうとして、ふと玄関脇(わき)の窓が目に留まった。

「あら、カーテンを変えたのね」

「ええ、そう……前のがずいぶん汚れちゃったから」

薄い花柄のカーテンは、いかにも厚い生地のそれに変わっていた。しかもガラスには、レース模様のシートが貼られていた。

「ずいぶん、お洒落(しゃれ)ね」

「そう？」と、道代は窓に目をやる。「ほら、今まで何もかも開けっぴろげにしてきたけど、なんだかそれって不用心な気がして」

「用心しないといけないような心当たりでもあるの？」

寛子は、道代に問うた。それは自分たちのことか、と問いたかったがそれはできなかった。

「そういうわけじゃないけど。ほら、あたしは奥さんと違って、ずぼらだから。家の中の掃除だっていい加減なもんだし、それが外から丸見えなのも外聞が悪い気がして」

「そう?」と、寛子は言いながら、軒に吊された草の束を示した。「ねえ、あれって蓬?」
「ええ、そう。……そうなの、干して草餅でも作ろうと思って」
寛子は首を傾げた。新芽を摘んできて草餅を作るというのは分かるが、干してまで蓬を蓄えようというのは理解できなかった。
「あら、いけない」道代は、取って付けたような声を上げた。「お風呂に水を張ってる途中だったわ」
そう、と寛子は苦労して笑う。
「ごめんなさい。お邪魔して」
「いいのよ。――じゃあ」
寛子の鼻先でドアが閉まり、そして鍵をかける音がした。寛子は少しの間、閉ざされたドアを見つめ、その外に閉め出されている自分について考えた。
(何なのよ、一体)
泣きたい気がする。この村は最低だ、と思った。ひと思いに出て行けない我が身が恨めしかった。踵を返し、改めてドアを一瞥した。ドアの上にある採光窓に、びっしりと紙が貼られているのに気づいた。
寛子は首を傾げる。それは守り札だ。外に向けて、数枚の守り札が等間隔に貼られている。今まで一度だって、あんなものを貼っているのは見たことがなかったのに。

5

「こんばんは」と、加藤は玄関の戸を開けて中に声をかけた。手には大工道具の入った鞄（かばん）を提げていた。

工務店からの依頼だった。裏口のドアの建てつけが悪く、鍵も壊れているので直してくれ、と依頼された。外場のごたごたと人家が集まったあたりにある、滝重造（たきじゅうぞう）の家だった。

「滝さん、こんばんは。遅くなって済みません。安森工務店の者ですが」

とにかく、細かな造作が多い。依頼された仕事をこなしているうちに、思いのほか、遅くなった。もともと、用があるので夕方以降に来てくれとは言われていたものの、すでに夕方どころか八時を過ぎていた。

「あのう――滝さん」

外場集落の混み合ったあたりには珍しくない、棟割（むねわ）り長屋の一軒だった。間口は狭く、奥が深い。その奥のほうから、うっそりと老人が一人姿を現した。

「ああ、済みません。滝さんはおられますか」

加藤が言うと、その老人は何やら不快気に眉根を寄せて頷（うなず）く。

「わしが滝だが。工務店の人かね」
ええ、と答えながら、加藤は瞬いた。
「あの……滝重造さんは」
「わしだ」
そんな、という言葉を加藤は呑み込んだ。加藤は滝老人を知っている。母親のゆきえと同級生で、それで親交があるのだ。——だが、この老人はどう見ても滝ではない。
加藤は激しく困惑した。家はここで間違いない。これまでに何度も、アンテナの工事や電化製品の納品に来たことがあるからたしかだ。だが、この老人は絶対に滝ではない。なのに本人が滝だと言う。
どうなっているのだろう、と目眩のする気分でいると、滝は奥のほうを示す。
「裏から廻ってきてくれるかい。裏口なんで」
はい、と加藤は頷いた。悪心のようなものを感じた。
鞄を提げて外に出て、そして建物を振り返る。たしかにここだ。表札にも滝とある。
どうなっているんだ、とまた心中で繰り返したとき、すぐ隣の家の前に女が三人、和やかに立ち話をしているのが目に入った。
「あの……済みません」
はい、と女の一人が振り返った。

「こちらは、滝さんのお宅ですよね？」
そうですけど、と女たちは不審そうにする。
「滝、重造さん？」
「そうよ」
「重造さんは、あんな方でしたっけ」
女たちは呆れたように加藤を見た。
「もちろん、そうよ。何なの？」
いえ、と加藤は口の中で呟いた。本当に悪心のようなものがこみ上げてきた。それを呑み下し、鞄を提げて裏へと廻る。女たちは加藤のほうを胡乱なものを見る目で見て、それから中の一人の促す声で、揃って隣の家の中へと入っていった。加藤は思わず、鞄を取り落としそうになった。
（……そんな）
促した一人は、まるで自分の家に他の二人を誘うふうだった。だが、その女にも、加藤は見覚えがない。滝の隣は、老婆の一人暮らしではなかったか。あんな中年の女がいるなんて、加藤は聞いたことがない。しかもあの女は村の別の場所で見かけた覚えがある。
（……越してきたんだ）

きっとそうに違いない。そう思いながら、加藤は思わず、懐の中から守り袋を引き出していた。母親のゆきえから最近になって渡されたものだ。どうしても身に付けていろと言って聞かないから、とりあえず母親を宥めるつもりで身に付けていた。ゆきえが縫ったもので、中に何が入っているのかは知らないが、抹香を入れているのか、薫きしめてあるのか、強く香の匂いがしていた。

それを握りしめて、加藤は裏へと向かう。なぜだか、その小さな袋が、このうえなく心強かった。

6

大川篤は暗い部屋の中で目を覚ました。まったく見覚えのない部屋だった。

彼はしばらく見当識を失い、呆然としていた。何がどうなっているのか分からない。だが、気を取り直して周囲を検め、その結果ただひとつだけ確認した。それは、自分が閉じ籠められている、ということだった。虜囚となっていることに対する恐怖が——その反動としての怒りが突き上げてきて、篤は力任せにドアを殴った。渾身の力で蹴り、何度も体当たりを繰り返すと、ボルトの塡まった受座の部分から枠が裂けてドアが開いた。部屋を飛び出したが、廊下もまた密閉されていた。篤は手当たり次第にそのへんを叩

き、喚(わめ)いた。喚いたという自覚が篤自身にないまま、篤は怒声を撒(ま)き散らしていた。捕らえられていた部屋のすぐ隣にはドアがあって、錠が下りているようだったが、ドアの脇には鍵がぶら下げてあった。鍵を開け、篤は中に踏み込む。牢獄(ろうごく)のように格子(こうし)の嵌められた室内には、老婆が一人蹲(うずくま)っていた。

その老婆は、篤のほうを見ると、怯(おび)えたように身を縮めた。逃げるようにあがいたが、牢獄の隅に身を寄せた彼女には、それ以上逃げる場所がどこにもなかった。

「おい、ここはどこだ」

篤は吼(ほ)えたが、老婆は身を竦(すく)める。悲鳴じみた声を上げるだけで、篤に答えようとはしなかった。篤は檻(おり)を開け、中に踏み込む。篤は混乱していたし、恐ろしかった。実を言えば他人を見つけて安堵(あんど)したのだし、その人物が自分と同じく閉じ籠められていることに、連帯感めいたものを感じていた。それで中に踏み込んだのだが、老婆は悲鳴を上げて逃げる。篤は老婆が自身の混乱に対して解答を与えてくれ、安心感を与えてくれることを望んでいたが、老婆のほうはひたすら、篤から逃れ篤を拒むことしか考えていなかった。

「ここはどこなんだ」

篤が問えば、悲鳴を上げ、這(は)って逃げる。

「なんで檻なんかあるんだよ。ひょっとしてあんたも捕まってんのか」

「やめて。勘弁しとくれよォ」
「何もしねえよ。それより答えてくれ。ここはどこなんだよ！」
老婆は篤の大きな体軀と吼えるような声が怖かった。暗闇の中に閉じ籠められ、大きな他人の気配だけがある。篤は暗闇の中でも老婆の様子を見て取ることができたが、老婆のほうはそれができず、できないことを篤は理解していなかった。
「なあ、おい」
「やめてよォ」
老婆はしゃくりあげ、逃げ惑う。篤は苛立った。与えてほしいものが与えられない。老婆は逆上していたし、篤はそんな老婆以上に逆上していた。
「おい、逃げんなよ！」
老婆の腕を捕まえた。老婆は身を捩って逃げようと泣き喚いた。逃がすまいと篤は老婆にのしかかり、それでいっそう、老婆はあがく。死にものぐるいで逃げようとした。恐怖と不安と、老婆の過剰な反応が篤を恐慌に陥れた。思うようにならない苛立ちと、恐怖の反動としての怒りが、もとより切れそうな篤の理性の箍を外した。
「なんだよ、手前は！」
篤は老婆の腕を摑んで揺さぶり、逃げようとする背中を押して壁に叩きつけた。とにかく篤に対する抵抗をやめさせたい一心で老婆を殴り、あたり構わず叩きつけ、力任せ

に身体に手をかけて押さえ込んでいるうちに老婆は静かになった。

悲鳴がやんで、ようやく篤はほんの少しだけ落ち着いた。息をついてみると、老婆は額を割られ、ぐったりと力を失っていた。

篤は狼狽して彼女を放した。老婆は物のように投げ出され、こそとも身動きをしなくなった。慌てて揺すったが反応はない。叩いても呻き声すら上げず、口を覆っても呼気が感じられない。

篤は悲鳴を上げた。

——殺した。

「冗談だろ、おれ」

そんなつもりじゃなかった、という言葉は喉を越さなかった。こいつがあんまり騒ぐから。少しも篤の言葉など聞いてくれなかったから。まるで篤が化け物であるかのように、遮二無二逃げ出そうとするから。

呆然自失し、はたと我に返った。大変なことになった。この場を逃げなければ。腰が抜けたように力のない下肢を励まして立ち上がろうとしたとき、人の声が聞こえた。篤は竦んだ。逃げなければ、という衝動があまりに大きくて、かえって身動きができなかった。

若い男を先頭に数人の男たちが戸口に姿を現した。彼らは驚いたように動きを止め、

篤を注視した。
「ち……違うんだ。そんなつもりじゃなかったんだ。おれはちょっとこいつに話を聞こうと思って、それで」
若い男は眉を顰めただけで、檻の中に入ってくる。一人だけなら、体当たりして逃げ出せたかもしれない。だが、相手は複数で戸口には人の壁ができていた。篤は泣きそうな気分で若い男が老婆に向かって屈み込み、自分の犯した罪を検めるのを見ているしかなかった。
「……死んでるね」
「おれ、――おれは」
「辰巳さん、どうなってるんです」
戸口にいた連中が声をかけた。若い男は辰巳というらしかった。辰巳は篤を振り返る。
「君が殺したんだね」
「そんなつもりじゃなかったんだ」
篤は縺れる舌で、なんとか事情を説明しようとした。そんなつもりではなかった、老婆があまりに見境がないから。とにかく押さえつけて話をしたい一心で。
辰巳は手を振って篤の言を遮る。
「まあ、いい」言って、戸口のほうを振り返った。「運んでくれ。これは駄目だ。もう

埋めてしまっていい」
篤は辰巳を凝視した。辰巳は軽く微笑む。
「そんなに慌てなくていい。どのみち、これは君のために誂えたものだったんだから」
男たちが檻の中に入ってきて、淡々と死体を抱え上げた。誰も老婆を悼むでなく、篤に対して非難がましい目を向けるでもなかった。むしろ、中の一人は感心したような呆れたような目を向けた。
「襲えと言われないうちから、獲物を襲った奴は初めてですねえ。肝の太いこった」
くすり、と辰巳も笑う。
「将来有望だよ。まったくね」
「……死んでるんだろ？」
「死んでるね。だが、人は誰でもいつかは死ぬんだ。違うかい？」
篤はようやく理解した。誰も篤を責める気はないのだということ。それも、篤が老婆を殺してしまった事情を察してのことではない。そもそも誰も老婆の生死に頓着していないのだ。老婆が死んだことなど、誰も気にとめてない。
「さあ。こんなところにいても仕方ない。隣に君の部屋がある。少しの間、そこにいてもらわないといけないが、君はすぐにここを出ることになりそうだ」
「おれは――」

「君が色々と不審に思ってることは分かっている。知りたいことは教えてあげるよ、全部ね」

篤は辰巳に促されて檻を出た。檻のさらに隣にこぢんまりとした部屋があり、そこで服を渡されて、自分がようやく経帷子(きょうかたびら)を着ていることに気がついた。篤は辰巳から自分に何が起こったか、説明を受けた。そのほとんどが、篤にはピンと来なかった。聞きはしたものの、腑(ふ)には落ちなかった。混乱ばかりが募る。

「おれは死んでない。おれはこうしてここに」

「いるのだけどね。けれども君はもう死んでいるんだ。別物になってしまった」

「けど」

言いかけたところに若々しい声がした。小部屋を女が覗(のぞ)き込んでいる。その若く、華やかな顔立ちに篤は見覚えがある気がした。

「起きたのね」

女は笑う。辰巳が息を吐いた。

「まだ混乱しているようだ」

「あなたが小難しく説明をするからよ」女は笑い、篤に目をやる。「わたしを覚えてる？」

篤は首を振った。覚えているようでもあり、覚えがないようでもあった。

「そう？　いいわ、じきに思い出すから」

「おれは——」
「何が起こったのかなんて問題じゃないわ。わたしたち、これから楽しくやるのよ、そうでしょ?」
篤はぽかんとし、それから頷いた。篤はただ、たったひとつのことだけを理解した。
自分は殺戮の特権を手に入れたのだ、ということ。
——復讐だ。
篤は快哉を叫ぶ。
これまで自分を馬鹿にしてきた奴らのすべてに思い知らせてやる。

十七章

I

「お母さん、具合、どう？」
　加奈美は朝食を携えて母親の寝間の襖を開け、そして妙の様子がおかしいのに気づいた。顔が無気味な色に紅潮している。息は喘ぐように速く荒い。
「お母さん！」
　医者を呼ばなければ。――それとも、救急車を呼んだほうがいいだろうか。尾崎医院も不幸があったばかりだ。元子のところの志保梨のように、連れて行ったものの病院が閉まっている、などということがあったら。
　迷っているうちに、妙が奇妙な声を漏らした。音を立てて妙の足が布団を蹴る。下から突き上げられたように、二、三度、腹を浮かせた。見るみる赤い顔が紫を帯びてくる。口から血の混じった泡を吹いた。
「お母さん！」
　加奈美は慌てて泡を拭う。何度も揺すり、救急車を呼ばなければ、と思う。だが、立

ち上がって電話口へ行くまでの間、妙から目を離す踏ん切りがつかない。たかがそれだけの時間の余裕すらないように見えた。

妙はもう一度、血泡を吹いて、そして喉(のど)の奥で押しつぶされたような声を上げた。見開かれた目が白目を剝(む)き、弱く足が布団を蹴った。――そしてそれが最後だった。

妙は唐突に動かなくなった。懸命に揺すってみたが、布団の外に投げ出された手が、細かく痙攣(けいれん)しただけだった。それすらも、わずかの間にやんで、加奈美は妙の死亡を知る。胸に耳を押し当ててみたが、なんの音も聞こえなかった。トレイからスプーンを取って、鼻先にあてがってみても、スプーンは曇らない。息をしてない。

加奈美は悄然(しょうぜん)と坐(すわ)り込んだ。トレイの上の雑炊はまだ湯気を立てている。それだけの時間しか経(た)っていなかった。ほんのわずかの間に、妙は越えがたいものを越えてしまった。

零(こぼ)れた涙に促されて、加奈美は立ち上がる。敏夫に電話を入れた。敏夫が駆けつけてきて、死亡を確認した。

「救急車を呼ぼうと思ったんですけど、電話をかける間、目を離してもいいか心配で」

加奈美が言うと、敏夫は同意するように頷(うなず)く。

「救急車でも、駆けつけてくるのに二十分はかかるからな。おれでもそのくらいはかかる。……たぶんどっちにしても間に合わなかっただろうな」

そうですか、と加奈美は頷いた。ほんの少しだけ救われた気分だった。
敏夫に死亡診断書を書いてもらい、世話役に連絡をした。その間ずっと、とうとう、という気がしていた。加奈美の家でも葬式を出すことになった。——そう、今まで出さずに済んだことのほうが運が良かったのだ。加奈美は妙と二人きり、だから確率的に不幸を免れてきたのだろう。
寺に連絡をしてから、元子に電話をした。元子は無感動に「そう」とだけ言った。切なかったが、茂樹の具合が悪いようだから無理もない。思えば、茂樹をなくせば、元子も一人になってしまうのだ。もちろん、実家の家族はいるのだけれども。
こんな悲劇は、いくらでもあったことだ。特に、この夏以来、毎日どこかであったのだ、とさえ思う。加奈美だけに降りかかってきたことではない。
けれども、涙が止まらなかった。
(どうしてこんなことになったのかしら)
何が原因で——こんな。

2

かおりは煌々(こうこう)と明かりのついた中、母親のどこか冷ややかな手を握っていた。

午前六時を過ぎた。母親は昏々と眠ったまま、そして昭は、とうとう帰ってこなかった。

「お母さん……」

かおりは何度目か、呼びかける。母親は煩わしそうな声を上げたが、目は開けなかった。軽く開いた口からは、ごろごろという微かな音の混じった寝息が漏れている。

お母さん、と泣きそうな気分で、かおりはひしと母親の手を握った。縋るものはこれしかないのに、それは温かみを欠き、しかも、かおりの手を握り返して支えてくれる力強さを欠いていた。

溝辺町に行くと言って家を出た昭。なのにすぐ戻ってきて、二階で何かをしているようだった。それからすぐに降りてきて、何も言わずに出て行ったのが昼前のこと。それきり戻ってこないまま陽が落ち、夜になり、深夜を過ぎて朝になった。

昭、と呼びたい。けれども、声にできない。口に出したら泣き崩れてしまいそうな気がする。そして、それをしたら、昭は二度と戻ってこられない、という気がした。泣いては駄目だ。まるで昭に何か不幸なことが起こったような、そんな態度を取ったら、それが本当になる。きっと、そうなる。

だから今にも綻びそうになる自分を、母親の手に縋ることで支えている。せめて母親の手が温かく、力強かったらどんなに救われるだろう。

力のない手、ひんやりとした温度、うっすらと汗ばんでいるが、その汗も冷たい。かおりの手にも温度がない。指先は力が籠もって白くなっていた。

「……お母さん」

何度呼んでも目を覚まさない。昨日までは呼べば目覚め、時には水がほしいと口にしたのに、昨夜、かおりがうつらうつらしている間に布団を抜け出し、裏口で坐り込んでいるのを見つけて以来、それすらも絶えてしまった。揺すっても縋っても、微かなごろごろという湿った音が応えるばかりで、かおりは完全に一人、家の中に取り残されていた。

母親の様子がおかしい。明らかに、具合は悪化して、尋常の様子ではなくなっている。かおりには、どうしていいのか分からなかった。母親をどうにかしないといけないと思うのに、相談しようにも昭がいない。とうとう一晩、帰ってこなかった。どうにかしないといけないのに、母親は眠ったまま、かおりを助けてはくれない。

「あたし、どうしたらいいの、ねえ！」

かおりは母親の手を引いて揺すったが、やはりなんの反応もなかった。勢い余って、汗で手が滑り、母親の手は力無く落ちて畳を叩く。かおりは横ざまに転び、そしてその場で泣きじゃくった。

自分がなんとかしなければ。父親はいない。母親は昏倒している。昭は帰ってこない。

かおりは本当に一人だ。

泣きながら廊下を這(は)い、茶の間に向かった。電話に縋りつく。震える手で受話器を握ったが、どこに電話すればいいのか分からなかった。

両親の親族は、みんな村を出てしまっている。祖母は伯父の家に引き取られ、遠い町に住んでいた。電話したところで、すぐに駆けつけてくれる親族を、かおりは近辺に持っていない。

電話したほうがいいだろうか。こんな時間に、と言われないだろうか。母親の具合が悪い、昭が帰ってこないなどと言うと、どうしてもっと早くに連絡をしなかった、と叱(しか)られないだろうか。——実際、かおりは何度も連絡をして相談してみようと思ったのだが、躊躇(ちゅうちょ)しているうちに抜き差しならない事態になってしまった。どうしても踏ん切りがつかなかったのだ。いつか聞いた恵の声が、これは人に言ってはならないことなのだ、という理由のない重圧をかけている。

事態は、最初から、かおりに対処できる範囲を超えていた。それが時とともに、ますます解決不可能な難問と化している。ほんの少し躊躇している間に、次々に出口が塞(ふさ)がれて、もうどこにも行き場がないような気がした。

受話器を握ったまま、嗚咽(おえつ)するしかないかおりの耳に、隣家の戸が開く音が聞こえた。その微かな音に弾(はじ)かれ、かおりは顔を上げる。足を縺(もつ)れさせて立ち上がり、表に飛び出

した。

大塚浩子は、雨戸を開けているところに、裏隣の家の少女が駆けつけてきて驚いた。

――田中かおりだ。

「あら、かおりちゃん」

おはよう、と言いかけた声は、かおりの形相に凍りついた。

「小母(おば)さん――」

かおりは浩子に駆け寄り、そしてにわかに泣き始めた。何事だ、と夫の隆之が顔を覗(のぞ)かせる。浩子は分からない、と首を振り、とにかく泣きじゃくる少女を宥(なだ)めようと家に上げた。慰撫(いぶ)し、落ち着かせ、切れ切れの言葉から事情を把握してみようとする。

「お母さんが、病気で」

嗚咽の合間に言葉を聞いて、浩子は最初、田中佐知子が死んだのだと思った。それはあまりに違和感がなかった。浩子の息子が死んだのは夏、それ以来、村では死に事が続いている。かおりの父親も死んだ。もう誰が死んでも不思議はない、という気がしていた。

だが、詳しく話を聞いてみると、佐知子はまだ息があるらしい。問題は、隣家の息子――昭が昨夜、帰ってこなかった、ということだった。

「まあ……」
浩子は泣きじゃくる少女を不憫に思った。父親を亡くしたばかりで、母親が寝付いていて、そのうえ弟が戻ってこない。きっと不安で押しつぶされそうだったろう、少女にとっては長かったに違いない昨夜を思うと憐れみで涙が出た。
「可哀想に。大丈夫よ。……ちょっと行ってお母さんの様子を見てあげましょうね」
浩子は言って、夫を見た。夫は頷き、茶の間で目を白黒させている舅に声をかける。
「おれが行って、駐在と話をしてこよう。——大丈夫だよ、かおりちゃん。お母さんの側についていておいで。昭くんはおれが捜してやるから」
かおりは顔をくしゃくしゃにし、浩子のエプロンに縋って、またひとしきり泣いた。
隆之もその様子を胸の痛みとともに見守った。
隆之から息子を奪っていった「何か」。それが何かは隆之も浩子も知らない。疫病だという噂もあったが、隆之はそれを信じていなかった。根拠などない、とにかく違う、と思う。それが何なのかは分からない。——少なくとも隆之は分かっていないつもりだった。
分からないが「何か」だ。それは隆之から息子を奪い、目の前の少女から父親を奪い、母親をも奪おうとしている。きっとおそらく、弟も奪われてしまったのだろう。それは隆之の息子を襲い、隣家に襲いかかった。そうやって今や村を席巻しようとしている。

3

正雄はその夜、抜け道を通って山入へとやって来る車を見た。運転手は辰巳、助手席から降り立ったのは正雄よりもうんと年下の少女で、ではあれが桐敷沙子なのだと想像がついた。

「あれが……」

正雄が指さすと、恵が複雑そうに頷いた。恵は沙子を見るのは初めてではない。これで三度目になるだろうか。一度は直接対面したのに、歯牙(しが)にもかけられなかった。あれほど会うことを願っていたお屋敷の住人は、恵を振り返らない。恵を振り返ったのは桐敷千鶴(ちづる)だけで、それも単に餌(えさ)として振り返ったにすぎず、以後、千鶴も恵のことなどまったく念頭に浮かばないらしかった。それらの苦い記憶が胸の中に淀(よど)んでいる。

「あんなにちっこいんだ」

正雄が言うと、恵はそっぽを向いた。低く、単なるガキよ、と言い捨てる。

「だけど、あいつがいちばん偉いんだろ」

「知ったことじゃないわ」

屋敷に君臨し、傲慢(ごうまん)に仲間たちを見下ろすちび、と恵はさらに胸の中で呟(つぶや)いた。誰も

があんな子供の顔色を窺うのは、みんな辰巳が怖いからだ。そんな沙子に保護されて、勝手気儘に振る舞っている千鶴、恵だけが値打ちのないもののように山奥の集落にうち捨てられている。

正雄は少し迷い、蔵のある家のほうを見る。山入を仕切る佳枝が住む本家、と呼ばれる家。辰巳と沙子は連れ立って本家に入っていった。正雄が本家へと向かうと、何のかんのと言いながら恵もあとを追ってきた。

本家の茶の間を覗き込むと、沙子が佳枝に何か話しているところだった。同時に辰巳が座敷のほうから柚木を連れてきた。かつては公民館の図書館で司書を務めていた男。

——そして、正雄を仲間に引き込んだ。

正雄と恵ばかりでなく、茶の間を覗き込むようにして、周囲の廊下に人々が集まっていた。柚木は沙子の前に坐り、うなだれる。

「昨日、書店の子供が死んだと聞いたわ」

柚木は身を竦めた。

「孝くんというんですって？　あなたね？」

「答えなさい」佳枝は険のある声で柚木を促す。「あたしがあれほど子供はいけないと言ったのに、あんたはそれを無視してその子を襲ったんでしょう」

はい、と柚木は首を竦めるようにして頷いた。

「子供は駄目よ。特に小さい子は駄目。何度言ったら分かるの？　小さい子供が死ぬと、親を攻撃的にしてしまうのよ」

まったく、と佳枝は見下げ果てたように柚木を見た。

「前にもそれで罰を食らってるのに。——駄目ですよ、お嬢さん。この人のこれは病気だわ。何度叱っても、小さい男の子ばかり襲いたがるんだもの」

へえ、と柱の陰で正雄は口を歪めた。かつてよく見知っていた男の隠された顔を見た思いがした。それであいつは博巳を襲いに来ていたんだ、と思う。正雄はそれを目撃したために、とばっちりを喰った。柚木の目的はあくまでも博巳だったのだ、と知ることは、どういうわけか面白くなかった。

「病気という言い方は正しいかもしれないわね」沙子は柚木を見て溜息をつく。「趣味や嗜好を云々する気はないけど、自分の不利益になることが分かっていてやめられないんじゃ、たしかに病気みたいなものだわ。……どうなの？　どうしてもやめられないの？」

柚木は身を小さくして黙り込んでいる。

「そう。もう一度だけチャンスをあげるわ。辰巳、連れて行ってよく言い聞かせて」

辰巳が柚木を引っ立てる。柚木はそれに抵抗しながら、沙子のほうを見て哀れな声を上げた。

「都会に——街に行かせてください」
駄目よ、と沙子は目を逸(そ)らす。
「自分の損得も分からない人を、目の届かないところへやる気はないわ。あなたのしていることは、全員を危険に巻き込むことなの。どうしてもやめられないと言うなら、二度と迷惑なことができないようにするしかないわ」
「お願いです、わたしは」
「辰巳、連れて行って。明日一日、よく考えてもらいましょう」
正雄は、引き立てられる柚木を見て口を歪めた。それが何を意味するのかは分かっている。どこか、山の奥の林の中に括(くく)りつけられるのだ。樹影の濃い林の中は、昼間でも直射日光が射(さ)すことはない。それでも仲間はひどい火傷(やけど)を負う。それは爛(ただ)れて弾けた側から再生し、彼を一日、苦しめるだろう。中には一日を持ち堪(こた)えられず、本当に死んでしまう者もいる。
「……馬鹿(ばか)な奴(やつ)」
恵の声には侮蔑(ぶべつ)が露(あら)わだった。正雄は頷く。本当に愚かだ。制裁を受けて、目を付けられて。屋敷の連中に逆らわず真面目(まじめ)にやっていれば、本家に迎えられ——あるいは屋敷に迎えられることもあるのに。
正雄は柚木のようになる気はなかった。後藤田秀司のような木偶(でく)すれすれの脱落者に

なる気もない。徹のような例もあるけれども——と、正雄は顔を顰め、軽く口許を歪める。徹は佳枝の側で働いているけれども、それはきっと昇格ではないのに違いない。徹は完全に落伍者だった。従順に働く正雄が優遇されるならともかく、徹がそんな扱いを受けるなんて理不尽だ。そう、たぶんあれは佳枝の側近になったなどということではなく、佳枝に管理されているのだろう。

正雄は、そんなふうになる気はない。ずっと不当に扱われてきた。ここでこそは自分の真価を認めてもらって、居場所を得るのだ。改めて決意して、目の前を通り過ぎる辰巳に声をかけようとしたとき、先に恵が声を上げた。

「辰巳さん、手伝いましょうか」

こういうところが、正雄と恵は似ている。

「ありがとう。だが、ぼくだけで大丈夫だ。それより、食事に行かないのかい」

「これから行きます。ちょうど行こうとしたところに辰巳さんとお嬢さんの姿が見えたから。何かお手伝いすることがあるんじゃないかと思って」

辰巳はくすり、と笑った。

「気持ちだけもらっておくよ」

去っていく辰巳を見送り、正雄は小声で言う。

「点数稼ぎ」

「自分だって同じことを言おうとしたくせに」
事実だったので、正雄は口を噤んだ。茶の間では、沙子が溜息をついている。佳枝が小さくなっていた。
「佳枝さん、困るわ。最近、統率が緩んでいるんじゃないの？　まだ村の人に気づかれたくないの。疑うぶんにはいくら疑ってもらってもいいけど、公然と疑われたくはないのよ。まだ危険なの、分かってる？」
「分かってます。でも、人数が増えましたし……。それに全員がもうあたしの目の届く範囲にいるってわけじゃありませんし」
「言い訳は聞きたくないわ。少し手綱を引き締めて」
佳枝は沙子を見る。
「それは、もちろん。でも、千鶴さんだって、好き勝手にしてるんですよ。あの人の連れてくる連中は質が悪いんです。それを千鶴さんが唆すものだから」
「あなたはいつから、千鶴のことを批判できる身分になったの？」
冷え冷えとした声だった。気圧されたように佳枝は黙り込んだ。
「全員の安全は、あなた自身の安全でもあるの。それを忘れないでちょうだい」
小池昌治はバスを降りた。最終バスは小池を置いて去っていく。暗い国道の脇に小池

は一人、残された。

所用があって出かけたものの、帰りが思いのほか、遅くなった。もう少しいいじゃないか、と引き留める相手をうまくいなす言葉が見つからなかったせいだ。相手は小池が最近、息子一家に失踪されたことを知っていた。息子に逃げ出された哀れな知人を励まそうとする相手の気遣いが分かるだけに、問答無用に切り上げにくく、しかも、暗くなってから村に帰るのは嫌なのだという本当のところは、とても口にできなかった。

だが、すでに九時を廻っている。あたりは暗く、国道の向かいに見える堀江自動車の廃車置き場は、邪な闇をあちこちに孕んでいるように見えてならなかった。小池は早々に切り上げて帰れなかった自分を悔いた。だが、部外者に対して、何と言えば良かったのだろう。子供のように夜が怖いなどと言って理解してもらえるものだろうか。小池は町の寄り合いで何度か村の異常を訴えた。もうこれだけの人間が死んでいる、村は変だ、と言ったのだが、それを聞いた連中は端から誇張された怪談話の一種だと決めてかかるか、さもなければ小池の神経が過敏にすぎるという態度を取った。

実際のところ——と、小池は諦めて歩き始めた。

こんなに続くなんて妙だ、という話なら、山入で死体が発見された頃から人の口に上っていたのだ。だが、小池もそれを信じていなかったし、誰も実際に心配などしていなかった。どれだけ人が死んでも、どれだけそれが続いても、それが対岸の出来事である

限り、ちょっと不思議な話と変わらない。死は身に迫るまで対岸の出来事なのだ。——人は誰しも明日にだって死ぬかもしれないのにもかかわらず、誰もそんなことを信じていないのと同様に。

周囲に目を配りながら、街灯の下から街灯の下へと歩いた。まだ九時だと言うのに、道には人っ子ひとり見えなかった。時折、犬が不安そうに鳴く。それだけで、賑やかなテレビの音が窓辺から漏れ伝わってくることもなかった。村は死に絶えたように息を潜めている。

街灯を辿って村道を北に向かう。商店街の中を突っ切った。商店街の西のはずれまで来て中外場の集落に入ると、もう街灯らしい街灯もない。あちこちの家に点った明かりだけが頼りだった。小池はできるだけ人家の多い道を選んで曲がった。

角をふたつほど折れて、ようやく家に近づいたときだった。前方から歩いてくる二人の人影が見えた。小池は一瞬、ぎくりとしたが、その二人が何やら談笑しているふうなのに息を吐いた。良かった、と思った。心強いばかりでなく、こうしてまだ夜歩きをする人間がいるのだという事実に安堵するものを感じた。

「こんばんは」

小池は声をかけつつ、二人組とすれ違った。愛想の良い、「こんばんは」という声が返ってきた。二人は小池の目の前で、間近の家の明かりの中を横切った。

一瞬、照らされた二人の顔を見て、誰だったろう、と小池は思う。どちらもどこかで見た顔だが、どこの誰、とは思い浮かばなかった。

（誰だったか……）

首を傾(かし)げ、小池は足を止めた。一方が誰だったか、思い出した。（あれは）小池は思わず振り返る。（……大塚製材の）

二人組も足を止めて、小池のほうを振り返っていた。わずかに届く窓の明かりで、二人の相好が見て取れた。間違いない、大塚製材の息子だ。だが、大塚製材の康幸は死んだという話ではなかったろうか。それとも、大塚の誰か別の者と、勘違いしているのだろうか。怪訝(けげん)に思い、そして小池は血の気が引くのを感じた。

（もう一人は……あれは）

小池は一歩を退(さが)った。二人は顔を見合わせ、そして足を踏み出した。

（……たしか、広沢(ひろさわ)の高俊(たかとし)とかいう……）

広沢豊子(とよこ)の息子。夏に家人に黙って仕事を辞め、仕事に行くと言い置いて家を出て、溝辺町のパチンコ屋で倒れた。小池自身がその葬儀を采配(さいはい)した。

小池は声を上げ、身を翻(ひるがえ)して駆け出した。その背後から二人ぶんの足音が追ってきた。道幅はかろうじて車が離合できるほど、その両側に家が建ち並んでいるのに、道に面した窓が開いている家は一軒もない。どの家もぴったりとカーテンが閉ざされ、あるいは

雨戸が引かれている。
小池は恥も外聞もなく声を上げた。どこかの家に駆け込まなくては。玄関を叩（たた）き、戸を開けてもらうだけの時間の猶予（ゆうよ）があるだろうか。
小池の足は縺（もつ）れる。背後の足音はそれに対して力強かった。誰か、と悲鳴じみて声を上げたところで、すぐ脇の小道から人影が現れた。
「おい、あんた――」
小池はよろめくようにして人影に縋（すが）りつく。どうしたんです、とその初老の男は小池の肩に手をかけた。
「あいつら」と、小池は背後を示す。振り返る一瞬、もう背後には誰の姿もないのではないかと思えたが、やはり二人の若い男は足早に小池のほうにやって来る。「あいつらは」
「済みません」と広沢高俊が言った。「おれの知り合いです」
そうかい、と答えた男は小池を後ろに押し出した。まさか、と声を上げる間もなく、高俊の手が小池の腕を摑（つか）んだ。
「夜歩きするときは、気をつけないとな」
見知らぬ男は言ったが、これは小池に対する言葉ではなかった。そうですね、と高俊が答えた。

「お前ら――」

言いかけて、あとは悲鳴になった。起き上がりだ、というとっくに知っていた真実が、ようやく言葉になってあふれ出た。

誰か、という声に対して、すぐ近くの窓が開いた。

「何の騒ぎ?」

小池は救済を求めようとしたが、口を塞(ふさ)がれてままならなかった。窓から顔を出した女は、小池らに目を留め、あら、と声を上げる。

「高俊ちゃんじゃないの。下りてきてたの」

小池は口を塞がれたまま目を瞠(みは)った。

「ええ。小母(おば)さんも戻っていたんですか」

「そうなのよ。幸い、亭主も目を覚ましてねえ」

「そりゃあ、幸運でしたね」

じゃあ、と高俊は快活な声を上げ、女に向かって手を挙げた。西のほうへと引きずっていかれる小池の頭上では、あれは誰だ、どういう人物だというありきたりの会話が交わされていた。

大川篤は意気揚々とハンドルを握る。助手席には千鶴が坐(すわ)っている。小さなジープは、

山入と村を往復するために千鶴が与えてくれたものだ。

ヘッドライトは消してあったが、篤は夜目が利く。昼間に走るのと大差なかった。山入からの抜け道は、決して良い道ではなかったが、悪路を駆け抜けることに篤は大いに喜びを感じていた。歩いて山を越えるしかない連中を追い越していくのも気分がいい。誰も篤に指図できない。横には桐敷千鶴がいるのだから。

「荒っぽい運転なのね」

「怖いか?」

篤が言うと、千鶴は笑って答えない。篤はそれに満足した。

「どこに行くの?」

「家だ。そう……まず婆だ」

篤は祖母の浪江の顔を思い浮かべた。口煩く、何かと言うと篤を見下した婆だ。まずはあいつから思い知らせてやる。

「……お父さんじゃないの?」

千鶴に指摘されて、篤はちら、と千鶴を見た。そう、父親も片付けなくてはいけない。必ず思い知らせてやる。そう思うのに、篤は自分がどこかで怯むのを感じた。

「親父は……親父はまだ、いいんだ。最後なんだ」篤は言い、言った言葉に我ながら納得した。「そう、最後だ。それまでたっぷりいたぶってやるんだ」

そう、と千鶴は微笑む。篤は車を西山の林道に向かって走らせる。
「なんで村道を使わないんだ？　あっちのほうが早いのに」
「あの道？　あれは塞いであるのよ。通れないの。ずいぶん前に辰巳が発破をかけて壊したから」
「嘘だろ？」
「本当。村の人に、山入に行ってほしくないんだもの。だから道を塞いで野犬を集めたの」
「野犬」と、篤は繰り返す。「ちくしょう、おれ、あの道で犬に咬まれたことがある」
あら、と千鶴は軽やかな声を上げて笑った。
「それは災難だったわね。山入になんて行こうとするからよ。気味が悪くなかったの？　あなたの親戚が酷い姿で死んでたところでしょ？」
「別に」と、篤は笑ってみせる。「あんな爺、死んだって知ったことじゃねえ。むしろ、血だらけになってるって話だったから、それを見てやろうと思ったんだ」
「剛胆ね」と千鶴は含み笑う。「わたしはぞっとしたけど。沙子はああいうところ、容赦がないから」
「ああいうところ？」
「山入に人を寄せたくなかったのよ。だからわざわざ野犬を連れてきて、死体をバラバ

ラにさせたの。できるだけ悲惨なことにしたかったんでしょ。買ってきた動物まで殺させて。あの日、死体が見つかってなかったら、夫婦者の死体のほうまでどうにかしたと思うわ。——わたしはああいう血腥(ちなまぐさ)いのは駄目。我慢できないの」
「気弱なことを言うじゃないか」
　篤は笑う。林道に出ると、兼正の脇を通って村に降りた。家の近くまで走り、村道の路肩に車を停める。
「……怖い？」
「何が」と、篤はうそぶいたが、実を言えばさっきから緊張で震えが来ていた。もう、一人殺している。浪江だって殺せるはずだ。だが、意図的に誰かを殺すのは初めてで、だから不安にならずにいられない。
「いい？」と、車を降りようとする篤を、千鶴は留めた。「まず、家に入らないといけないの。あなたはもう家の人間じゃない。だから、改めて誰かに入れてもらわないと駄目」
「押し込めばいいだろ」
「やってみるといいわ、できないから。あの剛胆な沙子でも辰巳でも、招待されてない家には入れないの。駄目なのよ、本能的に竦(すく)んでしまうの」

「おれは臆病者じゃねえ」

「自惚れないで」ぴしゃりと千鶴は言う。「あなたがどんなに剛胆だろうと、本能に忠実でない者は早死にすることになるのよ」

「おれは」

「黙って。用心深さを欠いた大胆さは無謀と言うのよ。身が竦んで襲撃に失敗したら終わりなの。虎を前に竦まないのは、愚かさであって大胆さではないの。竦むのは恥ずかしいことじゃない、無理に大胆なふうを装って、失敗すれば笑い者よ。わたしだって、そんなみっともない人に目をかけてはあげないわ」

　篤は口を歪めた。

「……分かったよ」

「あなたのお祖母さんは、あなたを家に入れてくれると思う？」

　いや、と篤は呟いた。

「そう。じゃあ、外におびき出すのね。窓を叩いて外に呼び出すの。これはわたしが手を貸してあげる。出てきたら、声を立てられないようにして襲いなさい。背後に廻るのがいいわ。背後から顎を拘束して首を狙うの。それがいちばん安全。場所はここよ」

　言って千鶴は、篤の首筋に指を這わせた。

「人間なら脈打ってるから分かるわ。殴っては駄目よ。傷が残るようなことをしては駄

目。咬めばそれでおとなしくなるから」
「……ああ」
「放したら、言い含めるの。明日も来るからって。窓を叩いたら入れてくれって。これは夢で、実際には何も起こってない、忘れてしまうって言い聞かせる。でないと翌日には大騒ぎになるわ。いいわね？」
篤は頷いた。
「人にもよるけど、普通は一度では死なない。だから絶対に言い聞かすのを忘れないこと。そして、できるだけ痕跡は残さない」
「……分かった」
千鶴はくすりと笑う。助手席で身体をひねって背中を向けた。
「試してみて」
「……あんたに？」
「そう。あなたは羊を襲ってないから。場所はここよ。位置を覚えて」
千鶴は下ろしていた髪を掻き上げる。白々とした項をさらした。
大川浪江は、電話のベルで目を覚ました。執拗に電話が鳴っている。まさか、と浪江は暗闇の中で身を起こした。こんな深夜に電話だなんて、ろくな知らせでないに決まっ

ている。

自分がそれを取るのは怖いようでもあり、しばらく様子を窺って(うかが)いると、荒々しく襖(ふすま)が叩きつけられる音がし、重量感のある足音が茶の間に駆けていくのが聞こえた。息子が電話を取りに行ったのだ、と理解したが、電話のベルの音は、富雄(とみお)が茶の間に辿り着いた頃合いに切れた。受話器を叩きつける音がしたから、とりあえず電話に出たものの、切れてしまったのだろう。ほんの少しして、息子が毒づきながら戻ってくるのが聞こえた。

浪江は布団(ふとん)の上に坐ったまま、無意識のうちに耳を澄ました。また電話が鳴るのではないかという気がしてならなかったからだ。息子が電話に出るのと同時に電話を切ってしまった相手が、改めて電話してくるのではないかという気がする。それでじっと耳を澄ましていたのだが、それきり電話が鳴ることはなかった。

浪江は息を吐いて、改めて布団に横になった。

(何だったのかしらね……)

深夜の電話は人を不安にさせる。誰だったのだろうか、と気になってならなかった。考えながら横になっていると、今度は小さな音がした。

浪江は裏に面する座敷を寝間として使っている。その裏庭に面した窓が——正確には雨戸が、軽く叩かれるような音がした。浪江は最初、気のせいだと思った。それがごく

微かに、執拗に続くのを聞いて、きっと何かの加減でこんな音がしているだけなのだろう、と自分に言い聞かせた。さらに音は続いた。あたりを憚るように、人を呼ぶ音だった。

浪江は再度、身を起こした。とっさに息子を呼ぼうかと思ったが、それも躊躇われた。妙な電話で起こされて機嫌を悪くしたばかりの息子を、さらに起こして、それが何でもない風音だったりしたら。母親だから皮肉や聞こえよがしの不平くらいは言うが、あの息子を正面から怒らせるのは浪江とて避けたかった。激昂すると手がつけられない。――実際のところ、浪江は息子が本当に激昂したところを見たことがあるわけではないのだが、息子には常に、本気で怒らせたくはないと思わせるだけの何かが漂っている。

微かな音は続いていた。それはノックの音のように聞こえた。浪江はそろそろと布団を出て、窓際に這っていった。明らかに雨戸を叩く音がしている。

今は深夜だ、と当たり前のことを自分に確認した。こんな時間に真っ当な人間が訪ねてくるはずがない。ましてや、浪江は近頃、夜がなんとなく怖かった。だからこんな深夜に、ましてや不審な物音がするからと言って、窓を開けたり裏に出てみたりすることなど、したくはなかった。だが、なぜこんな音がするのか、確かめないでいられない気がするのはなぜだろう。それは来訪者などではなく、単なる風音、あるいはその他の無害な何かだと確認したかった。

（……そうに決まってるんだから）
浪江は恐る恐る、掃き出し窓のサッシを開けた。これくらいは大事ないはずだ。雨戸が引いてあるのだから。
「誰かいるの？」
小声で声をかけてみる。声にした瞬間、自分がとても愚かなことをしているという気がした。きっと風の音だ。声をかけても、それを聞く者などいるはずがない。
音は続いている。少し小さく、その代わりに早くなったような気がした。別段、浪江の声を聞いて焦って（あせ）いるふうでもない。ただ続いているだけの様子が、いっそう風か何かの立てる音だという気にさせた。
「何か引っかかってるのかしらねえ」
浪江は小声で言い（誰に聞かせるために？）、ことさらのように笑ってみた。
「これで開けてみると、木の枝が引っかかってたりするのよ」
ひとりごちて（まるで言い訳をするみたい）浪江は雨戸に手をかける。端を一枚、ちょっとだけ動かしてみた。そのとたんに、音はやんだ。少し待ったが、もうなんの音もしない。やれやれ、と浪江は失笑する。これは本当に何かの弾みであんな音がしていただけなのだ。雨戸を動かした拍子に、引っかかった枝か何かが落ちてしまったのに違いない。

浪江はそう思ってさらに雨戸を開けた。しんと冷えた夜の庭が広がっている。弱い風に庭木が枝を揺すっていた。やはり何もいない。――こんなことだろうと思った。浪江は狭い濡れ縁に軽く手をついて身を乗り出した。夜風は凍えて、霜でも降りそうな匂いがする。

身震いして、雨戸を閉めようとした。そのとたんに誰かが脇から飛び出してきた。声を上げる間もなく窓から引きずり出され、太い腕が浪江の口を蓋するように廻された。ようやく声を上げたが、それは鼻から抜けて、妙に頼りなくか細い音になった。

手をかけていた雨戸が――そして濡れ縁から庭へと転がり落ちた身体が音を立てたはずだが、家人にそれが聞こえたかどうか。もしも聞こえて飛び起きたにしても、もう間に合わない、と浪江は思った。訳が分からないうちに半ば抱えるようにして連れ出され、すでに浪江の身体は庭木の陰に引き込まれようとしている。

完全に建物が見えなくなって、浪江は蟀谷のあたりが痺れるのを感じた。息が苦しい。口許を塞がれているせいかもしれない。あるいは首から顎に廻された腕のせいで血行を止められ、脳貧血を起こしそうになっているのかも。無意識のうちに手足を振りまわした。なんとかしてこの苦しいのから逃れたかった。

「……おとなしくしろ」その低い声は、恐慌状態に陥った浪江の耳に届くはずもないほど小さかったにもかかわらず、浪江を凍りつかせた。「じたばたするんじゃねえ。ぶっ

殺すぞ」
　生け垣と庭木の間の地面に下ろされた。どんな明かりも、そこにはなかった。だから、自分を横から抱えたのが誰なのか、浪江には分からなかった。ただ、闇の中にさらに濃く、大きな人影を見たように思った。だが――この声は。
　浪江の視線は、奇しくも正面から篤の顔を捉えた。浪江にはそれが分からなかったが、篤は祖母の目がまっすぐ自分を見上げてくるのを見た。眥が裂けるほど目を瞠って、篤を振り仰いでいる。
　篤は笑いかけ、そして顔を強張らせた。祖母の顔つきが変わった。それは実を言えば、声の主に気づいた浪江がようやく事態の真相に気づいて呆然としたにすぎないのだが、篤はその表情の変化から――そして、依然として自分に据えられたままの浪江の目許の表情から、自分に対する侮りと、責める色を感じ取った。
　――なによ、あんただったの。
　これはどういう真似なの。妙なことをするんじゃないわよ。お父さんに言いつけるからね。富雄に叱ってもらわなきゃ。さっさと放しなさい。まったくお前って子は。豊や瑞恵を見習ったらどうなの、かず子さんの育て方が、お前に比べてあそこの家の子はだいたいお前は小さい頃から**富雄**いい若い者が**富雄ってば**いい歳をして**ちょっと来てちょうだい**何ひとつ満足に**この子ったら！**

篤は腕に力を込めた。二度と馬鹿にさせない、二度と偉そうな口が利けないようにしてやる、何がなんでも父親に告げ口などさせるものか。
忿怒と狼狽と、そして恐怖が篤の箍を外した。無我夢中で浪江を締め上げ、思いあまって篤は呻いた。荒れ狂うものを持て余し、言葉にならないまま吼え、そして同時に横面に軽い痛みを感じた。
「やめなさい」
低いが、きっぱりした女の声だった。それでようやく、篤は我に返った。千鶴が険しい表情で篤を見ている。思わず力の抜けた手から浪江の首が滑って落ち、祖母は庭の片隅に頽れた。
篤は何かを言おうとしたが、千鶴が指を立ててそれを制す。家のほうを窺うので篤もそれに倣った。見慣れた家は寝静まったまま、人の起き出してくる物音はない。少なくとも、庭に様子を見に出てくるような気配はなかった。千鶴が小さく息を吐く。篤を軽くねめつけて、膝を折った。
篤は呆然と足許を見下ろす。浪江が篤を責めるように見たまま、そこに倒れていた。千鶴は側に屈み込み、浪江の顔に触れる。
「まあ……また殺しちゃったの？」
千鶴は呆れたように言って、篤を見上げてきた。

「おれ……」
「困ったひとね」と、千鶴は笑って浪江に目をやった。「……どうしたもんかしらね。速見さんに相談してみるのがいいかしら。沙子に知れると厄介だわ」
言葉のわりに、困っているふうではなかった。微苦笑のようなものが浮かんでいる。
「そんなつもりじゃなかったんだ」
「分かってるわ。でも、これはちょっと厄介なの。あなたのお祖母さんは病死体でなくて他殺体なんだもの。なんとかしないと、警察に連絡されてしまうわ」
言って千鶴は首を傾げる。
「駐在の佐々木はいいのだけど……でも、一一〇番されると面倒ね。仕方ないわ、速見さんに頼んで始末してもらいましょう。失踪も不自然だけど、他殺体が見つかるよりマシだわ、きっと」
さらに言い訳を言い募ろうとした篤を千鶴は制す。
「さあ、抱えて。車に運ぶの。わたしに死体なんか抱えさせないでね」
翌朝、大川浪江の姿が見えないことに気づいたのは、大川富雄の妻、かず子だった。浪江の部屋は荒らされた様子もなく、ただ窓が開き、雨戸が開いていた。衣類は消えていない。浪江は寝間着のまま出て行ったらしかった。心当たりを捜したが、浪江の行方

は知れなかった。駐在に報告しようとしたが、駐在の姿は見えなかった。駐在の佐々木は、昼間にいた例しがない。
溝辺町の警察署に行ってはどうか、と言い出したのは瑞恵だった。大川はそれを遮った。
「必要ねえ」
でも、と言う瑞恵に、黙れ、と命じる。
浪江が出て行くはずがない。ましてや夜中に着の身着のまま家を出るなどあり得ない。失踪ではない、おそらくは。浪江は決して、自分の意思で家を出て行ったのではあるまい。
大川はここに至って、ようやく理解していた。少なくとも疫病ではない。いつか郁美が言っていたように、鬼かもしれない、起き上がりかもしれない。そのどちらにせよ、それ以外のものにせよ、大川にとっては大差なかった。肝要なのは、敵がいる、ということだ。
村の秩序と村人の安全を脅かす敵がいる。それさえ理解できれば、大川にとっては充分だった。

4

武藤は事務所で電卓を叩いていて、薬局のほうで何かが落ちるけたたましい音を聞いた。慌てて棚を迂回し、薬局を覗き込むと、律子がそこに倒れていた。

「律ちゃん」

声を上げて駆け寄る。物音を聞きつけたのか、待合室にいた患者が一人、カウンターの中に駆け込んできた。敏夫を呼ぶように頼む。すぐに敏夫とやすよが駆けつけてきた。

「……大丈夫です」と、律子は身を起こした。その顔を覗き込んだ敏夫の血相が変わるのを、武藤はたしかに見たと思った。

武藤は鳥肌が立つのを感じた。やはり、という気がしたのは、律子が今朝から、どこか調子が悪いように見えたせいだ。口数が少なかった、明らかに生彩を欠いていた。顔色が悪く、ひどく億劫そうに見えた。

敏夫と武藤で律子を支え、処置室に運んだ。ベッドに横たわった律子は、立ち眩みです、と何度も呟きながら、人形のように虚ろな目で天井を見ていた。

「なんだか疲れてて……」と、律子は天井に視線を据えたまま呟く。「あたし、辞めます」

そうか、と敏夫は律子の手を握った。何が起こったのか——起こっているのかは、分

かりすぎるほど分かっていた。
　これでいよいよ、武藤とやすよだけになるのか、と思った。看護婦が一人で病院が成り立つはずがない。とは言え、患者の数もまた激減していたから、必ずしも不可能な事態ではないのかもしれない。だが、もう病院を維持しようという気力のほうが萎(な)えていた。いよいよ閉めることになるわけだ、と思う。――それも悪くない。
「律ちゃん、入院しないかい」
　いいえ、と律子は言う。
「嫌です。家に帰してください。もう病院にはいたくありません」
　やすよが目を逸(そ)らし、武藤もまたうなだれた。敏夫はやすよを振り返る。
「やすよさん、患者はどのくらい残ってる？」
「あと二人ってとこですかね。物療の人ばっかりですから、なんだったら先生、律ちゃん、送っていってやってくださいよ」
「そうしよう」と、敏夫は頷(うなず)いた。家に送り届けて、そしてそれが律子との別れになるわけだ。
　武藤の手を借り、律子を車に乗せて家に送った。土曜の夕刻、母親の康恵(やすえ)も妹の緑(みどり)も家にいて、ぐったりした律子を驚いたように迎えた。
「忙しかったから」と、康恵は敏夫をねめつけた。「こうなると思ってたんですよ。こ

の子ってば、人が好いから。そりゃあ、看護婦が大事な仕事だってことは分かってますけど、だからって休みなしでなんて」
「お母さん、やめなよ。若先生を責めるようなことじゃないでしょ」
「責めることですよ。――先生も医者なんだから、分かってたでしょう。こんな状態でいつまでも律子だって身体が続くはずないって。患者の健康のことは考えても、働いてる者の健康のことは考える気がないんですか」
敏夫は俯いた。そこを衝かれると、返す言葉がなかった。――そう、こんな状態でスタッフの身体が保つはずがないことを敏夫は了解していて良かったはずだ。単純に健康のことばかりではなく、村に侵入し、癌細胞のように増殖していく危機が、律子たちを見逃してくれるはずのないことを、もっと真剣に考えても良かった。
鬱々としながら車を病院に走らせていると、自転車に乗った武藤が一軒の家に入っていくのが見えた。自転車の籠の中には、薬袋らしいものが入っている。わざわざ薬を配達に来たのか、と思った。こうしている間にも、やすよが患者の相手をしているのだろう。
思えば、武藤も息子を亡くしたのだ。喪が明けないうちから病院に出てきて、十和田が抜けたあと、ずっと無休で働いていた。武藤の妻の静子がパートで事務を手伝い、ついでに朝晩には掃除を手伝っていく。災厄にまだ無縁なのは、やすよだけだが、同僚が

自分を残して全員いなくなって、それで災厄に無縁と言えるだろうか。
土曜にもかかわらず、村には閑散と人気がなかった。夜間に人の姿が見えないのはもちろん、夕刻になるだけで、もはや人通りが減る。昼間はまだ特に減ったようには見えないが、街角で立ち話する者の姿を見かけなくなった。村の人口それ自体が減っているせいもあるが、何よりもみんな、用がなければ家から出たくないのだろう。
丸三か月が経って、この有様だ、と敏夫は思った。惨憺たる、と形容しても間違いではないだろう。そう、敏夫が一人焦り、悪あがきを繰り返している間に、村はここまで食い荒らされてしまったのだ。
病院に戻り、中待合に診察を待つ患者の姿がないのを確認して、敏夫は控え室に戻った。放り出したままの資料を揃え、カルテやメモを掻き集める。それを一から整理し直した。
救済が必要だ。村にはこの災厄を逃れるだけの力がない。外部の注意を喚起し、救済を求めなければいけない。敏夫にできるのは、もはやそれだけなのだと、ようやくそう心得た。

5

三十日、早朝、田中佐知子は自宅で息を引き取った。これを看取ったのは、かおりと隣家の大塚浩子だった。

「大丈夫よ」と、浩子はかおりを撫でる。「しばらく小母さんのところにいらっしゃい。一人じゃ心細いでしょう？」

　慰撫され、かおりは頷いた。けれども、とぼんやり思う。——次は自分の番だ。どこに行こうと逃げられないのに違いない。恵は父親を奪い、母親と昭を奪った。残ったのは、かおりだけ。だからきっと次は自分なのだろう。

（恵……でも、どうして？）

　どうしてなのかは分からない。かおりに分かるのは、すべては恵がもたらしたもので、だからきっと恵はかおりを憎んでいるのだろう、ということだけだった。

　かおりには、夏野や昭のような行動力がない。そしてその二人でさえ、もうこの世のどこにもいない。おそらくは、じきにやってくる運命から逃れる術はないだろう。恐ろしくてたまらなかったが、同時に、早く終わってくれればいいのに、という気がした。どんなに恐ろしい結末でも、終わりがないまま、この悪夢の中に捕まっているよりよほどいい。

6

三十一日、月曜。十月も終わりのこの日、前田茂樹は死亡した。
元子は息子の傍らに呆然と坐り、子供の呼吸が徐々に浅くなり、絶えてしまうのに聞き入っていた。
——とうとう。
夜には一睡もせず、息子の枕許に陣取っていた。絶対に巌から守り抜いてみせるとそう思ったのに、疲労と倦怠が元子をしばしば不本意な眠りにつかせ、そうやって元子が目を離した隙に、茂樹の姿は布団の中から消え、そうして裏口や、縁側や、庭先で発見されるのだった。
徐々に朦朧とし、言葉も身動きもなくなる息子を、元子はただ見つめているしかなかった。昨夜も茂樹は元子が手洗いに立った隙にいなくなり、玄関先に倒れていた。元子が抱き起こすと、「お祖父ちゃん、怖いよ」とだけ、弱々しい声で言った。
やはり巌だったのだ、と思った。巌が元子からすべてを奪った。いっそのこと、元子も連れて行けば良かろうに、それをしないのは巌が元子を嫌っていたからに違いない。元子だけを除け者にして、元子には手の届かないどこかで勇と登美子と志保梨と茂樹と、

五人でよろしくやるつもりだ。きっとそうなのに違いない。

「そんなこと、させないわ」

そう、せめて茂樹だけは。

「この子だけは、渡さない……」

元子は茂樹を抱え、風呂場に運んだ。狭いタイルの上に布団を敷き展べ、そこに寝かせる。風呂場の窓には格子が入っている。それを握って確認して、窓をぴったり閉め、さらに内側からガムテープで目張りした。窓ガラスにはあり合わせの板を苦労して切ってあてがい、これもガムテープで貼りつける。風呂場が元子の家で唯一、内側から鍵のかかる部屋だった。ここにこうして茂樹と立て籠もっていれば、巌も茂樹を連れて行けないはず。

自分が風呂場を出なければならないときの用心に、脱衣所の窓も同様にし、ドアには物置から取り外してきた鍵をつけた。こうすれば、自分が外に出ている間にも、誰も茂樹に触れることはできない。

「茂樹は渡さないわ」

元子は風呂場で息子を掻き抱く。こうしていれば、やがて茂樹は起き上がるはず。巌に奪われることなく、元子の手許に留まっているはずだ。

十八章

I

三十一日、月曜を待って敏夫は役場に赴いた。もはや躊躇している場合ではない。資料を揃え、外部に助けを求めるのだ。事態をここまで悪化させたのは、そもそも自分の独断に原因があったことを、敏夫は認めないわけにはいかなかった。

出張所に入ると、役場の中は閑散としていた。もとよりさして広くもない事務所の中には誰の姿も見えなかった。敏夫は思わず、腕時計を見る。役場の時計と見比べたが、もちろん昼休みではなかった。主のいない机が放置されている。——そう、放置されている、という印象が強かった。

なぜ誰もいないのか、あたりを見まわしていると、奥のほうから老人が一人姿を現した。たしか、上外場の広沢隆文ではなかったかと思う。

「隆文さん」

「ああ、こりゃあ、若先生」

老人は破顔したが、敏夫は怪訝な気分を抑えられなかった。隆文は妻と二人、林業と

農業で食っていたはずだ。役場になぜ隆文がいるのか、釈然としなかった。

「どうして、あんたが」

「いやあね」と、隆文は禿げ上がった頭を撫でる。「このところ山に入れなくてね。野犬が多いんですよ。危なくて危なくて。おれも歳だしね、もう山も田圃も諦めて年金でひっそり暮らそうかと思ってたら、役場で働かないかって話があって」

「ああ――そうか。で？　他の職員は？」

「はあ、それが。昼間は誰もいないんで」

「いない？　馬鹿な」

「なんですけどねえ。いないんですよ。なんでも所長が身体、悪くて、夜にしか出てこれんのだそうです。色々と書類に判子をもらわないといけないのに、肝心の所長がそれじゃ、昼間にすることがないでしょう。それで職員は夜に出てくることにしたそうですよ。昼間はこうして、おれが留守番してるってわけで」

敏夫は唖然とした。

「そんな……馬鹿な」

「と言われても。何か書類のことでしたら、おれが預かっときます。証明書なんかでしたら、明日来てもらえれば渡しますけどね。急ぎでしたら夕方に出直してください。七時ぐらいになると職員がいるんで」

「隆文さん、死亡診断書の写しがほしいんだがね。できたら戸籍の閲覧もさせてもらいたいんだが」
「じゃあ、夕方に出直してください」隆文は申し訳なさそうに苦笑する。「それは、おれじゃあ分かりません。おれは本当に単なる留守番なんで。そういうのは、勝手に弄れないんですよ。全部ロッカーの中で、鍵かかってますしね」
　済みませんね、と隆文に拝まれて、敏夫はどこか朦朧とした気分で役場を出た。そう言えば以前、役場の夜間受付がどうのこうの、という話を聞いたか。一体これはどういうことだ、と困惑したまま夕刻を待ち、改めて車に乗って病院を出た。役場まで陽の落ちた村を横切って歩いて行く気にはなれなかった。
　八時を過ぎていたが、役場には煌々と明かりが点っている。中に入る前から、ガラスのドア越しに、事務所が人であふれ、活況を呈しているのが見えた。立ち働く職員たち。二、三の利用者、喧噪と機械音、ありふれた役場の情景だった。——それが夜でさえなければ。
　敏夫は建物の中に入る。立ち働いている人々の顔を見渡したが、そこには顔見知りは一人もいなかった。狼狽しながらカウンターに向かうと、中年の痩せた男が顔を上げる。
「済まないが、保健係はいるかな」
　男は微苦笑し、いない、と言う。

「以前の保健係が姿を消してしまいましてね。それきり後任が決まってないんですよ。——何の御用で？」
「その……」敏夫は無意識のうちに、何度も周囲の様子を窺わないではいられなかった。「九月からこちらの死亡者数が知りたいんだ」
男は目を眇める。
「そういうことにはお答えできないんですがね。どうしてもってことなら、溝辺町のほうに問い合わせてくださいますか」
「おれは——尾崎だ。病院の」
「ええ、存じてますよ。けれども、お答えできないんです。そういう規則なんで」
「そんなはずはない。これまでだって、訊けば教えてもらえたんだ。死亡者数が知りたい。できたら死亡診断書の写しと一緒に」
「御冗談を。そういう文書を職員でもない方に見せられませんよ」
「これまでは」
「これまではどうだか知りませんけど」と、男は薄笑いを浮かべたまま、ぴしゃりと言う。「わたしは、そういう指示は受けてませんのでね。尾崎さんだけは別格だとか、特別扱いしろなんて指示もないですしねえ」
敏夫はその男の顔をまじまじと見た。男は揶揄するように笑う。蛍光灯のせいか、薄

笑いを浮かべた顔は血色が悪かった。
「まあ、御不満でしたら、所長か町役場のほうに言ってください」
「では、所長を出してもらおう。保健係がいないんじゃ、そうするしかなさそうだ」
「所長はちょっと席を外してますが。じきに戻ってくるとは思いますけどね」
「じゃあ、待たせてもらう」
「どうぞ御随意に。——もっとも、そうやって待ってらしても、あまり意味があるとも思えませんけどねえ」
「どういう意味だ……?」
「ですからね」と、男は低く笑う。「先生は九月からこちらの死亡者数を知りたいんでしょう? その死亡届の写しがほしい?」
「……そうだ」
「所長にかけあってもらって、それで所長がうんと言えば死亡者数ぐらい、お出ししますけどね。けれども死亡届の写しはねえ。お出ししようがありませんから」
敏夫は首を傾げた。男は嘲るように笑う。
「なにしろ、ありませんのでね。肝心の死人がいなくちゃ、死亡届なんて出す人もいませんしねえ」
敏夫は一瞬、その言葉の意味が分からなかった。

「……なんだって？」
「ですからね。九月からこちら、死亡した住民はいませんから。なので写しをお渡しできるような届け自体がないんですよ。——一枚もね」
「……馬鹿な。あり得ない。つい先日、おれの妻も」
そう言われましても、と男は笑う。
「八月にはねえ、四人ほど人死にが続きましたけど。けれどもそれきり、今日まで死亡した住人はいないです」
「そんなことがあるはずはない。現に——」
「ああ、保健係の石田さんとねえ、戸籍を担当してた田中さんが何やらやってたみたいでね。町役場に送らないといけない報告を、四の五の言って遅らせてたんですよ。それで役所のほうからせっつかれましてね。慌てて調べてみたら、あの人たち、何を思ったか死んでもいない人を死んだとか言って、虚偽のリストを作ってたんですよ。驚いて訂正して、役所のほうに正しい報告を上げといたんですけどね」
敏夫は口を開けた。——そう、報告を止めてくれと言ったのは他ならぬ敏夫だ。だが、それは石田の失踪で自然に解除されたものだと思っていた。
「そんなはずはない」敏夫は男をねめつける。「おれは医者だ。そのおれが、現に診断書を書いている。控えがおれの手許にある」

「それは困りましたね」と、男は笑った。「それじゃあ先生、文書偽造ですよ」

いいか、と敏夫は男に指を突きつける。

「そんなペテンが通用すると思ったら大間違いだ。現に村の人間で、国立や共済病院で看取（みと）られている者もいるんだ。九月からこちら、死人はいない、だって？　いないはずがないだろう。安森幹康は九月に死んだんだ。救急車で息子の進と一緒に国立に運ばれて、どちらも国立で死亡が確認されてる。なんだったら、国立で看取った医者を連れてこようか？」

ああ、と男はさらに笑った。

「工務店の幹康さんね。だってあの人は、死亡の前に転出してますから」

敏夫は目を瞠（みは）った。男は挑戦的な眼差（まなざ）しで敏夫に視線を据える。薄笑いを浮かべたまま。

「八月の末に転出届が出てますね。まだ村にお住まいだったみたいですけど、役場の帳面の上では、奥さんも息子さんも外場の人じゃないんでね。ですから、死亡者はゼロです」

敏夫は言葉を失い、喉（のど）の奥で呻（うめ）いた。無意識のうちに救済を求めて役場の中を見まわすと、職員がじっと敏夫と男のやりとりを見守り、薄笑いを浮かべている。

――そういう、ことだったのか。

敏夫は打ちのめされた気分で思った。続く転出、続く死亡、村外に通勤する者、村外から通勤する者は例外なく死の直前に辞職していた。何もかも、死を隠蔽するためだったのだ、とようやく悟った。

敏夫は無言で踵を返した。文字通り逃げるように役場を駆け出し、車に乗り込む。

公式には、村の死亡者はゼロだ。そう言い切る以上、すべてがそれで整合しているのに違いない。敏夫の手許にはカルテと死亡診断書の写しがあるが、肝心の戸籍上では死亡したことになってないのなら、たしかにそれを振りかざしたところで、下手をすれば敏夫のほうが私文書虚偽記載の罪に問われかねない。——いや、死亡していない者を死んだとして死亡診断書を発行したことになるのだから、別の罪を構成するのだろうか。

そこまでを考えて、敏夫は笑った。

(ナンセンスだ)

ステアリングを握り、軽く額をその手に当てる。

役場の戸籍と、敏夫の持っている文書と、ふたつの帳尻が合わない。それを振りかざして外部の注意を促すことはできるだろう。どちらが正しいか争うことは不可能ではなく、人々の記憶から幾多の死を抹消できるはずもない以上、敏夫のほうが正しいことを認定させることも不可能ではない。公に捜査されれば、こんなペテンはたちまち明らかになる。——だが。

（連中はおそらく、そんなことはさせてくれない）
石田が消えたように、敏夫も消えるだけだ。診断書の写しとカルテを抱いて。そうして事態は表向き、いっそう整合していく。
「……やられた」

2

十一月に入って最初の日、夕刻になって敏夫の許に訃報が届いた。患者の一人が、上外場の国広で娘が死んだようだ、と言う。律子だ、と悟り、敏夫は病院を閉めるや否や国広家に駆けつけた。
六時が近い。夕闇の落ちた道では、家へと急ぐ村人が俯き加減に歩いていた。立ち止まって声をかけ合う者もなく、ましてや立ち話する者たちの姿もない。国広家に辿り着くと、家には明かりが点っていたが、喪中の提灯もなく鯨幕もない。不幸を窺わせるようなものは見えなかった。
「済みません。こんばんは」
玄関から敏夫が声をかけても返答がない。敏夫は建物の脇に廻る。表に面した縁側から、茶の間にいる康恵と緑の姿が見て取れた。

「国広さん、こんばんは」
　縁側のガラス窓を叩いて声をかけると、ようやく二人が振り返る。敏夫はガラス戸に手をかけた。鍵はかかっていなかったようで、それは難なく開く。
「律ちゃんの具合はどうです」
　死にました、と康恵の声は素っ気なかった。
「いつ……今日ですか？」
「ええ、昼前に」
「しかし、通夜は」
「葬儀社に頼んでますから」
　短く言って、康恵はそっぽを向いた。敏夫は首を傾げた。葬儀社に依頼してあるが、明日になるということか。——まさか葬儀社に依頼したから、自分たちでは通夜は行なわない、という意味ではあるまい。
　思いながら、さらに怪訝な気がするのは、この間には敏夫を責めた母親と妹が、ぼうっと坐っていることだった。顔色が悪く、姿勢にも倦怠感が漂っている。娘が姉が死んだばかりだと言うのに、なんの感情も見えない。
「律ちゃんは、何で亡くなったんですか」
　敏夫の問いに答える者はなかった。緑が座布団を枕に、気怠げに身体を投げ出した。

「おたくは寺の檀家でしょう。なんで葬儀社なんですか。律ちゃんを看取って死亡診断書を出したのは誰です」

江渕さんですよ、と康恵は気のない声で答え、いかにも億劫そうに立ち上がって家の奥に消えた。

――発症している。

敏夫は二人の様子から確信する。康恵も緑も両方だ。間違いない。なおも縁側から問いかけたが、緑は横になったまま返答すらしなかった。埒が明かず、敏夫は窓を閉めて地所を出、周囲を見渡した。家の横手のほうから、さも哀しげな犬の鳴き声が聞こえていた。

周辺に通りがかる人の姿はない。隣の家に明かりが点り、道に面した窓のカーテンが開いているのを認めて、敏夫は隣家に向かう。玄関先から声をかけた。たしか隣は、田村弘岳の家のはずだった。村には残り少ない木工所で働く老人で、腰部脊椎症でしばしば病院にもやって来る。

「田村さん、済みません」

隣の住人なら、詳しい様子が分からないか。敏夫が何度か声をかけると、一人の老人が姿を現した。弘岳より少し若いだろうか。

「済みません、田村さんはおられますかね」

「田村はおれだけど」
敏夫はぽかんとした。
「いや……あの、田村弘岳さんは」
「おれだ」
その田村弘岳とは似ても似つかない、若々しさを残した老人は言った。
「悪い冗談だな。あんたは弘岳さんじゃない」
「何だい、あんたは。失礼なことを言うじゃないか。おれが田村弘岳だよ。本人が言うんだから間違いない」
「しかし」
「嘘だと言うなら、おれが田村じゃないって証拠を出してくれるかね」
敏夫は返答に窮した。病院に帰れば田村のカルテがあるが、もちろんカルテには写真など貼られていない。保険証番号も控えてあるが、保険証にはやはり写真など添付されてはいないのだ。田村の患部レントゲン像なら残っているが、それだけで田村本人だと言い張る者を、違うと証明することはできない。もちろん、目の前の男をレントゲンにかければ、像が一致しないことは証明できるだろう。だが、何よりまず、男がそんなことを了解してくれるとも思えない。
救いになるものはないか、敏夫は周囲を見渡す。田村のさらに隣家はぴったりと雨戸

が閉じている。向かいも同様の有様だ。田圃を隔てたさらに向こうに明かりの点ってい る家が見えたが、外部を拒絶するようにカーテンが引かれている。
「不審に思うんだったら、隣に聞いてくれ」と、男は律子の家のほうを顎でしゃくった。「長い付き合いなんだからな。そうでなきゃ、すぐそこの篠田の家にでも行って訊いてみるんだな」
男は言って、ぴしゃりと玄関の戸を閉じた。
律子の家はあの有様だ。おそらく訊けば、田村に間違いないと、康恵も緑も証言するだろう。篠田は――と、敏夫は考え、そもそも篠田母娘が九月に転居していることを思い出した。田茂定市が作ったリストの中に、篠田母娘の名前があった。敏夫は仮に発症し、死亡したものとしてグラフに二を書き込んだ。
敏夫は泥濘を泳ぎ渡る気分で車に戻った。病院に戻る間にも、軽い目眩が止まらなかった。病院に戻り、つい田村のカルテを捜し出してみたものの、やはりそれはあの男が田村でないことを証明するなんの支えにもなりそうになかった。
田村のレントゲン像は、あの男のものとは一致しないことが確実だ。だが、あの男がレントゲンを撮らせてくれるはずもなく、それをさせてくれたところで、レントゲン像が一致しない、という以上のことを証明できない。田村の患部像は保険証番号に結びつけられてはいるものの、あの男が田村の保険証を所持しており、レントゲンのほうが間

違っている、これは自分のものではないと主張した場合、敏夫はそうでないことをどうやって証明すればいいのだろう。

敏夫は一人、事務局の椅子に腰を下ろした。ふと気づくと、そこはかつて十和田が使っていた席だった。十和田はいない。辞めると言葉だけを残して消えた。捜せば実家の連絡先が分かるはずだが、もしも連絡したとして、どんな消息が返ってくるのだろう。失踪したと言われるのか、あるいは死んだと言われるのか。

村の九月以降の死者は公式にはゼロだ。それ以外にも転居が続いていたが、篠田家のように住人が戻ってきているとしたら。そうやって戻ってきた住人は、ひょっとしたら夜にしか姿を現さないのかもしれず、あるいは田村のように似ても似つかない顔をしているのかもしれない。

――いや、と敏夫は思う。田村は独居老人だが、家族がいないわけではない。村を出ているものの、子供がいる。その子供を村に呼び寄せれば、あの男が田村でないという証言が得られるはずだ。

（しかし、そんなことをさせてくれるのか？）

たとえば呼び寄せた子供が襲われ、その人物が虚ろな目をして田村本人に間違いないと証言して帰っていく。そうして村から離れたどこかの町で死亡することになったとして、誰かその異常に気づいてくれるだろうか。

（この村の住人でない者で、異常なことが起こっていることを、証言できる者がいるのか？）

村外から村に通勤していた者は、この夏以来の惨状をそれなりに理解しているはずだ。少なくとも葬儀が続いていたことを知っている。だが、十和田はもういない。下山も、雪も聡子もいない。

「そうか」と、敏夫はひとりごちた。「村ではゼロでも、溝辺町ではゼロじゃない」

そう、かえって村の外部、周辺に死人が集中していることになりはしないか。屍鬼に襲われた連中の死は、明らかに余剰死だ。村の周辺で死と失踪が続いているはず。そこを指摘すれば——。

そこまでを思って、敏夫は軽く机を叩いた。頭を抱える。たとえば十和田が、あるいは下山が死の直前に転出していたら？　そうやって死が拡散し、死亡者数が不審を招かない程度に均（なら）されていれば、敏夫が何を指摘しても無駄というものだろう。そして連中は、おそらく、その程度のことはやっている。

役場のあの異常な様子。高見のあとにやって来たという駐在の顔を、敏夫は見たことがない。村外から通勤してくる者は姿を消し、村外に通勤していた者は死亡の前に辞職している。

「そればかりじゃない……」

夏以来、病院に薬品を納めるプロパーの顔ぶれが頻繁に変わった。村に出入りする者もまた、連中に調整されているのだ。
気がついてみれば、いつの間にか村は外部から隔離されている。至るところで人の流れは寸断され、村は孤立し、ブラックボックスと化している。
「だが、あれだけの人間が死んでいるんだぞ！」
人々の記憶から、その死は抹消できない。生きていた痕跡、死んだ痕跡を完全に拭い去ることも不可能だ。敏夫の手許にはカルテがあり、死亡診断書の控えがある。診療報酬明細書もあり、それは保険支払基金に提出され、支払いを受けている。支払基金にはレセプトが残っているはずだ。死んだ者に対し、生命保険などの支払いも行なわれているはず。それに際しては死亡診断書や戸籍の除票が発行されており、それが随所に残されているはずだった。——だが、肝心の役場の戸籍そのものが死亡者数ゼロである場合、齟齬のあるふたつのデータを突き合わせた者は、その齟齬をどう解釈するだろう？
敏夫は軽く笑った。低く、歪んだ笑いになった。
死んだと言って死亡保険金の支払いを受けた者が、戸籍上死亡しておらず、しかも本人は転出して行方を眩ましている。
「おれが失踪すれば完璧だ……」
死んでいないという公式の「事実」がある。その一方に死んだという主張があって、

その主張に係わる人物は全員が転出して行方が分からないとすれば、それが世間的にどう解釈されるかは、あまりにも明らかだろう。
「これが連中の狙いだったんだ」
やがて村には住人など存在しなくなる。転出が続き、村は公には穏便に解体されていく。そしてその廃墟と化した山奥の集落には、不思議に夜だけ住人の姿が見えるようになるのだ。
あまり遠い未来のことではない。この異常な状況を引っぱれば引っぱるほど齟齬は蓄積し、不審を招くことになるからだ。連中は先を急ぐだろう。
「村にはおそらく、ほとんど時間は残されていない」

3

寺務所の電話が短く鳴って、すぐに沈黙した。光男はベルの音に腰を浮かしたが、ほんの二度ほど鳴って途切れるまでに受話器を取ることができなかった。誰だろうか、と光男は考え込んだが、もちろん分かるはずもない。間に合わなかった自分を責めたい気もしたが、取ったところであまり意味はないのだと思い直した。
静信と美和子と克江と自分と。寺に残されたのは、今やたったそれだけだった。静信

は読経できるが、光男は読経できない。それこそ門前の何とかで真似事ができないわけではないが、誰も光男の読経など望んでいないだろうし、それは光男自身の良心に悖ることだった。

（第一、その必要もない……）

死者は依然、出続けているはずだ。だが、近頃になってぴったりと訃報が入ってこなくなった。誰も死人が出たと寺に連絡してこない。連絡してこられたところで、読経できるのは静信だけ、葬儀ともなれば僧侶一人というわけにもいかないが、鶴見も池辺も角ももういない。近郊の寺に手伝いを頼むことは可能だが、もはやその必要もなかった。

（一体……）と、光男は夕闇の降りた窓の外を見た。

死者はどうしているのだろう。こうしている間にも、どこかの家で誰かが息を引き取っているはずだ。その遺体はどうなってしまうのだろう。光男には見えないところで生じたそれは、同じく光男には見えない暗闇の中に引き込まれて消えていく。

光男は息を吐いて、使うあてを失った机に雑巾をかけた。寺は光男の一部だから――あるいは、光男は寺の一部だから、こうなっても疎かに放置はできない。むしろ徐々に死に絶えようとしているのにも似て、荒廃が忍び寄ってくることが我慢できなかった。ことさらのように朝夕、掃除をする。どこもかしこも磨き上げているのに、どこからともなく寂れた色が立ち昇ってくるのだった。

躍起になって掃除を終え、やはりどこか荒んだ色を拭い取れなかったことに落胆しながら、光男は美和子に帰宅を告げた。寺務所の明かりを点けたまま玄関に出る。土間を整理し、必要もないのに履物を揃えて庫裡を出、山門を閉めて潜り戸から出た。山門前の石段も、石段下の短い門前町も閑散としている。並んだ店のすべてがもう閉まっていたが、そのうちの半数は、このところ開いているのを見かけたことがなかった。明かりも乏しい。玄関先の外灯や、窓の明かりが欠けているせいだった。もともと暗い夜道には、あちこちに暗黒がわだかまっている。

光男は、刃物でも突きつけられたような気分で家までの道のりを急いだ。俯き、ひたすらに足を急がせる。家に向かう路地を曲がってやっと顔を上げた。路地の左右に並んでいる家も、やはり明かりが乏しい。歯が抜けるようにして窓の明かりが欠けている。路地の奥に見える黄色い明かりが克江の待つ家で、いつものことながら、明かりが点いていることに光男はほっと息をついた。近づけば、夕飯の支度をする匂いが漂ってくる。ささやかな平常に辿り着いて緊張を解いたとき、脇のほうから茂みを掻き分ける音がした。

光男の家とひとつ手前の隣家は、細い側溝で区切られている。垣根のようなものはなく、双方から庭木が枝を重ね合っている。その茂みの間に人影があった。会釈しようとして、その人影が隣家の誰でもないことに光男は気づいた。裏口に手をかけた人物は、

光男を振り返った。そして側溝を飛び越え、大股(おおまた)に歩み寄ってくる。光男は動けなかった。足許から震えが立ち昇ってきたが、それが単純な恐怖によるものなのか、それとももっと意味の深い畏怖(いふ)によるものなのか、光男自身にも分からなかった。ただ、そういうことだったのか、と思った。

夏以来、続いていた死の連鎖。村に蔓延(まんえん)していた奇妙な事柄。心のどこかで、やはり、と思った。振り返ってみれば、光男はいつからか、こういうことだと分かっていた。

その男は大股に歩み寄ってくると、光男の腕を摑(つか)んだ。

「光男さん、おれに会ったことは言っちゃあいけない」

「鶴見さん……あんた」

その先をどう言えばいいのか、光男には分からなかった。

「あんたは何も見ていない。いいな?」

「あんた、まさか」

鶴見は、以前と変わらない、けれどもどこか憂鬱(ゆううつ)そうな顔で頷(うなず)いた。それが何を肯定するものなのか、光男にはやはり分からなかった。

「おっ母さんが大切だろう?」と鶴見は翳(かげ)った顔で低く言った。「だったら何も見なかったことにすることだ」

「黙っていれば、お袋は安全なのかい」

さあな、と鶴見の声は低い。
「あんた、寺には手を出さないよな？」
「おれはもう寺には出入りできない。おっかなくてな」鶴見の声は掠れたように低かった。「……そうだな、おれならおっ母さんを寺に住まわせるよ」
　光男は頷いた。鶴見は踵を返す。その肩を落としたように見える背に、光男は呼びかけた。
「御院は？　池辺くんや、角くんは？」
　さあ、と鶴見は振り返らないまま答えた。
「顔を見ないな。……きっと逝っちまったんだろう」
　そうかい、と光男は答え、鶴見の行方を見守ることなく家の中に逃げ込んだ。泣きたいような気もしたが、不思議に涙は出てこなかった。何を嘆けばいいのか、分からなかったせいなのかもしれない。
　明るい茶の間では母親の克江が夕飯を用意して待っていた。湯気の立ち昇るそれを母親と食べ、それから光男は荷物をまとめた。母親を急かし、寺へと向かう。
　すでに寺には静信と美和子しかいない。そして光男は寺の一部で、寺を維持する責務を負っている。——負うと決めたのだ、十五の歳に。

4

十一月二日、敏夫はクレオールに広沢らを呼び出した。村の崩壊まで時間がない。この現状を打破しようと思うなら、何がなんでも敏夫には協力者が必要だった。説得できる者がいるとすれば、広沢らだろう。そう思い、昨夜のうちに電話をかけ、とりあえず説得できる見込みのある者をクレオールに集めたのだった。

店に向かうと、クレオールにはいつかのように準備中の札が下がっていた。あのとき、呼び出されたのは敏夫のほうで、ここで疫病の可能性があることを敏夫は示唆した。それを今日、撤回しなければならない。

ドアを開けると中には、長谷川はもちろん、広沢と田代、結城がテーブルを囲んで揃っていた。

「済まなかったね、広沢さん。平日の昼間なのに」

いいえ、と広沢は笑う。

「この時間をお願いしたのはわたしですから」

そうだな、と敏夫は頷く。空いた椅子のひとつに腰を下ろした。

「しかし、広沢さん。なんだってこの時間なんだい？　いや、こうして集まるなら夜の

ほうが自然なんじゃないのかい。そうすれば仕事をサボらなくてもいい」
「それはそうですが……」と、広沢は歯切れ悪く呟いた。「別に深い意図はないんですけどね」
「そうかい？　おれはまた、広沢さんは夜に外出するのを嫌がってるのかと思ったよ」
敏夫は言って、広沢をはじめとする四人の顔を見まわした。それぞれが視線を逸らす。
「……夜には人通りが絶えるからな。もともとこの村じゃ、夜は早かったが、それにしても最近は異常だよ。陽が落ちると誰も外を出歩こうとしないんだ。いつもは診察時間のギリギリまで患者が来るんだが、患者さえ陽が落ちると来るのを嫌がる。なんでなんだろうな」
「冷え込むようになったせいじゃないですか」と、さりげなさそうな声で言ったのは長谷川だった。「陽が落ちると、風が冷たいですからね」
そうだね、と同意したのは田代だった。敏夫は四者四様の表情を窺う。誰もが夜を恐れているくせに、それを互いから隠そうとしている。
「結城さんはもう落ち着かれましたか」
「ええ、まあ」
「奥さんから連絡は？」
ありません、と結城の声は低い。

「連絡を取ってみたんですか？　実家のほうに？」
「いえ。……特に連絡することもないですから」
「連絡してみたらどうです。ひょっとしたら奥さんは実家に帰ったわけじゃないのかもしれない。そうしたら、失踪届を出す必要があるんじゃないですか」
結城は険しい表情で敏夫を見返す。
「どうしてそんなことを急に。——まさか、わたしが梓に対して冷たいと、そういうことをおっしゃるためにわざわざ呼び出したんですか」
まさか、と敏夫は肩を竦めた。
「おれはそんなに暇じゃない。家庭内の事情に嘴を挟むほど酔狂でもないです。だがね、結城さん。夏以来、村に転出者が続いていることは御存じでしょう」
「ええ。それは」
「住人が次々に姿を消す。それも夜中に、突然、引越してしまうんですよ。なんの事情の説明もなく、極めて異常な状況で。——たとえば」と、敏夫は二、三の特に異常な例を挙げた。家出した嫁と同居すると言って消えた三安、小池老を残して消えた息子一家。翌日の診察に来ると言っておきながら消えた広沢豊子ら、ついに診察に来ることのなかった前原セツ。
「小池さんのところの保雄くん一家は、引越す前、例の病気を発症していたと考えられ

る。広沢の豊子さんもそうだし、前原の婆さんもそうだ。例の病気に罹った人間は、不思議に引越をしたくなるらしいんだな。それだけじゃない、村外に通勤している者は、急に仕事を辞めたくなるらしい」
　広沢は困惑したように首を傾げた。
「たしか……武藤さんのところの」
「そう、徹くんも辞職してたんだ。――広沢さん、これをどう解釈したらいいんだろうね。結城さんはどうです。奥さんが消える前、顔色はどうでした。妙に感情が鈍麻している様子はありませんでしたか」
「そんな」と、言いかけたなり、結城は口を噤んだ。視線がテーブルの上をさまよう。結城は明らかに狼狽していた。
「たくさんの住人が奇妙な引越をして村から消えた。そのほとんどが、行く先が分からない。結城さん、ここから電話してみませんか。奥さんの実家に」
　結城は怯えたように敏夫を見て、そうして首を横に振った。
「そう。――じゃあ、こういうのはどうです。誰か最近、役場に行きましたか。マサさんはどうだい。孝くんが亡くなったとき、役場に行ったろう？」
「行ったけど……」
「死亡届を出して、埋葬許可証をもらった。違うかい」

「もちろんだよ。なんか、昼間は職員がいないらしくて、発行は夕方だったけど、たしかにもらった」
「だろう？　ところが月曜、おれが行って聞いたところによると、この村じゃあ、九月以降の死亡者はゼロなんだそうだよ」
馬鹿な、とこれは人数分の声が上がった。
「そう、馬鹿な、だろう。あれだけの人間が死んだんだ。マサさんのところの坊やも亡くなってるし、結城さんのところの夏野くんも亡くなってる。なのに誰も死んでいないんだそうだ」
「そんなことが起こるはずがない」
結城の声に、敏夫は頷いた。
「そう、起こるはずがないんだ。それが起こってる。この村は夏以来、ずっとそうだったんだ。どれだけの人間が死んだと思う？　どれだけの人間が消えたと？　起こるはずのないことだ。常識に照らして、これだけの人間がこの短期間に、死んだり移動したりするなんてことはあり得ない。だが、その起こるはずのないことが継続しているんだ、夏以来ずっと」
「一体」と、長谷川が頭を抱えた。「何がどうなってるんです。何か変ですよ、この村は。そう——先生に指摘されるまでもなく、絶対に変だと思ってた」

敏夫は頷く。

「そう、変なんだ。あれだけの人間が死んで、明らかに伝染しているふうなのに、伝染病ではない。これは感染症じゃないんだ。まったく病原体が発見できなかった」

「まさか」

「事実だよ。実際のところ、伝染病のはずがない。伝染病で患者が辞職するかい。引越をするのかい。そんな症状を呈す病気がどこにあるんだ」

「これはどういうことなんです？　何が起こってるんですか」

長谷川の問いに、敏夫は問い返す。

「その答えは知ってるんじゃないのかい」

まさか、と長谷川は目に見えて狼狽した。

「わたしに分かるわけがない」

「そうかい？　——あんたらは、伊藤の郁美さんがやらかした騒ぎを覚えてるかい」

四人がいっせいに息を呑んだふうを見せて、押し黙った。覚えているのだ、と敏夫は確信する。誰もがあれを覚えていて、それを疑っている。なのに口に出せないでいるのだ。

「なんだって、昼間に集まることになったんだ？　どうして夜じゃいけなかったんだ？　あんたらだって疑っているんだ。違うのか」

それは、と田代が口ごもり、そして沈黙が降りた。全員があらぬ方向を見つめ、懸命に狼狽を隠そうとしている。敏夫はその彼らに向かって、丁寧に説明をした。伝染病だと思われた疾病の特徴、その異常な症状のあらまし。それはあり得ない症状であること、ただひとつ、循環血液減少性ショックであると解釈すれば、すべての症状が整合すること。多くの失踪者、辞職者。今や村は外部と切断され、孤立していること。外部にこの異常を知らせ、証明してみせる手段の失われていること。それは村を包囲し、息の根を止めようと喉首に手をかけている。

「馬鹿馬鹿しい」

結城が吐き捨てて立ち上がった。

「あんたは一体、何を言いたいんだ？　まさか本当に郁美さんのように起き上がりだなんだと言い出すつもりなんじゃないだろうな」

「そう言うつもりだよ。別に無根拠に言ってるわけじゃない。お望みとあれば証明してみせる」

「桐敷さんを呼び出すのか？　そして抹香でも撒いてみるのか」

「おれは少なくとも、後藤田秀司と安森奈緒の死体が墓にないことを知っている」

結城が口を開けた。広沢らも、それは同様だった。

「暴挙は承知だ。だが、確証が必要だったんだ。墓を暴いてみた。どちらにも死体はなか

った。棺の中は蛻の殻だったんだ。お望みなら、今から行ってもう一度暴いてみてもいい。そうすればたしかに二人が起き上がったことを自分たちの目で確認できるだろう」

沈黙が降りた。それを破ったのは、やはり結城だった。

「話にならない」

「結城さん」

「死体がない？　そんなことがあるはずはない。あんた、歳はいくつなんだ？」

「おい――」

「ひとつ訊きたいんだが」結城は敏夫をねめつけた。どうしてだか、憎悪のようなものがそこには込められていた。「あんたはずっと、寺の若御院とつるんでいたろう。どうしてこの席に若御院がいないんだ？」

「それは……」

「全部あんたの妄想だよ。忙しかったんでどうかしてるんだ。それで若御院は付き合いきれなくなったんだろう。だからこの場にいない。違うのか」

敏夫は呆れて言葉を失った。それこそ妄想に近い邪推だが、静信がこの場にいない訳を敏夫は説明できなかった。

「わたしは少し休養することを勧めるね」

言い捨てて、結城は店を出て行った。敏夫は呆気にとられてそれを見送り、広沢らを

振り返ったが、広沢らはまるで見苦しいものから目を逸らすようにして、敏夫から視線を背けた。

「マサさん、おれは」

田代は強張(こわば)った表情で笑った。

「結城さんは息子さんを亡くしてから、気が立っているんだよ。悪気があってあんなもの言いをしたわけじゃないんだ、気にするな」

敏夫はわずかに安堵(あんど)しかけたが、田代はそこで敏夫から視線を逸らした。

「お前も疲れてるんじゃないかな。恭子さんのこともあったしな。いや——おれはお前を非難する気はないよ。お前が大勢の患者を抱えて奔走してたのは分かってる。明らかに伝染してるのに、伝染病じゃないということになると、対処できなくてすげえ焦(あせ)ったろうな。その気持ちは分かるんだよ、うん」

「マサさんも、結城さんに一票かい」

「妄想だなんて言う気はないよ。死体が消えたのは本当かもな。おれは昔、聞いたことがある。死体の盗掘ってあるんだよな。あれは遺骨だったかな。人骨ってのは肺病に効くって俗信があるらしいじゃないか。——なんかそういうことじゃないのかな」

敏夫は言葉を失った。長谷川が微笑(ほほえ)んで頷く。

「そういう話がありますねえ。そう言や、アメリカでもあったんでしょう?　墓場から

死体を掘り出してどうこう、という。ホラー映画のモデルになった事件で」
「ああ、そう。エド・ゲイン」田代はことさらのように明るい声を上げた。「トビー・フーパーが監督で」
「ヒッチコックの『サイコ』もあれがモデルでしょう」と広沢が温厚に声を挟んだ。敏夫は呆然とその場の様子を見守る。彼らは故意に、話題を別の場所にスライドさせようとしていた。
「……それが、あんたらの答えか？」
敏夫の声で、作り物めいた談笑が消えた。沈黙が降り、ようやくのことで広沢がそれを破った。
「……申し訳ないけれども、わたしには荒唐無稽に聞こえます。先生にはそれなりに確信と覚悟があってのことだとは分かるんですが」言って、広沢は何に対してか首を振った。「ひょっとしたら、我々は頑迷で思考の柔軟さを欠いているのかもしれない。けれども理解してほしいのですがね。我々は近代合理主義の洗礼を受けているんですよ。洗脳されている、と言ってもいいのですけどね。この世には化け物や魔法は存在しない。それが我々の世界に対する認識なんです。なにもそれが唯一の真実だ、などと言う気はありません。けれども、我々はそれが真実だという前提のもとに世界を把握しているんです。それは幻想かもしれないのだけれど、我々にとっては所与の事実です。いまさらそ

れを覆せと言われても、それはできない。それをすると、我々は世界そのものを失う」
「これは、そういうレベルの話じゃない」
「そういうレベルの話なんですよ。鬼なんてものは存在しない、それが我々――少なくともわたしにとって、問答無用の真理なんです。すべてはそこから始まる。鬼なんてものがいない以上、これは伝染病なのだし、転居も辞職も、それなりの故あってのことなんです。そうでなければならないのだし、そのために何もかもが整合する説明を捏造しなくてはならない。説明できないのだとすれば、どこかに事実誤認があるんです。そうでなければ我々は世界を――ひいては自分自身を喪失してしまう」
長谷川が同意を示すようにひとつ頷き、無言で席を立ってカウンターの中に入った。
「……手を貸してほしいんだ。おれ一人ではこれを食い止められない」
「食い止めるべき何かがあるとすれば、それは先生が一人で背負うべきことでもないし、背負いきれるものでもないでしょう。これだけの死者が出ているんです。先生の言う通り戸籍が改竄されているとしても――もしも、それが事実だとしても、それが虚偽である以上、かえってそれが外部の注目を引く契機になるでしょう。この事態がこのまま放置されるなんてことは、あり得ない」
「ずいぶんと人が好いんだな」
「別にわたしは、誰かが我々を助けるために外部から手を差し伸べてくれるだろう、と

言いたいわけではないです。放置されない、と言っているんですよ。世間の好奇の目、世間の疑惑、そういったものを押しとどめることはできないと思うんです。誰かが齟齬に気づきます。もしも本当に改竄があれば。明らかに事実にそぐわないんですから。誰もが怪しむし、奇異の目で見る。だからこのまま放置されるなんてことはあり得ない」
「誰が齟齬に気づくと言うんだ？　村は外部と切断されてる。ブラックボックスになっているんだ」
「たしかに、武藤さんのところの徹くんは死亡の前に辞職していました。しかしながら、職場にはちゃんと人間関係があったんですよ。そのうち誰かが、辞めた彼はどうしているだろうかと思って連絡を取ることもあるでしょうし、それ以外にも、様々な手続きが必要になることだってあるでしょう。徹くんが死んだという事実は、外部に漏れる。今ももう、漏れているでしょう。何人もの人間が武藤徹という人間の死亡を知っている」
「だが、それは他人事なんだ」
「職場の同僚なんですよ」
「元同僚と言うべきだ。——この村では夏以来、尋常でない数の死が続いていた。おれがおかしいと思ったのは八月の終わりだ。それに対して、結城さんやあんたらが、おかしいんじゃないかと言ってきたのは十月に入ってからのことだろう。どうしてこんなタイムラグができたんだと思うんだ？

あんたらが訊いてきた時点で、すでに死者は三十に上ろうとしてたんだ。だが、あんたらはそこに至るまで疑問を抱かなかった。もちろん、あんたらの知らない死者もいただろう。だが、あんたらだって頻繁に葬式を見たはずだ。誰それが死んだという噂を聞いていたはずだ。なのに、それは意識に引っかかっていなかったんだ。直接自分が係わった死人でなければ、勘定のうちに入らない。そういうことじゃないのか？」

「それは……」

「いいか。身内の死は重大事だ。誰もそれを無視できないし、忘れることだってできない。それが続けば異常だと思う。だが、身内でなければ他人事で、それは無視することが可能だし、忘れることも可能だ。身内の死でなければ、死は死として認識されないんだ。死としての重大性を剝奪されてしまう。徹くんの同僚だって、徹くんが死んだことぐらい聞いているだろうさ。だが、徹くんはもう同僚じゃない。彼らの身内じゃないんだ。武藤徹が死んだことを知識として知っていても、誰もそれを重大で痛ましい死というものだという認識はしてない。そんな、意味を剝奪された死なんか、どれほど続いたところでせいぜいが悪趣味な冗談の種か、そうでなければ怪談話の種になるだけだ。

あんたらだってこの夏、さんざん口にしたんじゃないのか。どうかしてる、悪い病気でも流行ってるんじゃないかって。それを自分でも、何パーセント信じていた？　それがあんたにとって無視できない事実になったのは、いつの時点だ？」

広沢は押し黙った。敏夫は長谷川を振り返ったが、長谷川は洗い物を始めている。田代が立ち上がり、店番をしないと、と言い残して店を出た。広沢も息をひとつ吐いて、席を立つ。授業があるので、と言い残して去った。

あとには敏夫一人が残された。敏夫はしばらく空席になった四つの椅子を見つめ、そして俯いて店を出た。

店の外は、白々しいほどの上天気だった。空は冴えて高く、冷えた空気は余剰のものを凍結させ、結晶として払い落としたように澄んでいる。そこに妙に陽気な笛の音が流れていた。霜月神楽が近いのだ。家々の落葉樹は色を変えようとしていた。山を覆った樅の色だけが深い。

打ちのめされた気分で病院に戻った。閑散とした待合室には患者の姿はなく、事務局には武藤が残って電卓を叩いていた。

「ああ、おかえりなさい」

うん、と生返事をし、敏夫は周囲を見る。

「やすよさんは?」

「薬の配達がてら、年寄りの様子を見てくるって出ましたよ」

そうか、と敏夫はカウンターに頬杖をついた。

「……なあ、武藤さん。あんたはそこにいて、夏以来、何が起こってきたか見ていたよ

な？」
「はあ」と、武藤は顔を上げて敏夫を見る。
「村は鬼に侵略されてる、ってのはどうだい」
武藤は瞬いた。
「御冗談を」
敏夫は、そうか、と苦笑した。敏夫には活路がなく、しかも完全に孤立していた。

5

結城は家に戻るなり、苛立ちに任せて下駄箱の上のものを払い落とした。
「……鬼だって？　馬鹿馬鹿しい！」
結城はその場に吐き捨てた。敏夫に対し、なんという愚かな、という憤りを捨てられない。
「そんなものがいるはずはないだろう」
まったく、あまりにも馬鹿気ていて話にならない。なんという曚昧、あれが村に唯一の医者だ。そんな村に好きこのんで越してきた自分を心の底から嫌悪した。
「いまどき、子供だって信じるものか」

結城は足取りも荒く居間に向かう。まだ陽は高いが飲まずにいられなかった。あまりにも愚かで、腹立たしくて我慢できない。

「よりによって医者が、なんてことだ」

テーブルを叩いたが、その音はいかにも虚ろに響いた。完全な空洞と化した家、そこで一人罵声を上げている自分。冷ややかに己を観察する自己が、本当に愚かなのはどちらだ、と問いかけているような気がする。

「……馬鹿馬鹿しい」

結城の声は、空洞に谺して耳に舞い戻ってきてみると、いかにも頼りなく、覇気を欠いていた。不思議に、いつか息子を送ってきた姉弟の顔が漠然と脳裏を過ぎった。

そんなことがあるはずはない。そんなものが存在するはずなどないのだ。

「あり得ない」

あの姉弟のほうが正しかったなんてことがあるはずはない。だったら自分は、息子を助けようとした恩人を家から追い出したことになる。息子を守るための品物を自ら破棄し、みすみす息子を死に追いやった。

「そんなはずがないだろう」

結城はグラスに口をつけ、呷る。どういうわけかグラスを摑んだ手の震えがやまなかった。

これはもっと別の事態だ。おそらくは新種の疫病。おそろしく致死率が高く、いったん発病すれば、どんなに最先端の医療をもってしても助けられない。

――そういうことに決まっている。

長谷川はグラスを洗い終え、そして閑散とした店の中を見た。昼時には病院の若い者が頻繁に食事に来たものだが、最近ではそれもない。清水や結城は身内で不幸があって以来、足が遠のいていたし、他にも明らかに常連客の数が減っていた。夜は早目に閉めるようにしている。妻が夕刻には戻ってくれ、と言うせいもあったし、どういうわけだか夜間の客が減ったせいもある。長谷川自身、歳のせいなのか、近頃、夜に店を開けておくのが億劫だった。

疲れているんだ、と思う。敏夫も自分も。あるいは村の者は全部。

妙に気力の萎える感じ、身内を覆った虚無感とその底で燻っているような焦りには覚えがあった。息子を亡くしたときがそうだった。何もかもが疎ましく虚しく、そして抜き差しならぬ威圧感を与える。何もかもを投げ出してしまいたい、という衝動。

長谷川はしばらく一人でカウンターに坐り、物憂いサックスの音に耳を傾けていた。やがて立ち上がり、ステレオのスイッチを切る。――店を畳もう、と思っていた。

このまま村に残るも良し、あるいは、どこかに引越すも良し。もともと長谷川は根無

し草だ。都会で根を捨て、この村に流れてきた。またここから漂い出て行ってもいいだろう。さほどに不安はない。どこに行っても、なんとかなるものだ。
とりあえずその前に、しばらく妻を連れて旅行にでも行こう。そう、明日にでも。ゆっくり二人で温泉にでも入って、そしてこれからのことを相談してみよう、と思った。
田代は店に戻り、それからふと思いついて、役場へと向かった。留守居の老人に戸籍謄本の発行を頼んで、店に戻り、夕刻に店を閉めてから役場に寄る。
陽が落ちてから、ようやく役場らしい喧噪に満たされた事務所の様子には強いて注目しないようにし、謄本を受け取った。田代の息子はたしかに死亡によって抹消されていた。
「そうだよな」と、田代は呟いて苦笑する。謄本を出してくれた職員が怪訝そうに首を傾げた。いや、と口ごもり、田代は言ってみる。
「なんか……村で死人が続きますね」
そうですね、と職員は頷いた。
「本当に立て続けにねえ。どうなってるんですかね」
「ずいぶん亡くなっておられるんじゃないですか、夏以来こっち」
「そうなんですよ。町役場のほうからも調べるよう言ってきてるぐらいでしてね」

田代は、ほっと息を吐いた。

「そうですよね、――そうでしょうね」

武藤が家に帰ると、キッチンでは妻の静子が食事の用意をしていた。寝間で着替え、少しの間考え込んで台所を覗いた。食卓を整えていた妻の静子と話をした。

それから風呂を使い、上がってダイニングに行くと、もう食事の用意はできていて、保などはすでに箸を付けている。旺盛な食欲を微笑ましく見て、武藤はひとつだけ空いた席を寂しい思いで見やった。悲しみと痛みが綯い交ぜになったものが、胸の奥から喉のあたりにまで満ちる。

ごく当たり前の夕食だった。とりとめのない会話の断片が行き交い、茶碗がやりとりされる。保が箸を置いて立ち上がろうとしたとき、武藤は少し待つように言った。

「どうしたの？」

「少し、話があるんだ」

保は父親の顔を見返した。どこか疲れたような、放心したような色を浮かべた、このところずっとそうだった通りの父親。

保は怪訝に思いながら、自分の席に着いて焙じ茶を啜っていた。姉が箸を置き母親が最後に何やら心得た顔で箸を置いた。

うん、と父親は誰に対してか、頷いた。そうして保と葵を見る。
「お前たち、家を出てみる気はないか」
「……なんで」
保は瞬く。どうしてそんなことを父親が急に言い出したのか、分からなかった。
「溝辺町にアパートでも借りて、二人で下宿生活をしてみるっていうのはどうだろうね」
「それは……いいけど」
保は姉の顔を見た。葵は首を傾げつつ頷く。母親は何もかも心得ているふうで、黙って湯呑みに口をつけていた。
「尾崎の若奥さんが亡くなったろう。徹が逝って、夏野くんも正雄くんも死んで、それ以外にも、村じゃあ葬式が多い。この村はちっとばかり変だよ。この頃な」
保は頷いた。
「何がどうなってるのか分からないし、わたしはそういうことが分かるような聡明な質でもないんだがね。だが、そうだな。わたしは臆病なんだよ。だからお前たちを徹の二の舞にしたくないんだ」
言って、父親は寂しげに微笑んだ。
「親っていうのは、そういう生き物なのさ。子供に対しちゃあね。危ないものは持たせ

たくないし、危ないところには行かせたくない。どんな些細な危険からも遠ざけておかないと安心してられないんだ」
「それは分かるけど……でも」
「お母さんは家を離れるのは嫌だと言うしね。わたしも仕事があるからね」
父親が言うと、母親が笑う。
「お父さんのいるところが、わたしの職場だもの。あなたの世話をするのが仕事なんですからね」
父親も声を上げて笑った。
「なんだそうだ。だから、お前たち二人で暮らしてごらん。人間、先々何があるか分からないもんだし、今のうちに一人でも生活できるよう、練習をしてみなさい」
そう言って微笑む。葵が何かを隠すように俯いた。保はそれを見、改めて両親の顔を見る。父親はどこか晴れ晴れとした表情をしていた。
村が変なのは事実だ、と思う。こんなに次々に人が死んで。だから村を出て行け、と父親は言っている。自分はここに踏み留まるつもりだ。職場が病院でなければ、あるいは父親も一緒に出て行こうと言ったのかもしれない。だが、病院だから。職員が減っていると聞いたけれども、そのせいもあるのだろう。村に残ってあの場所を支えるつもりなのだ、と理解した。それに伴う危険は承知している。だから一人でも生活できるよう

練習してみろ、と言っている。
保は掠れた声で、ようよう言った。
「……うん。分かった」
そうか、と父親が頷き、母親が、明日の放課後、待ち合わせて一緒にアパートを探しに行こうと言った。保は頷きながら、皮肉だ、と切なく思っていた。
(おれのほうが出て行くことになったよ、……夏野)

十九章

I

矢野妙は目覚めた。しばらくの間記憶が混沌としていて、闇を見つめているしかなかった。

小さな小屋の中だった。蒼い闇が降りていて何もかもが陰鬱なふうに翳って見えた。小屋が荒んでいるようなのもその気分に拍車をかけた。長い間使われていない物置小屋という風情の建物だった。そのわりに、ついさっきまで誰かがそこにいたような、人の気配の残滓とでも言うべきものがそこここに残っている。それは土間に何気なく置かれた真新しい空き瓶のせいなのかもしれなかったし、大雑把に畳んで放り出されたさほどに古びてはいない新聞のせいなのかもしれない。いずれにしても妙は小屋の土間に直接寝ていて、このとき周囲には誰もいなかった。妙はここがどこで、自分がどうしてこんなところにいるのか、さっぱり理解することができなかった。

妙はふらつく足で立ち上がり、戸を開けて表に出た。小屋はかろうじて舗装された細い道の端に建っている。道の両脇には樅の林が迫っていて、山の中なのだとは想像がつ

いた。

なんとなく周囲を見渡し、妙はぎくりと身を竦めた。樅の林の上、月明かりもないのに鉄塔が銀に輝いて見えた。鉄骨が錯綜する巨大な形状は、不思議に気味悪いものに感じられた。竦むほどの威圧感を放射している。

ありふれた鉄塔に竦むなんて、どうかしている。妙は思いながら、それでもそれが見えない――鉄塔から見下ろされることのない場所に行きたくて、道の傾斜が下るほうへと歩き始めた。

鉄塔があるから、おそらくは西山だ。この道は林道で、あの小屋は林道沿いによくある道具小屋だろう。それは理解できたものの、妙はなぜ自分がそんな場所にいたのか、理解することができなかった。とにかく家に帰ろうと思う。夜道は怖い。不思議にあたりは蒼褪めて、決して暗くはなかったのだが、夜は恐ろしいものだという知識が妙を怯えさせていた。

(早く……帰らないと)

樅に覆われた山は、死の領分だから。

妙は足を急がせた。最初はふらついて千鳥足になったが、次第に歩調はしゃんとしてきて、いつもよりずっと足が軽いような気がした。なんだかとても気分がいい。なのにとてもどこかが変だ。下着を一枚、着け忘れているような、理由不明の心許なさがあっ

た。
　ともかくも足を急がせているうち、林道を下りて村に出た。ちょうど末の山と交わるあたりだった。小さな祠が田圃を隔てて見える。末の山に沿って急ぎ、国道に出た。妙はいつの間にか飛ぶように家の前へと辿り着いていた。無事に家まで戻ってきた。
　安堵して駆け寄ろうとし、妙はまた竦む。寝静まった建物、明かりはなく窓も閉ざされ、雨戸もぴったりと引きまわされている。禍々しい感じがしてならなかった。それは鉄塔に感じたものと同種の感覚だ。近寄ると怖いことが起こる、という不吉な予感に似たものを感じる。そこが自分の家で、今が危険なものの徘徊する夜でなければ、近寄りたくなかった。
（どうかしてるわ）
　そう、あれは自分の家だ。きっと加奈美がたった一人で（自分はなぜあんな小屋にいたのだろう？）眠っている。怖いことなどあるはずがない。なのにどうして、こんなに身が竦むような思いがするのだろう。
　妙は躊躇い、それからようよう、家へと近づいた。畏怖のようなもの、気後れのようなもの。近づきたくない、という切実な気分を押さえ込むことができたのは、それが極めて不吉な予感に似ていたせいだった。良くないことの気配がする。そしてあの家の中には加奈美が一人で眠っている。加奈美に何か――。

裏手に廻って、加奈美の部屋の窓辺に歩み寄った。雨戸のないガラス窓の内側には、ぴったりとカーテンが閉ざされている。その窓を、勇気を鼓舞して叩いた。異様な気配のようなものが立ち込めていて、家の中に入ることなど考えただけで身が竦んだが、だからこそいっそう、加奈美の顔を見たくて、たまらなかった。

広沢高俊は大塚康幸と、死体をひとつ穴の中に埋めて小屋へと戻った。
「あれは誰なんだ?」
高俊は康幸に問う。高俊はその若い女の人相に見覚えがなかったが、康幸は知っているのだろう、埋めたあとに手を合わせていた。
「丸安の嫁さん。——淳子だったかな」
「へえ」と高俊は呟く。「残念だったね」
仲間の知人が起き上がらなければ、そう悔やみを言う。それが仲間同士の礼儀のようなものだった。
「別によく知ってたわけじゃないんだ。同じ製材所同士で丸安とは往き来があったってだけで」
「ああ、そう」
二人は甦生して長い。犠牲者を襲うのはルーティーンワークにすぎず、その結果、生

じた死体の処理も不要物を処分するのと同義だった。高俊も康幸も、すでに犠牲者を人間だとは認識していなかった。それは家畜のようなもの、そう意図的に割り切るようにしているうちに、もはやそれが当たり前のことになっている。——ただ、知り合いだけは別だ。それなりの親交があった者は、家畜とは違う。少なくとも放牧された羊と、庭で飼われているペット程度の違いがあった。

「それより、どうだい。日向ちゃんは」

高俊が聞くと、康幸は少し照れたように笑う。

「うん、いい子だよ。気がつくし、良くしてくれる」

康幸は今では三安と通称される安森家で暮らしていた。三安の嫁、日向子が甦生していて、日向子との二人暮らしだ。高俊はかつての住まいと遠い上外場で暮らしている。遠いと言っても村の中のことだが、少なくとも周辺には、かつて付き合いのあった者はいない。知り合いの——ちょうど高俊の母親ぐらいの女で甦生したのがいて、その女との、やはり二人暮らしだった。

山入は完全に飽和している。仲間のうち、それなりに経験があって特に失点もない者は、徐々に村に下りてそこで暮らすようになっている。山入に比べれば別天地だ。家は住み心地が良く、食糧は近所から間引いてくればいい。家の中に上手(うま)く隠しておけば、狩りに出ることさえせずに済む。できた死体は葬儀屋に運べば速見が処理してくれる。

とりあえずは仕事もある。高俊は役場で働いていたし、康幸は近くに点在する山小屋の管理をしている。山の中には作業小屋や、道具小屋が点在している。そのうちの五つほどを分担し、そこに手を入れ、運び込まれた死体の面倒を見る。甦生しないか見守って、甦生すれば近所から羊を引いてきて与え、最初の羊を襲うところまで面倒を見て山入に送る。腐敗が始まったら処分する。——今夜葬(ほうむ)った女のように。

かつてはそれは、山入の特定の家でのみ行なわれていたことだった。辰巳などがあらかじめ甦生しそうな者に目星を付け、山入に運び込み、その後の面倒も全部見ていたが、さすがに近頃は死体が多い。とても辰巳一人の手には負えず、あらかじめ甦生するかどうかを確認することもままならない。とりあえずすべての死体を見守っているしかないが、そうすると山入では収容し切れない。それで山小屋に入れ、割り当てられた者が面倒を見る、そういうことになっていた。

「たいへんだな、五箇所もあるんだろ」

高俊が言うと、康幸は笑う。

「そうでもないよ。順番に巡(まわ)って様子を見るだけだから。仕事があるっていうのはいいよ。それなりに張りも出るしな。小屋の壁を塗ったり、板を張ったりするのも面白い。最近、上手くなったんだ」

「へえ」

「でも、ごめんな。遊びに来てくれたのに手伝わせて」
「別にいいよ。そんなにたいした手間じゃないし」
「もうじき広本が空きそうなんだってさ。お前んちの近くに小さい製材所があるだろ。広沢の製材所」
「ああ、あそこ」
「あれが空いたら、そのうち任せてもらえないか、辰巳さんに頼んでるんだ。造作するのにいるだろ、材木が」
「そうだな。康幸さん、それが本業だもんな。そうなるといいな、近くだし」
うん、と康幸は頷く。西の山のいちばん下にある小屋が目の前だった。康幸は扉を開け、そして中に踏み込み、硬直する。
「……どうした？」
「いない」
高俊は、え、と声を上げて小屋の中を覗き込んだ。たしかに誰もいない。女の死体を運び出す前、その隣には老婆の死体が横たわっていたのに。
「起き上がったんだ」と、康幸は呟き、高俊を振り返った。「お前、小屋を出るとき、鍵かけたか？」
高俊は首を振った。死体は高俊が担いで出た。戸を閉めといてくれ、と言われたので、

扉を閉めたが、鍵はかけていない。
「閉めといてくれって言われただけだったから……」
「戸を閉めとくだけじゃ意味がないだろ」
——その通りだ。高俊は顔が強張るのを感じた。
「どうしよう、康幸さん」
「どうしようって。おれだって困るよ、こんな。広本の話だってしたばっかりなのに。辰巳さんにこっぴどく叱られる。下手すると山入に連れ戻されるかもしれない」
高俊はシャベルを小屋に放り込む。
「捜さないと」
「……見つからなかったら？」
「怖いことを言うなよ。村の連中に見つかったらおおごとだ。おれ、辰巳さんに吊されちゃうよ」
「でも、おれたちが出てすぐに起き上がって小屋を出たんなら、どこまで行ってるか想像もつかないよ。山の中を、うろついてるかもしれないし」
「そりゃ、そうだけど」
高俊は身震いする。下手をすると高俊まで責任を問われる。辰巳の叱責だけは避けたかった。懲罰は御免だし、康幸の言う通り、村に住む資格を取り消されて山入に連れ戻

されるかもしれない。
「朝になったら焼け死ぬよ、きっと。顔が焼け爛れたらさ、どこの誰だか分からないだろ。婆さんも、起き上がらなかった、埋めたって言えば」
「でも」
「おれが証人になるよ。二人で口裏合わせたら分かんないよ。辰巳さんだってもう死体がどれだけあるのか把握しちゃいないだろ」
――そうかもしれない、と康幸は思った。どうあっても、ここで失敗して辰巳に叱責され、恩恵を失うような事態は避けたかった。
「……とにかく、捜すだけは捜そう。どっかそのへんにいるかもしれないし」

矢野加奈美は、窓を叩く音で目を覚ました。枕許のスタンドが点いたままになっている。身を起こし、時計を見た。午前四時を過ぎていた。誰かが窓を叩いている。ガラスが割れそうな勢いだった。
（こんな時間に……誰？）
夜明け前に訪ねてくるような知人の心当たりはない。――元子を別にすれば。茂樹の具合が悪いと聞いた。加奈美は何度も電話したが、元子はそのたびに手が放せない、と言って電話を切る。そのたびに自分が切り捨てられるような気分がした。元子は加奈美

を含む外界を自分自身から遮断しようとしているように思われてならなかった。
(茂樹くんに何か)
容態が変わったのかもしれない。それでもう、電話することも念頭に浮かばず、駆けてきたのかも。元子ならあり得ないことではなかった。
加奈美は起き出し、カーテンを開ける。元子の姿を捜して窓を覗き込み、そこに妙を見つけて仰天した。妙が窓を叩く手を止めた。声もなく、唇が加奈美、と綴る。
「……なんで」
だって、母親は死んだ。加奈美は身を裂かれるような痛みとともに、野辺に棺を送ったのだ。
愕然としながら、それでも足は無意識のうちに動き、小走りに裏口へと向かっていた。何もかも間違いだったのだ、という悲しいのか嬉しいのか分からない気分と、きっとこれは夢で自分はひどい落胆をすることになるに違いない、という気分が交互に加奈美を揺すって、悪酔いしそうだった。こんなことはあり得ない。だからこれは夢か幻覚に違いない。だから裏口を開けても、妙などそこにはいないのに相違なかった。加奈美は母親を失った。自分の一部を喪失してしまった。それはもう取り返しのつかないことで、けれどもそれが全部間違いで、何かの僥倖で妙が帰ってきたのだったら、どんなにどんなに嬉しいだろう。

(……神様)

祈るような気分で鍵を開けた。ドアを開いて裸足のまま裏庭に出ると、妙が呆然とした風情で佇んでいた。本当に帰ってきてくれたのだ、と思い、だからこれはきっと夢に違いないと思った。なんて嬉しい――そして残酷な夢なのだろう。自分はきっと、目が覚めてから声を嗄らして泣くに違いない。あらゆる摂理を恨んで身悶えするだろう。

そう思う間にも、加奈美は、お母さん、と声をかけて駆け寄っていた。その手を摑むと、夜風と同じ温度をしていた。それでもたしかに、そこには手が。

「……お母さん」

妙の手が加奈美の手を握り返す。加奈美は涙を零し、そして妙を二度と自分の側から切り離されまいと家へと促した。妙の手の感触が、夢だとは思えないほどたしかだった。それとも自分は、たしかに手の感触がする、という気分になっているだけなのだろうか。

経帷子を着た妙の手を引き、肩を抱えて家に入れた。その骨の感触の露わな肩も、やはりたしかな手応えがした。本当かもしれない、と思う。思うと同時に、すっと背筋を寒いものが撫でた。もしもこれが夢でなく、本当に妙が帰ってきたのだとしたら。

加奈美は妙を放し、慌てて裏口を閉めて鍵をかけた。二度と妙を失うまいと思うと同時に、早く世間の目から隔離しなくては、という気がした。裏口を閉めて振り返る一瞬、妙が消えているのではないかと疑ったが、妙はそこに立って加奈美を見ていた。加奈美

は初めて悪寒めいたものを感じた。

——これはどういうことなのだろう。なぜ妙がここにいる。帰ってくるはずなどないのに。

「……どうして？」

訊いたが、答えはなかった。妙は首を振った。妙もまた加奈美以上に呆然としているように見えた。

とにかく、と促した。白装束のままはまずい。近所の者がこれを見たら、妙が起き上がってきたのだと思うだろう。——そう思い、加奈美は悟った。

妙は起き上がってきたのだ。震えが立ち昇ってきたが、それは決して妙が怖かったからではない。起き上がってきたのだ、という事実そのものが怖かった。

恐る恐る手を伸ばし、妙の顔に触れた。妙は涙を零していたが、その涙にも温度はなく、妙の鼻も口も呼気を零してはいなかった。肌は冷え冷えとして、触感以外の感触を持たない。

（起き上がりだ）

これが、村で続いていたことだったのだ、とようやく悟った。妙は墓から起き上がり、死を媒介するために山を下りてきた。加奈美を引くために戻ってきたのだ。

だからと言って、目の前に母親がいて、どうして家から閉め出せるだろう？　山へ帰

れと追い払うことなど、加奈美にはできなかった。
「とにかく……着替えよう？　泥だらけだよ」
加奈美が手を引くと、妙はこくんと子供じみた仕草で頷いた。加奈美は妙を洗面所に連れて行き、顔を洗わせ、着替えさせた。経帷子を脱いでいつもの寝間着に着替えてみると、それは母親そのものだった。明かりの点いた茶の間に坐らせてみると、母親が死んだという記憶のほうが嘘に思えた。
加奈美は何度も声をかけ、何が起こったのか訊こうとしたが、妙はただ頭を振った。呆然としているようだったが、次第にそれは焦りの色を露わにする。加奈美はやがて、妙が声を出すことができないのだと悟った。声が出ないことで、妙自身も狼狽している。
「いいよ……いいの。とにかく寝て？　落ち着いてからゆっくり考えよう？」
加奈美が言うと、妙は頷く。いつの間にか、あたりには仄かな明かりが漂い始めていた。夜が明ける。
「ちょっと待っててね。布団を敷いてくるから」
加奈美は言い残し、妙の寝間へと向かった。二度とここに主は戻ることはないのだと、感慨をもって片付けたばかりの部屋に布団を展べた。
茶の間に引き返すと、妙は炬燵台に突っ伏していた。慌てて駆け寄ると、ぐったりとしている。眠っていると言うより意識がないように見える。——いや、それよりも死ん

でいるように。
体温はなく、呼吸もなかった。胸に手を当てても鼓動も感じられない。ついさっきまで起きていた、そのことが嘘のようだった。
これは死体だ。間違いなく、妙は死んでいる。起き上がって山を下りてきた、というのが嘘だったのだろうか。それともそもそも妙が死んだという記憶のほうが間違いだったのだろうか。ひょっとしたら妙は、今ここで初めて死んだのかも。あるいは気の狂った自分が妙を墓から運び下ろしてきたのかも。
埒もない考えが脳裏で渦を巻いて、加奈美はしばらく身動きができなかった。たしかなのは今、目の前に母親の死体がある、ということだった。
(とりあえず……運んで)
そう、寝間に運んで、そして誰かに相談してみよう。——でも、誰に?
加奈美は考えながら、妙の身体を抱え、引きずるようにして寝間に運んだ。布団に横たえる。そうしてみると、本当にそれは妙の死体にしか見えなかった。たった今、ここで息を引き取ったふう。
目眩がした。悪心がこみ上げて、加奈美は窓を開ける。雨戸を少し開いて、庭に向かって吐いた。どこからが夢でどこからが嘘で、何が本当なのだろう。加奈美の居場所はどこなのだ。一体何が現実なのだ。

半ば泣きながら喘(あえ)ぎ、しばらく窓辺で息をしていた。庭の向こう、白々と明け始めた村の景色には、何ひとつ変わりがない。いつもの朝、いつもの秋の景色だった。異常なことなどなく、加奈美の知る、かくある姿は寸分も損なわれていない。では、加奈美の背後にある布団の中には、誰の姿もないはずだ。なのに振り返るとそこには妙がいて、ならば妙は寝息を立てていなければならないのに、やはり息も脈もなかった。

（……どうしよう）

どうしたらいいのだろう。どう理解し、受け止め、自分の中で整えればいいのだろう。途方に暮れるあまり、泣かずにいられなかった。泣いている加奈美の背後から曙光(しょこう)が射(さ)した。夜は本当に払拭(ふっしょく)され、朝に塗り替えられようとしていた。

異音を聞いたのはその時だった。加奈美は顔を上げた。ずっと声を出さなかった妙が、目を開けて短い断続的な呻(うめ)き声を上げている。

「……お母さん？」

妙は苦痛に満ちた声を上げ、顔を覆(おお)った。駆け寄った加奈美の目の前で、妙の手が顔が赤く腫(は)れあがり、水膨れを生じていく。それが弾(はじ)け、妙は悲鳴を上げた。火傷(やけど)だ、と加奈美は思った。――でも、なぜ。

理由は分からないが、悲鳴が漏れるのは怖かった。慌てて雨戸を閉め、窓を閉めると、妙は唐突におとなしくなった。ぱたりと顔を覆った手が落ちる。その手も顔も爛れてい

たが、声を上げることもなく、もう瞼も穏やかに閉じている。
「……朝陽？　光のせい？」
加奈美は窓と妙を見比べ、改めて戸締まりをした。雨戸をぴったりと閉じ、なんとなくそれでも不安でガムテープで目張りをする。ガラス窓を閉じたうえでガラスには新聞紙を貼り、そうしてカーテンをぴったり閉じて、中央を粗く縫い合わせた。そうすることで、加奈美は無意識のうちに、妙の存在を外部から隠蔽しようとしていた。

2

静信が考え込んでいると、済みません、と小声が輿寄せのほうでした。気のせいだろうか、と思いながら寺務所を出ると、輿寄せの土間に、十五、六の少女が立っていた。
静信には、その少女が誰なのか分からなかった。
「どちらさんでしょう」
訊いたが、少女は口を噤んだまま俯いている。
「どうしました？」
重ねて問うと、少女はようやく顔を上げた。
「あの、……あたし」言いかけたが、心許なげに再び俯く。「若御院は覚えてないと思

うんですけど、以前、恵のお葬式のとき会って……」
「清水恵さん？」
はい、と少女は頷く。夏以来、数え切れないほどの葬儀があり、記憶し切れないほどの関係者に会った。静信は少女の顔に、たしかに見覚えがあるような気もしたが、あまりにも膨大な顔の群の中に埋没して、どこで会ったどの人物だと特定することはできなかった。
「とにかく、お上がりなさい。そこは寒いでしょう」
冷えた風が吹いていた。少女は逡巡したふうを見せ、それから頷き、靴を脱いだ。静信は寺務所に少女を通し、暖房を少し強くする。俯いたままの少女に煎茶を淹れて出した。
「こんなものしかないのですけど。召し上がって温まってください」
「ありがとうございます」と、少女の声は消え入りそうだった。
「清水恵さんのお友達ですか？」
「はい。……あたし、幼馴染みで……」
気後れしたような口振りに、なんとなく聞き覚えがあった。そう言えば、恵の埋葬の時、プレゼントを墓に入れたいと、同じように気後れしたふうに言った少女がいなかっただろうか。

「間違っていたら申し訳ないのですけど、恵ちゃんの埋葬のとき、プレゼントを取りに戻られた方ですか？」
少女は両手で湯呑みを包み込んだまま、顔を上げる。やっと表情を和らげた。
「そうです。あの……あたし、田中かおりといいます」
少女はほっとしたように息を吐いた。
「あたし、お願いがあって来たんです。その……戒名をもらうのって、どうすればいいんでしょう」
「どなたか、御不幸でも？」
少女は俯く。迷ったように口を開きかけ、閉ざした。
「やっぱりずっと、お得意じゃないと駄目ですか……？」
「いえ、ずっと檀家でないといけないということはありません。ですが、お付き合いのあるお寺さんが別にあるなら、そちらに頼まれたほうがいいとは思いますが。どなたか、亡くなられたのですか？」
「母が。……でも、そうじゃないんです。あたし、自分の戒名がほしいんです」
静信は瞬いた。
「あなたの？」
「いつ、死んでもいいように。——そういうのって無理ですか」

少女は顔を上げ、真正面から静信を見る。痛々しいほど真摯な顔に見えた。静信は少女の傍らに腰を下ろした。
「無理ではありませんよ。生前に戒名を受けられる方もおられますから。けれども、あなたのような若い方が、そういうことを言ってこられるのは初めてです。田中さんはおいくつですか?」
「……十五です」
「いつ死んでもいい、というお歳ではないですね」
柔らかく言うと、少女は俯いた。
「そうおっしゃるからには、それなりの理由がおありなのでしょうし、戒名をお出しするのは、一向に構いません。ですが、あなたのような若い方が死を覚悟したふうなのは、痛々しい気がします。——お母さんが亡くなられたのですか?」
「……はい」
「他の御家族は?」
「父も死にました。弟も死にました。もう家族はいません。今は、近所の人が面倒を見てくれてます」
「それは御愁傷様です。さぞ、お辛かったでしょう」
「次はあたしなんです。分かり切っているんだから、きちんとしておきたいんです」

かおりは顔を上げて、泥のついた両手を示した。
「墓穴は掘ってきました。お墓も用意したんです。立派なのじゃないけど、お父さんとかお母さんのを見て、同じように自分で書いたんです。最後に死んだ日を入れたら、それでいいようにしとこうと思って。でないと小母さんに迷惑をかけるから。でも、お墓を見たら戒名があって、自分の戒名ってどうやってつければいいのか分からなくて、それで」
静信は青白い少女の顔を見た。この少女は自らを埋葬しようとしているのだ。家族を失い、一人だけ残され、生き延びる気概を失って一緒に葬られてしまおうとしている。自分の墓を自分で用意するというのは、自分自身に対する決別の儀式だとしか思えなかった。
「あなたの命は、あなたが思っている以上に尊いものなのですよ」
静信が言うと、かおりは怪訝そうに首を傾げた。
「家族を亡くされて、さぞお辛かったでしょう。十五で御両親を亡くされれば、自分がこの先どうなるのか、分からないだろうと思います。かおりさんは、自分の人生が先行きのないものに感じられるだろうと思います。なんの希望も持てない、苦しい予感だけがする。そのぶん、自分の人生が値打ちを失ったように感じられるだろうし、人生の値打ちがなくなれば、命の値打ちもなくなったように感じられるかもしれません。けれど

も、値打ちのない命など、ないんですよ」
「あたし……」
「かおりさんの命は、あなたに付与されたたったひとつの尊いものです。人はいずれ死にます。それがずっと先のことだとは、ぼくも言いません。悲しいかな、人間はいつ死ぬか分からないものだし、ぼくもあなたも、もういくらも生きていられないのかもしれない。この村では、近頃、人の寿命は短いのです。人は呆気なく死ぬ。とても、脆い」
「……はい」
「ですが、明日にも死ぬかもしれないと知ることと、いつ死んでもいいと心を決めることとは別物なんです。明日にも死ぬかもしれないと知ることは、命の脆さを悟ってそれを引き受けること、いつ死んでもいいと心を決めることは、命の脆さに絶望してあらかじめ投げ出すことです。けれども、どんなに脆くても、いつ死んでもいいと投げ出して構わないほど安い命などないんですよ」
言って、静信は苦笑した。村の崩壊を是としてしまった人間の言う台詞ではない。自嘲せずにいられなかった。
「……こんなことしか言えなくて済みません。ぼくは、かおりさんが今、どんな状況におられるのか分からない。どれだけ辛かったか、どれだけ辛いか分からない。そんな人間が、訳知り顔をしても、かおりさんにしたら何を言う、という気持ちがなさるでしょ

う。……けれども、ぼくはそう思うので、あなたが十五の若さで自分の墓を用意しようとしていることが、とても痛々しいことのような気がするんです。戒名が必要なら用意してさしあげますが、そういうことでしかお役に立てないのはとても悲しいし、残念です」
「でも……あたし」かおりは俯いた。「次はあたしなんです。それもじきに決まってるんです。だって……恵はあたしのこと、怒ってるんだもの」
「清水恵さんは、かおりさんのお友達だったのではないのですか？」
「そうです。だから、余計に怒ってるんだと思います。お父さんもお母さんも、昭も、だから……」かおりは両手を強く握り合わせた。「次は、あたしなんです」
かおりは静信を見る。静信は首を軽く傾げたまま、言葉を挟まなかった。かおりには静信の沈黙が、先を促すもののように見えた。返答に困っているのでもなく、かおりが何を言い出したのかと身を引いているのでもなく、これから何を言おうとしているのか、待ち受けているような気が。
「分かんないんです、あたし、恵が何を考えてるのか。でも、怒ってるのはたしかなんです。だから、お父さんもお母さんも死んだんです。昭――弟も」
「恵さんが怒ると、かおりさんの御家族が亡くなるのですか？　なぜ？」
「分かりません。でも、恵が」

かおりは言いかけ、口を噤んだ。こんなことを言っても、大人には信じてもらえない。今だってきっととても変に思っているに違いない。そう思って静信を見たが、静信は首を軽く傾げたまま、かおりの言葉を待っている。

「若御院は笑うと思います。絶対に信じられないと思うから。でも、恵が――恵が言ったんです。お父さんが死んだ、って。そしたら、本当にお父さんが死んでて、同じようにお母さんと昭も死んで」

「清水恵ちゃんが予言したんですか？」

「予言でなくて、宣言だと思います。あんたの父親は死んだ、って。そしたらお父さんが本当に死んでて。恵はそうやって、あたしに復讐（ふくしゅう）してるんです。ざまあみろ、って言ったもの。理由は分からないけど、でも、きっと結城さんが死んじゃったから」

「結城――夏野くん？」

「そうです。恵は結城さんのこと、好きだったの。でも、あたし、結城さんが危ないの、分かっていたけど助けてあげられなかった。だから怒ってるのかもしれません。あたしが変なことに巻き込んだせいだと思ってるのかも。分からないけど、とにかく恵は」

かおりは言いかけ、言いすぎたことに気がついた。

「……恵は、変わっちゃったんです」

そうですか、と静信は言った。笑うでもなく、嫌な顔をするでもなく、ごく真面目（まじめ）に

頷いた。

「それで、次は自分だと、かおりさんは思うんですね」

「ええ」

「恵ちゃんが起き上がって、今度こそは自分に直接、復讐しに来ると」

「そうです」と、かおりは静信を凝視した。「信じられないでしょうけど、あたしはそう思うんです。……いえ、本当は恵かどうか、分かりません。でも、次はあたしです。それはたしか。あたしは、気がついたから。結城さんも昭も、それで死んだんだもの」

「夏野くんは、それで死んだんですか？」

「そうです」

静信は軽く額を押さえた。

「信じられないでしょうけど、そうなんです。あたし」

「いえ、違います。可哀想（かわいそう）なことをした、と思って」

かおりは首を傾げた。

「彼は気がついていたんだ。そして、あなたも、弟さんも。それを知っていたら、手を貸してあげられたかもしれないのに」

かおりは、ぽかんとした。

「きっと他にもいたんだ。そして粛清されていった。そんな人間が、ぼくらの知らない

ところでたくさんいたに違いない。なのにぼくには、何もできなかった……」

結城夏野の死は、確実に屍鬼からの報復だ。気づいてはいけないことに気づいて、夏野は粛清された。それもあえて知人に襲わせるという、被害者にとっても加害者にとっても惨い方法で。

そして、かおりの不幸も同様なのかもしれなかった。この少女は、知ってはならないことを知ったために、父母と弟を亡くしたのだ。憐れみを込めて静信は孤立した少女を送り出した。去っていく後ろ姿を見つめ、そして孤立したのは、かおりだけではないことに気づいた。

信明の失踪、鶴見の死。池辺、角。寺もまた人が確実に減っている。かおりの家ほどの惨状を呈してないのは、ひとえにここが寺であり、屍鬼にとっては忌まわしい場所であるからに違いない。そうでなければ今頃は、静信しか残っていないのかもしれなかったし、あるいは静信自身、いなかったのかもしれなかった。

静信は軽く目頭を押さえた。信明は生きていない。なぜなら、それは報復だからだ。知りすぎた静信に対する粛清。

（沙子……そこまでしないといけないのか）

静信は心中で呟いたが、不思議に怒りはなかった。むしろ存在したのは、沙子に対す

る憐れみのようなものだった。そう思うのは、どうしてだか、そこまでする沙子を沙子自身、決して肯定してはいないだろうという気がしてならないからだった。
徹の声が耳の奥に残っている。たぶん、あの延長線上に沙子はいる。そうでなければ「神様に見捨てられた」という気持ちなど抱かないだろう。知りすぎた者には粛清が必要だ。これは沙子が自己の存続を確保するための必然なのだろう。だが、沙子はたぶん、粛清する自分を悲しんでいる。
思って、静信は自嘲した。
（こうして……ぼくは逸脱する……）
ここで沙子を憎むのが、当然というものなのだろう。父親を殺した。それも静信がただ知りすぎた、そのことのために。屍鬼の悪事に気づいたから、粛清をもってする。それも当人ではなく、その家族を襲う。これは悪事を塗り重ねる行為で、だから屍鬼は極悪非道な存在だと認識するのが正しいのに違いない。
屍鬼は殺戮者だ。静信は父親を奪われた被害者で、だから屍鬼を罵り石を投じなければいけない。彼の隣人が、弟を殺した彼を罵ったように。
（彼の罪は露わになり……）
彼は裁きの間に引き出された。隣人たちは彼を唾棄し、罵った。

だが、誰も彼が罪に踏み込んだことを嘆かない。

荒野に追われた今になって、彼はふと思う。そうやって弟のために彼を責めた隣人たちの中に、彼が罪に踏み込んだことを嘆く者はいなかった。

いや、彼が罪人であったことを思えば、それは当然のことなのかもしれない。しかしながら、丘を離れ、それを外から眺め渡すこの荒野にあって振り返ると、なぜそれが当然だとされるのか、その根拠が彼には見つけられなかった。

彼にとって、弟の殺傷という事件は、まぎれもなく悲劇だった。彼の本意ではなかったのだから。弟を失ったことで、最も傷つき喪失するものが多かったのは彼自身だった。それを他者に理解させることは難しい。実際、彼は賢者に対しても神に対しても、そういった真情に関しては一切、口を噤んだ。だから隣人たちにとっては、彼は明らかな罪人であり、嫉妬によって、あるいは恨みによって弟を屠らんとして屠った殺人者であり、その罪を隠そうとした卑劣漢であり、神を侮って平然と塔に登った反逆者なのかもしれなかった。——しかしながら、なぜ、そうであることで、彼は罵られなくてはならなかったのだろう。

罵られるほどの罪ではないと言いたいわけではない。彼は単純に不思議に思う。彼の知る隣人たちは、慈愛に満ち、神の栄光を信じ、敬虔で利他的だった。緑野の片隅に孤立する彼に手を差し伸べ、彼が調和を破壊することを恐れてそれを拒めば、傷つくほど

に隣人たちは善良だった。少なくとも、彼はそう思っていた。
ならば、なぜ隣人たちは、秩序という調和から最終的にはみ出した彼にも手を差し伸べようとしなかったのだろう。弟に嫉妬する貧しさを憐れみ、嫉妬から罪に踏み込んだ彼を悲しむことがなかったのだろう。罪を隠そうとした愚かさ、神を侮った蒙昧、そのすべてを隣人たちは彼のために悲しんでも良かったはずだ。
しかしながら、彼らはそれを怒った。彼を罵倒し、石を投げた。なぜ怒ったのか、なぜ罵ったのか、なぜ石を投げて罪人をさらに裁こうとしたのか。
彼が秩序の敵だからだ。彼が罪人で、彼らの秩序を踏みにじったからだ。
つまりは隣人たちは、同じ秩序を共有する同朋に対する慈悲は持ち合わせていても、敵に垂れる慈悲は持たない、そういうことではないのだろうか。隣人たちは人を憎み、咎め、罵る。無慈悲も持ち合わせていたのだが、同朋に対してはそれが向けられることがなかっただけなのだった。しかしながら、他を峻別し、慈悲と無慈悲を使い分ける者を、真に善良だと言うことが、果たしてできるのだろうか。
本当に彼らに罪はなかったのか。彼は初めてそのことを疑問に思っていた。
彼は丘を振り返る。丘は広大な荒野の中に、小さく頑に閉じていた。丘の周囲に荒野があるのではない、と彼は確信していた。荒野に丘があるのだ。外界を拒絶し、罪とするところのものを荒野に放逐することで、それはかろうじて楽園としての己を守ってい

る。

3

加奈美は何度か母親の寝顔を見た末に家を出た。家のあちこちには、厳重に戸締まりをした。

妙の存在は、加奈美一人で抱え込むには大きすぎた。悩んだ末に元子に相談しようと、元子の家を訪ねたが、元子の家も同様に戸締まりされていて、いつも通りに家の中を覗(のぞ)き込むことを許さなかった。仕方なく呼び鈴を押してみる。ひょっとしたら元子はいないのではないかと思えたが、しばらくして家の中で人の動く気配がし、玄関の戸を開けて元子が顔を覗かせた。

ああ、と元子は加奈美の顔を見て言った。

「今、取り込んでるの」

元子はまるで外界に危険なものでも潜んでいて、その所在を探るように細い隙間(すきま)から顔の半分だけを見せている。

「……そう。茂樹くんの具合はどう?」

「今は寝てるわ」

それだけだった。加奈美がそれ以上、声をかける間もなく元子は戸を閉じてしまう。ちょっと待って、と言いかけたものの、加奈美にもその先、何と言えばいいのか分からなかった。死んだ母親が起き上がって戻ってきた、などと言って信じてもらえるだろうか。——いや、妙の死体が家にあることは、見せれば誰にも理解してもらえるだろう。だが、それが朝にはたしかに動いて生きた人間のように振る舞っていたことを、どう説明して理解してもらえばいいのか。

(夜になれば……)

また動き始めるだろうか。そうすれば話は簡単だが、そうと決まったものでもない。ひょっとしたらあれきり、妙は死んだままなのかもしれなかった。

加奈美は呻いて蟀谷に指を当てた。ともすれば思考は脈絡を失いそうになる。何が現実で何が事実なのか、切り分けていくよすがを見失いそうになるからだ。

今の自分には冷静に対処することができない。そしてそれは、元子も同様だろう。茂樹の容態が悪いときに、あの元子が冷静でいられるはずがない。そう——元子を頼っても意味がない。だが、元子以外の誰に相談できると言うのだろう。

途方に暮れた思いで、足を引きずりながら家に戻った。どこからか、太鼓の音が響いてきていた。霜月神楽の準備で下集落は浮き足立っている。それがかえって加奈美を孤独な気分にした。雨戸を閉め切った家に帰り、加奈美は何度も妙の枕許と茶の間を往復

しながら、妙が起き上がってきたことが現実なのか夢の一種なのかを考えていた。妙が死んだという記憶は果たして正しいのだろうか。妙が今、家の中で死んでいるという事実のほうが正しいのだろうか。一人、茶の間に坐っていると、自分の記憶に過ちはないと思う。ならば妙は起き上がってきたのだ。それとも自分が知らないうちに妙の死体を掘り上げてきたのだろうか。もしも加奈美がそれをして、しかもその記憶がないのだとすれば、そもそも妙が死んだという、その記憶自体、信じる値打ちがあるだろうか。

そう思うと居ても立ってもいられず、妙の姿を見に行かないでいられなかった。暗い部屋の中、妙はやはり死んでいるが、火傷の痕は薄れている。たしかに死んでいる、と思う。起き上がったのだという気がする。けれども——。

そもそも妙の存在をどう受け止めればいいのか、それすら分からないまま、日没がやってきた。何度目かに様子を窺いに行くと、妙はボンヤリとした様子で布団の上に起きあがっていた。

「……お母さん、気分、どう?」

訊くと頷く。今はもう、ほとんど見えない火傷の痕に目をやって、ひりひりするわ、と答えた。今度はちゃんと低いながらも声が出ていた。

加奈美はそこに触れながら、改めて確認する。起きあがっている妙の手には体温がなかった。呼気も脈拍も感じられない。間違いなく、死んでいる。

（でも、本当に死んでいるの？）
死んでいるのなら動かないはず。動くのなら呼吸だって脈拍だってあるはずだ。生死の境目が曖昧模糊としたものに変じて、加奈美はやはり妙の存在をどう受け止めていいのか分からない。
「何かほしいもの、ある？」
加奈美が問うと、妙は「お腹が空いた」と答えた。加奈美は頷き、もう少し寝ているように言って（だって、健康でないのはたしかだもの、病人みたいなものじゃないの？）台所に立った。とにかくできるだけゆるく粥を作った。作る間に妙は起き出してきて、茶の間でいつも通りに坐ってテレビを見ている。
粥を差し出すと、妙はどこか釈然としない様子で、それでも「ありがとう」と言って口をつけた。
「……変ね。あたし、ぼうっとしてるわ」
妙は呟く。
「今日は何日なの？　あたし、昨日は何をしてたんだったかしら」
加奈美はこれに答えられず、そう、とだけ相槌を打った。妙は首を傾げながら、粥を啜っていたが、味がしない、と言う。
「なんだか、ちっとも食べている気がしないわ。それにすごく熱いわよ、これ」

「そう……？　もうずいぶん冷めたと思うんだけど」
「そうかしらねえ。加奈美、普通の御飯はないの？　これじゃなんだかお湯でも啜ってるみたい」
「ああ……ちょっと待って」
ジャーの中に昨晩炊いたものが残っていた。それを茶碗によそい、あり合わせのものを添えて出すと、妙はそれも平らげる。機械的に口に運び、やはり食べた気がしない、と言う。
「でも……」
「胃は重くなったんだけど、食べた気がしないのよ」
訴えるので、カップ麺を探し出してそれも与えた。妙は熱いと不服を言いながらそれも平らげ、そしてそれから全部を吐き戻した。
「——お母さん！」
妙は呻き、そうして不安そうにする。自分はどこか具合でも悪いのだろうか、と訴えた。
「……若先生に診てもらったほうがいいのかしらねえ」
そんなことを言う妙を宥めて掃除をした。不思議に涙があふれて止まらなかった。
「どうしたの？　ごめんなさいね、せっかく加奈美が用意してくれたのに」

「いいのよ」
「胃の調子がおかしいのかしら。でも、お腹が空いたわ。すごくひもじいのよ、なぜかしら」
「もう駄目よ。また吐いちゃうわよ。やっぱり休んでないと駄目」
「でも……」
「きっと胃が弱ってるの。お母さん、昨日まで寝てたんだもの。だから急には受けつけないのよ。とにかく様子を見て、それからね？」
加奈美が言うと、妙は不承不承、というように頷いた。
「変ね。……気分はいいんだけど」
妙は呟き、そして加奈美を振り返った。
「でも、あたし何か変じゃない？　自分でそんな感じがするんだけど、気のせいかしら」

4

千鶴は屋敷を出ようと階段を下りていて、正志郎に呼び止められた。
「どこに行くんだ？」

千鶴は手摺を握ったまま振り返る。
「どこ？ ――食事に行くの」
男は渋面を作っている。対外的には、夫である人間の牡。だが、千鶴とこの男は同類ではなかった。
「若い新入りと一緒になって、ずいぶん派手なことをしているようだね」
「そう？ 新入りの面倒を見ているだけよ」
「はなはだしくマナーの良くない新入りのようだ。君はそれに車まで与えて、何をしているんだ？」
「何って。食事をしてるだけよ」
そうか、と男は低く呟く。
「――沙子が呼んでる」
千鶴は瞬間的に身を竦めた。篤の件だとは想像がつく。たしかに篤の所行は派手と言って良かった。最初の一人を殺して以来、彼は犠牲者を殺さないでいられないのだ。とりあえず襲うことができるようになったものの、相手が無抵抗になれば、余計に相手に対する私怨を抑え切れなくなるらしい。そのたびに速見に処置を頼んできたが、さすがに速見も事態を伏せておけなくなったのか。頼りにならない男だ。
千鶴は拗ねて正志郎を見上げた。

「わたし、出かけたいの。沙子にはそう言っておいて」
「沙子のところに行くんだ」
「ひょっとして、わたしがあの坊やを構うから妬いてるの？　だったら無用の心配だわ。篤は面白いけど、別にそれだけのことよ」
「沙子は彼の所行を、面白いとは思っていないようだね。おとなしく行ったほうがいいんじゃないかい？」
千鶴は手摺を放して身を起こした。正志郎が二階を示す。千鶴は踵を返して、二階に戻り、沙子の部屋に向かった。千鶴は沙子に反抗する術を持たない。沙子こそがこの屋敷の主人だからだ。辰巳を仲間に加え、千鶴を仲間に迎え入れた。正志郎を最初に襲ったのは千鶴だが、ある種の契約をもって人のまま仲間に迎えたのは沙子だ。そんな沙子に反抗してみたい気もしないでもないが、夢想することはあっても、実際にそれを企図したことはなかった。かつてはあったのかもしれない。だが、すでにそういう反抗心も摩耗するほど長い間、千鶴は沙子に依存してきていた。沙子が千鶴の安全を確保し、居場所を作り、必要なものを与えてくれる。それらを自分の才覚だけで得る自信が、千鶴にはなかった。
しおしおと沙子の部屋に向かい、中に入った。少女の形をした千鶴の「母」は、厳しい目で千鶴を振り返る。反射的に身が竦んだ。

「……あなたは一体、何をしてるの？」
千鶴は俯く。
「大川篤といったわね？　彼は危険だわ。このまま野放しにはできない。辰巳に預けるわ。いいわね？」
「……そう決めたんだったら、わたしにはノーと言う権利はないんでしょ？」
拗ねて沙子を見ると、沙子は溜息をつく。
「どうしてあんな無軌道を側で見てるの？　まるであなたも楽しんでいるみたいね。あんな野蛮な人殺しが楽しいの？」
別に、と千鶴は呟く。
「楽しいわけじゃないわ。……でも、つまらないんだもの、何もかも。こんな田舎に引き籠もって、獲物を狩るくらいしかすることがないんだもの」
都会にいれば、ごく普通の女みたいな顔をして遊ぶ場所がいくらでもあった。この村ではそれすらない。
「もう少しの辛抱なの。我慢できない？」
千鶴、と沙子は手招きをする。千鶴は側に寄り、沙子の足許に坐り込んだ。膝に頰を載せる。
「つまらないわ、こんなところ。食べて寝るだけなんて、馬鹿みたい。街に帰りたい

わ」
沙子の手が千鶴の髪を撫でる。
「もう少し辛抱して。……自重してちょうだい、お願いよ。あなたがあまり無軌道なことをすると、処罰しなければ示しがつかないわ。これだけ仲間が増えると、統率が必要なの」
千鶴はぴくりと顔を上げた。
「まさかわたしも辰巳にお仕置きさせるの？　……酷いことをしないで」
「しないわ。でも、あなたがそんなふうじゃ、いつかそうしないわけにはいかなくなるわ」
「大目に見て。わたしは特別でしょう？」
「そう、特別。ずっと一緒なんですもの。でも、だからこそあなたを妬む人もいるのよ。あなたの御乱行をわざわざ御注進に来る人がいるの。そんな隙を作らないで」
「……恵？　あの娘でしょう」
「誰でもいいわ。あなたが隙さえ作らなければいいの。酷いことはしたくないのよ。させないで」
髪を撫でられ、千鶴は頬を沙子の膝に落とす。
「つまらないの。……とても退屈でつまらない。食べて寝るだけなんて、自分が生きて

ないみたいだわ。まるで食べるために存在しているみたい」
「もう少しだけ。もう少しで終わるから。そうしたら、真っ先に街に帰してあげるわ」
嘘(うそ)ばっかり、と千鶴は呟く。
「嘘じゃないわ」
「嘘よ。わたしを放してくれないくせに。沙子はここに残るんでしょう？　だったらわたしもここにいないといけないんだわ」
「千鶴がお馬鹿さんだからよ。少し好きにさせると、こんなことをしでかすんだもの。だから目を離せないの。どうせパートナーを探すんだったら、もっと用心深い人にして。そうしたら、あなたをその人に預けて、一緒に街に戻してあげるわ」
「本当に？」
ええ、とその少女は母親の顔で頷く。
「でも、言っておくけど篤は駄目よ。とても任せておけないわ。どうして正志郎じゃ駄目なの？」
「正志郎なんてつまらない。人間のくせに敵の下僕に成り下がるなんて。そんな男は嫌なんだもの」
そう、と沙子は息を吐く。
「ねえ、沙子。尾崎を襲っちゃ駄目？」

「尾崎の——先生？」
「わたし、彼がほしいの。とても興味があるの」
「彼はハンターなのよ？」
「そう。だから面白いの。彼は敵を察知してるの。そうして対抗しようとしてるのよ。だからいいのよ。——駄目？　もういいでしょう？　江渕だっているんだし。最近、尾崎が看取っている犠牲者なんていないわ。役場だってあんなふうなんだし、もう彼は必要ないでしょ？」
「そう……そうね」
「寺と医者は必要だったんでしょう？　それは犠牲者を看取ってもらって、村の中で全部を処理してもらうためだったんでしょ？　だったらもう必要ないじゃない。それよりもそろそろ片付けておかないと、厄介なことになりはしない？」
沙子は千鶴の髪を撫でたまま、何かを考え込んでいる。千鶴はその膝に縋って揺らした。
「お願いよ、沙子。そうしたらわたし、篤のことなんか二度と構わないわ」
「そう……」と、沙子は呟く。「いいわ。——そうね、もう潮時かもしれないわ」
敏夫はベッドの中で輾転と寝返りを打っていた。焦りが大きい。広沢たちを説得でき

なかった。戦略を間違えたのかもしれない。かえって広沢のような理性的な者ほど、現実を直視することが難しいのかも。あるいは大川や――そう、母親の孝江のような、最初から予断を抱きやすい者のほうが煽るには良かったのかもしれない。

（これから……どうする）

たぶん時間は残されていない。ひょっとしたら、来年には村はもう存在しないのかもしれなかった。年の瀬を区切りに、様々な事務手続きがいったん、締められる。それ以前にそれを改竄し、整合させられるようにしておかないと、みすみす齟齬を外部に対して露呈してしまう。どんなに長くても来年の三月。それ以後、村はたぶん存在しなくなる。

急がなければ、と思う一方で、倦怠感が押し寄せてくる。あれほど理を説いたのに、理解を得られなかったことが敏夫を萎えさせていた。愚か者と呼ばれ、異常だと言われたほうがましだった。あんなふうに同情めいて宥められるなんて。

軽く呻いて反転したとき、闇の中でドアが開く音がした。一瞬、静信かとも思ったが、そうでないことも理解していた。静信だけはあり得ないし、さすがの静信も勝手に部屋の中に忍び込んできたりはしない。だとすれば、こんな夜に訪ねてくる者など限られている。

敏夫は跳ね起きた。ベッドに近寄ってこようとしていた人影が、驚いたように後退っ

た。

「……起きていたの？」

とっさに手を伸ばして枕許のスタンドを点ける。明かりを浴びて浮かび上がった女の顔には見覚えがなかった。

「……誰だ」

「お茶をいただきに来たの。そう誘ってくださったんでしょう？」

女は笑う。辰巳だ、と敏夫は思った。たしかに敏夫は、かつて一度だけ辰巳に会ったとき、そう言った覚えがある。

「時間ってものを考えてほしいんだがね。——どうやって入り込んできたんだ」

女は鍵の束を示した。

「奥様が合い鍵を作らせてくれたの」

「……なるほどな。あんたは桐敷の奥さんかね」

そう、と女は笑う。

「千鶴といいますの。よろしく」

「自己紹介なら、忍び込んでくる前にしてほしかったな。あいにく、時間が時間だし、おれはちょっとあんたたちに対して含むところがあるんでね。お茶を飲む件はキャンセルにしてもらいたいな。招待は取り消すよ。未来永劫、家の中には立ち入ってもらいた

くない」
「取り消しは利かないの。残念だったわね」
　そうか、と敏夫は呟く。スタンドを点けたまま枕許に置いてあった手にはスイッチを握っている。
「どうも無礼で気に入らないな。おれは眠いんだよ、千鶴さん」
　スイッチを入れた。ベッドサイドの床に置いたプロジェクターの明かりが点った。空いた壁面をスクリーン代わりに白い光と錯綜する赤い直線が現れた。それは千鶴の白い顔の上をも赤い傷のように横切る。千鶴が明らかに怯んだ。
「籠目文様ってのは、魔を払うんだそうだ。……嫌いなんだろう、こういう図形は」
　千鶴は身を翻し、ドアの外へと逃げ出す。その陰から声だけがした。
「……沙子が言っていたわ」
「沙子？　娘さんかい」
「あなたの奥さんの葬儀はおかしいって」
　敏夫は苦笑した。
「……なるほど」
「どう考えても、あんなに保つはずがない。そもそも奥さんを襲った男は、襲ってる間に死んだようだと言ってたのよ。仮にかろうじて生きていたとしても、お葬式が遅すぎ

るって」
「うん。まあ、そうかもしれないな。……恭子はいい家内だったよ。最後の最後に良くしてくれた。あれこそを内助の功って言うのかね」
くすり、とドアの向こうで笑う声がする。
「平然としたものね」
「おれはこういう人間だからね」
「……おやすみなさい」
ああ、と敏夫は呟く。気配の絶えた廊下のほうを窺いながら、壁に赤く浮き上がった文様を見ていた。
「いよいよ、おれの番か」
退路はもうどこにもなかった。

5

信明の自室――病室は、信明が消えた日のまま、きちんと片付けられていた。美和子は掃除を欠かさない。戻ってくると信じているのか、あるいは、戻ってこないのでは、という懸念をそうやって拒絶しているのかもしれなかった。

信明が痩せた身体を横たえていたベッド、脇に積まれた本とスケッチブックは、信明が文字を書く練習に使っていたものだ。ここにひっそりと横たわり、それでも決して自分の運命に呑まれてしまうことのなかった師父。

静信はぼんやりとベッドに腰を下ろした。必要なものは、すべてベッドの上から手が届くように配置されている。美和子の手を煩わせまいとし、萎縮した四肢に甘えまいとした。懸命に自分であり続けようとした父親は、静信にとって大きな支えであり、敬愛の対象であり続けた。

だが、もういない。おそらくはもう生きていないだろう。ここから拉致され、殺されてしまった。

(あの人が君に何をできたと言うんだ……)

ここで横たわっているしかなかった。信明が沙子にとって脅威であったはずはない。生かしておいても、もはや何もできなかったのだ。殺す必要があったとは思えない。それをする理由があるとすれば、ひとつ、静信に対する報復だけだ。

(無駄なことを……)

報復などしなくても、静信はとっくに傍観者に成り果てている。たしかに静信は屍鬼の存在を理解していたが、気がついていると言うなら、すでに村の者のすべてが気づいているのだと思う。もはや静信の口を封じることに意味はないし、そもそも静信にはも

う何をする気もなかった。失われていく命を惜しいと思わないわけではなかったが、自分に何ができるのかと問うても、答えを見つけることができない。
溜息をついて、なんとなく枕許の本を手に取った。時代小説の叙情的な一節を読み、そしてそれをベッドの脇の棚に納める。枕許の本を集め、きちんと揃えて棚に納めた。もう片付けてもいいだろう。栞されたページの先を読む者は、永遠に帰ってこない。
棚を整理し、枕許を整理した。枕頭台の脇には、静信が譲ったワープロが取り残されていた。なんとなくそれを膝の上に広げる。
信明は様々な文書を残していた。日記、随筆めいたもの、手紙。信明は細やかに檀家の人々の様子について気を配っていた。実際、信明は檀家にとって一種の精神的な医者であり続けた。師父の気配を追うようにして、残された文書に目を通した。言葉遣いから、行間から立ち昇ってくる気配が慕わしくてならなかった。
やがて静信は、ひとつの文書に辿り着いた。静信は眉を顰めた。

　面識も得ませんうちに、突然のお便り、失礼します。お手紙を差し上げたのは、一度拙宅にお招きいたしたく思ったからです。
　妻の部屋ではありません。息子の部屋も寺務所も御勘弁ください。居間にはお招きいたしません。どうぞ愚僧の部屋においでください。

愚僧は離れに起居しております。いつなりとも御遠慮なく。お待ちしております。

　静信はしばらく、その液晶の文字を把握しかねてただ見つめた。

（これは……）スクロールさせるまでもない、短い文面。（招待状だ）

宛名はない。誰に出したものかは分からない。けれども執拗に自分の部屋でなければ困る、と訴えているのが、屍鬼の存在を意識させた。——けれども。

　文書が作成されたのは十月十五日。最終更新日は十月十八日になっている。静信は記憶を辿り、ちょうどその頃、光男が信明から手紙を頼まれた、と言っていたのを思い出した。宛名は桐敷正志郎になっていた。光男はそれを訝り、静信に報告した。静信は信明に意図を問うたが、信明はただの挨拶だ、と答えた。

「これが……あの」

　おそらくは、そうだろう。これが桐敷家に宛てたものだ。

　思えば、安森徳次郎が倒れて以来、信明はどこかおかしかった。徳次郎が倒れたのは、十月の十三日、信明はかつてないほどの頑迷さで見舞いに行く、と言い張った。そうやって徳次郎を訪ね、妙に得心した顔で戻ってきて、それから何かを深く考え込むように沈黙していた。その二日後に、信明はこの文書を書いた。書いたまま、なぜだか放置されたままの文書は、十八日になって更新された。徳次郎が死んだ翌日だ。

「でも、なぜ？」

信明はおそらく、桐敷家に巣くっているのが何者なのかを察知していたのだ。だからこんなにも執拗に、自室以外は困ると念を押している。それを知りながら出された招待状は、畢竟（ひっきょう）、自らの死を招くものだ。

——なぜ。何故（なにゆえ）このような罪を。

——何があったんだ？

（何も……）

　殺意のない殺人はない

——何か理由があったんだろう？

（何も）

「……お父さん、どうして」

それは招かれない限り、家の中に入り込むことができない。

屍鬼（四）

新潮文庫　お－37－6

平成十四年三月一日発行

著者　小野不由美（おのふゆみ）

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六―五四四〇
読者係（〇三）三二六六―五一一一

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社

ISBN4-10-124026-4 C0193